

年報

令和4年度（2022年度）



Oita University of Nursing and Health Sciences

公立大学法人大分県立看護科学大学

2022年度の年報発行にあたって

大分県立看護科学大学
理事長・学長 村嶋幸代

2022年度の年報をお届けできることをありがたく思います。

2022年度には、学部教育の新カリキュラムがスタートしました。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の中でも、計画通り進めています。

コロナ禍は、オミクロン株で感染力が強まりましたが、感染状況に合わせてオンラインと対面授業を組み合わせ、教育を継続できました。今までの蓄積から、むしろ、オンラインであることを積極的に活かした試みも出てきました。詳しくは、各科目における授業の工夫をご覧くださいればと思います。

また、県内の多くの機関が、コロナ禍の中でも、少しでも学生・院生の実習を受け入れようと、様々な工夫をしてくださいました。お陰様で、様々な実習体験ができ、学びが深まりました。ありがとうございました。

一方、「従来以上の準備をしてから臨地実習に出すべき」という認識も広がりました。そこで、基礎・成老年実習室を大幅に改造しシミュレーション教育ができるようにしました。文科省からシミュレーター購入の予算を獲得すると共に、県の医療介護確保基金のお世話になって、実習室の階段椅子の撤去、スクリーンを2つの実習室に連動できる形で設置、各ベッドサイドにモニターを置いて教員のパソコンから最新の資料や映像等を提供できるようにしました。コロナ禍で進んだことの一つです。学生の主体的な学びが促進されています。

2022年度は、看護学の再編にも着手し、広域看護学講座に新たに社会看護学研究室を設立しました。これで、社会環境（保健医療福祉行政）の重要性やその見方を教える教員を確保できました。更に、2023年4月から成人看護学、老年看護学、NPの各研究室を開設する準備をしました。これにより、学部4年間をかけた看護師の教育、大学院修士課程でのナースプラクティショナー（NP）の教育を強化することができます。上述したシミュレーション教育と相まって、臨床看護能力を一層向上させる基盤ができました。

また、2022年度は、6年に一度受審する認証評価の年でもありました。今回は、新しく認証評価機関となった大学教育質保証・評価センターで受審しました。その結果、「大分県立看護科学大学は学校教育法、大学設置基準をはじめとする関係法令に適合し、教育研究の水準の向上及び特色ある教育研究の進展に努めている」と認められました。評価で言及された優れた点は伸ばし、指摘事項は新設の質保証推進会議とも協働し、全学で改善・改革に務めます。

2022年度の年報をご一読頂き、忌憚のないご意見、また、ご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

2022年度 大分県立看護科学大学 トピックス

対面授業を再開

COVID-19の感染状況が緩和したのを機に、1月26日から対面授業を再開しました。



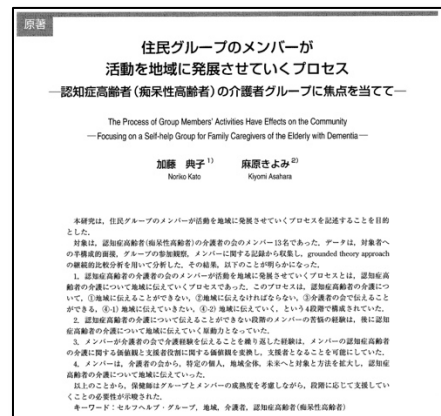
DX化、シミュレーション教育を推進

文部科学省の「ウイズコロナ時代の新たな医療に対応できる医療人材養成事業」、大分県の「地域医療介護総合確保基金」を活用し、ICT化、DX化を推進し、演習科目におけるシミュレーション教育を充実させました。

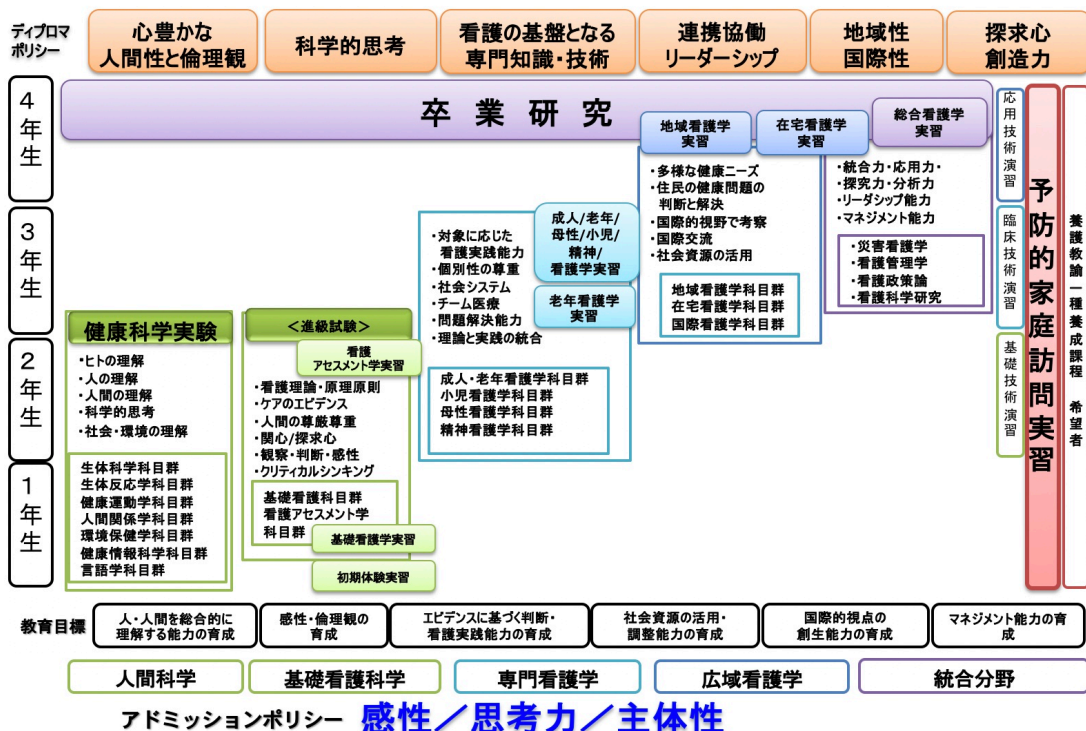


新しい研究室を設置

加藤典子先生をお迎えし、新たに社会看護学研究室を設置しました。また、NP研究室及び成人看護学研究室と老年看護学研究室の設置が決まりました。



学部教育のカリキュラム2022



保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部改正に伴い、学長・学部長が陣頭指揮を執り、タスクグループを立ち上げ、全学を上げて学部の教育内容を検討し、文部科学省に承認された新カリキュラムに基づく教育を開始しました。(左の図は、カリキュラムの概要)

新しい学部カリキュラムを開始

特定行為研修を 17 区分 31 行為に変更

大学院 NP コースでは、プライマリ NP の強化、効率的・効果的教育を重視し、特定行為研修を 17 区分 31 行為に変更しました。（写真は大分名産のカボスを使った褥瘡のデブリドメントの練習風景）



第 24 回看護国際フォーラムを開催

第 24 回看護国際フォーラム「With コロナの経験から得た知見—未来志向で考えるシームレスな新人教育の在り方」を大分県看護協会と共催し、10月29日（土）にオンラインで開催し、盛況のうちに終わりました。

LIVE 13:05 - 14:05

“オール兵庫”で取り組むコロナ禍での新人看護師育成

キーワード コロナ禍 / 長期化 / 新人看護師 / 連携

講師：大野 かおり RN, PHN, RNM, PhD
兵庫県立大学看護学部 在宅看護学 教授
兵庫県看護協会 第二副会長

REC 14:10 - 15:10

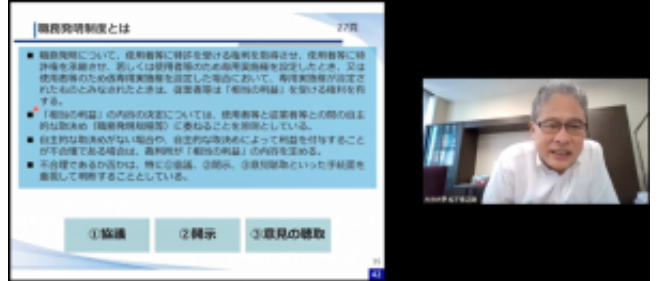
**看護基礎教育と臨床ギャップへの架け橋
—看護実践への移行—**

キーワード 看護教育 / 臨床教育 / 移行 / 看護実践

講師：岩間 恵子 PhD, RN, CCRN
米国 ペース大学校看護学部 基礎看護学 助教

産学官連携・知的財産管理体制を強化

看護研究交流センターの産学官連携推進チームは、知的財産に関する研修会を開催し、教員のシーズ集を改定しました。また、大分大学研究マネジメント機構知的財産管理部門長・教授の松下幸之助先生に知的財産アドバイザーをお願いすることにしました。（写真は松下先生の講演の様子）

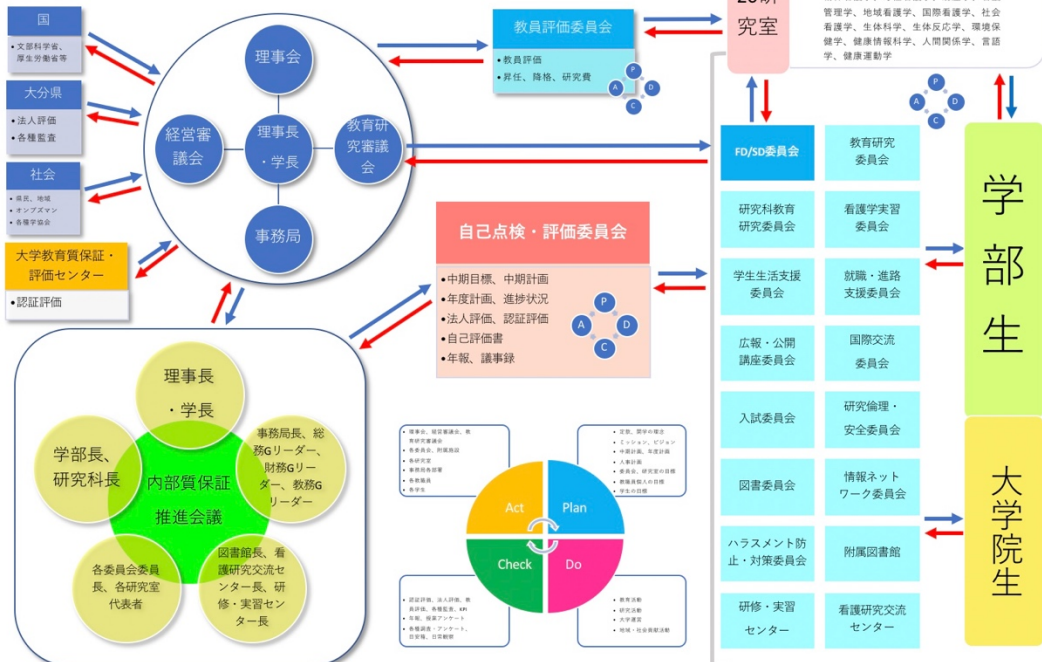


博士号を 6 名に授与

大学院では、博士号を 6 名に授与し、大学院開設以来の博士号取得者は 32 名になりました。



大分県立看護科学大学内部質保証体制



（左の図は、大学の内部質保証体制）。

大学教育質保証・評価センターの機関別認証評価を受審した結果、日頃の自己点検・評価活動、予防的家庭訪問実習や健康科学実験、看護国際フォーラムや中小規模病院等看護管理者支援事業等が高く評価され、大学評価基準を満たしているという評価を頂きました。

機関別認証評価に合格

2022 年度年報・目次

トピックス

1. 学内行事	1
2. 入学試験等	5
3. 学生の状況と進路	12
4. 授業等	17
5. 研究室活動	112
6. 研究助成・事業助成等	133
7. 研究業績	140
8. 社会貢献	154
9. 学務	173
10. 附属組織	206
11. 名簿	214

1 学内行事

1-1 学年暦

前期		後期	
4月		10月	
8	入学式	3	後期授業開始(2~4年次生)
11	全学オリエンテーション	29	看護国際フォーラム
11,12	新入生オリエンテーション		
12	前期授業開始(2~4年次生)	11月	
12~19	履修登録	24	卒業研究要旨提出締切(4年次生)
13	一学期授業開始(1年次生)	26	学校推薦型選抜試験および社会人選抜試験
20~	予防的家庭訪問実習開始	29	卒業研究論文提出締切(4年次生)
26,27	健康診断		
5月		12月	
9~6/3	在宅看護学実習, 地域看護学実習(4年次生)	1	三学期授業開始(1年次生)
		1,2	卒業研究発表会
		5~19	看護アセスメント学実習(2年次生)
		24	冬期休業開始
6月		1月	
19	開学記念日	7	冬期休業終了
13~7/1	総合看護学実習(4年次生)	16~27	基礎看護学実習(1年次生)
		27	大学入学共通テスト(追試験)準備(2,3,4年次生休講)
7月		28,29	大学入学共通テスト(追試験)
13	大学院特別選抜	2月	
16	オープンキャンパス	9	助産師国家試験
16	夏期休業開始(1年次生)	10	保健師国家試験
21	夏期休業開始(2年次生~4年次生)	12	看護師国家試験
20~8/1	小児看護学(保育所)実習(3年次生)	22	進級試験(2年次生)
		25	一般選抜試験(前期)および私費外国人留学生選抜試験
8月		28	後期授業終了
23	大学院入学試験	3月	
9月		1	春期休業開始
2	夏期休業終了(1年次生)	12	一般選抜試験(後期)
5	夏期休業終了(2年次生~4年次生)	16	卒業式・修了式
5	二学期授業開始(1年次生)		
5~11/25	老年看護学実習, 成人看護学実習 I・II, 小児看護学実習, 母性看護学実習, 精神看護学実習(3年次生)		
10	公開講座		

1-2 オープンキャンパス

新型コロナウイルス感染拡大予防のため、7月16日（土）にオンラインで開催（LIVE配信）した。学長挨拶、大学紹介、入試概要説明、授業料・奨学金等の説明、在校生による合格体験談・メッセージ、模擬授業を配信した。また、模擬授業以外は8月から10月まで大学ホームページ上で後日配信した。オンライン開催に先立ち、事前に朝日新聞と読売新聞に広告を掲載し、広報活動を行った。オープンキャンパスのLIVE配信には197名の参加があった。後日配信については再生総数（配信期間：2022年8月9日～10月31日）が764回であった。参加者からは「合格体験談」や「在校生メッセージ」が進路を選ぶ際の参考になったという意見が多かった。しかし、「キャンパスの様子を見たい」、「学内の設備等を見せてほしい」という声もあった。令和5年度は新型コロナウイルス感染拡大予防に配慮しながら、対面での開催を計画している。実際の学内の様子を見てもらえるようにしたいと考えている。

1-3 看護国際フォーラム

新型コロナウイルス感染症の流行状況を鑑み、大分県看護協会と共催で第24回看護国際フォーラムを令和4年10月29日に、Zoomウェビナーで開催した。テーマを「With コロナの経験から得た知見—未来志向で考えるシームレスな新人教育の在り方」とし、米国から1名の講師が録画講演、国内から1名の講師がライブ講演した。質疑コーナーでは、米国・国内講師がライブ参加した。参加者は226名と盛況であり、約14%は県外からの参加者であった。参加者の職業は「看護師」が約4割を占め、臨床現場からの関心も高いテーマであることが伺えた。参加者アンケートの結果では講演内容について97%、質疑応答について94%が「とても満足」「ほぼ満足」と回答しており、高い満足度を示していた。

1-4 国際交流

1) 韓国の蔚山大学校医科大学看護課程交流派遣学生受け入れと交流

蔚山大学から学部交流派遣として学部生8名を同行教員2名と共に8月2日から8月6日までの5日間受け入れ、本学に滞在する予定であったが、日韓の新型コロナウイルス感染症の流行状況について情報共有しながら実施の可否を両校で協議し、今年度は中止とした。

2) 韓国の仁荷大学校医科大学看護学部のオンライン交流会

感染拡大下でも実施可能な国際交流としてオンライン交流会を企画し、MOU締結校である韓国仁荷大学の看護学生28名と本学学生28名が参加、8月9日に実施した。両校参加学生の満足度は高く、今後につながる企画となった。

3) インドネシア ムハマディア大学のオンライン講義

MOU 締結校であるインドネシア ムハマディア大学から依頼を受け、精神看護学研究室の影山教授が6月14日にオンラインで“Issues and Trends in Mental Health” 「メンタルヘルスの課題と傾向」のテーマで講義を行った。

4) 本学学生の派遣

本学から学部交流派遣として学部生8名を同行教員2名と共に8月15日から8月19日までの5日間、韓国の蔚山大学校医科大学看護課程に派遣する予定であったが、日韓の新型コロナウイルス感染症の流行状況について情報共有しながら実施の可否を両校で協議し、今年度の派遣事業は中止とした。

1-5 若葉祭

COVID-19 感染拡大予防のため、今年度も開催を中止した。

1-6 公開講座

新型コロナウイルス感染拡大予防のため、9月10日(土)にオンライン開催した。今年度のテーマは「腸活!腸から元気になろうー免疫力をアップする心と体のつくりかたー」と題して、順天堂大学医学部病院管理学研究室教授の小林弘幸氏と本学生体反応学研究室准教授の吉田成一氏がそれぞれの専門的視点から「腸活」について講演した。告知のチラシは県下の病院や各種施設等や、6月の大分県看護協会総会などで早期に配布した。また、朝日新聞と読売新聞の2社に広告を掲載した他、大分県信用組合の県下38支店のデジタルサイネージにも告知を掲出し、広報した。参加者の年代は10代から60代以上と幅広かった。また、職業も医療従事者のみならず、看護系教員、会社員、高校生と様々で、総勢107名の参加があった。終了後のアンケートでは、「大変良かった」「良かった」が99%と高い評価が得られた。参加しようと思った理由は「テーマに興味があったから」が最も多く92%であり、情報源は「チラシ」「本学のHP」の二つで約7割を占めた。今後の開催方法としては、オンラインでの開催希望が90%と多かった。次年度も幅広い年齢層から関心の高いテーマで開催できるよう企画する。また、オンラインと対面のハイブリットでの開催を計画する。

1-7 アニュアルミーティング

アニュアルミーティングは、教員相互の研究内容を知る機会とすると同時に研究活動のスキル向上を図ることが目的で、学内競争的研究費を受託した全教員とその他の助教以上の教員は3年に1度以上の発表をすることになっている。

今年度の開催は、3月6日（月）13:00～16:50に実施された。発表は22演題、参加者は発表者21名を含め54名であった。発表の要旨集は、図書館に所蔵された。今年度は昨年度同様オンライン（Zoom）による発表形式とし、全体を2群に分け、途中休憩を入れ、1演題あたり8分（演者による発表2分、質疑応答6分）とした。演者による口頭説明が2分と短いため、3日前にカレッジホールに発表用のポスターを掲示し、参加者は事前にポスターを閲覧し、当日に質疑を行う方式とした。12月に発表予定者に日程を、1月に演題登録、2月上旬に発表要領の連絡、下旬に要旨メーグとした。発表時は、画面共有するデータ（形式自由）を用いてディスカッションし、活発な意見交換が行われた。今年度は発表演題が昨年度の12題より多かつたこともあり4時間ほどかかつた。

次年度は、対面のポスターセッション形式とオンラインによる長所を検討し、実施方法等を決定する予定である。

2. 入学試験等

2-1 学部入試

令和5年度入学試験の選抜区分及び募集人員、入学者選抜試験結果の概略は次表のとおりである。

選抜の区分及び募集人員

学部	学科	入学定員	募集人員				
			一般選抜		特別選抜		
			前期日程	後期日程	学校推薦型	社会人	私費外国人留学生
看護学部	看護学科	80人	40人	10人	30人	注1) 若干名	注2) 若干名

注1) 社会人の「若干名」は学校推薦型の30人に含める。

注2) 私費外国人留学生の募集人員「若干名」は前期日程の40人に含める。

入学者選抜試験結果の概略

(単位：人、倍、%)

区分		志願者	受験者	合格者	競争率	入学者		
						計	県内(率)	男性(率)
特別	学校推薦型	63	63	30	2.1	30	30(100.0)	3(10.0)
	社会人	1	1	0	—	0	—	—
	私費外国人留学生	0	0	0	—	0	—	—
	計	64	64	30	2.1	30	30(100.0)	3(10.0)
一般	前期日程	116	112	48	2.3	44	25(56.8)	3(6.8)
	後期日程	133	44	10	4.4	8	3(37.5)	0(0.0)
	計	249	156	58	2.7	52	28(53.8)	3(5.8)
合計		313	220	88	2.5	82	58(70.7)	6(7.3)

試験教科等

区分		教科	試験期日	出願期間
特別	学校推薦型	総合問題 面接	令和4年 11月26日(土)	令和4年 11月1日(火)～11月9日(水)
	社会人			
	私費外国人留学生	総合問題 面接	令和5年 2月25日(土)	令和5年 1月23日(月)～2月3日(金)
一般	前期日程	総合問題 面接	令和5年 2月25日(土)	令和5年 1月23日(月)～2月3日(金)
	後期日程	総合問題 面接	令和5年 3月12日(日)	

2-1-1 特別選抜

① 学校推薦型

大分県内の高等学校卒業見込者の中から、各高等学校長が推薦した生徒を対象に、「総合問題」と「面接」により実施した。試験の配点は下表の通りである。

区分	総合問題	面接等	計
学校推薦型	200	50 注1) 段階評価を行い、評価が一定基準に達しない場合は不合格とする	250

注1) 面接等 50 点に、出願書類（活動報告書）の評価点 20 点を含む。

② 社会人

社会人としての実体験から看護学への強いモチベーションを持った学生を確保することにより、教育・研究への活性化を図るため、また、生涯学習の要請に対応するため、社会人選抜を実施した。

年齢が満 24 歳以上で、社会人の経験を 3 年以上有し、大学入学資格を有する者を対象に、「総合問題」と「面接」により実施した。試験の配点は下表の通りである。

区分	総合問題	面接	計
社会人	200	40 得点が配点の 50%以下の場合は、総合点にかかわらず不合格とする	240

③ 私費外国人留学生

日本国籍を有しない者であって、所定の要件を満たした在留資格を有する者に対して、私費外国人留学生選抜を設けているが、志願者はなかった。

「総合問題」と「面接」を試験科目とし、試験の配点は下表の通りである。

区分	総合問題	面接	計
私費外国人留学生	200	段階評価を行い、その評価が一定基準に達しない場合は不合格とする	200

2-1-2 一般選抜（前期日程）

令和 5 年度大学入学共通テストで本学が指定する教科・科目（下表参照）を受験した者について、「総合問題」と「面接」により試験を実施した。

教科	科目		教科・科目数
国語	『国語』	1 科目	5 教科 7 科目 または 5 教科 8 科目
地理歴史 ・公民	「世界史A」 「世界史B」 「日本史A」 「日本史B」 「地理A」 「地理B」 「現代社会」 「倫理」 「政治・経済」 『倫理、政治・経済』	左記科目から 1 科目 2 科目受験した場合は、いずれか高得点の科目を合否判定に利用	
数学	『数学Ⅰ・数学A』 『数学Ⅱ・数学B』	2 科目	
理科	① 「物理基礎」 「化学基礎」 「生物基礎」 「地学基礎」	左記科目から次の A または B を選択 A 理科①から 2 科目及び 理科②から 1 科目 B 理科②から 2 科目	
	② 「物理」 「化学」 「生物」 「地学」		
外国語	『英語』	1 科目	

本学で実施する個別試験を含んだ配点は下表の通りである。

試験区分	国語	地理歴史 ・公民	数学	理科	外国語	総合問題	面接	合計
大学入学 共通テスト	100 注 1)	50 注 2)	100 注 3)	100 注 4)	200 注 5)	—	—	550
個別試験	—	—	—	—	—	200	30	230
計	100	50	100	100	200	200	30	780

注 1) 「国語」 100 点は、200 点に 0.5 を乗じた値とする。

注 2) 「地理歴史」「公民」 50 点は、1 科目 100 点に 0.5 を乗じた値とする。

注 3) 「数学」の配点は、1 科目を 50 点に換算し計 100 点とする。

注 4) 「理科」の配点は、計 200 点を 100 点に換算する。

注 5) 「外国語」の「英語」は、「リーディング」及び「リスニング」の合計点とする。

※面接は、段階評価を行い、評価が一定基準に達しない場合は不合格とする。

2-1-3 一般選抜（後期日程）

令和 5 年度大学入学共通テストで本学が指定する教科・科目（下表参照）を受験した者について、「総合問題」と「面接」により試験を実施した。

教科	科目		教科・科目数
国語	『国語』	1 科目	5 教科 7 科目 または 5 教科 8 科目
地理歴史 ・公民	「世界史A」 「世界史B」 「日本史A」 「日本史B」 「地理A」 「地理B」 「現代社会」 「倫理」 「政治・経済」 『倫理、政治・経済』	左記科目から 1 科目	
数学	『数学Ⅰ・数学A』 「数学Ⅱ」 『数学Ⅱ・数学B』	左記科目から 1 科目	
理科	① 「物理基礎」 「化学基礎」 「生物基礎」 「地学基礎」	左記科目から次の a または b を選択 a 理科①から 2 科目 b 理科②から 1 科目	
	② 「物理」 「化学」 「生物」 「地学」		
外国語	『英語』	1 科目	

本学で実施する個別試験を含んだ配点は下表の通りである。

試験区分	国語	地理歴史 ・公民	数学	理科	外国語	総合問題	面接	合計
大学入学 共通テスト	(100) ^{注1)}	(100)	(100)	(100)	200 ^{注2)}	—	—	500
個別試験	—	—	—	—	—	200	30	230
計	300				200	200	30	730

注 1) 「国語」100 点は、200 点に 0.5 を乗じた値とする。

注 2) 「外国語」の英語は、「英語」は、「リーディング」及び「リスニング」の合計点とする。

※面接は、段階評価を行い、評価が一定基準に達しない場合は不合格とする。

2-2 令和5年度大学院看護学研究科博士課程（前期）

2-2-1 特別選抜

概要

修了後、県内で活躍を希望する優秀な本学学生を確保すべく広域看護学コースおよび助産学コースに特別選抜を設定して実施している。今年度から NP コースを追加した。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	専攻領域		募集人員
			実践者養成		
看護学研究科	博士課程（前期）	看護学専攻		広域看護学コース	2名
				助産学コース	3名
				NPコース（小児・老年）	若干名

試験の概略

（単位：人）

区分	志願者	受験者	合格者	競争率 (倍)	入 学 者		
					計	県内 (%)	男 (%)
修士課程	6	5	5	1.0	5	5(100.0)	0(0.0)

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
小論文 面接	令和4年 7月13日（水）	令和4年 5月31日（火）～6月14日（火）

2-2-2 一般選抜

概要

大学卒業生等を対象に、「総合問題」と「面接」により実施した。大卒者でないものは就業経験により出願前に資格認定を行っている。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	専攻領域		募集人員
			実践者養成		
看護学研究科	博士課程（前期）	看護学専攻		研究者養成	3名
				NPコース	10名 （うち5名は地域枠）
				広域看護学コース	10名
				助産学コース	10名
			看護管理・リカレントコース	2名	
		健康科学専攻			2名

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	令和4年 8月23日(火)	令和4年 7月25日(月)～7月29日(金)

試験の概略

(単位：人)

区分	志願者	受験者	合格者	競争率 (倍)	入学者		
					計	県内 (%)	男 (%)
看護学専攻	36	36	22	1.6	20	11(50.0)	1(5.0)
健康科学専攻	1	1	0	-	0	0(0.0)	0(0.0)

(二次募集)

概要

8月に実施した試験の結果、合格者が定員を下回ったコース・専攻を中心に12月に再度募集を行った。志願者はいなかったため、試験自体は実施していない。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	専攻領域	募集人員	
看護学研究科	博士課程 (前期)	看護学専攻	研究者養成	2名	
			実践者 養成	NPコース	若干名 (地域枠のみ)
				広域看護学コース	若干名
				助産学コース	4名
		健康科学専攻	2名		

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	令和4年 12月10日(土)	令和4年 11月15日(火)～11月22日(火)

試験の概略

(単位：人)

区分	志願者	受験者	合格者	競争率 (倍)	入学者		
					計	県内 (%)	男 (%)
看護学専攻	5	4	2	2.0	2	1(50.0)	0(0.0)
健康科学専攻	1	1	1	1	1	1(100.0)	1(100.0)

2-3 大学院博士課程（後期）

2-3-1 進学審査（対象者がいないため、実施せず）

2-3-2 一般選抜

概要

修士の学位を有する者等を対象に募集した。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻	2名
		健康科学専攻	2名

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 口頭試問	令和4年 8月23日（火）	令和4年 7月25日（月）～7月29日（金）

審査の概略

（単位：人）

区分	志願者	受験者	合格者	競争率 （倍）	入学者		
					計	県内（%）	男（%）
看護学専攻	2	2	1	2	1	0(0.0)	1(100.0)
健康科学専攻	0	0	0	-	0	0(0.0)	0(0.0)

（二次募集）

概要

8月に実施した試験の結果、12月再度募集を行なったが、志願者なしのため実施せず。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻	1名
		健康科学専攻	2名

審査科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 口頭試問	令和4年 12月10日（土）	令和4年 11月15日（火）～11月22日（火）

審査の概略

（単位：人）

区分	志願者	受験者	合格者	競争率 （倍）	入学者		
					計	県内（%）	男（%）
看護学専攻	0	0	0	-	0	0(0.0)	0(0.0)
健康科学専攻	0	0	0	-	0	0(0.0)	0(0.0)

3 学生の状況と進路

3-1 在学生の状況（令和4年4月1日現在）

学生総数 410名（学部生326名、院生84名）

（単位：人）

学 生 数					
	計	県内	県外	男	女
1年次生	87	58	29	2	85
2年次生	88	56	32	5	83
3年次生	76	56	20	5	71
4年次生	75	49	26	4	71
計	326	219	107	16	310
割合（％）	100.0	67.2	32.8	4.9	95.1
大学院博士前期（1年次生）	35	20	15	11	24
大学院博士前期（2年次生）	21	12	9	5	16
大学院博士後期（1年次生）	4	4	0	1	3
大学院博士後期（2年次生）	5	5	0	1	4
大学院博士後期（3年次生）	19	13	6	6	13
計	84	54	30	24	60
合計	410	273	137	40	370

3-2 奨学金・授業料減免

■日本学生支援機構奨学金実績（人）

	貸与		給付
	一種	二種	
学部	112	80	50
大学院	9	4	0
合計	121	84	50

■その他奨学金実績

- ・ 壽崎育英財団奨学金 学部生3名 大学院生1名
- ・ 三和酒類地域文化振興会奨学金 学部生3名
- ・ JEESMUG 緊急支援奨学金 4名

■修学支援制度授業料・入学金減免実績（学部） （人）

	前期	後期	入学金
全額免除	19	19	3
2/3免除	13	16	3
1/3免除	14	9	6
合計	46	44	12

修学支援制度減免額計 19,137,800 円

■大分県立看護科学大学授業料減免制度実績（学部・大学院） （人）

	学部		大学院	
	前期	後期	前期	後期
全額免除	1	1	2	3
2/3免除	0	0	1	0
1/3免除	0	0	0	1
合計	1	1	3	4

本学制度授業料免除額計 2,143,200 円

3-3 卒業生・修了生の進路

3-3-1 学部卒業生

令和5年3月31日現在

1 卒業生の状況（74名）

出身地別	県内	49	名	66.2	%
	県外	25	名	33.8	%
進路希望別	就職	61	名	82.4	%
	進学	13	名	17.6	%

2 進路決定状況

就職	決定	60	名	98.4	%
	未定	1	名	1.6	%
進学	決定	13	名	100.0	%
	未定	0	名	0.0	%

3 就職先内訳

(1) 地域別

大分県内	36	名	60.0	%
		(県内出身者31名+県外出身者5名)		
大分県外	24	名	40.0	%
		(県内出身者8名+県外出身者16名)		
計	60	名	100.0	%

(2) 就職先

独立行政法人等	27	名	45.0	%
都道府県	8	名	13.3	%
市町村	3	名	5.0	%
民間	22	名	36.7	%
その他	0	名	0.0	%
計	60	名	100.0	%

大分県内	大分大学医学部附属病院(21)、大分県立病院(5)、大分赤十字病院、アルメイダ病院、天心堂へつぎ病院、大分岡病院、リバーサイド病院、井野辺病院、厚生連鶴見病院、別府発達医療センター、大分県教育委員会（さくらの杜高等支援学校）、大分合同新聞販売店
大分県外	日本医科大学附属病院(2)、福岡市立こども病院(2)、佐賀県中部病院(2)、虎の門病院、国立がん研究センター、国立成育医療研究センター、昭和大学附属江東豊洲病院、東京大学医学部附属病院、明理会中央総合病院、湘南鎌倉総合病院、山梨県立中央病院、名古屋大学医学部附属病院、大阪母子医療センター、公立豊岡病院、呉共済病院、九州医療センター、産業医科大学病院、浜の町病院、済生会熊本病院、和歌山県立熊野高等学校、大町町立大町ひじり学園

4 進学先内訳

大分県立看護科学大学大学院 8名（広域看護学コース5名、助産学コース3名）
 宮崎県立大学大学院 1名
 熊本大学教育学部教護教諭特別科2名
 西南女学院 助産別科 1名
 熊本看護専門学校 1名

3-3-2 大学院博士課程（前期）修了生

令和5年3月31日現在

1 修了生の状況（修了生18名）

出身地別	県内	10名	55.6%
	県外	8名	44.4%

2 進路決定状況

就職	決定	18名	100.0%
	未定	0名	0.0%
進学	決定	0名	-%
	未定	0名	-%

3 就職先内訳

(1) 地域別

大分県内	9名	50.0%
大分県外	9名	50.0%
計	18名	100.0%

(2) 就職先

独立行政法人等	5名	27.8%
都道府県	1名	5.6%
市町村	3名	16.6%
民間	8名	44.4%
大学	0名	0.0%
その他	1名	5.6%
計	18名	100.0%

大分県内	広域看護学	大分県、大分市(2)、中津市
	助産学	大分大学医学部附属病院 (2)
	N P	聖陵岩里病院
	看護管理・リカレント	大分市医師会立アルメイダ病院、別府医療センター附属大分中央看護学校
	健康科学専攻	-
大分県外	広域看護学	なし
	助産学	浜の町病院、福岡赤十字病院、福岡パースクリニック
	N P	和歌山病院、小倉医療センター、白十字病院、訪問看護ステーションあかりば、株式会社アイランドケア レスピケア ナース、種子島医療センター
	看護管理・リカレント	なし
	健康科学専攻	-

※既に就職している施設名も併せて記載。

4 進学先内訳

なし

3-3-3 大学院博士課程（後期）修了生

令和5年3月31日現在

1 修了生の状況（修了生6名）

出身地別	県内	3名	50.0%
	県外	3名	50.0%

2 進路決定状況

就職	決定	6名	100.0%
	未定	0名	0.0%

進学	決定	0名	0.0%
	未定	0名	0.0%

3 就職先内訳

(1) 地域別

大分県内	3名	50.0%
大分県外	3名	50.0%
計	6名	100.0%

(2) 就職先

独立行政法人等	0名	0.0%
都道府県	0名	0.0%
市町村	0名	0.0%
民間	0名	0.0%
大学	6名	100.0%
その他	0名	0.0%
計	6名	100.0%

就職先	大分県立看護科学大学(2)、佐賀大学、大分大学、西南女学院大学、純真学園大学
-----	--

※既に就職している施設名を記載。

4 授業等

4-1 学部

コミュニケーション論

1 年次 1 学期

関根剛

コミュニケーションの基礎となる情報の受信・理解・発信を中心に、Zoom による遠隔講義で 8 回の講義を行った。昨年度のような 9 月に授業時間のほとんどが開講される変則的な編成ではなく、通常の週一回開講のペースで実施された。講義内容は昨年と同様、コロナによる学生の交流減少に対応するために、自己理解・学生相互のコミュニケーションを促進するグループエクササイズを行った。また、講義全般においてもチャットによる随時質問の受付、ブレイクアウトルームや投票を用いてアクティブラーニングの機会を多用した。昨年度と比べて講義時間数が減少した点については、「コミュニケーションをとること」「文化とコミュニケーション」を統合、「ボディランゲージ」を「プレゼンテーションスキル」に組み込む形で行い、時間外学習としていくつかのホームページ紹介や動画視聴により講義理解を促進する機会を提供するなどして、コマ数の減少に対応することを行った。次年度は対面講義が予定されており、遠隔講義の良い点（情報を即座に示すことが出来る、チャットによる随時の質問を受ける機会を与える、終了と同時に Google フォームによる確認テストを行うことが出来る）点を残して、遠隔講義と対面講義の両方のメリットを活かす方法を模索する必要がある。

人のこころの働き

1 年次 1 学期

吉村匠平

外界の対象や自分自身を認識する人間の脳の機能、2 年次開講科目「行動療法論」の理解に必要なオペラント条件づけの基本的知識について、反転学習課題、講義時間内の小実験、ブレイクアウト機能による話し合い活動等を通して学習する機会を構築した。講義時間中に chat や Zoom の投票機能を利用したアウトプットの機会を構築し、学生が他の参加者の考えに触れる機会を提供した。講義後の学習課題として、毎時講義終了後に講義内容の要約課題とコメントの作成を求め、次回授業時に採点の上返却した。講義に先立ち、評価基準を学生に開示し、学習到達状況を個別に確認できるようにした。

大学ナビ講座

1 年次 1 学期

福田広美、村嶋幸代、濱中良志、安部眞佐子、稲垣敦、杉本圭以子、影山隆之、関根剛
甲斐優子、廣田真里、首藤佐織、増田勝美

1 年次早期に開講することで、大学で学ぶために、リテラシーと呼ばれる身につけておくべき基本的な事項および技術を習得することを目的とした。内容は、「大学カリキュラムの方針・考え方」「大学で学ぶということ」「メモ・ノートの取り方」「図書館利用法」「大学の授業と試験の受け方」「心の健康維持増進・健康な生活維持向上」「伝える技術：文を書く、レポートを書く」「伝える技術：話す、プレゼンする」「看護と将来の進路」の 8 回、講師 12 名で行った。本年度から新カリキュラムの科目として実施した。学生が、早期から県内就職に関する情報を得られるよう、医療政策課や県内の医療機関にも協力を得て、就職進路支援委員会による企画を組み込んだ。学生が、授業を通して大学における学び方と合わせて、将来の進路を考えることができた。

次年度は、学生が大学における学びを効果的に行うために生活面にも焦点を当て、4 年間の学生生活で留意すべき点など、学生が早期から対策がとれるよう教育を行う。

英語 I - A 1

1 年次 1 学期

宮内信治

英語音声では発音記号の習得を目標に、記号の確認と発声法を教授した。母音について認識を確認できた。調音点と構音の観点から音質の違いを意識させていきたい。講読では日本語訳との対照により英文法を理解させた。音源 CD を活用して発音の英語らしさを意識させた。今後は休止 (pause) の意味と役割を意識させたい。英文書写、音読暗唱の課題では、文量を増やし、抵抗なく達成できたと考えられる。多読では、学生自ら書籍を選び英語で読むことで世界に通じる教養に接触させた。収録語数の多い書籍を学生が手に取るよう工夫したい。

英語 I - B 1

1 年次 1 学期

Gerald T. Shirley

This class had two components: an eight-week-long Computer Assisted Language Learning (CALL) session and speaking and listening activities in the classroom. The CALL session focused on listening, reading, and grammar problems. In classroom work, a topical syllabus was used. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities were used to maximize student interaction. Classroom work was learner-centered rather than

teacher-centered, so students participated actively in every class. The course content, learning materials and teaching method were evaluated highly in the final class survey of all students, and the survey results will be used to improve the course in the next academic year.

環境保健学概論

1 年次 1 学期

小嶋光明、恵谷玲央

世界保健機関（WHO）レポートに沿って、WHO が定義する環境保健とその基本的な考え方について教示し、環境中の様々な有害因子が人間の健康に及ぼす影響を理解するための方法を中心に講義している。健康障害や疾病発生を予防し、健康増進に寄与するための方策について、最新の知見や技術などを取り上げ、講義を進めることで疫学研究に必要な知識を修得できるよう努めた。今年度はオンラインで講義を行い、オンラインフォームやチャット、メールなどを用いて学生からの質問に対応しやすい環境を整備し、積極的に質疑応答に加わる学生も多かった。試験の得点に大きな差はなかった。今後は、学生のより積極的な学習を促進するため、環境保健に関する課題に対処するための解決策を考察する課題を設けるなど、検討する必要がある。

健康情報処理演習 I

1 年次 1 学期

品川佳満、岡田悠希、佐伯圭一郎

看護師に求められる ICT 活用能力のベースとなる基本技術（データ管理、ワープロ・プレゼンテーション・表計算ソフト、画像処理、データベースの利用）について教授した。今年度から、表計算ソフトの演習時間を増やし、データ処理能力の強化を図った。授業は、Google Classroom を最大限に活用し、①事前学修のための資料や動画、②講義・演習で使う資料等の電子媒体提供、③事後学修用の課題や練習問題の提示、④課題解説、の流れで展開した。今年度から評価方法の一つとして、コンピュータを利用した実技試験を取り入れた。課題や実技試験の結果から判断すると、大部分の学生については ICT に関する基本的な能力は、身に付いていた。今後は、授業で示していない処理等についても、自らが調べることで実践できる応用力の強化を図りたいと考えている。

生体構造・機能論Ⅰ

1 年次 1 学期

濱中良志

今年度はコロナ禍のため、Zoom の様々な機能（アニメーションや書き込みなど）を駆使して循環器や呼吸器や神経などの、人体の構造（解剖学）と機能（生理学）を教授した。今年度から動画配信を行い、事前学習に役立てた。

生態構造・機能論Ⅱ

1 年次 1 学期

岩崎香子

ヒトの生命維持に最低限必要な生体機能のうち、消化・吸収、排泄、内分泌、生体防御を行う器官の構造と機能について教授した。レベルの異なる 2 つの書籍（基本事項を中心とした書籍①と詳細な内容まで取り扱った書籍②）を教科書として用いた。書籍①を用いて予習を行い（該当する領域を読み、関連動画を視聴後、Google フォームの確認テストを行う）、復習には授業で使ったプリントと書籍②を用いて復習することで理解の定着を図った。事例問題を 2 回取り入れ、グループで問いの答えを見つけるためのディスカッションを設けた。事後アンケートでは、学習内容の連携が意識できた、ディスカッションによる気づきが得られたとの回答が多かった。学習習慣の確立促進と、他者とのディスカッションにより自己の理解不足点を自覚することを促したことから、全員が単位取得できたが、再試験受験者の半数が学習習慣の確立に時間がかかったという特徴が見いだされた。次年度は予習・復習の習慣化を早期に確立する援助を検討する必要がある。

健康運動ボランティア演習

1 年次

稲垣敦

昨年度は COVID-19 のため全てのイベントが中止となり、学生はボランティアに全く参加できなかったが、今年度は、①富士見が丘夏祭り（7/23）、②富士見が丘団地わかば老人クラブ「わかば会サロン」（9/24）、③七瀬の里まつり（11/6）、④総合型地域スポーツクラブ交流会（11/23）、⑤別府大分毎日マラソン（2/5）、⑥森林探検ウォーキング（3/25）の 6 つのイベントで各学生が 1 回ずつボランティアを実施できた。次年度のボランティアの実施は、感染状況や感染症の取り扱い等に影響にもよるが、各学生が 2 回のボランティアに参加することを目指す。

スポーツ救護（救急法含む）

全学年

稲垣敦

受講希望者は 67 名いたが、COVID-19 により日本スポーツ救護看護学会主催のスポーツ救護講習会が開催されなかったため、今年度は開講できなかった。次年度、開講できた場合は、受講希望者全員が受講できることを目指す。

生命科学入門

1 年次 1 学期

小嶋光明、岩崎香子、定金香里

看護学を専攻する学生が身につけておくべき基礎教養として生物の基本的事項を講義している。また、医療の分野で利用されているバイオテクノロジーも紹介し、生物学を学ぶ必要性を理解できるよう努めた。集中講義（4 日間連続で 8 回）なので、1 回ごとに要点を簡潔にまとめるように心がけた。また、高校までに生物を十分に習得できなかった学生にも配慮して、毎回講義で小テストを行うことにより学生の理解度を把握しながら講義を進めた。

看護サイエンス入門

1 年次 1 学期

吉田成一、恵谷玲央、岡田悠希

本年度より開講した選択科目である。看護学を学修するにあたり身につけておくべき物理、化学および数学に関する基本的な事項を講義している。高校までに十分に習得できなかった内容を再学習すると同時に看護学との関係についても意識を向けるよう努めた。45 名が履修登録を行い、43 名が成績評価に関する試験を受験し、42 名が単位修得に至った。

物理、化学、数学の各領域間で平均点に大きな差は生じなかったが、個人毎の成績では 3 領域間で習得度合いに大きな差が生じた学生もいた。特定領域の学修習得状況が悪かった学生が、その後の科目履修に障害が生じるかについて今後評価する必要がある。

看護学概論

1 年次 1 学期

廣田真里、秦さと子

看護を原理的、本質的に理解することで看護を探究し、創造していく基盤を養うことを目的としている。看護の対象である生活者としての人間理解及び看護の歴史を縦軸として、看護の役割や機能を横軸に授業を組み立て、看護とは何かを考えられるように構成した。パワーポイントでは文字を減らし、図やイラスト等多用し、理解してほしい箇所や大事な箇所には「重要」「ポイント」などと資料に示し印象に残るように工夫した。毎回、レポートにより、その日の学習内容を復習できるように意図的に課題を課した。

10 回の講義を通して、それぞれに「看護とは何か」「生活者としての人間の理解」など、未熟ながらも 1 年次生で考えられる限りの習得はできたと考える。また、これから看護を学習していくうえで、看護学を学ぶ意味、また看護学の基盤となる学問の習得の必要性にも言及し今後の学習の動機づけとなっていることが感じられた。

次年度は、概論で学んだことが他の科目ともつながっていることをさらに強調して、知識としての定着をさらに図っていきたい。

身体観察技術論

1 年次 1 学期

秦さと子、石丸智子、田中佳子、神矢恵美、廣田真里

看護の展開につながる身体的な情報を収集する方法について、人が生きていくために必要な「恒常性の維持」と「日常生活行動」を枠組みとし、解剖生理に基づいた身体所見の理解と身体観察技術の習得を目指して技術演習を行った。授業範囲の「講義動画」のオンデマンド配信等を教材とし、学生がグループ演習で取り組む課題事例に基づいて事前学習を課した。事前学習で自分の考えをつくり上げたのち、授業でのグループ活動に取り組むような授業構成とした。これにより、可能な限り演習時間をグループ活動や技術練習にあてることができた。また、希望に応じて課外でも教員指導が受けられる体制を取っており、学生は概ね目標達成できた。今後も学生が主体的に課題に取り組む仕組みを取り入れながら、授業展開を行っていく必要がある。

予防的家庭訪問実習 I

1 年次

福田広美、影山隆之、篠原彩

単位認定者を学部長とし、看護研究交流センター地域交流チームが実習マネジメントを担当した。新型コロナウイルス感染症の感染拡大以降初めて、80 チームすべてに協力者を配置すること

ができた。感染拡大のため訪問は4月から3か月間休止とし、7月より開始したので、単位認定に必要な訪問回数を1年次生は3回とした。訪問の実施にあたり、抗原検査ならびに細かな症状の有無の確認を行った。また、これまでの学生2人で訪問するというルールを見直し、訪問予定の学生が体調不良や新型コロナウイルス感染関連の休みなどやむを得ず訪問できない場合は、学生1人での訪問も可能とできるだけ訪問機会を持てるようにした。休止期間中、1年次生は地域関係者による講話を通して、訪問地域の特徴や課題を学ぶ機会を持った。さらに、自分自身を生活者として捉えるグループワークをチームで行い、ディスカッションを通して協力者を生活者として捉える視点を培うとともに、チームの親交を深める機会を持った。1年次生は特に、協力者とのコミュニケーションと、在宅高齢者の生活・人生の全体像を捉えることを主眼とした。訪問機会は少なかったが、情報を得たり、信頼関係を築くうえでコミュニケーションが重要であり、上級生と協力者のやり取りを見るのが自己の課題を確認する機会となった。

カウンセリング論

1年次2学期

関根剛

カウンセリング理論およびコミュニケーションスキルを解説、ロールプレイを取り入れて体験的にスキル修得することを目標に、今年度から2回少ない8回の講義を対面により講堂で行った。昨年度から2コマ減少したのは、カウンセリング理論について、来談者中心療法、認知行動療法、健康相談を残し、精神分析、ゲシュタルト療法を減じた。また、ロールプレイを4回から3回に減じている。講堂における講義、特にロールプレイは4名グループとして実施するには、物理的な構造上適してはならず、2人組を中心として実施することとなった。また、懸念されていたGoogleフォームによる毎回テストについては、対面講義であっても、提出をその日中とすることで、特に大きな問題は生じなかった。次年度も対面講義が行われるとした場合、ロールプレイをより有効に実施する物理的な空間をどのような調整するかが課題となる。

英語 I - A 2

1年次2学期

宮内信治

講読ではシェークスピアのソネット、新渡戸稲造『武士道』を使い、「国際人」に求められる教養と思考の一端に触れさせた。作品や作者の歴史的背景も紹介していきたい。講義後半の多読活動では、演習活動に慣れて学生の読む量が増加した。読書記録の様式を感想に特化し、記録時間を短縮した分、読むことを意識して演習させた。古典的名著の多読版への興味関心を喚起するよう、今後は提示の仕方を工夫していく。

法学入門(日本国憲法)

1 年次 通年

二宮孝富

市民としての基本的な法的素養を身につけるために、日本国憲法について、歴史的意義と人権に重点をおいた講義を行い、また、民法について契約・不法行為・家族についての講義を行った。単位認定者数は 78 名であった。

生物統計学

1 年次 2 学期

佐伯圭一郎、岡田悠希

看護研究を遂行する上で必要となる記述統計学、推測統計学の基礎について講義を行った。オンライン、対面、対面とオンラインを併用したハイブリット型の授業が混在する結果となったが、今年度から Google Classroom を利用することで、講義資料の公開や課題提出が効率的に行われ、受講者の便宜が図れたと考える。また、今年度からカリキュラムが変更となったため、健康情報処理演習Ⅱで実施する統計学の演習が当科目の終了後となった。この点については、この科目で理論的な内容で一区切りをつけて演習につなげることができたとは考えるが、次年度以降は当科目の内容と演習で扱う内容等についてさらに改善を進めることを考えている。

健康情報処理演習Ⅱ

1 年次 2・3 学期

品川佳満、岡田悠希、佐伯圭一郎

健康情報処理演習Ⅱでは、前半は、医療職者に必要な情報セキュリティや個人情報の取り扱い等の情報倫理に関する事、病院情報システムの役割等について講義（オンライン）形式で教授した。また、今年度から AI や IoT など、Society5.0 時代に必要な話題を講義に取り入れた。後半は、看護や医療分野におけるデータ解析に関するスキル修得のための演習を行った。前半の筆記試験の結果をみるとシラバスで示した到達目標をクリアしていたと考えられる。後半については、課題や実技試験により評価を行ったが、結果として十分な修得には至っていなかった。理由としては、新型コロナウイルスの影響で授業や試験のスケジュールが大きく乱れたことが学習の深度に影響した可能性がある。また本演習は、健康情報学や生物統計学の理解、健康情報処理演習Ⅰの基本技術の修得が前提になっていることが難易度を高めたと考えられる。各課題の目的を十分に把握したうえで演習に取り組むことが、データ解析スキルの修得や、関連科目の理解を深めるため、今後明確に伝えていきたい。

生体代謝論

1 年次 2 学期

安部眞佐子

生化学と栄養学の教科書を用いて講義をした。生体構造論と生体機能論がより深く理解できるように、生体分子を低分子から高分子へと基本的な性質と代謝をあつかった。酵素、ビタミン、ミネラル、情報伝達にふれ、エネルギー代謝を生化学での細胞内の反応として説明し、さらに個体レベルで空腹摂食サイクルの臓器での代謝に力点をおいて講義した。生化学部分は、長文のレポート課題を全員が提出した。栄養学では、栄養素の理解、食事摂取基準、また血糖値の調節について説明した。当初はオンラインでの講義であったが、後半は対面での講義となった。毎回、正誤問題を課し、試験はその中から問題を出題した。また、講義中は、学生同士が知識を共有できるようにブレイクアウトを使用した。講義の感想としてブレイクアウトの利用についての意見が多く、言語化の有用性を大多数から確認できた。今年度は、学生からの質問も少なかったため、講義の進行はほぼ予定通りであった。次年度は、対面での講義進行となると予想されるため、学生への質問回数が限られるが、対面の良さを生かして講義をしたい。

病理学総論

1 年次 2 学期

定金香里

シラバスに即して、疾病の成り立ちや修復過程について組織レベルから講義した。講義のスライド資料の他、講義内容を簡潔にまとめた配付資料、視覚資料も配付した。また、試験前に演習問題を配付し、講義の復習をさせた。基本、対面講義を行ったが、状況に応じ、Zoom でも講義を行った。

講義については学生からわかりやすい、スライドが見やすいなどの評価を得た。一方で時間配分に関しては改善の余地がある。講義時間が足りず、対面講義では、講義時間内に小テストの実施や学生と双方向のコミュニケーションを取ることができなかった。小テストの代わりに演習問題を配付したが、来年度はこれを毎講義後の復習課題として配布したい。Zoom での講義では投票機能を利用して、簡単なクイズを実施したが、対面での講義でもそうしたツールが利用できないか検討したい。質問は、講義後にメールで受け付け、次の講義時間で答える形式を取り入れる。

健康スポーツ

1年次2学期

稲垣敦

今年度より、科目名が「健康運動」から「健康スポーツ」に変更された。この科目では、運動の楽しさや素晴らしさ、運動の必要性を体感するため、これまでに学生がしたことのないような多くのレクリエーションやニュースポーツ（フライングディスク、アルティメット、ユニバーサルホッケー、インディアカ、ソフトバレーボール、リングテニス、フットサル、3オン3、バドミントン、ドッジボール等）を行った。今年も COVID-19 感染予防のため、運動中もマスクを着用し、手、運動器具、体育館の消毒を徹底し、飲料水を持参するように指導した。この結果、この授業中に感染したと考えられる報告はなかった。次年度も十分な感染予防対策の下で実施する予定である。

身体安楽援助論

1年次2学期

秦さと子

実践で遭遇する機会の多い身体症状とその発生機序を理解し、症状が日常生活に与える影響を考察したうえで、対象に必要な援助を判断する力を養うことを目的に実施した。感染対策のため全てオンラインで講義を行った。講義では、身体の異常を示すサインに気づくための観察の視点や、発生のメカニズムを理解しながら、必要な援助を考えられるように導いた。また、思考に合わせて情報を提示するように講義資料の工夫を行った。筆記試験では、対象の異常を示すサインに気がつき、メカニズムから必要な支援が導けていることが、学生の記述から確認できた。今後は、授業内容の理解を促進するための予習の支援を検討する。

生活援助技術論

1年次2学期

秦さと子、田中佳子、石丸智子、神矢恵美、廣田真里

シミュレーションあるいは学生に対して安全、安楽に配慮した技術が実施できることを目標に授業を行った。今年度は、感染予防対策に配慮しながら、整った環境下で実演しながら看護技術が学べるようにすべて対面授業で実施した。1学期の身体安楽援助論と同様に、「講義動画」のオンデマンド配信等を教材とし、学生がグループ演習で取り組む課題事例に基づいて事前学習を課し、授業でのグループ活動に取り組むような授業構成とした。同じ授業構成にすることで、実技練習時間の確保とともに、学習行動の習慣化を図った。学生は概ね目標達成できた。今後は、習得した技術力を適正に評価する方法の検討を行っていく。

看護疾病病態論 I

1 年次 2 学期

藤内美保、石田佳代子、内倉佑介、山田貴子

本年度、1 年次生は新カリキュラムの運用となる。本科目の内容に大きな変更はないが、障害をもつ対象に対して看護職としてどのような観察をする必要があるのかの理解が深められることを目標においた。2 単位 20 コマで、疾患に関する病気の概念、症状・検査・治療などを中心に行った。消化器疾患、呼吸器疾患、循環器疾患、血液・造血器疾患の講義をオンラインで行った。各系統の解剖や生理の基礎的知識を想起させながら教授した。試験もオンライン形式で実施した。学生は何ができて何ができなかったかがすぐわかり、教員も全体的な傾向や誤答が多い問題などがすぐに把握できて非常に効率的である。中間試験を実施して、2 系統ずつの試験とし、知識の整理ができるよう配慮した。COVID-19 の感染拡大の影響から、全てオンラインの授業であったが、学生も慣れてきており、集中できているとの反応であった。

人間科学系との既習学習との連動を考慮して、授業の単元の進行を考慮し進めた。授業アンケートでは概ね満足度は高かったが、既習学習をどう積み上げながら疾患や病態、観察ポイントの理解に繋げていくか検討していく必要がある。

教職概論

1 年次 2・3 学期、

吉村匠平、麻生良太、小野治子、関根剛、堀本フカエ、横山秀樹

本講義の受講が、教職課程の履修を継続するかどうかの判断に資するよう、専門職としての教員の基本的な心構え、教職の意義、教員の役割、職務内容などについて学び、職業としての教師が、どのようなものであるのかについて各自のイメージを作り上げる機会を提供した。講義の内容についてお互いの意見や疑問を討論し、一つ一つについて自分の意見や考えがもてるようにすることを通して、教師としての構えや教師としてのありようについて考える機会を提供した。本年度は、養護実習を終えた 4 年次生との交流の機会を提供することができた。

人間関係学

1 年次 3 学期

吉村匠平

心理学における「人格、性格」概念の理解について、実体論的理解（類型論、特性論）と状況論的理解の双方の視点から考える機会を提供した。反転学習課題、講義時間内の小実験、ブレイクアウト機能を用いた話し合い活動等を通して学習する機会を構築した。毎時座席を抽選で指定し、学生が他の参加者の考えに触れる機会を提供した。講義後の学習課題として、毎時講義終了後に講義

内容の要約課題とコメントの作成を求め、次回授業時に採点の上返却した。講義に先立って評価基準を学生に開示し、学習到達状況を個別に確認できるようにした。

英語 I – B 2

1 年次 3 学期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students participated actively in every class. The course content, learning materials and teaching method were evaluated highly in the final class survey of all students, and the survey results will be used to improve the course in the next academic year.

言語表現法

1 年次 3 学期

松田美香

小論文を書ける文章力および社会人としての適切な言語表現を身につけるため、論文で使用する日本語、データの引用、定型文などを実践的に学んだ。評価はレポートとし、適切にデータを引用し、文を組み立てて、テーマに沿った小論文を書くことができた。

韓国語

1 年次 3 学期

黄炳峻

ハングル（文字）の発音と書き方を覚え、基礎的な文の構造を学びながら、簡単な会話のやりとりも試みる講義を行った。単位認定者数は 69 名であった。

哲学入門

1年次3学期

平野互

哲学は、様々な事象を対象として概念化し考察する過程と定義されるため、保健・医療・福祉および一般社会で重要と考えられる概念である「権利、人権」、「自由、自己決定、自立」、「障がい」、「尊厳」、「優生思想」を考察のテーマとして取り上げ、論じた。また看護職者の行動の拠り所とすべき実践の哲学である生命倫理、看護倫理について、その基本的な考え方、原則を教授した。すべて対面で講義を行ったが、出席状況は極めて良好で、単位認定者は72名であった。

社会学入門

1年次3学期

大杉至

社会学の巨匠たちが社会をどうとらえてきたかを概説し、それぞれの論者によって、様々な社会のとらえ方があることを理解し、社会を見る目が豊かになるように講義を行った。単位認定者数は10名であった。

健康情報学

1年次3学期

佐伯圭一郎

保健統計学、疫学の基本的な考え方を中心に講義を進め、健康情報処理演習において演習課題を組み込んで、理解の定着と応用力の向上を図っている。

本年度から新カリキュラムに移行し、3学期の開講となったため、統計学や情報処理についてある程度学習が進行した状態での履修となった。それを考慮した内容の修正や課題の変更などを一部試みたが、不合格者が昨年度よりは減少したものの、めぼしい効果は上げられなかったと評価する。また、対面での授業となったため、内容を絞り込んで授業の進行にゆとりを持たせ、講義の区切りを明確にし、授業中における学生の学習の整理や質問を推進することに配慮した。ただ、実際には授業中に質問はほとんどみられず、授業アンケートでは、授業の進行が冗長であるという声や、スピードアップや枝葉の内容の切り捨ての要望が寄せられたため、次年度には講義は内容をさらに絞り込んでスピーディーにすすめ、質問や補足はGoogle Classroomをより活用する方向に修正を予定している。

病理学各論

1 年次 3 学期

定金香里

シラバスに即して、器官系統別に様々な疾患の成り立ちに関する講義を逆転授業の形式で行った。学生は、事前に講義動画を視聴し、質問がある場合はメールを教員に送る。講義では、学生は確認クイズを解いた後、自己採点をする。残りの時間で、教員が解説および質問に対する回答を行った。講義動画用のまとめ資料および視覚資料の他、解説スライドも配付した。

講義については学生からわかりやすい、スライドが見やすいなどの評価を得た。一方で、配布物が多いという意見もあった。逆転授業に関しては、確認ができて良い、知識がしっかり身につくといった声と、講義動画を見る時間がない、二度手間だと思う、といった相反する意見が学生から聞かれた。しかし、学生の大半が、逆転授業は継続すべきであると考えていた。来年度は可能であれば、講義動画を短縮したものを作製したい。講義動画を事前に見ていない学生に関しては、FD/SD 研修において、講演者から授業中に視聴させれば良いという教唆を得たので試してみる。また、配布物に関しては、まとめ資料と視覚資料を統合した資料に変更したい。

微生物免疫論

1 年次 3 学期

吉田成一、松本昂

微生物と生体、環境との関わり、特に微生物感染症について、および病原微生物に対する生体の防御反応について、理解させることを主要な目標とした。

カリキュラム進行の関係があり 2 コマ続きで 5 回講義となったこと、また、他科目との関係で 3 回講義を行った後、1 ヶ月以上間隔が空いた上で 2 回講義があったため、受講生からすると科目の修得に困難感があったと考える。一方、今年度の講義は全て講義室で行うことが出来たため、昨年度の講堂で実施した講義と比較すると受講生が受講するにあたって、教員の声が聞こえにくいという状況にはならなかったと考える。

試験の平均点等は昨年度とほぼ同程度であったが、記号選択問題の正答率は 9 割弱と極めて高かったが、記述式問題の正答率が低かったことから学修状況は精確な理解となっていないと考えられる。特に、本試験で出題した記号選択問題と同一の内容を記述式問題にしたところ、7 割強になったことは、選択問題で正答できたとしても理解していることではないということである。本質的な理解につながっていないと思われる受講生も散見された。来年度は 1 回 1 コマの講義となること、講義の中断期間もないため、各回の復習および疑問点の都度解決する対応などを行い、状況の改善を期待したい。履修者（再受験該当者を含む）85 名中、78 名が単位を取得した。

看護理論入門

1 年次 2 学期

廣田真里、秦さと子、石丸智子、田中佳子、神矢恵美

看護現象を科学的に理解する力や看護の基盤となる看護観を養うことを目的とし、看護理論に関する基本的知識について学習し、看護理論と看護実践の関連・活用について考える科目である。カリキュラム変更に伴い、授業回数が 10 回から 8 回となったため、授業計画の変更が必要であった。グループワークの回数を確保するため、教師による講義を 2 回とし、代表的な看護理論家をリレー形式で紹介した。

「理論」について解説し、代表的な看護理論家 6 人（ナイチンゲール、ヘンダーソン、ペプロウ、オレム、ベナー、ロイ）の看護理論を通して「看護」「人間」「健康」「環境」の看護のメタパラダイムについての理解とともに、看護について自分なりの考えを深められるように促した。6 人の看護理論家の考えを学んだ後、それらの理論を実践につなげるため、グループワークを実施した。グループワークでは、1 月に計画されている基礎看護学実習での「対象者を社会で生活している人として理解できる」という目的を達成するために対象を理解するのに適当と思うオリジナルの記録様式を作成させた。その記録様式を用いて、教員が演じる模擬患者から情報を引き出し、整理したものを発表させた。それぞれのグループでオレムとヘンダーソン、ロイとペプロウといったように、理論家の考え方を組み合わせてオリジナルの記録様式を作成していた。看護理論の特徴をとらえた上で、自分たちなりの記録様式を作成した意図や考えを述べられており、どのグループも工夫を凝らした様式と発表であり、理論を学ぶ意味の理解がされていることを実感した。

グループワークの時間がやや少なかったが、完成度は高く、発表時のディスカッションも活発であった。

しかし、グループワークの説明がわかりにくいとの学生評価があることから、次年度は最初のオリエンテーションをわかりやすく説明し、導入をスムーズに行うことが必要である。また、看護理論から実習へのつながりを理解しやすくするため、教育内容及び教育方法の工夫が必要である。

基礎看護学実習（2021 年度分）

1 年次後期（2 年次前期に実施）

廣田真里、秦さと子、石丸智子、田中佳子、神矢恵美、藤内美保、石田佳代子、山田貴子、内倉祐介、中釜英里佳、矢野亜紀子、藤本優子、今村知子

2022 年 1 月 17 日開始予定の基礎看護学実習を COVID-19 オミクロン株の流行により 7 月に延期した。7 月 21 日（木）～8 月 3 日（水）までの期間、大分県立病院、大分赤十字病院、アルメイダ病院、大分医療センター、大分記念病院、三愛メディカルセンター、井野辺病院の 7 か所で実習を計画した。しかし、COVID-19 による第 7 波の到来のため、大分県立病院初め、次々に実習を断られ、最終的に、アルメイダ病院、大分医療センター、中村病院、豊後大野市民病院、大分赤十字病院の 5 か所で時期をずらしながら実施した。実習期間の全日程を実習できたのは、アルメ

イダ病院のみで、他の病院の実習は学内実習との組み合わせで実施することとなった。学生 1 名が発熱のため、学内実習に変更となったが、そのほかは期間は短かったものの、臨地での体験はできた。それぞれの病院で、患者訪問時間が限定されたり、発熱のために控室で待機したりと病院の事情、学生の体調等で、その都度対応が必要であった。学生は短い期間ながらも学内で学んだコミュニケーション技術を駆使し、限定された中で情報収集し、それなりに患者理解に努めていた。また臨地でしか学べない患者の反応を目の当たりにして戸惑う自分を振り返ったり、看護職者としての態度を指導されたり、意図的な情報収集についてなど、多くの学びがあった。

一方で、学生が自身の体調や日々変わる周囲の状況から、多くの制約を受け変化に対応しなければならず、落ち着いて実習に集中することができない環境であった。学生が実習に集中できる環境を提供できなかったことは反省すべき点である。

次年度の実習について、効果的な方法及び、変化に対応できる環境を考慮して、事前にいくつかの実習パターンを準備しておく必要がある。

基礎看護学実習（2022 年度）

1 年次 3 学期

廣田真里、秦さと子、石丸智子、田中佳子、神矢恵美、藤内美保、石田佳代子、山田貴子、内倉佑介、渡邊一代、矢野亜紀子、吉村幸永、中釜英里佳、橋本志乃、今村知子

2023 年 1 月 16 日から基礎看護学実習を大分赤十字病院他 8 病院で実施予定であったが、COVID-19 第 8 波の流行により、大分赤十字病院、大分記念病院、三愛メディカルセンター、井野辺病院、新別府病院での実習を断られたため、アルメイダ病院、大分医療センター、中村病院の 3 か所で実施した。3 か所の病院で臨地実習できたのは 35 名、学内実習となったのは 49 名であった。

臨地実習では、当初、連絡・報告・相談のタイミングや態度などの指導を受けたが、徐々に改善が見られた。受け持ち患者との関係では、コミュニケーションが日を追うごとにとれるようになり、概ね良い関係が築けていた。しかし、得た情報を整理し思考し記録に残すことが不十分であった。情報は得られているにもかかわらず、得られた情報から生活者としての視点で思考することが不足しており、記録はさらに一方向だけの捉え方になっていた学生が多かった。カンファレンスで十分な意見交換にならず、他の学生の意見を取り入れたり思考の広がりや深まりに繋がれなかったことがその一因である。学生たちは 2 週間臨地に行けたことで、実際の患者を目の前にして、演習とは異なる体験をし、戸惑い、悩んだことで実習による達成感を得ていた。学内実習では、学生自身が臨地に行けないため、臨地に行けた学生との差が生じるのではないかという危機感を持ち、日々積極的に実習に取り組んだこと、担当教員が、可能な限り臨地に近い環境を作り実習指導者になって指導したこと、ゆっくり思考する時間があったことなどから、記録上はよく対象を捉え、エビデンスに基づいて必要な看護を導き出せていた。学生自身も学内ではあったが、実習の達成感は得られていた。全体として、実習目標は達成できていた。

今後は実習で得られた情報をじっくり思考する時間と助言が必要だと考える。次年度の実習で

は、臨地で見聞きした情報を取捨選択するための助言と、思考する時間をとれるよう実習計画を立案する必要がある。

次年度の実習について、効果的な方法及び、変化に対応できる環境を考慮して、事前いくつかの実習パターンを準備しておく必要がある。

看護疾病病態論Ⅱ

1 年次 3 学期

藤内美保、石田佳代子、内倉佑介、山田貴子

本年度、1 年次生は新カリキュラムの運用となる。本科目は従来 2 単位 20 コマであったが、1 単位 10 コマと変更し、目標は、障害をもつ対象に対して看護職としてどのような観察をする必要があるのかの理解ができることを追加した。2 単位 20 コマで、疾患に関する病気の概念、症状・検査・治療などを中心に行った。腎・泌尿器疾患、内分泌・代謝疾患、脳・神経系疾患、運動器疾患、感覚器系の眼・耳・鼻・皮膚疾患の講義をオンラインで行った。各系統の解剖や生理の基礎的知識を想起させながら教授した。試験もオンライン形式で実施した。学生は何ができて何ができなかったかがすぐわかり、教員も全体的な傾向や誤答が多い問題などがすぐに把握できて非常に効率的である。授業の単元の進行は、人間科学系との既習学習との連動を考慮して進めた。

授業アンケートでは概ね満足度は高かったが、既習学習をどう積み上げながら疾患や病態、観察ポイントの理解に繋げていくか検討していく必要がある。

健康支援概論

1 年次 2 学期

加藤典子

本年度から新カリキュラムで開講された。健康の概念と健康に対する考え方や意味を考え、健康の維持・増進の重要性について学ぶことを目的とした。対面で講義とグループでの演習を行った。看護の対象である人間には健康に関する価値観は多様であることを学ぶとともに、健康に関する基礎的なデータ及び支援に活用できるモデルを活用した演習を行った。また、学習を通じて学生が生活習慣に関して振り返りを行う機会とした。

行動療法と発達心理

2 年次前期、

吉村匠平、関根剛

行動療法については、より実務的に理解できるよう、多理論統合モデルを用いて戦略的に考える視点を中心の構成とした。評価は試験及び行動改善プログラムのレポートによって行った。

発達心理については、言語発達、運動発達、進化心理学、発達障害を取り上げ、受講者が互いに意見を交流する機会を設けながら、定型発達を基準として発達を理解する構えを相対化する視点の獲得を主目的として講義を展開した。評価は、毎回の要約課題とコメント、反転学習課題の成績を総合して行った。評価は、それぞれの評価 50%ずつとして評価し、事前に基準を受講者に明示した。

音楽とところ

2 年次前期

小川伊作

クラシック音楽、ジャズ、フォークソングの 3 つのジャンルの音楽を取り上げ、多様な音楽に触れることを通して、「音楽とは何か?」、「音楽の意味するもの」について、そして音楽と人間との関係についてふりかえる機会とし、もって音楽についての理解を深める講義を行った。単位認定者数は 43 名であった。

美術とところ

2 年次前期

澤田佳孝

便利さを重視する現代社会においては、とかく失われがちな、人が生まれながらに持っている物を作る力、表現する心・工夫する能力などを、描く体験を通して復活させ、自己を表現することの楽しさ、感じたこと・考えたことを形に表すこと(造形表現)の歓びを理解する講義を行った。単位認定者数は 17 名であった。

英語Ⅱ－A 1

2 年次前期

宮内信治

原書 *Word Power Made Easy* を用いて英語語彙の増強を図った。ギリシャ語、ラテン語起源の語源についての知識をもとに医療関連語彙を習得させた。長期記憶への定着を念頭に、ラテン語の活用が英語にどのように反映されているかを意識できる知識を提示していきたい。1 年次に学習させた英文解釈マニュアルを活用し、看護に関する英語原著論文の緒言を文法解析させ、講義時の解説をもとに解釈の修正と文法理解を促したうえで和訳させた。論文読解における語彙の重要性と文法解析の有効性を認識させた。オンライン講義時の解説スライドを改訂した。講義時に説明した内容を今後簡潔に提示できるよう学内通信インフラの活用を図りたい。

英語Ⅱ－B 1

2 年次前期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students participated actively in every class. The course content, learning materials and teaching method were evaluated highly in the final class survey of all students, and the survey results will be used to improve the course in the next academic year.

保健ボランティア

2 年次

加藤典子

保健医療に関するボランティアを体験し、体験を通じて、保健医療現場におけるボランティアの意義について理解を深めることを目的としている。学生自らが、保健医療に関わるボランティアができる施設を探して参加手続きを行い、ボランティアに参加したうえでレポートを作成する一連のプロセスをとおして、自主性や行動力の向上につながっている。今年度は、新型コロナウイルスの感染状況を見ながら、学生が参加できるボランティアを行った。子ども食堂や学童保育などでのボランティアをとおして、各学生が目的を達成できた。

環境保健学詳論

2年次前期

小嶋光明、恵谷玲央

環境保健学詳論は生活の中で遭遇する身近な環境因子(物理的因子、化学的因子、生物的因子)が及ぼす健康影響についての基礎知識を講義している。熱中症、感染症・ワクチン摂取、PM2.5などの身近な健康影響をテーマとして与え、そのメカニズムや予防策について学生に発表してもらうことにより、問題の把握、予防や管理のあり方を考えることができるよう配慮した講義を行った。また、発表に対して学生間でのコメントや質疑応答を促すことで関心をもった講義参加の機会を創出することができた。同一のテーマであっても、学生毎の多様な視点での発表内容となり、学生にとっての気づきも多くあったと考える。

しかし、学生によっては発表時間を超過する場合があったり、質疑が出にくい場面も見受けられた。今後は発表を円滑に進め質疑応答を促すためのツールの利用やルールの整備を検討し、学生が自分の意見を主張しやすい環境を整える必要がある。

生体薬物反応論 I

2年次前期

吉田成一

生体薬物反応論 I は薬理学総論、末梢神経系作用する医薬品および生活習慣病、感染症に用いる医薬品に関する講義を行う科目である。学習範囲が絞られているため、理解度が高い学生が多い状況であった。しかし、過去に定期試験の問題として出題していない分野あるいは医薬品(今年度は不整脈と感染症)の学修修得状況は低かった。また、基本的な用語について精確な説明ができていない受講生が多かった。

今年度も講堂で行ったことから、教員の発言及び学生の発言ともに聞き取りにくいという指摘が多かったが、次年度以降は講義室で実施するため改善できると考える。講義後に、本科目の学修について学修成果物(ノートなど)を提出するよう求め、質問事項の記載があれば回答する、あるいは、提出物に誤りがあれば指摘するなどの対応を継続的に行っているが、提出状況が年々悪化している。これは疑問点あるいは不正確な理解に対応できないことになるため、一定回数の提出を履修の条件にするなど、今後学生の意見を確認しながら対応を考えていきたい。なお、提出状況が高い学生と低い学生を比較すると、高い学生の単位修得率が高かった。

試験の平均点は、昨年に引き続き低下した。また、本試験で合格しなかった者のうち再試験を受験しなかった者も多数いたため、単位取得率も低下した。なお、履修者(再受験該当者を含む)92名中、74名が単位を取得した。単位取得率は昨年度より低下した。

健康運動学

2 年次前期

稲垣敦

1 年次の健康運動では運動の楽しさや素晴らしさ、必要性を体感した。2 年次のこの科目では、さらに科学的知見に基づいて運動の重要性や必要性を講義した。はじめに科学一般について考え、その後、バイオメカニクスや生物の進化の視点を取り入れて、加齢や不活動・運動による身体機能の変化や健康との関連性を講義することで、運動の重要性を教授した。また、トレーニング理論と具体的な運動の仕方についても講義した。今年度は、COVID-19 感染拡大のため、全て Zoom で行った。次年度は対面での授業を予定しており、学生の反応を活かしながら、講義を進めたい。

医療技術論

2 年次前期

秦さと子、石丸智子、田中佳子、神矢恵美、廣田真里

対象者の安全と安楽を優先するとともに、検査の目的や治療の効果が最大限に達成されるように支援する方法の習得を目指して授業を展開した。今年度は感染対策を実施しながら、整った環境下で看護技術が学べるように、すべての授業を対面で行った。初めて見る医療機器の取り扱い方や、対象および自己の安全のために必要な行動や技術について、教員が一つずつ教授する方法や、学生ペアやグループ間で実施する方法などを組み合わせながら学習効果を考えて授業展開を行った。学生は概ね目標達成できた。本科目開講は、今年度で終了となる。

ヘルスアセスメント

2 年次前期

藤内美保、石田佳代子、内倉佑介、山田貴子

ヘルスアセスメントでは、身体的側面からの観察に主眼を置き、ヘルスアセスメントの意義、基本技術、健康歴聴取、消化器系、呼吸器系、循環器系、脳・神経系、運動器系のアセスメントについて教授した。フィジカルイグザミネーションの正しいスキル修得を担保するため、感染対策を徹底して、コロナ以前のように講義・演習は対面授業を可能な限り実施した。フィジカルイグザミネーションは、e ラーニングの事前・事後学習の工夫を駆使して行った。

また最後の 4 コマでフィジカル事例演習を行った。事例を設定し、慢性閉塞性肺疾患の症状、メカニズム、合併症について事前学習し、注意すべき症状や身体所見や事例患者に生じる可能性がある病態とその理由について、グループでディスカッションすることで、臨床推論、仮説検証過程の思考を学ぶことができた。試験は、知識を問う試験はオンラインで、対面での実技試験は対面で実施した。

次年度は新カリキュラムとなり、基礎看護学研究室の身体観察技術論で正常編としてのヘルスアセスメントを踏まえ、本科目では健康障害を対象としたヘルスアセスメントに焦点をあてた授業計画を立て、さらにヘルスアセスメントの到達度を高められるように努めていく。

看護アセスメント概論

2 年次前期

藤内美保、石田佳代子、内倉佑介、山田貴子

本科目の目的は、「対象者の健康問題と看護の必要性をアセスメントし、問題解決を踏まえた看護過程を展開するための基礎理論を学ぶ」ことである。今年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大による影響で、すべての講義をオンラインで行った。講義では、問題解決型アセスメントの方法、つまり、体系的なデータ収集、演繹的推論プロセスに重点を置いたアセスメントの基本的な考え方を、学生一人ひとりが身につけられるように指導した。本科目の評価はレポートと小テストによって行った。なお、学生個々の課題が明確になるように、本研究室で考案したルーブリック評価表を用いて評価し、結果を個別にフィードバックしている。

具体的には、講義では、看護過程の意義や目的、看護過程の基盤となる考え方、看護過程の各ステップ、臨床推論の考え方などを解説し、講義と事例展開（事例に基づく看護過程の展開）による個人ワーク（時間外学修を含む）を並行させながら実施した。この個人ワークは、アセスメントから（実施を除く）評価までの看護過程の一連の流れにおいて、看護過程の各ステップの記録様式に個人で記録を書いて思考を整理していく経験を通して、看護の思考を育てるものである。講義と個人ワークを並行させる目的は、講義で解説した考え方を事例課題に対して活用できるようにするためである。このような方法で、学生一人ひとりが基本的な思考の型を習得できるようにしている。しかし、学生は、実習経験がまだ少なく、患者についてのイメージや印象が混沌としているために概念化が困難な面があるので、DVD や動画を活用してイメージ化を図るような工夫を行っている。また、学生からのニーズに応じて記録の書き方の記載例を示した。今年度は周術期（胃切除術を受けた患者）の事例を用いたが、学生全体の傾向として、疾病による身体面への影響や術後の回復過程などを理解するための知識が不足していたことなどのために、根拠に基づいたアセスメントが不十分で、目標の達成が困難な学生が多かった。「看護アセスメント演習」の時間を一部活用して補足したことで、概ね目標を達成できた。

応用力のある人材を育てるためには、単に手順を覚えるのではなく、思考の仕方を身につけることがまず重要と考えている。しかし、それを着実に身につけるためのプロセスでもある記録を書くことそのものに負担を感じていたり、苦手意識を持っていたりする学生への指導には悩むことが少なくない。学生が一つずつ理解して、知識を積み上げていけるように、今後も学生とコミュニケーションを図り、個別に応じた指導を工夫していきたいと考える。

看護アセスメント演習

2年次後期

藤内美保、石田佳代子、内倉佑介、山田貴子

看護過程の演習が円滑に進められるよう個人ワークした看護過程の内容をフィードバックし、ポイントや考え方の復習を行い、学生全員の理解の底上げを行った。演習では、看護過程の基本的知識を活用するために、5名～6名からなるグループ演習を行った。看護過程を展開するために作成された慢性呼吸不全患者事例のDVDを視聴させ、グループディスカッションしながら看護過程を展開させた。どこでもシートと付箋を活用し、関連図を作成することで非常に学生間でのディスカッションが深まり教育の効果が高いので、今年度も継続した。COVID-19の感染状況が落ち着いている時期でもあり、対面での演習を行った。学習成果は例年と同様に全グループは良好な評価で目標達成できた。疾患や健康障害の段階、発達段階、性別や個別性のある情報から看護診断が導けた。学生は既に個人ワークで看護過程の展開を行っているので、グループメンバーとディスカッションし、視野が広がり、理解が深まることを意図した。中間発表会と全体発表会を行い、ディスカッションすることで自己のグループの強みや不足部分を確認し改善・修正できていた。

次年度も引き続き、アセスメント能力の向上、エビデンスに基づく判断、アセスメントに基づく計画、客観的視点をもった評価など、看護過程の理解が深められるように事例選定やディスカッションのファシリテーション、フィードバックの工夫などをしていきたい。

予防的家庭訪問実習（2年次）

2年次

福田広美、影山隆之、篠原彩

単位認定者を学部長とし、看護研究交流センター地域交流チームが実習マネジメントを担当した。新型コロナウイルス感染症の感染拡大以降初めて、80チームすべてに協力者を配置することができた。感染拡大のため訪問は4月から3か月間休止とし、7月より開始したので、単位認定に必要な訪問回数を2年次生は3回とした。訪問の実施にあたり、抗原検査ならびに細かな症状の有無の確認を行った。また、これまでの学生2人で訪問するというルールを見直し、訪問予定の学生が体調不良や新型コロナウイルス感染関連の休みなどやむを得ず訪問できない場合は、学生1人での訪問も可能とし、できるだけ訪問機会を持てるようにした。休止期間中、自分自身を生活者として捉えるグループワークをチームで行い、ディスカッションを通して協力者を生活者として捉える視点を培うとともに、チームの親交を深める機会を持った。2年次生は特に、協力者の生活を把握し、在宅生活を維持するために必要な条件を考えることを主眼とした。学生なりのアセスメントを実践することを通して協力者の理解が深まり、協力者の生活や健康に地域や周囲の環境の変化が影響を与えることについて考えることができていた。

成人看護学概論

2 年次前期

森加苗愛

成人期に特徴的な健康問題と対象への看護援助の概要を学ぶことができるよう講義を系統的に計画した。今年度も COVID-19 の感染予防を鑑み、講義は全てオンラインで実施した。講義内容は、人間のライフサイクルにおける成人期の特徴を、発達課題、健康の側面から総合的に理解し、看護を実践していく上で基盤となる知識や理論を教授した。看護理論の講義では、事例を通して講義を展開し、看護実践を意味づけして理解できるように工夫した。看護実践の具体例では講師の臨床経験を交えつつ、看護実践がイメージできるように工夫した。また、オンラインでの講義の工夫点としてブレイクアウトルームによるグループディスカッションを実施し、学生が主体的に講義に参加できる機会を工夫した。

次年度は新カリキュラムの導入となる。本講義を礎にして、成人看護援助論で更に具体的に教授し、学生がより看護実践に関心を深め、主体的に学ぶことができる講義の工夫を行っていく。

老年看護学概論

2 年次前期

小野美喜

老年期の加齢変化と高齢者への看護援助の概要を学ぶ目的で、ライフサイクルにおける老年期の特徴、健康問題をもつ高齢者の身体的、心理的、社会的問題を理解し、疾患や機能障害を持ちながら日常生活を送る高齢者への看護に必要な知識を教授した。オンラインと一部対面授業で実施した。授業では、高齢者のリアルな生活像をイメージできるように、予防的家庭訪問の利用者やご家族の日常生活を想起しながら、高齢者の健康課題を捉える工夫をした。また高齢者の生活に必要な社会資源の選択や、看護場面で課題となる倫理的問題などに着目して意見交換を行うなど、例年同様に、学生が考えて意見を述べる参加型授業を行っており、今後も継続する。

成人看護援助論

2 年次前期

小野美喜、森加苗愛、佐藤栄治、宿利優子、中釜英里佳、堀裕子

成人看護学概論をふまえつつ、急性期、慢性期、回復期、終末期の健康障害についての看護援助方法を教授した。今年度も COVID-19 の感染予防のため、講義はオンラインで行った。オンライン講義では、ブレイクアウトルームによるグループワークを取り入れるなど、学生が主体的に参加できる様、講義の工夫を行った。

講義内容は、がん患者へのケアや周手術期看護を実践的に学ぶことができるよう、解剖整理に関

する教材を作成し理解しやすく工夫した。また、臨床の活きた看護実践を実感できるよう、講師として急性・重症患者看護専門看護師を招聘し講義を行った。慢性疾患看護においては、事例を通して行動変容に関する理論を理解できる様にした。学内実習として、例年血糖値測定・インスリン注射を行うが、今年は COVID-19 の影響を鑑み見合わせた。次年度、3 年次生の演習に取り入れる予定である。退院指導の講義はオンラインで行ったが、グループに分かれて胃がん患者事例、糖尿病患者事例、悪性リンパ腫患者事例を設定し、実際に退院に向けた看護問題のアセスメント、看護計画、指導媒体を作成し発表・全体討論を行った。実際の退院指導をイメージしながら計画を立案してオンラインで発表会を行うことができた。

次年度から新カリキュラムとなる。引き続きグループワーク、成果発表会等を組み込み、学生が主体的に学び、発言できる講義・学内実習内容を工夫していく。

小児看護学概論

2 年次前期

草野淳子、足立綾

本科目は、小児看護の特質と概要、および小児の成長発達を理解することを目的とした。小児保健や教育・福祉・保育の概念と、小児医療の動向・小児看護の役割と重要性について教授した。媒体として DVD を使用してイメージ化した。特に重要な概念として小児の成長と発達については形態・機能的発達、小児看護で用いる理論、家族支援などに重点を置いた。最終的に自分の中の子ども観を認識するための課題レポートを課した。講義方法はコロナ禍であったため、主に Web で行った。評価は筆記試験 (90%) ・出席状況 (5%) ・レポート (5%) とした。学生は筆記試験を受験し、こども観についてはそれぞれの考えを述べていたため、授業目標は達成できた。次年度も同様の授業構成とし継続する。

母性看護学概論

2 年次前期

林猪都子、永松いずみ

母性看護学の基本概念および意義を理解し、人間の性と生殖の側面から、女性の生涯を通じた健康生活の促進と健康問題への援助活動を学び、母性各期における母性看護の役割と重要性について認識を深めることを目的として教授した。

新型コロナウイルスの影響を受けて Zoom 講義にて実施した。教材をネット配信できるように講義内容を見直して講義に望んだ。講義中に学生の反応が見えないためにグーグルフォームによる学び、感想を講義終了後に学生に求めた。学生の講義に対する学びや質問が見られ、次回講義に反映することができた。Zoom 講義は 3 年目となったが、有線使用の講義とし、ネットトラブルを回避した。次年度は対面による講義で、学生の反応を直接確かめながら実施したい。

社会保障システム論

2 年次後期

平野 互

保健・医療と福祉・介護の統合が重要視される今日の看護職にとって、社会保障の制度と社会資源に関する理解は不可欠である。限られた時間数で社会保障の全体像が把握できるよう内容を整理し、特に他の科目で触れることの少ないであろう福祉を多く盛り込んで講義を組み立てた。まず社会保障制度の意義と構造を論じ、次いで保健・医療システムと福祉制度の全体像を理解するために、所得保障、医療保険、医療法、地域保健、感染症対策に引き続き、母子・児童、高齢者、障がい者を対象とする個別的な保健・福祉政策について講義した。

コロナ禍のため、前半 4 回は Zoom による遠隔授業となったが、期末試験の成績は概ね良好であった。

養護概論 I

2 年次前期

小野 治子

学校保健活動を担う養護教諭の基本理念、教育職員としての養護教諭の基本原則などを学ぶことを目的とした。具体的には、各学生が母校の養護教諭へのインタビューを通じて、養護についての本質や基本的概念、職業倫理などの理解を深めた。さらに、講義において、各学生のインタビュー内容の発表、ディスカッションにより学生相互間での学びを深めた。本年度は、夏休み前に母校へのインタビューの事前課題を提示し、講義は夏休みの集中講義とした。学生が集中して授業に参加することができるよう、個人の発表、グループワークを多く取り込み、それぞれの学生が及ぼすグループダイナミクスを活用し、主体的、積極的に学習することができた。養護教諭養成課程の早い段階で母校の養護教諭にインタビューすることで、理想とする養護教諭像が明らかになり今後の学習意欲への高まりが期待できた。今後も、学生が集中できる講義方法を工夫していきたい。

教育学概論

2 年次前期

鈴木 篤

これまでに受講者が有してきた学校教育や家庭教育での経験や理解を問い直すことを通して、教育に関する本質的理念について、①教育についての基礎理論・思想を理解するとともに、②教育の歴史的発展過程を理解し、今後の変化についての見通しを持つことを目的として、講義を行った。

生徒指導

2年次前期

藤村晃成、関根剛、吉村匠平

教師として児童生徒を対象に生徒指導を行う上で理解すべき考え方（法制度を含む）や理論、実践のための方法などを理解するとともに、学校で実際に生徒指導を行うための実践能力の基礎を養うことを目的に講義を進めた。

教育相談

2年次前期

中島暢美、飯田法子、河野伸子

学校教育における教育相談の意義や役割について理解し、不適応とは何か、適応障害とは何かについての理解を深めるために必要となる、心理学の諸理論に理解の深化を試みた。また、受講者各自が体験したことなどを課題化して、どのような対応が必要か、どのような組織との連携が必要かなどを、グループで話し合わせた。

英語Ⅱ－A2

2年次後期

宮内信治

Word Power Made Easy を使い、医療を含む科学分野に関連する英語語彙の学習定着を図った。教科書内原文を音読暗唱させる際、自然科学発達の歴史的経緯を意識させたい。講読演習では文章の論理構成を意識させることを念頭に解説し、看護に関する英語原著論文本体を文法解析させ、講義時の解説をもとに解釈の修正と文法理解を促し和訳させた。論理的な文章構成と国際的な看護の現状の一端を理解させることができた。教材として使う文献を更新していきたい。

英語Ⅱ－B2

2年次後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English,

and teach them how to use learning strategies. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students participated actively in every class. The course content, learning materials and teaching method were evaluated highly in the final class survey of all students, and the survey results will be used to improve the course in the next academic year.

放射線健康科学

2 年次後期

小嶋光明、恵谷玲央

放射線健康科学は現代医療に必要不可欠な放射線と健康との関係を理解するために、放射線の諸特性、放射線の物理、生物・健康影響、その防護についての基本的な事項を講義している。また、医療における放射線利用についての理解を深めるために、X 線検査や放射線治療の具体的な事例について検査画像や写真等を用いて教示した。さらに、同時期に実施している健康科学実験(自然放射線の測定、診療用 X 線装置の散乱線の測定を通して放射線の量的な理解)と合わせて、医療における放射線利用に対するより実践的な知識が身につくように努めた。

試験成績は概ね良好であった。今後は、講義内容と看護学とのつながりを強調し、放射線利用におけるリスク評価や防護対策など、看護師が実際に行うことができる対応についても取り上げ、学生の学習意欲を高める講義展開を検討する

健康運動学演習

2 年次後期

稲垣敦

学生が自分の健康課題を自分で見つけ、これを解決するために、主体的に目的や目標を定め、前期の健康運動学で学んだ知識を活用して自分に合った運動メニューを作成して運動実施した。ベースライン測定(10/14)と効果判定測定(2/14-23)を行い、運動の効果を判定し、レポートを作成した。今年度の効果判定測定は1日に限定せず、10日間測定できるようにすることで、3密を避けた。また、大学敷地内あるいは自宅周辺で運動することとした。次年度は、行動変容理論のミニ講義を充実させる。

健康科学実験

2 年次後期

濱中良志、岩崎香子、安部眞佐子、吉田成一、定金香里、小嶋光明、恵谷玲央、稲垣敦

健康科学実験は基本的な実験演習や測定を通じて、人の身体、健康に関係した事項や人間をとりまく自然環境に関する基本的な現象を体得し理解を深めることを目的としている。実験テーマは10テーマからなる実験を行った。1) 人体解剖学実習(担当者: 濱中良志、岩崎香子、安部眞佐子)、2) 組織学実習(担当者: 濱中良志)、3) 血液検査(担当者: 定金香里)、4) 基礎微生物学実習(担当者: 吉田成一)、5) ラットの解剖(担当者: 吉田成一、定金香里)、6) 放射線(担当: 恵谷玲央)、7) 染色体異常(担当者: 小嶋光明)、8) 呼吸循環器系持久力(担当者: 稲垣敦)、9) 心電図(担当者: 岩崎香子)、10) 食物栄養学実習(担当者: 安部眞佐子)

看護アセスメント学実習

2 年次後期

藤内美保、廣田真里、石田佳代子、山田貴子、内倉佑介、石丸智子、神矢恵美、後藤成人、佐藤栄治、篠原彩、宿利優子、秦さと子、田中佳子、姫野雄太、丸山加菜、吉村幸永

COVID-19 感染状況は県内でも 1,000 人を超す状況であったが、実習施設 3 施設の多大なご協力ご支援のもと、大分県立病院、大分赤十字病院、大分大学医学部附属病院の実習 3 施設が計画通りの 2 週間の実習を受け入れていただいた。また、事前に 1 施設受け入れが困難な場合には他の 2 施設で 1 週間ずつの 2 クールを受け入れていただくことも了解していただいていたが、その事態は避けられた。実習方法は実習施設により、ベッドサイド時間を 1 回に 15 分などの制限はあったが、それが意図的な関わりや何が必要な情報なのかを考えるなどの教育的効果もあった。また、制限されているなかで実習させていただき、学生も真剣に取り組む姿勢が見られた。学生も実習指導者も、臨地実習で学ぶことがいかに貴重な体験であり学習につながるかを認識されており、学生の実習目標の達成度は、ほぼ例年以上の効果があったと思われた。実際の担当教員の評価は、例年以上にアセスメントや実習態度などの評価は良かった。また、初学者の 2 年生では看護過程のアセスメントすることに時間がかかるが、今回の実習で、ベッドサイド時間が制限されていたことで、考える時間が増えたことの効果があったと考えられた。

学生は健康管理に注意し、大きなトラブルや COVID-19 に感染することもなく、無事に実習を終えることができた。

次年度も、コロナ感染状況や医療機関の対応などを注視し、実習施設と密な連携をとり、また学生が臨地実習の経験ができ臨地でしか学べないことを学べるように学習環境の整備に努めていきたい。

老年看護援助論

2 年次後期

小野美喜、佐藤栄治、宿利優子、堀裕子

本年度から対面講義を主にオンライン講義も適宜取り入れ、学生が老年期に代表的な障害や疾病をもつ高齢者の健康問題、障害や疾病が生活に及ぼす影響、高齢者とその家族の生活の質を考えた援助方法や自立支援を学べるように支援した。また、緩和ケアでは、終末期がん患者の事例 DVD を視聴し、トータルペインの視点で考える事例検討や人生の最終段階における意思決定支援の事例検討を行った。各講義では、知識の定着を目指して国試問題を取り入れたミニテストや、事例検討前の事前学習や Zoom のブレイクアウトルームで発言することで主体的に学習に取り組めるように授業を行った。学生からの発言も徐々に増えていった。今後も学生が主体的に学習に取り組めるように、事例のテーマや提示方法を検討していく。

母性看護援助論 I

2 年次後期

林猪都子

妊娠期、分娩期の生理と異常および心理・社会的特徴とその看護を学ぶことを目的に教授した。今年度はコロナ禍の回復を受けて、久しぶりに講義室で対面講義を実施した。知識の定着を図るために、毎回講義の開始前に小テストを実施した。久しぶりの対面による講義で、学生の反応を確認しながら講義を実施することができた。

精神看護学概論

2 年次後期

影山隆之

心理－社会的健康の基本的理解を深めるために、健康日本 21、精神力動論、心理社会的発達論、ストレス論、リカバリ、及び国際生活機能分類などの考え方と、主な精神症状・精神疾患、アディクション、自殺予防などのトピックを紹介するとともに、歴史的な文脈と法制の関係について講義した。全資料を一括製本して授業前に配布し、予習とくに演習問題について考えてくることを求め、パワーポイントや動画を用いず、授業内でディスカッションをした。授業中にはできるだけ自験例の紹介に努めた。前年度に説明・理解不十分と思われた箇所を丁寧に説明した結果、出席確認を兼ねたリアクションペーパーで確認した限り、理解不十分の箇所は前年より少なくなった。すべての回の感想に対して、2 日以内にレスポンスをまとめ、学内ウェブに掲載した。授業評価や筆記試験時に書かれた感想によれば、これらの方式は概して好評であり、精神看護への関心を高め、ステイグマを低下させる効果があったと考えられた。

家族看護学概論

2 年次後期

福田広美、荒木章裕、姫野雄太、矢野亜紀子

個人を取り巻く家族について、家族システムの視点から家族全体に対する看護を学ぶための講義を行った。家族看護学の理論や概念、家族機能や構造などの基礎的な知識を学習した。また、家族看護に関する主要な理論として、家族発達理論、家族システム理論、家族適応理論、家族ストレス対処理論について事例を交えながら講義を行った。講義で得た知識をもとに、学生は家族看護事例を通してアセスメントを行い、家族を看護の視点から捉える学習を行った。実習経験の機会が増加したことに伴い、次年度は参考事例ではなく実習経験を題材にして主体的に参加できる内容とする。

地域看護学概論

2 年次後期

甲斐優子、小野治子、藤本優子、佐藤愛、藤内修二、村嶋幸代

地域包括ケアの時代に応じた地域看護の視点や方法論を学ぶことを目的とした。具体的には、看護の対象は地域全体（地域に暮らす個人、家族、集団、組織）であることを理解することを目的にした。地域文化と健康との関連についても触れ、今後、実習における受け持ち患者の生活背景の理解へ視野が広がることを目指した。講義は、地域保健に従事する医師、保健師による講義を含め、一方的な講義にならないよう、アクティブラーニングを積極的に活用することで学生の学びを進化させた。

国際看護学概論

2 年次前期

桑野紀子、丸山加菜

①世界の人々を看護の対象としてとらえ、世界の保健医療に関する課題について学び、その背景や対策について考察すること、②日本国内の在留外国人や訪日外国人への健康支援に関して、対象者の文化社会的多様性に配慮した看護について学ぶことを目的とし、内容構成した。海外での看護実践については外部講師の体験談を組み込み、開発途上国の保健医療に関する状況や健康課題への理解を深めるために適宜動画視聴を組み込むなど工夫した。また、昨年度に続き講義終了後に Google フォームで小テストを実施し、次の回で解説し、復習の機会とした。今後は、講義内容に関する予習を促し、学習効果向上をはかることが課題である。

看護管理学概論 I

2 年次後期

福田広美、荒木章裕、姫野雄太、矢野亜紀子

看護管理学概論 I は、看護職として働く中で必要な看護管理の基本的な知識を身につけるための講義である。看護を取り巻く社会や看護管理に必要な能力、法律や安全管理など、臨床でスタッフの看護師も用いる看護管理全般について講義した。今年度はハイブリッド形式をとり、新型コロナウイルス感染症の影響で登校ができない学生も受講できるような環境を整えた。また、双方向の講義となるよう教員から発問を行い、学生の実体験や思考過程を述べさせ、理解度を確認しながら講義を進めるよう努めた。さらに、各講義後にリアクションペーパーを配布し、次の講義時に疑問については回答するなど、受講者の反応をみながら正しい理解に繋がるように取り組み、レポートにて理解度の確認ができたことから、全員単位取得できた。今年度は発問を通して受講生個人の思考時間は十分確保できていたが、グループディスカッションなど、集団で討議する時間は十分に確保することができず、思考の拡大を促すことは不十分であった。チーム医療が推進される中で、他者の意見を聞き、自分の意見を述べることは今後求められる能力であると考えられるため、来年度はグループワークも取り入れ、学生間の討議を意図的にできる環境を整えていく。

看護の倫理

2 年次後期

平野互、小野美喜

医療倫理・生命倫理の知識を習得するとともに、看護職に必要な倫理的判断のための思考訓練を行うことを目的に講義を行った。講義は、「Bioethics・生命倫理の展開と課題」・「Profession の責任と倫理」・「臨床倫理：倫理的判断の方法」・「意思決定の倫理」・「生殖補助医療にかかわる倫理」・「出生前診断と倫理」・「人間の尊厳、個人の尊重と自立支援」・「End of life に関わる倫理」・「医療従事者の事故対応と責任」の 9 回を平野、「看護職の価値観と文化、社会規範」を小野が担当した。平野担当分の講義には「ケースブック医療倫理」（医学書院）をテキストとする事例演習を組み込んだ。

コロナ禍が落ち着いている時期であったため対面で講義を行ったが、後半になると出席率が低下した。レポートにより最終評価を行った。

第1段階看護技術演習

2年次後期

秦さと子、丸山加菜、荒木章裕、後藤成人、佐藤栄治

本科目は、3つのステップからなる看護技術修得プログラムのファーストステップの位置づけである。演習目的は、対象への日常生活援助を一人で実施できる能力を身につけることである。過去2年間は、COVID-19の流行拡大に伴い対面での実施が困難であったことから、今年度は、使用するベッド間隔を空け、CO₂モニターを設置するなど感染対策を十分考慮したうえで実技演習を計画した。まず、学生が実技演習前に主体的に学ぶことができるように個人用のワークノートを準備し、技術の根拠や手順を自ら思考したうえで、グループワークに取り組むように設定した。その後、4～5人のグループで各自の考えや意見を共有・集約し、担当教員の指導内容を踏まえ適宜修正を行い、グループとしての意見をまとめ、実技演習に取り組んだ。学生のワークノートおよび実技演習の取り組み状況は良く、集中して練習に取り組み、概ね目標に到達できたと考える。感染対策のため、制限がある中での練習であったが、オリエンテーションを丁寧に実施し、円滑に演習をすすめることができた。本科目は平成27年度カリキュラムであり、新カリキュラムからは選択科目である基礎看護技術演習に置換される。

学校教育心理学

2年次後期

藤田文

教職課程や心理学における教育心理学の位置づけについて解説したうえで、発達、知能、パーソナリティ、学習、グループダイナミクスなど、児童生徒を理解するために必要な知識について教授した。単に知識を吸収するだけでなく、自ら積極的に、教育現場に必要な心理学の知識とは何かを考えていくことを求めた。

教育課程論

2年次後期

今井航

教員として授業計画を立案する際に、国の定める基準、即ち学習指導要領に則りながら授業内容を自ら構成できるようになるための基盤となる力の習得を目的とした。「教育課程とは何か（その形態・原理）」及び「学習指導要領とは何か」といった2点の問いを持って、授業を進めた。

生体薬物反応論 II

3 年次前期

吉田成一

生体薬物反応論 II は疾病の薬物治療に用いる医薬品の作用原理に主眼を置き、薬物を投与した際の生体反応（主作用及び副作用）に関する講義である。生活習慣病で使用する医薬品、中枢神経系疾患で使用する医薬品、免疫系疾患に使用する医薬品、救命救急時に使用する医薬品など多岐にわたり臨床上使用する医薬品全般について講義した。講義後に、本科目の学修について学修成果物（ノートなど）を提出するよう求め、質問事項の記載があれば、回答するあるいは、提出物に誤りがあれば指摘するなど、受講者と担当教員間で学修修得状況を確認、向上させるよう努めた。実際、提出回数が多い受講生は本試験で合格しており、提出回数が少ない、あるいは全くしていない受講生の本試験での合格率は低かった。過去に定期試験の問題として出題していない分野あるいは医薬品（今年度はてんかん）の学修修得状況は低かった。

2 年次後期により臨床的な実習を行い、本講義で取り扱う医薬品に関し、その重要性を理解しているため、積極的に学習するという意欲が高く、理解度は全般的に高かった。

昨年度と比較すると、平均点、最高点、最低点のいずれも上回ったが、これは昨年度大幅に処方例を更新したが、本年度は小幅の更新にとどめたことも要因と考えるが、学修修得状況は高くなったと考えられる。特に例年に比べて本試験で合格する受講生が多くなったことは受講生が本科目の履修に積極的に取り組んだためと考える。

履修者（再受験該当者を含む）77 名中、75 名が単位を取得した。再試験で単位を取得した者は全員 70 点以上と十分学修修得状況が向上していた。また、単位未取得者のうち一名は再試験を受験しなかった。

成人・老年看護学演習

3 年次前期

小野美喜、佐藤栄治、宿利優子、中釜英里佳、堀裕子、森加苗愛

健康課題（問題）をもつ成人および高齢者の急性期、回復期、慢性期の対象に必要な援助を検討し、看護過程の展開の思考と看護技術を学内で習得することを目的とした。発達段階（成人期、老年期）の特徴を踏まえた上で、健康問題を持つ対象者に必要な看護計画を立案し、看護援助の実践がイメージできるよう視聴覚教材を取り入れ、看護技術面においては、e-learning システムを活用した。

成人看護学演習の際は、COVID-19 感染症拡大により対面授業が行えなかった際は、web 会議ツールを利用してオンライン講義を行った。オンライン講義の特徴を活かして、学生の意向や疑問点をその場で聞き取り、解決しながら、学習が進むようにした。学生からの質問等も適宜チャットやメールを活用し受け付け、学生の困難感を軽減するよう努めた。また、Zoom で中間、最終カンファレンスを行い、学生間で学習内容の共有と強化に努めた。成人看護学演習では、周手術期の看

護から回復過程までの援助がイメージしやすい事例を設定した。事例は、右下葉扁平上皮がん切除術を受ける患者とした。術直後の患者観察や看護援助のみでなく、術中・術後の患者の状況に応じて評価修正しながら看護援助ができるよう、事例情報の提示の時期や方法を工夫した。また、本年度は、COVID-19 の状況で、対面授業が可能な時間を利用して、術後管理やストーマ装具の交換の技術演習も行った。全員が体験実施できるようにし、術後管理の際は、音声やモニター画面を見せるなどして、学生に術後のイメージをもってもらうように工夫した。ストーマ装具交換は、全員に交換を体験してもらい、排泄物の確認や皮膚の保護、交換のタイミングなども説明し実施してもらえるようにした。

老年看護学演習では、高齢者の褥瘡管理、高齢者の経鼻経管栄養注入、高齢者の身体機能変化、高齢者の転倒予防と多職種連携に焦点を当てた。感染症対策のため、少人数ごとで実施できるようなグループや使用ベッドの工夫、予習復習の方法を工夫し、全員が援助を実践できた。

次年度以降も、引き続き感染対策をとりながら、思考のトレーニングと共に紙面上のみの看護展開にならないよう、実技演習も組み込み、学生の成人・老年への看護援助のイメージ化、実践へとつなげるようにする。

老年看護学実習

3 年次前期・後期

小野美喜、佐藤栄治、宿利優子、中釜英里佳、堀裕子、森加苗愛

施設に入所している高齢者の健康問題と健康の維持・増進について考え、高齢者の生活の質の維持・向上を目指した老年看護の専門性と役割を学ぶことを目的として実施した。

介護老人保健施設および介護老人福祉施設で 1 週間の施設実習を計画していたが、今年度も COVID-19 の感染拡大の影響により施設実習を断念し、代替として学内実習を行った。

学内実習は昨年度に引き続きオンラインで実施し、高齢者疑似体験についてはリアルな体験と実践を求めるため対面による体験実習を行った。オンラインでの実習内容は、まず「高齢社会における高齢者施設の役割」や「施設における高齢者の生活と看護師の役割」について介護老人保健施設の管理者や看護管理者から講話を受け、高齢者施設の理解を深めた。次に「①施設の特性と多職種連携の実際」、「②高齢者の生活機能の変化と変化に伴う援助」、「③高齢者の生活の質を維持・向上するための援助と看護の役割」の 3 課題を提示し、視聴覚教材を用いた事例検討を通して課題毎のグループディスカッションを行った。

各課題レポートやグループディスカッションを通して、各課題についての考察と学びを述べることができおり、実習目標に到達できた。高齢者体験も学生同士の意見交換で看護実践の工夫が導かれていた。

老年看護学実習が感染予防対策から臨地で実習することが難しくなり 3 年目を迎えた。次年度の状況は不明であるが、感染リスクの高い高齢者の特徴を踏まえ、臨地でしか学べない内容を厳選しながら進めていきたい。また、研究室体制が変更し老年看護学研究室として運営をすることになるため、実習運営の工夫が必要である。

成人看護学実習Ⅰ

3 年次後期

小野美喜、内倉佑介、神矢恵美、佐藤栄治、宿利優子、中釜英里佳、堀裕子、森加苗愛、
矢野亜紀子、山田貴子

COVID-19 の影響により実習期間・時間の短縮が生じたが、75 名全員が臨地実習を行った。実習期間の短縮が生じた学生に対しては、学内実習を実施した。

学内実習では、急性期の紙面事例として胃がんの周手術期にある患者を用いた。実際に患者と対面することができないため、事例動画からも情報収集を行い、実習に近い看護展開を促した。また実習に近い形にするために、中間・最終カンファレンスを行い、学生間での学びの共有に努めた。

臨地実習では、実習期間・時間を短縮し、感染拡大予防に留意しつつ行った。実習施設は、大分県立病院 8 病棟と大分赤十字病院 7 病棟で、各病棟に 3 人ずつ学生を配置し、学生 1 人 5 日間の実習を実施した。

本実習は、第 4 段階の専門看護学実習に位置付き、成人期の身体的・心理的・社会的特徴を総合的に捉えた上で、急性期・回復期の健康段階にある対象に対し適切な看護援助方法を学ぶ。また、チームの一員として適切な看護が実践できる能力や自主性、自律性を養うと共に自己の看護観を発展させることを目的とする。実習中は感染予防の観点から、実習部署や看護実践、時間の制限はありながらも、可能な限り実習指導者と相談・調整を行い、学生が主体的に実習を行えるように調整した。

教員は常駐し、学生が看護スタッフと連携が図れるよう支援した。制限がありながらも実習施設の協力のもと、目標達成ができたと評価する。今後も引き続きチーム医療の中で学生が主体的に行動できるような指導方法を検討していく。

成人看護学実習Ⅱ

3 年次後期

小野美喜、内倉佑介、神谷恵美、佐藤栄治、中釜英里佳、堀裕子、宿利優子、森加苗愛、
矢野亜紀子、山田貴子

成人看護学実習Ⅱは、今年度も COVID-19 感染症予防のため臨地実習に制約が生じた。臨地実習が全面的に制限された期間は学内実習とし、成人の特性と健康課題を理解し、看護実践の必要性を判断し計画（実践）、評価できることを目的に実施した。方法はオンライン（Web 会議ツール、Web ベースのファイル共有システム）で実施した。内容は、昨年度同様に胃がん患者、肝がん患者（慢性期）の模擬事例による看護過程の展開を行った。昨年度作成した動画の視聴により、学生はリアルな患者の主観的情報や客観的情報が得られ、アセスメントにつながれたことをから、同教材を活用とした。Web 会議ツールを利用し、オリエンテーションや必要時個人面接、中間・最終カンファレンスを行った。学生間での学びの共有ができにくかったことが課題であったが、各教員の進め方に工夫があり、学生の考えや疑問点を中間・最終カンファレンス時に共有し、学生間で

解決しながら進めることができた。昨年同様に学生からの質問等には可能な限り迅速に対応し、学内実習に生じる不安を軽減するよう努めた。全学生が学内実習の実習目標を到達することができた。

臨地実習が可能となった期間は短縮実習として実施した。対象と接する時間が短時間に制限されたが、患者の状態を把握しながら、臨地の指導者との連携のもとで看護の展開が実践できた。

ポストコロナの臨地実習再開に向け、学生が対象への看護を思考できる実践型の実習を目指し、実習場との連携を深める必要がある。また、オンライン上での学習方法も引き続き効果的に活用していく。

予防的家庭訪問実習（3年次）

3年次

福田広美、影山隆之、篠原彩

単位認定者を学部長とし、看護研究交流センター地域交流チームが実習マネジメントを担当した。新型コロナウイルス感染症の感染拡大以降初めて、80チームすべてに協力者を配置することができた。感染拡大のため訪問は4月から3か月間休止とし、7月より開始したので、単位認定に必要な訪問回数を3年次生は2回とした。訪問の実施にあたり、抗原検査ならびに細かな症状の有無の確認を行った。また、これまでの学生2人で訪問するというルールを見直し、訪問予定の学生が体調不良や新型コロナウイルス感染関連の休みなどやむを得ず訪問できない場合は、学生1人での訪問も可能とし、できるだけ訪問機会を持てるようにした。休止期間中、自分自身を生活者として捉えるグループワークをチームで行い、ディスカッションを通して協力者を生活者として捉える視点を培うとともに、チームの親交を深める機会を持った。このグループワークでは4年次生が施設実習で不在であったため、3年次生が最高学年としてディスカッションを進めることとなり、その難しさを感じていた。3年次生は特に、協力者の健康維持のために大切なことを協力者と共に考え、可能な支援は実施することを主眼とした。3年次生はちょうど訪問を再開した時に長期施設実習中であったため、少ない訪問回数ではあったが、協力者の経年的な変化や環境の変化に合わせ支援を行うことの重要性を理解できていた。しかし、学生の中には訪問経験やチームメンバーとの活動機会が少ないことにより、次年度、最高学年としてチームリーダーの役割を担うことを不安に思っている者もいるため、チームの活動状況に応じたフォローが課題である。

小児看護援助論

3年次前期

草野淳子、足立綾、橋本志乃

本科目の目的は小児の行動を多面的にとらえ、発達段階に応じた日常生活の援助方法と保育技術を習得することである。また、小児期の主要な疾患・病態について理解し、健康障害をもつ小児

とその家族の看護を学んだ。講義方法はコロナ禍であったため、主に Web で行った。評価は筆記試験（90%）・レポート（10%）とした。学生は筆記試験を受験し、講義中に考えを述べていたため授業目標は達成できた。次年度も同様の授業構成とし継続する。

小児看護学演習

3 年次前期

草野淳子、足立綾、橋本志乃

本科目は、小児看護学概論や小児看護援助論で学んだ知識を生かし、第 4 段階専門看護学実習で必要とされる内容について選択して行った。主に Web での講義であったが、機能を用いてグループダイナミクスが活かせるようなグループワークを行った。評価は筆記試験（90%）・出席（5%）・個人ワークとグループワークへの参加状況（5%）であった。学生は筆記試験には参加し、グループワークでは科目の目標に沿った発言が見られた。来年度は感染の状況を見ながら、グループダイナミクスを考慮した看護過程の展開の指導を実施したい。

小児看護学実習

3年次

草野淳子、足立綾、橋本志乃、吉村幸永、神矢恵美

小児看護学実習では、3日間の保育所実習を7月末から8月第1週までに実施することはできた。幼児と出会うことが少ない学生には初めて子どもとコミュニケーションを学ぶこと、健康な子どもを理解して、病児と家族への関わりがスムーズに実施できることなど重要な効果がある。保育所実習では各グループで手洗い指導を最終日に行う課題を取り入れ、良く工夫して実施できたと保育所長会で成果が報告された。コロナ感染予防に活かされた。一方、コロナ感染症のため病院等の臨地実習は9月中は中止となった。この間は学内実習とした。病院実習の様子や、学生の実習の様子をDVDで学習した。事例は、教員が学生1人に1事例を準備して、最終日に発表した。学生の実習到達度に差があるが、他の学生の事例発表は好評であった。学生の個別性にあわせて、積極的に実習できるように指導することが課題と考える。

母性看護援助論Ⅱ

3 年次前期

林猪都子、永松いずみ

分娩期の異常と看護、産褥期、新生児の生理と異常および心理・社会的特徴とその看護を学ぶことを目的に教授した。分娩時損傷、分娩期出血、産科処置、産褥期の生理と経過、産褥期の看護、

新生児の生理と看護について実施した。

4月はコロナ禍の影響を受けて Zoom 講義にて実施した。教材をネット配信できるように作成して講義に望んだ。講義内容は生殖器の内容を含むために、学生に個室で視聴する事を求めた。講義中に学生の反応が見えないためにグーグルフォームによる学び、感想を講義終了後に提出することを求めた。結局対面講義ができなかったが、試験は学内で実施することができた。4月に開講して1か月で講義が終了するため、次年度は対面講義で学生の反応を確かめながら進める必要がある。

母性看護学演習

3年次前期

林猪都子、永松いずみ、今村知子

母性看護の実践に必要な知識を理解し、母性看護技術と看護過程を習得することを科目のねらいとした。昨年からの母性看護学技術演習は、演習室にて、グループ人数を少なく3日間6Gに分けて、「妊婦計測」、「新生児計測」、「沐浴」の3項目について実施した。知識の習得と確認は、過去の国家試験問題を学生全員で解いて、それぞれ知識の習得状況を確認した。ウェルネス看護診断に基づいた母性看護過程の演習は、産褥期の3事例のうち1事例を用いて、グループ学習で看護過程を展開した。看護過程の発表会は講堂で実施したが、学生間の意見交換が活発で学習を深めることができた。

母性看護学実習

3年次

林猪都子、永松いずみ、今村知子、渡邊一代、松木里香

母性看護学実習施設は4施設で、実習期間は1グループ2週間（延べ12週間）であった。学生の配置人数は、臨地実習期間は、大分県立病院は学生1G4～5名配置（男子学生2名）で4Gから開始し5.5日間であった（合計16名）。堀永産婦人科は学生4～5名配置で、9月は3.5日間、10月、11月は5.5日間であった（合計35名）。いしい産婦人科は学生4名配置（男子学生2名）で、9月の実習を7月に移行した（合計19名）。しかし、コロナ禍の影響を受けて、1Gの3名が1日間の臨地実習と学内実習で、1G1名の男子学生と2Gの4名が学内実習のみとなった。担当教員は大分県立病院1名配置、堀永産婦人科医院9月（前半、後半）は2名配置、10月、11月は1名配置で、合計3名の教員を配置した。いしい産婦人科は1名の教員を配置した。

実習は学生1名につき妊婦または褥婦を1名受け持ち、妊産褥婦、新生児の看護について学び、母性各期の特性とニーズに応じた看護過程の展開とした。実際には、9月はコロナ禍の影響で実習日数が3.5日であった。10月以降は5.5日と臨地実習日数を少し延ばして計画した。できるだけ現地で母性看護を体験することの必要性を痛感した。サロンリラ・ドーナつ助産院の実習はZoom

講義による学級活動に参加した。今年は4か所の施設で実習ができたが、9月はコロナ禍の影響にて短期間の臨地実習となった。今後はコロナ禍の回復によって、通常の実習形態に戻していきたい。

精神看護援助論

3年次前期

杉本圭以子、後藤成人

精神看護を実践するために必要になる知識として、精神疾患の病態や治療の基本および看護について生活とストレスの視点から説明できるよう講義した。各疾患の学習は、予習を基に講義時間での学びを追加することを求めた。視聴覚教材を多用し学生がイメージを持ちやすいよう工夫した。講義の最後の小テストで知識を確認し、提出された感想のいくつかを次回の講義で共有し、前回の復習をかねて学びをつなげるよう工夫した。

精神看護学演習

3年次前期

影山隆之、杉本圭以子、後藤成人

紙上事例教材を用いて個人ごとに事例検討に取組ませ、全体で振り返りを行った。また、実習中に対応する可能性がある事例については、SSTの方式を取り入れたロールプレイを行い、実践での対応のイメージをつけられるよう工夫した。さらに、事例演習のみではわからない精神科医療・地域精神保健と障害福祉サービスの実状（現状）について、実習施設等から招いた外部講師による講演によって伝えた。各自が実習を行う障害福祉サービス事業所を実際に訪ね、実際の地域生活の支援について見学し、実習での学びにつなげる時間を設けた。教材や講師は、学生に概ね好評のようであった。講義を振り返り、後期の実習へスムーズに移行するための準備として、演習の基本的な構造は継続してよいと考えられる。

精神看護学実習

3年次後期

影山隆之、杉本圭以子、後藤成人、丸山加菜、姫野雄太

病院実習と地域の障害福祉サービス事業所実習を計画したが、COVID-19の影響により実習病院の受け入れがかなわなかったため、学内実習4～5日、事業所実習4日、カンファレンス1日と再構成して実施した。事業所では利用者と一緒に就労プログラムに参加し、地域で生活する精神障害を持つ方の様子や利用する社会資源を理解し、どのような支援が必要かを考え指導を受けた。学

内実習では、3名の模擬患者を受け持ち患者として、DVDの映像と電子カルテから情報収集し全人的な理解とアセスメントができるよう環境を整えた。受け持ち患者の個別性を考えた計画をたて、面談場面のロールプレイを実施した。単に紙上での個人作業に終わらず、学生同士で活発な意見交換を促すことにより主体的に学べるよう工夫した。最終日のカンファレンスで学びを統合した。

第2段階看護技術演習

3年次後期

秦さと子、足立綾、永松いずみ、矢野杏子

本科目は、3つのステップからなる看護技術修得プログラムのセカンドステップの位置づけにある。演習目的は、対象への日常生活援助を一人で実施できるとともに、専門領域別の基礎的看護技術の実践能力を身につけることである。実施においては、第1段階からの流れを考慮して学生が効果的な学びができるようワークノートを準備し、技術の根拠や手順を自ら思考して実技をイメージできる形式とした。課題事例に対する技術展開を個人でワークノートを用いて思考した上で、学生3~4人でのグループワークおよび技術練習をした。グループ毎に技術チェックを実施予定であったが、COVID-19の状況を鑑み中止とした。教員はグループ毎に、課題事例の技術展開を行う上で必要な視点についての指導を行い、評価は個人及びグループのワークノート、技術練習状況に基づき実施した。学生の取り組みの状況は良く、概ね目標に到達できたと考える。

在宅看護論

3年次

福田広美、荒木章裕、姫野雄太、矢野亜紀子

疾病や障害をもちながら多様な場で生活する人々に対して、在宅看護を行うために必要とされる基本的な考え方や援助方法を理解することをねらいとした。学生が苦手とする本科目の課題である関連法規の理解については、実例を交えた講義内容と講義の割合の増加、振り返りの機会を複数回設けることで、知識の定着を図った。令和4年度カリキュラムへの移行に伴い2024年度より在学看護学概論と援助論に分かれるため、次年度は新カリキュラムの移行を視野に講義内容の調整を行いつつ、学生の理解度に合わせた講義展開を行っていく。

教育方法論

3 年次前期

佐伯圭一郎、麻生良太

教師による発問、それに対する児童および生徒の考察、話し合い活動、質問行動、説明、新たな課題の発見といった教授過程や理論の実際を概説した上で、学習指導案の作成を行った。同時に、情報化社会に対応した教育内容や方法の実際に焦点をあて、各種情報機器の活用について紹介した。

特別教育支援論

3 年次前期

古賀精治、藤野陽生

特別支援学校、特別指導学級、通級指導学級だけではなく、通常の学級にも在籍する様々な障害（発達障害や軽度知的障害など）のある児童及び生徒に対し、学習上または生活上の困難を理解し、個別の教育的ニーズに対応するために必要な知識や支援方法について教授した。

養護概論Ⅱ

3 年次前期

小野治子

子どもの健康課題解決、危機管理などの学校保健における課題の歴史の変遷を捉え、具体的な養護活動を展開方法やこれからの養護教諭に求められる役割について理解することを目的としている。講義は、オンラインでの夏期集中講義で実施した。オンラインでも、学生が集中し、主体的に取り組むことができるよう、個人発表およびグループワークを多く取り入れた。また、それぞれの学生が及ぼすグループダイナミクスを活用し、主体的に学習することができた。年度により履修人数が異なるが、今後も学生が集中できる講義方法を工夫していきたい。

道徳、総合的な学習及び特別活動

3 年次前期

鈴木篤

道徳教育、総合的な学習、特別活動の特質とその方法について知識・理解を深めることを目的として、学校教育の具体的な場面を取り上げながら説明した。

英語Ⅲ

3年次後期

Gerald T. Shirley、宮内信治

コミュニケーション担当 Students learn English-language nursing dialogues and practice role playing these dialogues with partners to improve their pronunciation, intonation and fluency. Students also learn useful nursing and medical related vocabulary and phrases. The instructor will use the survey results of the student questionnaire to improve the course in the next academic year.

語彙増強担当 語源学の知見を基に自然科学分野に関連する語彙を習得させた。前回使用したスライドを改訂し、活用した。語彙習得確認小テストの回数を増やした。音読暗唱テストの文量を増やした。学生は適切に対応、達成していた。さらに文量を微増させていきたい。

環境疫学・生物学演習

3年次後期

小嶋光明、恵谷玲央

環境疫学・生物学演習は健康と環境との関係についての知見が生まれてくる仕組みを講義している。疫学的な統計によって明らかになってくる知見や分子細胞レベルの生物学的な仕組みを通して明らかになってくる知見を演習・事例を通して理解できるように努めた。演習時間内に様々な医療統計、疫学データを適切に処理し考察する力を養うことを目的とし、課題レポートを作成させて提出するやり方は、学生が主体的に問題意識を高めるとともに理解を深めることにつながる。

エクセルを用いた演習の際に困難さを感じている学生や、時間内に課題の終わらない学生もいた。演習中に質問を促すなどして学生の理解度を確認したり、事前提供資料を充実させ指導方法を工夫したりすることが今後の課題である。また、アンケート等により課題の難易度に合わせた演習時間と講義時間配分の設定を見直し必要に応じて修正を行う。

地域生活支援論

3年次後期

小野治子、甲斐優子、藤本優子、佐藤愛、渡邊一代

地域で生活している人々のライフステージや健康課題別における地域保健活動について基本的な知識および実際の支援活動について理解することを目的とした。講義は、現場の看護職による講義を取り入れ行った。本年度は各講義の後に、ミニレポートを課し、講義内容の定着および思考力の向上を図った。さらに、地域看護学実習での実習地について、コミュニティ・アセスメントの手

法を用いて地域を理解する演習を設け、実習地域の理解を深め、健康課題を見いだすことができた。次年度も、各講義の振り返るレポートや地域看護学実習へと連動する講義演習を行う予定である。

健康支援論演習

3 年次後期

小野治子、甲斐優子、藤本優子、佐藤愛、渡邊一代

人々が健康への関心を高め、健康行動が実践できるような健康教育の展開方法とその実践力を養うことを目的とした。健康教育が行われる対象や場を理解し、個人・集団の健康増進や疾病予防のための行動変容を促す理論やモデルを活用した健康教育の企画・実施・評価等の一連のプロセスを理解できるよう講義・演習を行った。学生自らが今までの実習経験をもとに、健康教育の対象や場面を設定し、対象者に合わせた健康教育についてグループワークで取り組んだ。15 コマの演習の中で、健康教育の企画、指導案、健康教育発表の3回の発表を通じて、学生間の討議を行い、学生間の相互理解を深めることができた。次年度も同様の方法で実施したい。

国際看護比較論

3 年次後期

桑野紀子、丸山加菜

国際保健／国際看護の主要概念や世界の疾病構造の変化について理解を深めること、Universal Health Coverage や Sustainable Development Goals といった保健医療に関する世界的な取り組みについて学ぶこと、母子保健や精神保健といった各分野のグローバルな状況について学ぶことを目的として内容構成した。今年度は、世界的に増加している難民の健康課題や、在外邦人の健康支援に関する実践的内容を組み込んだ。課題レポートや試験結果から、学生は概ね目標を達成できたといえる。基本的な知識の習得と共に、変化の激しい世界情勢とそれに伴う健康課題について学べるよう、英語で発信される情報含め、最新情報の収集力も向上させる必要がある。

国際看護学演習

3 年次後期

桑野紀子、丸山加菜

演習前半は、貧困援助、難民の健康課題等のテーマを設定し、講義で学んだ知識を実践に結びつけて具体的にイメージできるよう、映画の視聴とその後のディスカッション・レポート作成を組み込んだ。文化・社会的背景が多様な在留外国人患者の看護について、実践経験豊富な外部講師をオ

オンライン上で招聘し内容を補強した。演習後半は、或る国の健康課題と背景および対策について国際機関ホームページ等を情報源として調べ、考察し、発表するグループワークを行った。学生5-6名のグループが海外の健康課題等について国際機関のホームページ等から英語で最新の情報を収集し考察した。学生は多様なテーマに取り組み、発表会とディスカッションを通して知見を広げ、概ね目標を達成できた。ディスカッションが深まり学習効果を向上できるよう工夫が必要である。

災害看護論

3年次後期

石田佳代子、石丸智子、内倉佑介、福田広美、松久美

本科目の目的は、地域や病院等における健康危機管理と災害時の対応について理解し、地域や病院等における災害看護のあり方、考え方とその実際を学ぶことである。そのために、講義では、災害および災害看護の基礎的知識に重点を置いたうえで、災害の定義、種類、法律、制度、災害サイクル各期における特徴と看護活動、病院における初動体制、DMATの活動や避難所における災害支援ナースの活動など、多面性を有する災害看護の全体像がわかるような内容とした。また、災害状況を設定したペーパーシミュレーションやDVD等の動画を活用するなどして、災害時のイメージ化を図り、災害時の特徴の理解を促せるような工夫を行った。演習では、日本DMAT（看護師）による指導の下で、災害時に必要な技術であるトリアージ（START法）に重点を置いたうえで、災害発生時を想定したシミュレーション・シナリオを使った訓練などを行った。本科目の評価はレポートによって行った。講義で学んだことなどを基にレポートを書くことで、様々な場における災害時の看護のあり方や自身の責務などについて、考えをより深めることができたと考える。

新型コロナウイルス感染対策のため、本年度は対面に一部オンラインを組み合わせ実施した。対面によるトリアージの実技演習ができていないので、実技としての達成度には課題があるのではないかと考えられる。本科目を通して学びたいことや身につけたい能力について、学生が自分の考えをまとめたレポートにおいて、「トリアージ」「臨機応変な対応能力」「正確な判断能力」を身につけたいと考えている学生が多いことから、そのような学生からのニーズや期待により応えられるように取り組みたいと考える。

看護科学研究

3年次後期

佐伯圭一郎、安部眞佐子、吉田成一、関根剛、小嶋光明、品川佳満、村嶋幸代、荒木章裕、姫野雄太、岡田悠希

卒業研究および将来の臨床における看護研究に必要とされる基本的な考え方、知識、技術を修得することを目的としてオムニバス形式の講義・演習を行った。また、講義以外にオンライン実施の卒業研究発表会の視聴を義務づけ、卒業研究に向けての理解と態度を養った。

今年度から Google Classroom を利用したことで、講義資料の公開やオンラインでの課題提出などが効率的に行われると共に、担当講師間での相互の講義内容の把握にも有効であった。

学校保健学

3 年次後期

草野淳子、小野治子、大渡文子、霜山朋子、手嶋康深、吉田知佐子

講義時間数は 20 コマであった。目的は、児童生徒の心身の健康維持・増進における学校保健の役割について、保健管理、保健学習、保健指導の視点から理解し、主要な観点を説明できるようになることである。講義は養護教諭の実践経験がある非常勤講師によって、主に行われた。内容は根拠となる法律、学習指導要領、教育課程について取り上げ、意義や内容が理解できるようにした。演習は保健室経営計画、症状アセスメント、保健教育指導案の立案とし、課題提出後に全員で討議し教員が講評を行った。評価は、症状アセスメント・指導案作成の発表(20%)と筆記試験(80%)によって行った。今年度の方法は有効であったため、来年度も同様に実施する予定である。

教育制度論

3 年次後期

今井航

世界の主要国における教育制度改革の動向や、学校の法的な位置づけを問うことにより、教育制度への関心を高めた。その上で、職務内容や遵守事項、免許制度、研修制度を取り上げ、教職員に関する制度の特徴を捉えさせた。加えて、教育委員会の制度の変遷、教員評価の制度、学校支援の制度についても解説した。

養護実習事前事後指導

3 年次後期

吉村匠平、関根剛

事前指導では、養護実習時の遵守事項について学ぶとともに、実習校の概要について、HP や要項をもとに整理した上で、個別の実習目標、実習期間中の具体的な行動目標を策定し、実習生間で交流させた。事後指導では、実習目標に沿って、実習の自己評価を行うとともに、他の学生の実習体験を共有する機会を提供した

養護実習 I

3 年次後期

吉村匠平、関根剛

大分市立松岡小学校、豊府小学校、植田東中学校、南大分中学校、城南中学校、臼杵市立臼杵小学校、佐伯市立上野小学校、別府市立山の手小学校、日田市立三隈中学校、宇佐市立駅川中学校で、学校体験活動を中心とする実習を行った。

応用生体機能反応論

4 年次

濱中良志、吉田成一

今年度は、コロナ禍のため、Zoom の様々な機能を駆使して、解剖生理学、病態生理学及び薬理学の思考過程を教授した。

総合人間学

4 年次後期

杉本圭以子、福田広美

看護学実習や演習を経験した 4 年次生が各講師の講義を通して物の見方や考え方を学び、人間として、医療者として備えておくべき豊かな知識と感性を養うことができるように、教職員の推薦から教育研究委員会での検討を重ね、様々な分野の第一線で活躍されている 8 名の講師とテーマを決定した。さらに、看護国際フォーラムへの参加を 2 回分の講義とし、全 10 回の講義を実施した。今年度は、COVID-19 の感染拡大予防策として Zoom による講義に変更を行いながら実施した。学生全員が 10 回の講義を聴講できた。先生方の講義を通して、1 人の人間としてももの見方や捉え方など視野の広がりを認識でき、レポートに看護職者としての学びや今後の課題について自己の意見を表現することができた。

本年度の開講日、テーマおよび講師は、第 1 回は 9 月 9 日に「どうぶつと共に生きる」をテーマに九州自然動物園アフリカンサファリ取締役展示部部長専門獣医師の神田岳委氏を招聘した。第 2 回は 9 月 16 日にこのみの空企業組合代表理事、看護師保健師、日本旅行医学会認定看護師の小野里春香氏を招き、「起業看護師としてのやりがい・添乗看護・在宅看護」をテーマに授業を行った。第 3 回は 9 月 30 日に気象予報士防災アドバイザー環境教育アドバイザーの花宮広務氏による「自然に対する畏敬の念を忘れないー地球温暖化、自然災害を俯瞰してー」をテーマとした授業を実施した。第 4 回は 10 月 7 日に LGBT サポートチーム ココカラ！共同代表の奥結香氏が「ひとりぼっちを作らない地域をー性的少数者(LGBT)当事者としてー」授業を行った。第 5 回は 10 月 14 日に昭和大学大学院保健医療学研究科准教授院内学級教師ホスピタルクラウンの副島賢和氏が

「学ぶことは生きることー院内学級の子どもたちが教えてくれた大切なことー」をテーマに授業を実施した。第6回は10月21日にコミュニケーションオフィス TAZ 代表の石本田鶴子氏が「医療コミュニケーションスキルとマインド-半年後に困らないために-」をテーマに講義を行った。第7回は10月28日に大阪芸術大学芸術学部舞台芸術学科教授の山本健翔氏を招聘し、テーマ「私が演劇を通して学んだこと」について講義を行った。第8回は11月4日にテーマ「理想の未来を手に入れるタイムマネジメントの基礎知識 - 時間の使い方を変えると人生は変わる-」について社会保険労務士大分県男女共同参画審議委員の篠原丈司氏による講義が行われた。第9回と第10回は10月29日に看護国際フォーラム「With コロナの経験から得た知見-未来志向で考えるシームレスな新人教育のあり方-」について国内外の講師による講演を学生が受講した。

学生のレポートやアンケートの結果より、4年次生が、本科目の多彩な講師による授業を通して目標を達成でき、より視野の広い看護について学ぶことが出来た。これらの結果を踏まえて、次年度の講師やテーマを検討し、授業科目の目標達成に向けて効果的な授業を計画、実施する。

看護探求セミナー

4年次

看護系教員全員

4年生に対し、実習で受け持った患者1名に対する看護を振り返り、看護をより深く考えることを目的としたケース・スタディを行った。振り返りを行う実習の事例は、コロナ禍で臨地実習の経験が学生によって異なるため、総合実習以外にも4年間の実習で受け持った事例を振り返ることとした。各教員が、学生を担当し、テーマ決定からケースレポート作成までのプロセスを指導した。学生は主体的に担当教員の指導を受けながらレポートの作成を行った。また、自らの看護実践と理論を繋げて理解を深めることができた。

次年度も振り返りを行う実習の事例については、4年間の実習の中から選択することとし、学生が主体的に看護探求セミナーに取り組めるように指導を行う。

地域看護学実習

4年次前期

甲斐優子、小野治子、加藤典子、藤本優子、佐藤愛、渡邊一代

大分県下の保健所（保健部支所含む）、市町村保健センター及び支所における2週間の実習を予定していたが、COVID-19の影響により、臨地実習と学内実習の2つのパターンで実施することになった。臨地の実習教育は、それぞれの施設の保健師が実習の現場で直接指導を行い、担当教員は各施設を巡回す指導を行った。学生と実習指導者双方の状況を把握し、終了カンファレンスでの指導、記録物の指導などを行った。学内実習では、大学院生のTAを活用し、実際の保健活動の疑似体験により学ぶことができた。また、金曜日を学内日とし、学内で教員と学生間で討議すること

で臨地実習と学内演習での学びを共有した。次年度も金曜日は学内日として、学びの共有を行っていく予定である。

予防的家庭訪問実習（4年次）

4年次

福田広美、影山隆之、篠原彩

単位認定者を学部長とし、看護研究交流センター地域交流チームが実習マネジメントを担当した。新型コロナウイルス感染症の感染拡大以降初めて、80チームすべてに協力者を配置することができた。感染拡大のため訪問は4月から3か月間休止とし、7月より開始したので、単位認定に必要な訪問回数を4年次生は3回とした。訪問の実施にあたり、抗原検査ならびに細かな症状の有無の確認を行った。また、これまでの学生2人で訪問するというルールを見直し、訪問予定の学生が体調不良や新型コロナウイルス感染関連の休みなどやむを得ず訪問できない場合は、学生1人での訪問も可能とし、できるだけ訪問機会を持てるようにした。休止期間中、4年次生は協力者へ電話による問安を行った。4年次生は特に、協力者個人の生活のみならず、地域の健康課題にも目を向けて考察・提案することを主眼とした。協力者を通して、健康に影響を与える地域の様子について考察し、地域でのつながりが健康にも影響を与えることへの理解を深めていた。また、チームリーダーとして創意工夫して役割を遂行していた。

看護管理学概論Ⅱ（政策等含む）

4年次前期

福田広美

看護管理のプロセスおよび管理の実際を通して、看護の質を高めるための理論や看護管理に必要な理論、経営に関する基礎的な知識および、看護政策について学習することを目的とした。

本年度も COVID-19 の感染防止対策のためオンラインで講義を行った。4年次生が、臨床や臨地で実際に経験した病院や在宅等の事例や模擬事例を通して、看護管理や看護政策の基本的な考え方を学んだ。次年度は、授業科目の目標達成に向けて、学生が身近な経験を通して看護管理や政策を考えられるよう学生間のディスカッションも交えながら授業を行う。

第3段階看護技術演習

4年次後期

秦さと子、山田貴子、渡邊一代

本科目は、3つのステップからなる看護技術修得プログラムのサードステップの位置づけにある演習である。本演習の目標は、これまでに学んだ看護援助に必要な知識と技術を、eラーニングにより主体的かつ計画的に再学習し、総合的に看護技術力を強化することである。

本演習に COVID-19 の影響はなく、学生自身が計画的に学習を進めることができた。学生はナーシングスキルによる反復学習を通して、自己にとって未熟な看護技術項目と定着している看護技術項目を再確認することができていた。また、レポート課題により自己の技術習得状況を振り返り、技術修得上の課題や今後の対策を明確にしていた。学生全員が概ね目標を達成できた。

在宅看護論実習

4年次前期

福田広美、荒木章裕、桑野紀子、篠原彩、姫野雄太、丸山加菜、矢野亜紀子

COVID-19 の影響により臨地実習、学内演習、ハイブリッド形式の3種類を同時進行した。昨年度と比して臨地で学習できる学生は増加した。臨地実習が行えない学生には、学内演習で実習目標が達成できるよう、動画教材や演習資料を活用しながら指導を行った。また今年度は自ら考えて学内演習に取り組む機会を多く取り入れることで、臨地実習との経験の差異の解消に繋げることができた。次年度は可能な限り学生全員が臨地に立てるよう実習施設と調整し、在宅看護領域の実習として十分な経験を積むことができるよう支援していく。

総合看護学実習

4年次前期

看護系教員全員

4年次生74名が県内33施設において、6月下旬から7月下旬の期間中に、3週間の実習期間を確保し、各施設・学生の状況（COVID-19感染状況）に応じて可能な範囲で実習を行った。COVID-19感染拡大の影響で、全期間学内実習で代替した学生は6名であった。本実習は4年間の看護学実習の最終段階にあたり、実習の集大成である。実習の目的は、主体的に実習課題を設定し、看護基礎教育における学びを統合しながらチームの一員として看護を提供するための総合的な看護実践能力、看護の質を保証するマネジメント能力、および看護専門職としての自律性を養うことであり、また、本実習の特徴は、計画から実施・評価までを学生が自律的に取り組む点である。制限がある中で感染対策を行いながら、各自が実習目的・目標に沿って実習し、4年次生全員が無事に実習終了することができた。次年度も引き続き感染予防に配慮しながら、学生個々人の実習目的・目

標に沿って実習を進める。

卒業研究

4年次

全教員

4年次生は、各研究室に所属し、開学以降行っている1人1テーマで研究に取り組むことを継続した。研究室配置は、各研究室の教員が、研究室の特色、研究室で行う研究テーマ、これまでの卒業研究などを録画で紹介し、それを学生が各自視聴した上で、研究室の希望に沿って研究室配置を決定した。学生は、各研究室の教員の指導のもとに、卒業研究のテーマを3月31日までに決定した。テーマ決定後は、研究計画に基づき研究に取り組んだ。今年度は文献研究、実験研究や調査研究などが行われた。また、倫理審査を要する研究は、研究倫理・安全委員会に計画書を提出し、学生が研究倫理審査のプロセスも学習した。4年次生は、研究室の配属から約10ヶ月間で、研究を実施し、要旨、論文、パワーポイントの作成までを行った。研究発表会は、Zoomにより3分科会に分かれて実施した。3分科会が同時進行のため、録画により後日発表を視聴できるようにした。卒業研究の評価は学生、教員ともにルーブリックを用いて行った。卒業研究発表優秀賞は、視聴した教員全員が評価し、各分科会から上位2名、計6名が選出された。

原著講読

4年次

全教員

4年次生は、卒業研究で配属された研究室で、教員の指導を受けながら原著講読を行った。授業目標は、専門領域の原著論文2本以上読み、その知見を述べるができること、卒業論文作成時に、原著講読で学んだ知見を活かすことであった。学生は、ルーブリックを用いて段階的に評価し、担当教員もルーブリック評価を行った。いずれの学生も一定のレベルに到達出来た。

養護実習Ⅱ

4年次後期

吉村匠平、関根剛

大分市立植田小学校、大分南中学校、東大分小学校、荏隈小学校、原川中学校、賀来小中学校、大分西中学校、八幡小学校、大東中学校、日田市立北部中学校、豊後高田市立高田小学校、香々地小学校、杵築市立宗近中学校、竹田市立久住小学校、中津市立今津中学校で、学校保健活動を中心とする実習を行った。

医療福祉と人権

4 年次後期

平野 互

基本的人権に関する知識を習得するとともに、人権感覚を身につける目的で開講される選択科目である。人権という概念を整理し、法に規定された事柄だけでなく、その本質的な意義と役割について理解できるよう、「人権の概念と意義」、「医療福祉の人権課題」、「人格と自由権」、「社会権～生存権と社会保障」「子どもの人権」、「高齢者の人権」、「医療における人権」、「障がい者の人権」、「差別と虐待」、「優生思想」の講義を行った。

4 年次後期の選択科目のため、今年も受講生は 1 名であったが、対面でゼミのように議論しながら、受講生の問題意識に添って講義を進め、受講生の理解も深まったと思われる。

看護スキルアップ演習

4 年次後期

秦さと子、荒木章裕、足立綾、永松いずみ、山田貴子

成人・老年（急性期、回復期）、母性、小児、在宅領域の事例に対し、根拠に基づくアセスメントおよび適切な看護技術を提供できる実践能力を養うことを目的として実施した。1 グループを学生 6～8 名で構成し、各グループで課題に取り組み発表会を実施した。必要と考えられる看護の根拠や意図が伝わるように動画や写真、パワーポイント資料の作成を課し、要点をおさえた発表を行うことができた。2 つのグループが共通事例を担当したことでディスカッションが深まり、また看護系教員のみならず人間科学系教員からの助言を受けることで、患者や一般的な視点に立ち返る重要性を再認識したと学生から多数意見があった。演習の実施は学生の主体性に任せていたが、グループ演習の参加度や役割分担に偏りがあったという声が学生と担当教員の双方から聞かれていたため、次年度はグループ編成を工夫するなどして、より効果的に演習を進めることができるように調整する。

教職実践演習（養護教諭）

4 年次後期

吉村匠平、小野治子、草野淳子、関根剛

学校保健活動を行う現場を念頭に置いた実践的な授業を演習形式で行った。4 年間の教職課程の学びを振り返り履修カルテを完成させた。学内演習では、構成的エンカウンターグループのファシリテーター体験、場面指導案の作成と実施、投影的な自己理解促進の手段としてのフォトコラージュ体験などを行った。

4-2 博士課程(前期)

助産学概論

1 年次前期

梅野貴恵、樋口幸

助産の基本概念および女性をとりまく社会的背景を認識し、助産師の責務と社会で期待される役割と重要性、さらに助産師活動に取り組む姿勢・態度や助産師の現状と課題について系統的に教授した。COVID-19 感染対策（換気や広い部屋）を行い、講義はパワーポイントを用いて教授した。2~3 名の学生グループによる事前課題のプレゼンテーションとディスカッションを行う方法もマスク着用で実施した。「出産や助産の歴史」、「女性を取り巻く社会の変化と親子関係をめぐる問題」では、各グループともディスカッションをよく行い、発表への質問もあり意見交換がなされた。研究課題の絞り込みに時間を要していたことから、「助産学研究の意義、助産学研究の方法と助産学研究における倫理」を教授内容に追加した。また助産学領域の研究論文のクリティークやガイドライン等の資料を用いたディスカッションを通して、助産とは何か、妊産婦が望む出産、社会に求められる助産師の役割について自己の考えを述べることができた。

周産期特論

1 年次前期

梅野貴恵、飯田浩一、後藤清美、小山尚子、佐藤昌司、豊福一輝

講義内容は周産期における正常・異常を判断するために必要な最新の医学的知識と技術の習得を目指して産科医師・新生児科医師を講師とした。妊娠・分娩・産褥・新生児の生理とその医学的管理についての基礎知識、さらに周産期における異常の判断をするために、産婦人科診療ガイドラインに基づき、疾患の病態・検査・治療や NICU における新生児管理、新生児救急蘇生法について教授された。評価は、筆記試験を実施し全員合格した。

母子成育支援特論

1 年次前期

梅野貴恵、井上祥明、上野桂子、宇留嶋美弥、草野淳子、桑野紀子、佐藤敬子、平野亙、吉村匠平

女性のライフサイクルにおける性と生殖の問題である不妊や出生前診断、生殖補助医療と生命倫理などの母子とその家族をとりまく様々な問題、国内外の子育て支援制度など助産師活動を実践する上で基盤となる内容を教授した。学内外の専門家を講師としたオムニバス形式で実施した。子育て体験は、感染対策の上、夏期休業中に育児体験人形を自宅に持ち帰り、学生がおむつ交換、授乳やあやすなどの子育てを 24 時間体験した。初めての子育ての困難さなど母親の心理を理解し、

支援者の重要性を再認識する機会となった。また、地域で活躍する開業助産師の活動を聴き、病産院以外の助産師の活躍の場を学ぶことができた。評価は、各講師によるレポート課題等の評価で行った。

リプロダクティブ・ヘルスト論

1 年次前期

梅野貴恵、井上貴史、宇津宮隆史、島本久美、竹内正久、花田克浩

講義内容は助産の基礎知識として、女性の性と生殖の健康における正常・異常を判断するために必要な最新の医学的知識と技術の習得のために産婦人科医師と遺伝の専門家を講師とした。性・生殖器に関する形態機能から主な疾患及び最新治療に対する基礎知識、遺伝疾患や遺伝カウンセリング、最新の生殖補助医療の現状と課題、HPV ワクチン接種等の予防を含めた子宮頸癌の動向や今後の展望についても教授された。評価は、筆記試験を実施し全員合格した。

ウイメンズヘルスト論

1 年次前期

梅野貴恵、小嶋光明、影山隆之、桑野紀子、實崎美奈、吉田成一

女性の生涯を通じた健康づくりを視野にリプロダクティブ・ヘルスを推進するために女性のライフサイクル全般における性と生殖に関わる心身の健康問題や生殖補助医療の課題、環境・社会問題と母子の健康を理解し、女性とその家族の健康相談や教育を実施するための知識や技術を教授した。講義は、講師の専門性を活かしたオムニバス形式、一部 Zoom で実施し、発表やレポート課題で各講師からの評価を得た。

妊娠期診断技術特論

1 年次

姫野綾、安部眞佐子、小嶋光明、吉田成一、渡邊しおり

妊娠期の経過及び生活状態に関する情報収集やフィジカルアセスメントに必要な基礎的な知識と実践の手法、そして、薬理、栄養、放射線障害などの知識をオムニバス形式で教授した。

正常妊婦だけではなく、ハイリスク妊婦への支援を思考する機会を設ける為、ハイリスク妊婦の支援に関する知識を提供すると共に、事例を用いた課題を提示することで必要な支援を考察する機会を設けた。さらに、正常逸脱を予防するアセスメントと助産技術の重要性及び妊婦とその家族を取り巻く環境の理解を深める為、実際の支援について説明し理解力の向上を図った。これらの基礎的な学びが、今後の演習実習にどのように関連するのかを学生が理解し、実践に効果的に繋げて

いくことができるような取り組みが今後の課題である。

分娩期診断技術特論

1 年次前期

樋口幸、生野末子、姫野綾

分娩期の経過及び生活状態に関する必要な情報を収集するためのフィジカルアセスメントや助産診断を行うための基礎的な知識及び助産技術を習得することを目的にしている。今年度の入学生は COVID-19 の影響で、母性看護学実習は実施できていたが時間制限のある同行実習であり、スタッフとのコミュニケーションが十分ではなく、見学場面を通しての学びが十分ではない状況であった。全員分娩見学は実施できていなかったが、講義開始前に分娩見学を実施する機会も設けられなかった。そのため講義には DVD や視聴覚教材を取り入れ、臨床場면을想起しやすいように工夫し、場면을教材化してエビデンスに基づいた看護を教授した。さらにローリスク分娩、ハイリスク分娩、緊急時の対応について、模擬事例を用いたシミュレーション教育を取り入れた。学生は、母子の安全と満足のいく分娩介助には、対象理解と状況把握が重要であることを学んだ。また正常からの逸脱を迅速かつ的確に判断し、他の周産期医療専門職種と連携して緊急性の高いニーズにも対応し得る助産師としての基本的な知識及び技術を習得できた。しかし、長期にわたる自粛生活の影響か、生活経験やコミュニケーション能力が乏しい学生もいる。助産師として、多様化する母子とその家族に対する理解や円滑に多職種と連携を図っていくための能力を養っていくことは、次年度以降も継続的な支援が必要である。

産褥・新生児期診断技術特論

1 年次

樋口幸、姫野綾

産褥期にある女性と新生児、乳幼児の健康状態を包括的にアセスメントし、褥婦のセルフケア能力を高めるための支援や新生児の胎外生活適応過程のケア方法を教授した。また社会的な問題となっている身体的・精神的・社会的ハイリスク状態にある母子とその家族に対する他職種や地域との連携については、講義とグループディスカッションを組み合わせ現状と課題を明らかにした。学生は積極的に講義、演習に参加し、産褥期と新生児・乳幼児期の心身の生理的変化についての基礎知識とケア技術を習得した。退院指導では、産後 2 週間での家庭訪問の内容充実を目標に退院後の生活を意識した指導案を作成し、パンフレットを用いて、ロールプレイを実施した。また、産後の悩みとして多い母乳育児の支援方法についても、実際の事例や場면을想定し、学内の乳房モデルや模型を使用して乳房トラブル予防のためのマッサージ（堤式）方法や授乳指導の演習を行った。対象者が産褥期の生理的変化や退院後の育児・生活をイメージできるための工夫について、学生同士で活発なディスカッションとリフレクションができた。その中で、対象者の生活背景に合わせた

個別対応の困難さと継続支援の重要性を理解することができた。次年度は、実際に産後の家庭訪問の機会が得られる可能性が高いため、個別性のある支援と継続的なかわりがイメージできるように、産後ケア事業や社会資源の活用も含めた教材・事例の工夫を行っていく。

周産期診断技術演習

1 年次

樋口幸、安部真紀、梅野貴恵、軽部薫、佐藤昌司、姫野綾

妊産褥婦と胎児・新生児の健康状態をエビデンスに基づいて診断する技術と、具体的な支援方法について教授した。今年度は、現状把握から今後の予測し予防的に行動するという、臨床での一連の思考と行動を意識して教授内容を構成した。演習は、COVID-19 の感染予防対策として少人数で分散して実施したが、学生間の学びの共有ができるようにリフレクションの時間を Zoom で設けた。妊娠中のマイナートラブルの緩和や出産・育児に向けた心身の準備・体力づくりのための方法として、マタニティーヨガやマタニティーピクス、骨盤矯正や産褥体操について、解剖生理も含めて学び、実際に体験した。胎児の健康状態の診断は、超音波診断機器と高機能シミュレーターを用いて胎児の計測や奇形の有無などから成長・発達、健康状態の診断、異常の早期発見に関する知識と技術を習得し、OSCE で到達度チェックを行った。妊娠週数によって胎児の成長を確認する観察や様々な指標を学び、胎児の健康状態を診断するために、実際の CTG 波形から児の状態を判読し、適切に対応できる能力を養った。新生児蘇生法は、アルゴリズムに沿って迅速かつ正確な蘇生処置が行えるよう、新生児シミュレーターを用いて、出生直後の処置、呼吸確立、胸骨圧迫に至るまで技術演習を実施した後、日本周産期・新生児医学会の新生児蘇生法「一次」コースを受験し、全員合格した。学生は、刻々と変化する母子の経過をアセスメントするための基礎知識と観察技術、状況に合わせた対応力を習得できた。しかし、対応までには時間を要したため、次年度は実習場面と関連させて、迅速に思考と行動ができるよう工夫していく。

助産保健指導演習

1 年次

姫野綾、梅野貴恵、樋口幸、矢野杏子

女性のライフサイクルにおける性と生殖に関する問題を実践に応用する思考過程と、保健指導案の立案及び実践方法を教授した。妊娠期、産褥期及び育児期の保健指導は、模擬患者への個別指導を実施し、保健相談、健康教育、援助活動の効果的な実践の能力を養った。その際の工夫点として、模擬患者を学生が実施することで妊産褥婦の気持ちを考察する機会を設けることや、教員が助産師役となり、実際の臨床現場に近い保健指導のデモンストレーションを実施した。そうすることで、学生が実施しがちな一方的な保健指導と、臨床助産師が実践する対象者に応じた保健指導の相違を考察する機会を設けた。リフレクションを実施する中で、学生自身もその違いに気づいている

ことは明らかとなったが、実習に出た際に、対象者に応じた保健指導を実践するのは困難であった。そのため、対象者に応じた保健指導を少しでも早く実践出来るようにすることが今後の課題である。

さらに、今年度から多様な性とセクシャリティ教育についての講義を開始し、多様な性について考察する機会を設けた。そして、今年度は、2年ぶりに小学校における性教育も時期をずらして実践することが出来た。性教育の実践においては、実践に至るまでの準備の大変さを知ると共に、実際の反応から得られる楽しさや達成感を感じる機会となり、学生自身が自己の成長を感じる機会となっていた。

分娩期実践演習

2年次

姫野綾、梅野貴恵、樋口幸、矢野杏子

今年度も引き続き、新型コロナウイルス感染拡大防止策を行いながら演習を進めた。

自己学習素材として教員間で作成した分娩介助場面の動画を活用し自己学習することで、デモンストレーションの機会を減らした。さらに、実習施設毎に時間をずらして練習を行う等、集団になる機会を減らす対応を行いながら、学習を深める対応を行った。自己練習時間は昨年同様短時間であったが、事前の動画学習が効果的に働き、分娩介助 OSCE は全員が1回で合格した。

分娩第一期に心音が低下するシミュレーションでは、密になる機会を避けるため、Zoom を用いてそれぞれで対応を考察する課題を事前に提示し、発表する講義へと切り替えた。実際の対応を想像することは出来ていたが、学生同士でのディベートが盛り上がらなかった。実際の臨場感を感じながら演習することが出来なかったことが大きな要因であると予測するが、学習効果として乏しかったことが反省点である。やはり、実習室でどう対応するかを考え、対応をシミュレーションしてみるのが学習を深めるために重要であると考えます。

その他、フリースタイル分娩介助・会陰切開縫合術の演習を9月に計画していたが、コロナ感染症拡大時期であったため時期をずらして12月末に実施した。しかし、学生の関心は国家試験に向いており、集中力や関心が乏しかった為、次年度は例年通り分娩実習終了後の9月頃に実施することを計画する。

助産過程展開演習

1年次後期

樋口幸、梅野貴恵

助産を実践するための基本的な助産過程の展開について、実際の事例を用いて実践に応用する思考過程を教授した。まず、講義形式で助産診断の概念・助産診断のプロセスを教授した後、妊娠期の異常事例、分娩期の正常事例とハイリスク事例の3つの事例について助産過程を展開した。

事例の展開方法は各自で自己学習したのち、2名ずつのグループで『実践マタニティ診断』の診断指標についてディスカッションし発表した。演習の中で、これまで学習してきた知識を使って思考・アセスメントを行っていたが、健康生活の診断（対象の生活や社会的背景など）に関する項目と分娩進行への影響との関連付けが難しいようだった。分娩期の事例は、初期診断だけでなく数時間経過後の状態の情報（パルトグラム）を追加し、経過診断の修正と初期診断計画の修正を行い、ハイリスク事例は分娩進行中に医療介入（点滴誘発）が実施された場合の診断名、計画の修正を取り入れ、臨床推論力を強化した内容とした。提出されたレポートから、妊娠期および分娩期における母児の安全・安楽を保障するために、妊産婦の身体的・心理的・社会的健康状態、胎児の発育・発達および健康状態について判断し助産診断名を記述できていた。ローリスクの事例では wellness の視点でケア計画が立案できていたが、ハイリスク事例では問題志向型の傾向がみられたため、今後はハイリスク事例でも wellness を意識して母子と家族に対するケアの視点を強化することが課題である。

助産マネジメント論

1 年次後期

梅野貴恵、安部真紀、生野末子、戸高佐枝子

助産師の職務、業務範囲および法的責任を理解し、助産業務を遂行するために開業も含めた助産管理について教授した。講義は周産期領域における管理的視点を養う内容とし、資料やパワーポイントを用いて実施し、講師それぞれの助産師としての専門性を考慮し、オムニバス形式で実施した。特に、産科領域で起こりがちな医療事故や災害時の母子への助産師としてのケアなど、身近な問題を教授しディスカッションした。今年度は授業内容を精査し、新カリキュラムに対応するため助産に関する政策立案のプロセスについて追加した。評価は、発表内容や筆記試験から行った。

地域母子保健学特論

2 年次後期

梅野貴恵、市原恭子、小野治子、佐藤由美子

日本の地域母子保健の現状について理解を深め、社会に求められる助産師の役割を明確にするための内容を教授した。母子保健の変遷、大分県の母子保健の現状をふまえた母子保健施策と母子保健の水準、育児を取り巻く社会環境や地域における具体的な母子への支援について、事例をとおしたディスカッションで理解を深めた。最後に、『子育てを取り巻く環境と助産師の役割』について、母子保健統計データや文献、実習中の受持ち母子の状況などをもとにプレゼンテーションを行い、それぞれの発表に対して意見交換を行い、母子保健をめぐる現状と助産師としての役割への理解を深めることができていた。

助産マネジメント演習

2 年次後期

梅野貴恵、安部真紀、樋口幸、姫野綾

助産業務の行われる病産院において、母子保健医療チームの一員としての助産師の役割と責任を認識し、助産の対象者の健康管理や助産マネジメントを実践する能力を習得するための演習とした。COVID-19 感染防止対策で昨年度に引き続き、臨地での助産院管理を経験することは中止した。第 5 回日本助産診断実践学会、第 63 回日本母性衛生学会のオンデマンド講義（多胎の妊娠期管理、産科診療ガイドライン 2020 をふまえた母体救急とその対応、産後うつの母親支援、課題を抱える妊産婦支援の実際など）を Zoom で聴講して周産期センターにおける助産師の役割についての学びを深めた。また、災害時の避難場所における母子への支援を想定し、実習室でシミュレーション学習を行った。周産期母子医療センターへの母体搬送事例 3 事例をもとに、受入れ施設助産師として求められる役割と助産ケアの実際についてグループでディスカッションを行い、模擬妊婦や模擬医師役を教員が行って実習室でシミュレーション学習を行った。実施後、デブリーフィングによって臨地での実習経験を生かし報告すること、マンパワーを集めることなどの重要性を発表した。演習後、助産師としての自己の課題と将来の目標をレポートし、それぞれが明確にすることができていた。次年度は、感染状況を踏まえて助産院助産師の自律した助産ケアの実際を学べる機会を検討する。

助産学統合実習

2 年次前期

梅野貴恵、樋口幸、姫野綾、矢野杏子

人間尊重の基本理念に基づき、新しい命の誕生に携わらせていただくことへの感謝と責任をもって、妊娠期から産褥・育児期まで継続して母子とその家族を受持ち、個別に応じた助産ケアの実践能力を養うことを目的に 3 施設で実習を行った。別府医療センターに 7 月下旬から受け入れ依頼をしていたが、7 月頃の感染拡大により実習中止とした。あおい産婦人科とアンジェリック浦田は 5 月 23 日から、堀永産婦人科医院は 6 月 6 日から開始し、9 月 2 日まで実習を行った。分娩介助例数は、平均 9.8 例（9～10 例）の実施となった。実習期間中に発熱した学生は PCR 検査陰性を確認して解熱確認後に実習継続できた。臨地実習終了後に COVID-19 陽性となった学生は、最終カンファレンスの日程調整で対応できた。各施設ともに臨地指導者の指導を受け、受け持ち妊産婦へのケアも実施することができた。中間カンファレンスでは、学生個々の学びの状況に応じた助言をいただき、後半は、継続事例を通して学びが深まっていた。継続事例 3 例を妊娠期（1 例分娩期）から産後 1 か月まで受け持ち、2 週間健診等を含む助産実践を指導者の指導を受け、妊産婦個々の問題に寄り添いケアを実践することができていた。次年度は、COVID-19 感染状況により入学前から臨地経験の不足する学生が実習することから、体調面の管理を行い、全員が 10 例以上の分娩介助を実施できるように指導者と連携し指導していく。

ハイリスク妊産婦ケア実習

2 年次前期

梅野貴恵、樋口幸、姫野綾、矢野杏子

周産期におこる異常やリスクに対して的確な判断力と高い予見性、緊急事態に対応する能力を養うことを目的に総合周産期母子医療センターで 2 週間の実習を行う予定であったが、COVID-19 感染防止のため実習施設の受け入れが困難で 8 月に延期する計画とした。しかし、夏の助産学統合実習が長引いたことや、感染が再拡大したこともあり臨地での実習を中止した。あらかじめ、臨地実習できないことを想定して、助産学統合実習中に帝王切開事例を受持つこととし、学生はその事例で事例展開し提出した。後期の助産マネジメント演習で、「多胎の妊娠期管理」や「産後うつへの母親支援」などのハイリスク事例のオンデマンド学習等で補足をした。次年度は、感染状況をみながら可能な範囲で臨地での経験ができるように計画する。

妊娠期課題探究実習

1 年次後期

梅野貴恵、樋口幸、姫野綾

産科超音波装置を用いた助産診断技術を活用し、妊婦と胎児の健康水準を助産師が自律的に判断し、科学的根拠に基づいた助産診断を行い、妊婦のニーズに寄り添い、安全で快適な出産を迎えるための保健指導ができる能力を身につけるための実習である。10 月 17 日から 11 月 1 日の期間に、1 学生が大分県立病院 2 日、わたなべ助産院 2 日、生野助産院 2 日の計 6 日間実習し、12 月 5 日からは、堀永産婦人科医院、あおい産婦人科、別府医療センターの 3 施設に分かれて実習した。大分県立病院総合周産期母子医療センター産科外来は見学後 2 例ずつ経腹超音波検査を経験できた。臨地の産科医師や助産師、教員の指導を受けながら、超音波診断装置を用いた妊婦健康診査 4~11 例と個別に応じた保健指導の実際 4~9 例程実施した。新型コロナウイルス感染対策や受診妊婦数の減少に伴い、あおい産婦人科と別府医療センターで実習した学生の経腹超音波検査の経験数がやや少なかった。2 月 20 日から堀永産婦人科医院、あおい産婦人科、アンジェリッククリニック浦田の 3 施設で、6~7 月に出産予定の妊婦を継続事例として受持ち妊婦健診日に実習した。継続事例の経験を含めて概ね実習目標は達成された。

NICU 課題探究実習

1 年次後期

樋口幸、梅野貴恵

今年度は COVID-19 の感染予防対策のため、体調、入室人数と時間の管理を徹底し、大分県立病院総合周産期母子医療センターで NICU 課題探究実習を実施した。2 週間の実習期間のうち、

臨地実習は3日間であったが、ひとりの学生に1名ずつ対象児を受け持たせていただき、ハイリスク新生児の生理的特徴を理解し子宮外生活適応の過程をアセスメントした。また、個別に応じた看護を展開し、母子分離された母親とその家族への親子関係成立のための看護計画を立案した。ハイリスク児の看護ケア技術は、事前に学内でNICU看護の特徴やハイリスク新生児への看護援助の視点を学習した後、臨地実習で実際に見学した。その後、学内で受け持ち児の看護計画に基づく新生児の看護実践について、高機能シミュレーターやSimPadを用いてトレーニングをグループで実施し、臨地での学びを共有した。臨地で見学できなかった母子分離された両親への愛着形成促進へのケア、家族とのつながりや退院後の生活を考えた育児環境の調整や他部門との連携については、指導者から臨床講義をして頂いた。学生は、ケアの視点や具体的な方法、助産師として妊娠期から果たすべき役割について活発にディスカッションし学ぶことができた。次年度も状況を鑑みながらの実習運営となるが、学生の教育効果を高めるため臨床との連携体制を強化していく。

地域母子保健演習

2年次後期

梅野貴恵、佐藤由美子、樋口幸、姫野綾、渡邊しおり

助産師として地域における母子保健ニーズに対応し、質の高い母子保健活動を展開する能力を養うための演習とした。大分市の母子保健事業の概要と母子保健の水準等を自己学習したのち、全員が1歳6か月児健康診査に参加し、大分市の担当保健師とディスカッションを行い、母子保健環境の特性や、健診状況から母親と子どもの関係性を理解し、問題解決へ向けた保健師の対応や多職種、他機関との連携を理解した。堀永産婦人科医院で実習した学生は施設での3か月児健康診査に参加し、継続事例の母子の状態を把握した。他2施設の学生は施設の許可を得て4か月児健康診査後の時期に継続事例に電話訪問を行った。実践マタニティ診断の産後期の診断名等を参考に、情報収集計画を立案し実施した。4か月健診後の受け持ち母子の様子を対面や電話での聞き取りから、家族や地域の人に支えられ成長している母子を理解し、助産師として育児期までの支援を認識する機会となった。次年度は新カリキュラムの学生で、4か月頃の継続事例の家庭訪問を予定しているため、感染状況を注視しながら準備をすすめていく。

広域看護学概論 I

1年次

甲斐優子、小野治子、加藤典子、藤本優子、佐藤愛、川崎涼子、藤内修二、村嶋幸代

公衆衛生および公衆衛生看護の歴史、基本的理念、対象を理解することを目的としている。具体的には、地域社会におけるヘルスプロモーションおよびプライマリヘルスケアの概念やそのアプローチ方法についての講義を行った。さらに、個人・家族・集団・地域社会の視点、家庭・職場・学校・国際社会の視点、全ての健康レベルやライフステージの視点という広域的な公衆衛生看護活

動の意義、目的、機能、役割を探究した。講義では、非常勤講師を招き、最新の情報を学生へ提供しつつ、複雑化する行政機関における公衆衛生看護の役割・機能を具体的に理解できるように実施した。

広域看護学概論Ⅱ

1年次

甲斐優子、小野治子、藤本優子、佐藤愛

公衆衛生看護活動で活用可能な理論やモデルについて理解することを目的としている。各学生が理論やモデルなどについてプレゼンテーション、ディスカッションを行い、理論の解釈だけでなく、実践での活用方法について探求した。学生の発表では、学生間での活発な意見交換ができ、来年度も同様の形式を予定している。

広域看護展開特論

1年次

甲斐優子、小野治子、藤本優子、佐藤愛、甲斐香代子、市原恭子、佐藤由美子

健康課題に対する保健師の支援技術についての基本的理論を修得することを目的としている。講義は、現役の保健師による講義を取り入れ、ライフサイクルや健康レベルの異なる人々への支援の実際と保健師の役割・機能を理解できるよう講義を実施した。また、学生間の発表や討議の機会をもち、個人を対象とした支援から地域社会全体を対象とした支援までの保健師活動方法について意見交換を行い、実践的な活動方法について探求した。

広域看護管理特論

1年次

甲斐優子、小野治子、佐藤愛、藤本優子

公衆衛生看護管理の概念と基本理論から管理的立場の保健師の役割・機能を理解するとともに、チームの一員としてチームの生産性向上に貢献する役割を理解することを目的としている。講義は、理論と実際を結びけるように、具体的実践例の考察やテーマに基づいた討議、学生間の発表などを取り入れた。また、現役の中堅保健師や統括保健師に活動の実際を講義してもらい、現実的な活動実態が学べるようにした。公衆衛生看護の管理的機能と自らがめざす保健師活動との関係について探求した。

産業保健特論

1 年次後期

小野治子、高波利恵、吉田愛

産業分野における保健活動のあり方を修得することを目的としている。労働環境および作業上の諸条件から発生しやすい疾病・障害の防止を含めた健康管理、メンタルヘルス対策、健康的な職場づくりについての講義を実施した。さらに、企業で働く保健師より、職域における保健師活動の現状と課題について実際の活動事例を示しながらディスカッションを含めた講義を行った。次年度に行われる広域看護活動展開実習（産業分野）と連動するよう講義内容を構成した。

学校保健特論

2 年次

小野治子

学校保健安全法に基づく学校保健のあり方と、学校保健を担当する専門職、特に養護教諭の役割と機能に理解することを目的としている。現在の学校が抱えている健康課題や地域の保健師との連携の取り方など実際の状況について各学生が調べ発表した。さらに最新の文献を用い、変化する子どもの健康問題に対応するための地域保健の連携や組織的な解決手段についてディスカッションを通じて考えを深めた。また、特別支援学校の見学を実施し、学校保健の活動と地域における保健活動との実際の連携について考察した。次年度も支援学校の見学を取り入れる予定である。

健康危機管理特論

1 年次後期

甲斐優子、小野治子、藤本優子、佐藤愛、玉井文洋、本山秀樹

地域社会における健康危機管理（災害保健活動・感染症保健活動を含む）に関する基本的な考え方の理解を深めることができるよう、実際の事例を用いて、事例の検討、学生の発表やディスカッションを取り入れた。また、県健康危機管理の経験者や大分 DMAT で活躍している講師による講義を通して、大規模災害発生時等の実際の対応について実践へと応用できるよう講義内容を構成した。

健康増進技術演習

1 年次

関根剛、稲垣敦、安部眞佐子

3名の教員により、年間を通じて、運動指導6回、栄養指導7回、心理相談8回の合計21回の講義をZoomによる遠隔講義により行った。講義内容は教員により重複しない領域であり、それぞれが独立した形で講義・評価を行い、3名の評価を総合して評価としている。受講生は8名と少数であったため、ビデオでの対面や随時の質疑、テーマごとの発表など対面に準ずる環境での講義が可能であった。昨年度は、実際の実験器具や検査用紙などを画像により示すことしかできなかったため、今年度は昨年度の課題にもとづき、大学院生室に心理検査を置いて、実際に手に取ってみる機会を作ることが出来た。次年度は対面に戻った場合も自由に手に取って見る時間を確保するために同様の方法をとるなどの工夫が必要と思われる。

広域看護アセスメント学演習

1 年次前期

小野治子、甲斐優子、加藤典子、藤本優子、佐藤愛、村嶋幸代、藤野里紗

地域看護診断を用いて地域社会の健康問題の抽出する方法を修得することを目的としている。具体的には、地域の既存資料や地区視診を通じて、地域の抱える健康課題、地域住民の健康課題を抽出する演習を行った。また、大分県国民健康保険団体連合会の担当者により、保健師として活用できる国民健康保険データとKDBシステムの理解を深める講義・演習を実施した。さらに、演習では「地域マネジメント実習」を行う対象の市の二次データを用いて地域看護診断を行い、2回の中間報告で学生や教員との討議を重ね、活発な意見交換を行い、実習科目との連動を図った。

健康教育特論

1 年次前期

小野治子、甲斐優子、藤本優子、佐藤愛、加藤典子

個人と集団が自らの健康の維持増進のための主体的な取り組みが行えるための支援方法についての必要な知識と技術を修得することを目的とした。健康行動の理論の活用した個人・集団・組織に教育的な働きかけと保健師の地区活動の展開方法について学びを深めた。また、家庭訪問指導や集団に対する健康教育では、一人で企画、指導案の立案、実施のデモンストレーションを行い、学生と教員間で討議し、さらに修正していくという過程を踏むことで実践力の向上に努めた。

健康リスクアセスメント演習

1 年次後期

小野治子、甲斐優子、藤本優子、佐藤愛

個人、家族、集団が抱える潜在的な健康問題（リスク）を的確に予測し、保健師としてのリスクマネジメント、支援のあり方を修得することを目的としている。演習は、結核事例や感染症事例を用いて課題を設定し、学生は各事例の課題について発表、討議を行った。事例の課題ごとに教員が助言を行い、演習を重ねることで、対象者または対象集団がリスクを予測し、自らリスクマネジメントができる支援方策を深めることができていた。

疫学特論

1 年次前期

佐伯圭一郎

人間集団における健康事象の頻度分布とそれに影響を与える多様な因子を分析するために不可欠な疫学の理論と実践の手法を教授した。テキストの講読とディスカッション、演習、確認のための小テストを組み合わせることで学習の定着をはかった。さらに保健師としての活動で特に必要度の高い調査手法とその具体例について理解を深めた。今年度はこの科目の演習をおこなう「疫学・保健統計学演習」と開講時期の間が空いたため、運用がやや順調でない点もあった。来年度も同様の時間割で進行する予定であるため、今後は今以上に演習部分を講義と一体化して、学習を深め、知識の定着をはかりたい。

保健統計学

1 年次前期

佐伯圭一郎、岡田悠希

健康情報の調査法とその概要、ならびに分析法について、その発生源から取り扱い、解釈に至るまで体系的に扱った。また、それら健康情報を適切に整理・分析するための生物統計学の手法を演習を交え教授した。別科目である「疫学」における統計手法で重複する部分については、両科目のテキストを補足する形で演習を十分に行って、理解を深めた。

疫学・保健統計学演習

1 年次後期

佐伯圭一郎、品川佳満、岡田悠希

疫学特論および保健統計学と連続した内容として、習得した知識を活用して実践する能力を身につけることを目的として演習を行った。また、保健師業務に必須である ICT 技術を身につけ、情報収集・分析・発信に活用できる能力を養った。今年度は、対応する講義科目と開講時期が間隔が空いたため、講義部分の復習となる内容が増加し、演習自体の時間が減るという進行上の影響があった。来年度も同様の時間割となるため、関連する講義科目と演習部分と講義部分の一体化を進める形で調整を行う予定である。

保健医療福祉行政特論

1 年次前期

平野互

新カリキュラムで、従来の「社会保障システム特論」と「保健医療福祉政策特論」を合併し集約した新科目。

限られた講義数で、社会保障制度の理念と構造の理解に加え、保健師の活動に必要な政策形成・企画立案の能力を涵養するために、法と社会制度、厚生行政の構造、社会保障政策・公衆衛生政策の歴史的展開と課題、医療制度と社会保険、児童・高齢者・障がい者に関する保健・福祉・介護のシステムの現状と課題を論じたほか、事業評価、障がい概念の転換と自立支援の意義について講義を行った。

未だコロナ禍の中にあっただが、少人数のため、対面で授業を行った。成績評価は、1) 経済格差と貧困層の拡大に伴う健康格差、2) 少子化社会における子どもの権利保障と子育て支援、3) 高齢者の生存権保障、4) 障がい者の生存権保障の4課題から一つを選択し、現状の問題点の整理と問題解決のための具体的政策や社会資源の考察を求めるレポートにより行った。レポートは、各人の関心事項について論考することとしたこともあり、社会保障の現状理解に資することができたものと思われる。

疾病予防学特論

1 年次

池邊淑子、藤内修二、三浦源太

解剖・生理学、疾病病態学、フィジカルアセスメント、臨床検査法等、診断治療学などの医学的な知識の修得し、地域に生活する個人、家族、集団、社会の健康状態を的確に判断・評価する能力を身につけることを目的としている。特に、保健師として、疾病予防のために医学的エビデンスに

基づいた健康教育・健康相談の実践活動ができるようにするために、特定健診の検査結果を解釈するために必要な知識、および実践能力を取得できるように、医師の講義を取り入れ構成している。2年次に行われる広域看護活動展開実習（産業分野）での健康相談の実施への連動を図った。

実践薬理学特論

1年次前期

吉田成一

生体内に投与された薬物の生体への影響（薬力学）と、生体内に入った薬物の生体処理法（薬物動態学）を理解し、薬害と有害作用、処方概要と投薬設計、治療効果と副作用についての基礎知識に関する講義を行った。特に生活習慣病を中心とした疾患（糖尿病、高脂血症、高血圧症など）に対する主な治療薬の作用機序、副作用、注意事項など、保健指導に活用できる実践薬理学の基礎知識が習得できるような講義内容とした。また、医薬品の治療効果に関する論文データの見方、意味を評価できるような講義も行った。

本年度は受講者が8名であったが、受講者の学修状況に差は認められず、学修修得状況も高かった。次年度以降も継続した状況としたい。

薬剤マネジメント学特論

1年次

小野治子、井上真

地域で治療や服薬指導に関わる看護職として、必要な薬剤コンプライアンスの基礎知識、多剤投薬、国民医療費の高騰など医薬品に関する諸問題について理解し、その対策について考えることを目的としている。具体的な理解の定着を図るために講義ごとの前回の小テストと振り返りおこなった。来年度も同様に小テストを取り入れていきたい。

環境保健学特論

1年次

小嶋光明

健康と環境（物理的要因（電離放射線、電磁界）、化学的要因（化学物質）、生物的要因（ウイルス））との関係について、基礎を整理した講義を行った。また、PM2.5と呼吸器疾患、COVID-19の症状、mRNAワクチンの副反応、生活習慣と心疾患、自然放射線量に関する最新の学術論文を学生に割り当てて討論を行った。そして、問題の多面性（自然科学的側面、統計学的側面、社会的側面など）を学生が理解できるように努めた。

地域生活支援実習

1 年次

甲斐優子、小野治子、加藤典子、藤本優子、佐藤愛、村嶋幸代

対象者と家族を継続的に訪問し、家族が支援の単位であること、地域で必要とする支援について考えることを目的としている。実習では、県内 8 か所の市町において保健師に同行あるいは院生単独で訪問を実施した。6 月から 3 月までの 10 か月間に合計 4 回～6 回の訪問を行い、対象者とその家族の継時的な変化を捉え、必要な支援や保健師の訪問の意義について理解を深めた。実習前、実習中にはカンファレンスを行い、実習目標の検討、方法の共通理解と評価の共有を行うなどして連携をとった。実習終了後の 2 月 2 日に実習成果報告会を行い、実習地の実習指導者の助言を受け、各学生ともに今後の課題を明確にできた。

健康教育演習

1 年次前期

小野治子、甲斐優子、加藤典子、藤本優子、佐藤愛

健康行動理論に基づき健康教育の技術と展開方法を修得することを目的としている。地域マネジメント実習 I・II と連動させ、実習地の健康課題より対象者と健康教育のテーマを選定し、健康教育の企画案、指導案、媒体作り、実施のデモンストレーションを実施した。企画案、指導案、デモンストレーションと 3 回の発表を行い、学生と教員間で討議し、さらに修正していくという過程を踏むことで学習を深めた。

広域看護実践演習 I

1 年次

小野治子、甲斐優子、加藤典子、藤本優子、佐藤愛

個人・家族を対象とした公衆衛生看護活動について家庭訪問の計画立案・アセスメント・評価の演習を実施した。また、実際の地域生活支援実習を通じて、事例報告や家庭訪問のまとめを行い、学生間で共有する機会を持った。

広域看護実践演習Ⅱ

1年次

小野治子、甲斐優子、加藤典子、藤本優子、佐藤愛

地域看護診断をもとに地域マネジメント実習Ⅰ・Ⅱで実施した内容について、公衆衛生看護活動に必要な理論に基づき整理・統合する演習を実施した。また、実習を通じてのまとめを行い、学生間で共有する機会を持った。

広域看護実践演習Ⅲ

1年次

小野治子、甲斐優子、加藤典子、藤本優子、佐藤愛

組織を対象とした公衆衛生看護活動について、理論、政策、保険医療福祉システムの変遷を理解し、今後必要となる社会資源や健康政策を考察していく演習を実施した。また、広域看護活動展開実習を通じてのまとめを行い、学生間で共有する機会を持った。

地域マネジメント実習Ⅰ

1年次前期

甲斐優子、小野治子、加藤典子、藤本優子、佐藤愛、村嶋幸代

地域および集団の健康課題を特定できる能力を修得することを目的として、広域看護アセスメント学演習、地域マネジメント実習Ⅱと連動させ実施している。本年度は日出町、国東市、豊後高田市、九重町、竹田市、臼杵市、佐伯市、由布市において7月の1週間の実習を行い、9月に実施する地域マネジメント実習Ⅱへと向けて地域の健康課題の検討を行った。

地域マネジメント実習Ⅱ

1年次

甲斐優子、小野治子、加藤典子、藤本優子、佐藤愛、村嶋幸代

地域および集団の健康課題を特定できる能力を修得することを目的として、地域マネジメント実習Ⅰ、広域看護アセスメント学演習や健康教育特論の演習や発表と連動し実習が効果的に行えるように組み立てた。実習は日出町、国東市、豊後高田市、九重町、臼杵市、佐伯市、由布市において実習指導保健師の指導を受けながら9月の3週間の実習を実施した。実習終了後、9月29日に実習施設だけでなく、大分県国民健康保険団体連合会、全国健康保険協会大分支部、大分県福祉保健部医療政策課の方々の参加を得て、実習成果報告会をオンラインにて開催し、実習成果の共有

とともに各市町の健康課題についての意見交換を行った。

広域看護活動展開実習 I

1 年次後期

甲斐優子、小野治子、加藤典子、藤本優子、佐藤愛、村嶋幸代

個人のみならず地域社会全体の QOL を向上させる活動について研究的視点を持ちながら実行できる能力を養うことを目的として、東部保健所、東部保健所国東保健部、中部保健所、中部保健所由布保健部、南部保健所、西部保健所、北部保健所、大分市保健所の 8 ヶ所において 3 週間実習を行った。実習指導保健師の指導を受けながら実習地で各学生が考えた実習テーマをもとに実習に取り組んだ。12 月 15 日にオンラインにて、実習成果報告会を開催し、実習指導保健師だけでなく、国保連合会、協会けんぽ等からも参加を得て実習成果を共有した。

広域看護活動研究実習

1 年次後期、2 年次前期

甲斐優子、小野治子、加藤典子、藤本優子、佐藤愛、村嶋幸代

本年度は、2 年次前期に竹田市市地域包括支援センターにおいて地域包括支援センターの機能と保健師の役割について学ぶ実習を行った。また、県内の企業 4 か所（大分キャノンマテリアル株式会社、大分キャノン株式会社、株式会社大分銀行、大分労働衛生管理センター）で職域における産業保健実習を行った。

NP 論

1 年次

藤内美保、石田佳代子、加藤典子、草野淳子、田村委子、堀裕子、光根美保、村嶋幸代

大学院 NP コースの最初の導入科目として、NP とは何か、プライマリ NP とは何かなどの NP の理解を深めるための基本的な知識やあり方について教授した。また本学が日本で初めて NP 教育を開始したことから NP コース開設までの経緯や NP の必要性、度重なる国際会議を含めてどのような活動をしてきたのかなどを紹介し、本学で NP を学ぶ自覚と責任をもつ機会とした。また NP 修了生による講義により、一層 NP の活動や目指すものが具体化し、視野を広げる学習ができた。科目後半では、特定行為の手順書や特定行為に関する厚労省の考え方などを教授した。また高度実践看護師とは何かを学生自らが探究し、ディスカッションすることで能動的な学習姿勢が見られ、全学生 10 名が学習目標に到達した。COVID-19 の影響もあったが、対面とオンライン授業を組み合わせ、学生の交流もしつつ NP の理解を深めることができた。

次年度は、新たなカリキュラム改正となり、NP の理解に特化した教育内容とする。

NP 実習

1 年次

藤内美保、大島操、甲斐博美、堀裕子、森加苗愛、吉村幸永

大学院 NP コースの初期の段階において、NP とは何か、プライマリ NP とは何かを実践的レベルでの理解を深めることを目的とした実習である。COVID-19 の影響のため、実習受け入れが困難なため、NP 修了生に同行する臨地実習は 1 日とし、診療看護師を雇用した経験のある看護管理者やプライマリ領域で活動している NP 修了生の講義、また離島で診療看護師としての活動を開拓した本学修了生の講義、地域密着型病院で病院や地域で診療看護師としてケアとキュアを統合した活動の講義、また自分がどのような NP としての活動するのか、そのための課題と対策など明確にするなどディスカッションなどにより、学内演習に切り替えた。診療看護師の協力に基づく同行実習では、大分岡病院、厚生連鶴見病院、大東よつば病院、やすらぎ苑で実施した。別府医療センターは同行実習に変えて 3 名の NP 修了生の講話とした。看護管理者や診療看護師の講義や学生同士のディスカッションにより、非常に深まった議論となり。最終レポートも深まりが確認できた。

次年度は、カリキュラム改正により、プライマリ NP 演習とする。演習科目であるが診療看護師の同行実習は引き続き行うが、プライマリ領域の診療看護師に幅広く協力を依頼できるため、広がりのある学びができると考えている。

老年 NP 特論

1 年次後期

森加苗愛、藤内美保、小野美喜、甲斐博美、堀裕子

老年 NP 特論では、①「自己の看護実践を看護理論を踏まえて意味づけて考察し、より質の高い高齢者看護を探究する。」および②「自己の NP としての活動戦略をたてる。」と大きく 2 つの目標の元、講義を展開した。①では、「良い看護ができた」と評価した事例」を選択し、何故良い看護と判断したかを看護理論に基づき振り返った。看護理論を学ぶのが久し振りである学生もおり、看護理論の意義、自己の思考過程・看護実践を意味づけ振り返る良い学びとなったといえる。②では、自己の施設を分析する力を養うために、実際に SWOT 分析を行った。また、夏休みを活用して看護部長と面談して卒業後の活動を共に検討するなど、本講義を通じて、修了後の自己の NP 像を培う機会になったと考える。

次年度も本講義を通じて自己の NP としての看護観の発展および修了後の活動戦略につながる講義を行っていく。

老年疾病特論

1 年次後期

濱中良志、一万田正彦、財前博文、小坂聡太郎、佐分利能生、加隈哲也、塩月成則、木村成志

NP としてプライマリーケアを提供するために、老年期によくみられる慢性期の疾病について病態生理学との関連性を学び、その診断・処方（薬・検査）・治療について知識を教授した。

老年臨床薬理学特論

1 年次後期

吉田成一、伊東弘樹、田中遼大

診断後、医薬品を処方するにあたり必要となる基礎的な薬理学総論および各種疾患の治療に用いる医薬品に関し、作用、副作用、相互作用等の面を重点的に身につけるための講義を行った。医薬品の商品名と一般名の双方を理解できるよう心がけ、講義を行った。

一度提示した処方や注意点については理解できるが、現象を一般化して、多様な条件で判断することに到達しておらず、臨床薬理学という視点での学習内容の習得状況は不十分である受講者が散見された。

履修者（再受験該当者を含む）9名全員が単位を取得した。単位取得率で評価すると、一定の学修修得状況にあるといえるが、本質的理解が進んでいない現状が過年度以前より継続している状況の改善が必須である。特に、講義時間中に実施している確認問題に類似した正誤問題の正答率はほぼ 100%であるが、記述問題等になると正答率が下がる現状は、理解ではなく、記憶力で対応していると考えられる。このような状況に対応するため、次年度から臨床薬理学の学修に重要な基礎的な範囲を別科目として設定し、理解度の向上に努める。

老年診察診断学特論

1 年次後期

濱中良志、永瀬公明、加隈哲也、糸永一朗、安藤優、中村雄介、中村朋子、佐分利能生、溝口博本、宮崎美樹、西水翔子、藤谷直明

プライマリーケアから臨床医学の各専門領域にわたって、専門医師による講義、演習を行った。今年度は、病態生理学との関連性を重視して教授した。

老年アセスメント学演習

2 年次前期

甲斐博美、立川洋一、宮川ミカ、光根美保、濱中良志、藤内美保、石田佳代子

老年期の対象者への包括的健康アセスメント及び看護的治療マネジメントを行うための専門的知識と技術を修得するために、シミュレーショントレーニングを行うことを目的に演習を展開し5名が履修した。実習につながるように、臨床推論を記述していきながら思考を整理できるよう、慢性疾患や症状を伴う高齢者（成人を含む）の事例を通して、情報を整理しアセスメントを行い、必要な検査の選択と結果の解釈、診断、ケアプランの作成を行った。事例のプレゼンテーションを通じ、基礎知識や求められる能力の確認を行い、学生間での意見交換や医師や NP からの助言で、アセスメント能力の強化やマネジメントに必要な能力の促進ができた。実習指導者でもある医師や NP とのディスカッションで科目内容の強化が図れた。同時期に履修する老年薬理学演習とともにアセスメント能力を強化できる科目となった。今後も、同時期の履修科目との相乗効果を高めるような演習展開を計画する。

老年薬理学演習

2 年次前期

甲斐博美、吉田成一、塩月成則、大仲將美

老年領域における NP の役割を理解し、必要とされる薬理学に関する高度看護実践能力を事例によるシミュレーションを通じて学んだ。症例を通じて、病態の理解や検査や処方判断、治療マネジメントも含めた薬理学の習得をディスカッションによる演習で強化した。NP が活動する臨床に多く見られる症候や事例を組み込み、演習の質を上げた。特定行為に係る内容も多く含み、同時に履修する老年アセスメント学演習との相乗効果で学生の到達度をあげている。今後も、臨床推論の学びと重ねて演習課題をプランしていく。

老年実践演習

2 年次前期

藤内美保、甲斐博美、草野淳子、足立綾、堀裕子、古川雅英、佐藤博、迫秀則、竹内山水、山本真、平井健一、田村委子、藤谷悦子、

対象者への看護的治療マネジメントを行うための専門的知識と技術を修得するために、シミュレーショントレーニングを行うことを目的に演習を展開した。

NP に必要な医療行為を習得するために専門医の指導の元で演習を実施し NP 実習につながるようにした。さらにシミュレーターを用いて創傷処置、胃ろうカテーテルの交換など複数の治療技術について個々の病態をふまえて安全・確実に実施できるようにした。特定行為の演習に関して

は、自律的な自己学習（演習）を支援した。次年度は、本学の特定行為数の変更に適した演習の組み立てをする。

老年 NP 実習 I

2 年次後期

森加苗愛、藤内美保、石田佳代子、甲斐博美、大島操

今年度は 5 名の学生が老年 NP 実習 I に臨んだ。学生は 4 病院施設において 8 週間の実習を行った。施設によっては、途中で COVID-19 の影響により実習の自粛期間を設けたこともあったが、施設の配慮により、その間も施設内で診療録により自己学習を行うことができた。老年 NP 実習 I では病院実習で基本的な診療を学び、特定行為のみならず、判断やアセスメント、臨床推論の能力を強化することを目標に実習を行った。学内カンファレンスを 2 週間に 1 度設け、臨地実習の事例や特定行為の実践を共有し意見交換を行い、各自実習内容を振り返った。ケースレポートや特定行為など各自で立案した計画に沿い、ほぼ目標を達成できた。

来年度も、特定行為と併せ、判断やアセスメント、臨床推論の能力を強化することを目標に実習を行うことができるよう支援していく。

老年 NP 実習 II

2 年次後期

森加苗愛、甲斐博美、大島操

老年 NP 実習 II では、4 週間の診療所実習を行った。外来では初期診療・慢性疾患の診療に関して、また指導医の訪問診療・往診に同行し、在宅で継続診療について学ぶことを目標に実習を行った。訪問診療などは感染対策を講じて同行し、医師からの指導のもとで医療面接や身体診察などを実施し、在宅での継続療養中の患者に対する包括的アセスメントを学ぶことができた。また、気管内チューブの交換や補液、インスリン注射の調整など特定行為も経験することができた。

来年度も、特定行為と併せ、診療所における判断やアセスメント、臨床推論の能力を強化することを目標に実習を行うことができるよう支援していく。

老年 NP 実習 III

2 年次後期

森加苗愛、石田佳代子、甲斐博美、大島操

老年 NP 実習 III では、入所している高齢者およびデイケアに参加する在宅高齢者の包括的アセスメント、看護的治療マネジメント（特定行為を含む）を実施することと、急変を含めた健康状態

の変化を早期発見し、医療的処置の必要性判断と実施をすることを目標として実習を行った。担当となる対象者に対しての看護的治療マネジメント、医療面接や身体診察を通じて包括的アセスメント能力を強化し、担当の高齢者の特徴を把握して看護を展開することができていた。

来年度も特定行為と併せ、高齢者施設における判断やアセスメント、臨床推論の能力を強化し、結果、より質の高い高齢者看護を探究できる実習を行うことができるよう支援していく。

老年 NP 探究セミナー

2 年次

藤内美保、大島操、甲斐博美、堀裕子、森加苗愛、吉村幸永

大学院 NP コースが NP 実習 I の病院での実習を修了した中間段階で、1 週間集中演習として実施した。NP コース学生 10 名が履修した。ケースレポート作成や、診療所や老人保健施設で展開される在宅医療の学習をする。学生個々の NP 実習 I の評価を教員と確認し合い、フィードバックして次の老年 NP 実習 II、III に繋げ、次の実習の準備性が整い、本科目の学習目標は達成できた。

次年度は、全ての NP 実習が修了した段階で、全体としての NP 実習のフィードバックをする。形成的評価は実習中の 2 週間毎の帰学日やカンファレンスで行う計画である。

小児 NP 特論

1 年次

草野淳子、足立綾、大末美代子、大津佐知江、黒木雪江、後藤愛、佐々木真理子、管谷愛美、菅原真由美、松本佳代

講義は科学的根拠に基づいたケアを展開できる実践能力を高めるために、小児の成長発達と発達課題を基本的・理論的に理解し、NP（診療看護師）としての看護実践する探求的視座を持つことを目的として行った。講師は大学教員の他、臨床実践の観点を得るために糖尿病認定看護師、訪問看護認定管理者、小児 NP（診療看護師）などが行った。

評価はレポート（50%）・プレゼンテーション（30%）・討論の態度（20%）であった。学生の発表の機会を多くすることで、積極的に取り組めた。来年度は本時間が老年コースとカリキュラムが一体化するため再構築する。

小児疾病特論

1年次

草野淳子、井原健二、糸永知代、井上真紀、江口春彦、小栗沙織、木村裕香、久我修二、清田晃生、小林修、末延聡一、関口和人、長濱明日香、原卓也、福永拙、別府幹庸、保科隆之、前田知己、足立綾、橋本志乃

小児に適切なプライマリケアを提供するために、小児期によくみられる疾病について学び、その診断・治療（検査・処方）について理解することを目的に行った。地域の医療機関で小児の診察を行っている各専門領域の医師がオムニバス形式で講義した。評価は筆記試験（100%）で行った。各時間については専門性が高い医師の講義であり、小児 NP に必要な知識を学ぶことができた。来年度はカリキュラムが変更するため、それを考慮したい。

小児臨床薬理学特論

1年次

草野淳子、松本康弘、吉田成一、足立綾、橋本志乃

前半は医薬品についての知識に必要な薬理学の概要や薬物動態など基礎的な薬理学総論を学んだ。後半は小児疾患に対する薬物療法を理解し、小児の薬用量、服薬指導などの知識を学んだ。特に小児に多い発熱、下痢や腹痛、アレルギー等の疾患の治療に用いる医薬品の作用、副作用、相互作用などを理解し、小児の特殊性に焦点を当てた内容であった。筆記試験(100%)にて評価した。来年度はカリキュラムが変更となる。

小児診察診断学

1年次

草野淳子、井原健二、江口春彦、久我修二、小林修、末延聡一、関口和人、長濱明日香、原卓也、別府幹庸、前田知己、足立綾、橋本志乃

小児の臨床における診察や診断の臨床推論能力を身につけるために、小児の全身的な臓器・器官ごとに必須の知識や技術について理解することを目的に行った。地域の医療機関で小児の診察を行っている小児科医がオムニバス形式で講義をした。評価は筆記試験(100%)を行った。来年度はカリキュラムが変更する予定である。

小児アセスメント学演習

2年次

草野淳子、原卓也、足立綾、橋本志乃

小児期の対象者への包括的健康アセスメント及び看護的治療マネジメントを行うための専門的知識と技術を修得するために、シュミレーショントレーニングを行うことを目的に演習を展開した。臨床推論の考え方と記載方法を学び、次に紙上事例について4事例を展開した。学生は4事例についてプレゼンテーションを行い、それを踏まえて医師や教員が指導をした。この演習を行うことで包括的健康アセスメント能力を身に付けることができた。評価はレポート(40%)・プレゼンテーション(40%)・意見交換(20%)で行った。来年度はカリキュラム変更に伴い老年 NP コースと一体化するため、再検討する。

小児薬理学演習

2年次

草野淳子、松本康弘、足立綾、橋本志乃

小児領域における必要とされる薬理学に関する高度実践能力を獲得するために事例によるシュミレーションを通して学んだ。症例を通じて、病態の理解や処方判断を演習で強化した。知識修得と演習を行うことにより学生の理解は深まった。評価は筆記試験(50%)・小テスト(50%)であった。学生の理解度はディスカッションで確認した。来年度も同様の内容で実施する。

小児実践演習

2年次

藤内美保、足立綾、大島操、甲斐博美、草野淳子、迫秀則、佐藤博、竹内山水、谷山尚子、田村委子、藤谷悦子、平井健一、古川雅英、堀裕子、山本真、吉村幸永、

各分野のスペシャリストの医師による集中演習によって演習を行った。シュミレーターや実技を多用し、実際に近い形での実習に取り組めた。知識は Web プログラムを用いて確認した。評価は演習準備・参加態度(30%)・技術習得度、OSCE 試験結果(70%)で実施した。すべての演習終了後に学外の OSCE 試験官の下、試験を行った。来年度はカリキュラムの改定により、内容が変更する。

小児 NP 実習 I

2 年次

草野淳子、黒木雪絵、原卓也、足立綾、橋本志乃

プライマリ診療を行う場で実践力を身に付けることを目的に小児 NP 実習を展開した。総合病院 8 週間の実習とし、小児病棟や小児外来にて臨床推論能力を養うために、医師の診療の場に参加した。具体的には医師の回診に同行して、診察技術や臨床推論力を身につけ、医師よりの指導を受けた。適宜、医師から実習記録の指導を受け、毎日教員に提出し、学生の実習目的の修得状況を確認した。評価は毎日の実習記録と 8 事例の事例レポート(100%)とした。来年度も同様の指導方法と内容にする。

小児 NP 実習 II

2 年次

草野淳子、福永拙、後藤愛、足立綾、橋本志乃

医療型障害児入所施設で実践力を身に付けることを目的に小児 NP 実習を展開した。施設 4 週間の実習とし、小児病棟や小児外来にて臨床推論能力を養うために、医師の診療の場に参加した。具体的には医師の回診に同行して、診察技術や臨床推論力を身に付けるため、医師よりの指導を受けた。適宜、医師の指導を受け、毎日の実習記録を教員に提出し、目標の到達度を確認した。評価は毎日の実習記録と 4 事例の事例レポート(100%)とした。来年度も同様の指導方法と内容にする。

小児 NP 実習 III

2 年次

草野淳子、足立綾

プライマリ診療を行う場で実践力を身に付けることを目的に小児 NP 実習 III を展開した。診療所 2 週間の実習とし、小児外来にて臨床推論能力を養うために、医師の診療の場に参加した。具体的には医師の診察に陪席・往診に同行して、診察技術や臨床推論力を身に付けるため、医師よりの指導を受けた。毎日の実習記録を教員に提出し、目標の到達度を確認した。評価は毎日の実習記録と 4 事例の事例レポート(100%)とした。来年度も同様の指導方法と内容にする。

小児 NP 探求セミナー

2 年次

草野淳子、足立綾、橋本志乃

小児 NP 実習 I・II・III が終了後に、実習での包括的健康アセスメント、治療的看護アセスメントの総括として5日間で1事例のまとめを行った。パワーポイントに臨床推論の過程をまとめ、他学生や教員の前で発表し意見交換した。評価は事例のレポート(80%)・意見交換の活発性と態度(20%)とした。次年度はカリキュラムが改定するため、老年コースと検討する。

生体科学特論

1 年次前期

濱中良志、安部眞佐子、岩崎香子

今年度はコロナ禍のため、Zoom を駆使して、各臓器における解剖学・生理学・生化学の復習をした後、関連する重要疾患の病態生理から各臓器の正常の機能を教授した。今年度から動画配信を行い事前学習に役立てた。

病理学特論

1 年次

定金香里

シラバスに即して、疾病の成り立ちや修復過程について、総論および器官系統別に各論の講義を行った。講義のスライド資料の他、講義内容を簡潔にまとめた配付資料、視覚資料も配付した。対面講義の他、Zoom でのライブ講義、オンデマンド講義など、受講生の受講状況に合わせたプラットフォームを提供した。

講義については学生からわかりやすい、スライドが見やすいなどの評価を得た。一方で時間配分が計画通りにいかなかった。学生の質問や試験の解答などから、よりわかりやすい説明や資料作りが必要であることがわかった。本講義は本年度で終了であるため、反省点は学部の病理学総論、各論の講義で活かすことができた。

病態生理学特論

1 年次前期

濱中良志、黒川竜樹

今年度はコロナ禍のため、Zoom を駆使して、各臓器別の疾患の成り立ちに関する病態生理学を解剖生理学との関連性を重視して教授した。

フィジカルアセスメント学特論

1 年次

藤内美保、石田佳代子

クライアントの包括的・全身的な身体的健康状態のアセスメント能力を高めることを目的に教授した。適切なスキルのもと観察ポイントや根拠に基づいた判断できる能力を確実に身に付けるため、五感を駆使した問診、視診、触診、打診、聴診の基本技術を基本に理論と実践を学んだ。全身、頭部、頸部、胸部（肺および心血管系）、腹部、直腸、四肢、神経系のフィジカルアセスメントを系統的に実施した。COVID-19 の影響により理論はオンラインで行い、フィジカルイグザミネーションは感染対策を徹底し演習室で対面で行った。学生が担当を決め、事前学習をしてプレゼンテーションとディスカッションをした。演習では異常な状態把握ができるようにフィジカルアセスメントモデルのシミュレーターを使用し、確実なスキルとその根拠を修得できた。試験は筆記試験および OSCE を行った。学生のプレゼンテーション内容はとても深く、ディスカッションも活発であった。昨年度の学生の授業アンケートで、教員の説明時間をもう少し確保してほしいという要望があったので、最小限の時間であるが改善できた。

今年度の授業アンケートの満足度は高かったが、演習では実習室で行う準備や片付けなどに毎回時間がかかるなどの意見があった。次年度は地域在宅・NP 実習室の整備計画があるので、活発な活用ができ、さらなるスキルアップを目指す。

健康増進科学特論

1 年次前期

稲垣敦、安部眞佐子

はじめに科学及び測定と評価について概説し、運動の強さと量の測定、歩行の運動力学的分析、歩行の筋活動と代謝、柔軟性、トレーニングの基本原則、レジスタンストレーニング、行動変容理論、100 歳の科学について講義した。臨床での運動指導のために、ストレッチングとレジスタンストレーニングを取り入れ、身体活動量計測の実習を行った。さらに、次年度は遠隔授業における実習の可能性を検討する。また、栄養学の知識の整理、確認をした。生野菜摂取の利点や弊害についての文献を収集してまとめ、生野菜摂取について考察した。また食事分析として、食事内容の振り

返りを行い、分析の仕方、指導などを実践した。その後、関連する英語文献を読んで解説した。

人間関係学特論

1・2年次

関根剛、吉村匠平

2名の担当教員により、関根8回、吉村7回の合計15回の講義をZoomによる遠隔講義で行った。講義内容はシラバスを基本として、参加学生の希望するテーマを取り入れて構成した。受講生は13名であったため、学生同士の討議、質問と回答、演習などアクティブラーニング要素を多く取り入れて行った。特に少人数であったことから、毎回1回以上の質問を評価の一部に組み入れたところ、的確な質問が数多くあがっており、遠隔講義だからこそ可能な学習者の積極性を引き出す工夫につなげることができた。評価は教員それぞれがレポートを課した結果を総合して評価した。次年度は講義内容にあわせて遠隔と対面の使い分けを効果的に行うことが課題となる。

看護管理学特論

1年次

福田広美、廣田真里、甲斐仁美

看護管理特論では、保健・医療・福祉に関する制度と組織、看護管理の基本となる組織論、人材育成や経営等、マネジメントに関する理論等について講義を行った。学生が看護管理の実践現場において理論を応用しながら改善、改革を進められるよう、講義の内容を踏まえた発表とディスカッションを行った。学生は質の高い看護サービスやマネジメント等について、実践と理論を結び付けながら看護管理に対する理解を深めた。来年度は、学生の看護管理に関する経験を活かしたプレゼンテーションおよびグループディスカッションの機会を授業に組み込み、実践の場に役立つ教育を行う。

看護教育学特論

1・2年次

藤内美保、梅野貴恵、小野治子、桑野紀子、秦さと子、山崎清男、吉村匠平

看護を担う人材育成には、質の高い看護教育学を学ぶ重要性があるという視点から、教育学の理論および技法を理解し、活用・応用できることを目標に教授した。今年度は新たな視点として、海外の教育事情や保健師・助産師の教育、看護職の実習の考え方・あり方についての内容を加え、系統だてて、幅広くグローバルな視野で考えることを目指した。教育学に造詣が深い学部講師1名を招聘し、教育原理や教育方法の基盤についての内容を教授してもらった。

次年度も学生の反応を把握しつつ、内容は継続的に進めていきたい。

看護コンサルテーション論

1・2年次

杉本圭以子、関根剛、竹村陽子、吉村匡平

看護におけるコンサルテーションの概念とプロセスの概略を講義し、現場でのコンサルテーションの実際を県内で活躍するがん看護専門看護師による講義で、より臨床に即したコンサルテーションをイメージできるようにした。組織に対するコンサルテーションの考え方や、コンサルテーションにおいて重要になる心理的アセスメントや効果的な心理教育、心理的援助法について学んだ後、学生が経験した事例を発表し、コンサルテーションのタイプをお互いに検討することで看護コンサルテーションについての理解を深めた。

看護倫理学特論

1・2年次

関根剛、小野美喜、平野互

3名の教員により、関根3回、小野4回、平野7回の計14回の講義、3名の教員のグループに分かれての受講生の事例報告レポートの討論の合計15回の対面と遠隔による講義を行った。評価方法は提出された事例報告レポートへの質疑などを通じて評価した。

看護政策論

1・2年次後期

影山隆之、加藤典子、小山明夫、小池智子、中西三春、立森久照、吉田一生

日本の看護・保健・福祉政策の最新の動向と、政策や事業の評価方法及び評価の実例、及び大分県における看護政策について、オムニバス形式の講義を開講した。狭義の看護政策だけでなく、副知事による日本の保健医療と社会福祉の現状と展望についての講義、対策立案の方法、NPOの政策的関与、研究エビデンスの政策への反映などについて、演習の要素を取り入れて展開した。今年度は広域看護学コースの学生にも履修を呼びかけた。履修者の反応は好評であった。

健康社会科学特論

1・2年次後期

加藤典子

看護の課題を捉えるには社会及び社会システムを理解することが重要である。本特論では、看護制度の課題に関して社会及び社会システムから深掘してその様相を捉えるようにした。また、個々の人間行動や社会構造、社会の抱える課題について解決のためのアプローチ方法について学習した。演習では、それぞれ1課題を設定し、課題を設定、分析、解決方策を社会システムのなかで検討した。

看護科学研究特論

1・2年次前期

小嶋光明、村嶋幸代、藤内美保、影山隆之、佐伯圭一郎、関根剛、桑野紀子、大田えりか

看護科学研究の理論および手法を概観し、研究活動を自ら展開するために必要な事項を論じて実践的能力の育成を行った。実験的研究、質的研究、疫学研究、文献研究を実際に行っている先生方に講義をしてもらうことで研究手法がより理解できるように努めた。また、研究倫理規範意識を向上させるため、APRIN eラーニングを活用した。

保健情報学特論

1・2年次前期

佐伯圭一郎、品川佳満、岡田悠希

保健医療分野において必要とされる情報入手・情報処理・情報管理の基盤となる理論と技術について、演習も交えながら教授した。後半の生物統計学については、事前学習と発表を組み込んだ形式で学習の充実をはかるとともに、事前事後の試験により知識と技術の定着を確認した。

生物統計学パートのテキストは前年度と同じものを利用したが、演習課題については難易度を検討しながら多数を差し替えることを行った。ただし、履修者にとって演習問題を解くことに集中した事前学習となる傾向があったため、次年度からは演習問題という形ではなく、統計学の各トピックについて短いプレゼンテーションを行うという形の課題を履修者に提示する形式とすることを決定した。

Intensive English Study

1 年次

Gerald T. Shirley

Competence in English is important for graduate students. This course aimed at improving the basic English language ability of students through intensive practice in reading, listening and grammar. It was an eight-week course in which students practiced reading, listening and grammar problems to help them improve their basic language abilities in these important areas. The course used a Computer Assisted Language Learning (CALL) system. The CALL course is designed so that students can access and practice CALL at any time on their computers at home and in the Graduate Student Room. There were no classroom sessions in this course. Students practiced the CALL course problems during their own time. Their progress was monitored and evaluated by the instructors during the eight-week course. Individual assistance and instruction was available to each student through consultation with the instructors. The course consisted of an orientation session in the CALL classroom in which the CALL course was introduced and class guidelines were discussed.

看護アセスメント学特論

1 年次

藤内美保、石田佳代子、草野淳子、杉本圭以子

クライアントマネージメントを遂行するために、看護職が問題解決過程を展開し、信頼性のある方法論に従った身体的、包括的な機能評価のための情報収集の基礎理論と技法について教授した。1 点は看護過程を展開する場合の看護理論による違いにより、看護診断に違いがあるか、診断過程の違いがあるかなど検討する。2 点目は小児のフィジカルアセスメント、家族看護とアセスメント及び看護の実際について、3 点目は災害看護における概念や理論の探求、災害看護の課題とその解決の探求など、4 点目は精神看護におけるアセスメントの講義および事例展開演習を行った。いずれも、基礎理論を踏まえた看護判断に関する具体的適用方法の課題学習を行い、レポートおよび出席状況により評価した。

次年度も学生の反応を把握しつつ、内容は継続的に進めていきたい。

精神保健学特論

1 年次前期

影山隆之

同一科目に研究者・リカレントコースと広域看護学コースの履修者がいることから、夜間と昼間の 2 度開講した。両者に共通する内容として、精神健康の基礎理論とモデル、及び精神保健医療福祉の主なトピックスについて扱い、さらに広域看護学コースでは行政保健師・産業保健師に必要な技法と活動を紹介した。各コースの履修者にとって新鮮な内容となったことがレポートからうかがえた。次年度は広域看護学コースの実習日程との調整を行い、共通内容については両コース合同で夜間開講とする予定である。

小児看護学特論

1 年次

草野淳子、足立綾

小児の各期における成長発達の特徴と環境を理解し、小児と小児を取り巻く環境の相互作用を理解するための理論と看護への活用方法を教授した。小児看護では家族看護が重要であるため、学生は家族理論を学び、課題として事例展開のレポートの提出をした。また、小児の成長発達と遊びを理解するために DVD を用い、実際の様子を観察できた。小児のプライマリケアに重点を置いた講義内容であった。評価は課題レポート(50%)、プレゼンテーション(30%)、討論参加状況(20%)であった。来年度は、シラバスの内容を再度見直したい。

成人看護学特論

1 年次前期

森加苗愛

今年度の受講希望者は 1 名であった。講義を行うにあたり、まず受講者の看護師経験についてディスカッションを行い、受講者が抱く成人看護における臨床課題を明確にし、自己の課題と併せて講義内容を企画した。結果、受講者の希望により、自己の実践と看護理論、外来看護におけるケアシステムの構築に焦点を絞り講義を企画した。

講義は対面で行った。自己の実践と看護理論においては、自己の実践事例に関連する看護理論の事前学習を元に看護実践を分析した。自己の看護実践を看護理論で分析することで、看護の意味づけができ、スタッフ教育の方法論にまで議論を発展させることができた。外来看護のケアシステムの構築については、がん看護を専門としている受講者の看護管理の経験に基づき、課題を明確にして、主にスタッフ教育、即ち成人教育に則ったスタッフ教育の在り方を議論し、今後の展望を得ることができた。

次年度も受講者の抱く成人看護における臨床課題に基づき、その経験値を活かすことができる講義を展開できるようにしていく。

放射線保健学特論

1・2年次

小嶋光明、恵谷玲央

医療における放射線診療の概要から医療従事者の放射線防護までの基礎と、原子力災害時に看護職者に求められる知識を教授した。学生からの質問と放射線の健康影響・リスクの最新の知見をもとに講義を行うことで理解が深まるように努めた。

看護管理学演習

2年次

福田広美

看護管理に関する実践力を高めることを目的に、臨床現場における組織の現状分析を行い、課題を明らかにしたうえで看護管理演習の計画の立案、実践および評価に関する教育を行った。学生が、所属先の組織分析を行い、改善に向けた実践計画を組織員の協力を得て立案した。さらに、これらの計画を関係者の協力を得て実施し、看護管理実践に対する評価と改善に向けた考察を行った。学生は、組織分析から評価に至るプロセスで定期的な発表とディスカッションを行い、各段階において、看護管理実践について理解を深めた。また、看護管理の実践を行うプロセスで文献を活用し、改善に取り組んだ。学生は、演習のまとめとして、看護管理実践を振り返るポートフォリオを作成し、発表および意見交換を行った。学生はコロナ禍で自施設を中心とした演習を行ったが、次年度は感染対策を行いながら可能であれば自施設外の研修も行き、学習効果を高める。

原書講読演習

1年次

宮内信治

英語習得における基礎的要素の確認定着を目標とし、発音記号、英文法基礎知識と文法解析、語源学の知見を基にした医療看護英単語を教授した。演習として看護（Nurse Practitioner：NP）に関する英文原著を用いた文法解析と読解和訳に取り組ませその成果をレポートにとりて提出させた。NPコース以外の受講生には、コース別、個人別に演習課題を指定し、文法解析と和訳を演習させた。英文読解能力の向上が見られた。演習用文献を更新し、看護における最新の国際的視点を提示していきたい。

特別研究（研究者養成コース）

通年

稲垣敦

履修者が各自の研究テーマについて、指導教員の指導を受けながら研究に取り組み、学会等で発表した。また、論文レビュー報告会（8/26、M1）、研究計画報告会（3/2、M1）で発表した。今年度は修了生がいなかった。

課題研究（広域看護学コース）

通年

稲垣敦

履修者が各自の研究テーマについて、指導教員の指導を受けながら研究に取り組み、学会等で発表した。また、研究中間報告会（8/25、M2）、研究計画報告会（3/2、M1）、研究成果報告会（3/3、M2）で発表した。今年度修了した4名の学生の課題研究のテーマは以下の通りである。

- 乳児の皮膚トラブルに関する母親の対処方法や困りごと
- 発達障害児・者のきょうだいに関する研究動向の日米比較
- 大分県内の健康経営認定事業所における睡眠衛生教育、適正飲酒教育、ストレスチェックの実施状況と業種、従業員数、職場文化との関連
- 精神保健福祉対応における市町村保健師と警察の連携の実態

課題研究（助産学コース）

通年

稲垣敦

履修者が各自の研究テーマについて、指導教員の指導を受けながら研究に取り組み、学会等で発表した。また、研究中間報告会（8/25、M2）、研究計画報告会（8/26、M1）、研究成果報告会（3/3、M2）で発表した。今年度修了した5名の学生の課題研究のテーマは以下の通りである。

- 妊孕性に関する知識の定着度と月経の管理及び婦人科疾患の受診行動との関連
- 妊婦における産後ケア事業の認知度および利用への意識
- 看護学生の月経前症候群とレジリエンスの関連
- 保育所に入所する子どもをもつ母親の卒乳・断乳時期の支援の実態とニーズ
- 新生児期のおむつ皮膚炎と腸内細菌叢との関連

課題研究（NP コース）

通年

稲垣敦

履修者が各自の研究テーマについて、指導教員の指導を受けながら研究に取り組み、学会等で発表した。また、研究中間報告会（8/25、M2）、研究計画報告会（8/26、M1）、研究成果報告会（3/7、M2）で発表した。今年度修了した7名の学生の課題研究のテーマは以下の通りである。

- 乳児病院から在宅に移行する医療的ケア児へ訪問看護師が行う看護の確立に向けたプロセスの検討
- 地域医療に従事する医師が在宅領域で働く診療看護師（NP）に抱く認識や期待
- 訪問看護における診療看護師の患者の状態に関する情報伝達・意思疎通の実態：医師とのインタラクションに焦点を当てて
- 小児がん患児に関わる診療看護師(NP)の実践と役割
- 海外の論文におけるナースプラクティショナーの臨床推論教育の介入研究の動向と分析
- 高齢心不全患者の緩和ケアにおけるアドバンス・ケア・プランニングの文献レビューに基づく看護実践と課題：診療看護師が担う役割の検討
- ポリファーマシー対策における診療看護師（NP）の取り組みと役割の認識

課題研究（看護管理・リカレントコース）

通年

稲垣敦

履修者が各自の研究テーマについて、指導教員の指導を受けながら研究に取り組み、学会等で発表した。また、研究中間報告会（8/25、M2）、論文レビュー報告会（8/26、M1）、研究計画報告会（3/2、M1）、研究成果報告会（3/3、M2）で発表した。今年度修了した2名の学生の課題研究のテーマは以下の通りである。

- 病院に勤務する看護師のチームワークに関連する要因：個人属性・看護提供方式・教育に着目して
- 臨地実習における看護学生のリスク感性と看護学生が認識する医療安全教育の関連

健康栄養学特論 I

1 年次

安部眞佐子

病態に応じた食事管理として、呼吸器疾患における食事の摂り方をまとめた。COPD の病態について理解を深め、栄養補給の重要性、食形態について討論し、応用として、COPD と腸内細菌の関連の論文を読んで現在の知見をまとめた。

放射線健康科学特論 1

1 年次

小嶋光明、恵谷玲央

放射線の健康影響を理解するための物理的基礎から生物学的基礎までの基本的事項を教授した。また、医療被ばくや原子力災害の現状とそこから受ける放射線の健康影響・リスクについての最新の知見を取り上げることで、身近な問題として理解できるように努めた。

放射線リスク学特論

1 年次

小嶋光明、恵谷玲央

福島原発事故後の環境放射線能や生物影響、小児期の医療被ばくによるがんリスクに関する最新の原著論文を課して、論文の解説をプレゼンさせるスタイルで進めた。取り上げた内容は、福島県の環境放射能の経時的変化、甲状腺検査モニタリングの課題、小児 CT 検査とがんリスク、福島県内の野生動物（低線量・低線量率放射線被ばく）における染色体異常である。

健康科学研究特論

1・2 年次前期

小嶋光明、村嶋幸代、藤内美保、影山隆之、佐伯圭一郎、関根剛、桑野紀子、大田えりか

看護科学研究の理論および手法を概観し、研究活動を自ら展開するために必要な事項を論じて実践的能力の育成を行った。実験的研究、質的研究、疫学研究、文献研究を実際に行っている先生方に講義をしてもらうことで研究手法がより理解できるように努めた。また、研究倫理規範意識を向上させるため、APRIN e-ラーニングを活用した。

特別研究（博士課程前期 健康科学専攻）

通年

稲垣敦

履修者が各自の研究テーマについて、指導教員の指導を受けながら研究に取り組み、学会等で発表した。また、論文レビュー報告会（8/26、M1）、研究計画報告会（3/2、M1）で発表した。今年度は修了生がいなかった。

4-3 博士課程(後期)

保健情報科学特論

1・2・3年次

佐伯圭一郎、品川佳満

本年度は履修者が4名であったため、教員も含め全員が2回担当となる輪講形式で実施した。各自が専門領域や研究テーマに関連する論文抄読や分析の実演などを行ったのち、参加者でディスカッションを行った。オンラインでの開講であったが、受講者の積極的な参加で活発なディスカッションで学びを深めることができた。

精神保健学特論

1年次前期

影山隆之

例年通り履修者の研究領域に関係深い精神保健学の論文を選ばせて、ゼミ形式で開講した。履修者の研究ニーズに沿った概念や方法論を取り上げることで、関心を高め研究の実際に資するようにした。

看護基礎科学演習

1・2・3年次

稲垣敦、安部眞佐子、小嶋光明、影山隆之、佐伯圭一郎、吉田成一、吉村匠平

オムニバス形式で実施され、同時並行して進められた。各教員から学生の学位論文を考慮した課題が提示され、学生は調査分析を行い、各教員に対してプレゼンテーション、あるいはレポートによって報告し、指導を受けた。

看護管理学特論

1年次

福田広美

看護管理学における近年の研究について講義を行った。また、看護管理について関心のある研究を中心に、受講者による文献レビューを実施、プレゼンテーションとディスカッションを行った。人的資源管理や組織管理、看護の質に関する研究等、幅広い看護管理学分野の研究について理解を深め、研究的な視点の強化に繋げた。次年度は、文献レビューに際し、質の高い研究論文の選定を

重視し、看護管理学分野における研究の理解と発展に向けた思考を深める。

生殖看護学特論

1 年次後期

林猪都子、梅野貴恵

思春期、成熟期、更年期、老年期の各ライフステージにおける女性の身体的、精神的、社会的特徴と看護問題の中から、学生の研究テーマである「妊婦のレジリエンス向上を目的としたプログラムの開発」「ハイリスク褥婦の産後のセルフケア行動確立へのシステム構築」の研究計画について講義、討議した。また、研究課題に関する原書講読をクリティークし討議した。

発達看護学特論

1 年次

小野美喜、草野淳子

小児から老年期の人間の発達をとらえ、発達課題やライフサイクル上の健康課題に着目し、看護介入や課題を学ぶことを目的として展開した。小児期では、成長発達、栄養、NICUにおける早産と家族の問題についてとりあげ、後半は成人期・中年期の生活習慣、ストレス、老年期の認知症、社会的孤立などの健康問題をとりあげた。履修学生は 1 名であり、授業内での意見交換を行うとともに、最終的に学生によるプレゼンテーションを行うことで発達看護の学びの総括ができた。

看護専門科学演習

1 年次後期

梅野貴恵、小野美喜、影山隆之、草野淳子、藤内美保、林猪都子、福田広美

看護専門領域教員によるオムニバス形式で、学生 1 名の背景や研究領域に関連した以下に記述する内容を講義し、学生による課題発表とディスカッションを通して学びを深めた。全ての講義やディスカッションは Zoom を用いて実施した。演習内容は、現代女性の性や生殖の課題とプレコンセプションケア、女性の更年期症状と男性更年期、高齢者が療養する医療・福祉施設における高齢者の自立および生活の質の向上と看護ケア、母子メンタルヘルスの測度に関する文献抄読、障害がある子どもをもつ保護者の愛着形成と保護者への支援、看護師の臨床推論とその教育方法、Tanner の理論、父親の育児参加の現状と課題、看護管理学分野における理論と最新の研究である。最終回は、受講生自身の研究課題に関する先行文献の知見と研究計画のプレゼンテーションと虚陰とのディスカッションを行った。学生は、全ての課題を完了し単位を取得した。

特別研究（博士課程後期 看護学専攻）

通年

稲垣敦

履修者が各自の研究テーマについて、指導教員の指導を受けながら研究に取り組み、学会等で発表した。また、研究中間報告会（8/25、D2）、論文レビュー報告会（8/26、D1）、研究計画報告会（3/2、D1）、研究成果報告会（3/3、D2）で発表した。今年度修了した3名の学生の特別研究のテーマは以下の通りである。

- 中小規模病院に勤務する看護師の職務継続意思と看護師長による基本的心理欲求支援行動との関連
- 看護学生のアタッチメントスタイルと実習適応感との関連：個人特性の理解を実習場面での指導に活かすために
- 博士論文の題目：自殺対策におけるゲートキーパー養成研修に関する研究：海外との比較、ゲートキーパーに興味を持つ人の人口統計学的特性、および研修の効果と持続性の検討

放射線健康科学特別演習

1年次

小嶋光明、甲斐倫明、恵谷玲央

放射線診断の効果とリスクに着目した最新の原著論文を課し、論文の解説をプレゼンさせるスタイルで進めた。取り上げた内容は、AIを用いたCT画像診断である。現状と課題をまとめ、研究の基礎に役だてた。

健康情報科学特論Ⅱ

1・2・3年次

佐伯圭一郎、品川佳満

著しい情報通信技術の進展に対応し、保健医療看護領域の情報システムの構築・運用・評価のための知識と技術を教授するとともに、情報を適切に分析・評価するための理論と技術を修得する。また、保健医療看護領域において特に重要な課題である、情報の適切な取り扱いに関する規則・モラルについても深く探求する。

以上の目標の下に、今年度は1名の履修者に対して、実際の研究データの取り扱いと解析を題材として、指導とディスカッションを交え、学習を深めた。

メンタルヘルス学特別演習

2年次

影山隆之

履修者が取り組んでいる研究課題に合わせ、その方面での調査研究に関する文献で用いられている精神健康アセスメントツールについて履修者にレビューさせ、その特性や扱いの留意点に関するゼミを開講した。履修者が少ないので、その年の履修者のニーズに合わせて内容を組み替える予定である。

特別研究（博士課程後期 健康科学専攻）

通年

稲垣敦

履修者が各自の研究テーマについて、指導教員の指導を受けながら研究に取り組み、学会等で発表した。また、研究中間報告会（8/25、D2）、論文レビュー報告会（8/26、D1）、研究計画報告会（3/2、D1）、研究成果報告会（3/3、D2）で発表した。今年度修了した3名の学生の特別研究のテーマは以下の通りである。

- 知的障害者福祉施設で働く福祉職員の職業性ストレスと精神健康との関連
- ヘアレスマウスを用いた組織反応から紐解く放射線皮膚炎の進行と回復におけるスキンケア効果の検証
- 日本人女性におけるマンモグラフィ乳房の構成の年齢変化について：10年間の縦断的後ろ向き研究

4-4 その他の教育活動

4-4-1 CALL 英語学習システム講座

Gerald T. Shirley

The program was implemented once in the first semester this year. All students (1st to 4th year students and graduate students) were invited to apply for the course so that they could freely engage in English study on their own.

4-4-2 大学生消防応援隊 (Oita-NHS-team)

学生 23 名 (4 年次生 8 名, 3 年次生 7 名, 2 年次生 2 名, 1 年次生 6 名)

担当教員 石田佳代子, 内倉佑介

1. 消防応援隊の活動目的

本学の消防応援隊は平成 26 年 3 月に結成された。活動目的は、地域での防災・減災の活動や災害時の活動を学び、地域での防災・減災活動に参加し、看護学生として地域に貢献することである。そのために、消防本部等の関係機関と連携をとりながら消防・防災に関する活動に参加することなどにより、消防に関する正しい知識、情報及び技術の習得などに努めている。

2. 本年度の活動計画と今後の課題

消防応援隊は、毎年 1 回実施される本学の防災訓練 (11 月 22 日実施) の企画・運営に携わっている。本年度も新型コロナウイルス感染対策により 1 年次生と教職員のための訓練参加となった。応援隊は 1 年次生の避難誘導・点呼 (安否確認)・AED の使用訓練を担当し実施した。

なお、学外での活動については、本学の新型コロナウイルス感染対策において、サークル活動は自粛する方針だったので、実施しなかった。

今後の課題は、応援隊学生の増員と消防応援隊としてのスキルの継続的な習得と考える。消防本部等の関係機関と連携をとりながら計画的に取り組むたいと考える。

5 研究室活動

5-1 生体科学研究室

1 活動方針

学部では、本学の教育理念の一つである「看護に関する専門知識・技術の習得とともに、科学的根拠に基づく問題解決能力などを養う」に沿って、人体の仕組みを解剖学的・生理学的・生化学的に理解し、その破たん状態（病気）の本質を十分理解する看護師を育成する。大学院においては、疾患の基礎となる生理学を細胞内のレベルまで深く掘り下げて理解し更に発展させることができる研究者および実践者を育成する。4年次生の卒業論文の作成の補助を行いながら、教員自身の研究を推進させる。その成果は、学会発表を国内または海外において年に1回以上行う。ある程度、成果がまとまったら、論文としてその成果を発表する。

2 教育活動の現状と課題

学生間の学力の差が大きくどこに照準を合わせて授業を行うかが最近の課題であったが、今年度は、平均的な学生に合わせて通常の授業をオンラインで行った。意欲の高い学生向けに動画配信を行い学生の事前学習・事後学習に役立てた。新入生の中には、コロナ禍で友人が出来ずに孤立化し学習意欲が低下し、単位取得が出来ない学生が複数人いたので、そのような学生に対して学習意欲を上げることが課題である。特に、生体構造機能論の学習意欲を高めるために、動画などを利用した事前学習と事後学習に取り組んでもらった結果、単位未修得者は1名のみであった。課題としては、看護疾病病態論との連携を密にして内容の確認を行うことが望ましい。

3 研究活動の現状と課題

今年度は、コロナ禍のため、4年次生と密な状態を避けながら、動物や細胞を使用した実験を行い、卒業論文として、まとめることが出来た。学会活動は、現地でポスター発表を行った。研究室で2年間、指導した大学院生も修士号を取得できた。

5-2 生体反応学研究室

1 活動方針

本年度より、教員定数が1名減となり、2名体制となった。研究室全体では教育に関する担当科目に変わりはなく、委員会活動等についても大きな変更は無かったため、教員一人あたりの活動量は一

定程度増加した。生体反応学研究室の教育活動に関しては、病理学、薬理学、免疫微生物学といった看護の専門基礎分野の科目の教育を担当している。外的・内的要因に対する生体反応、これによって発症する様々な疾病、その発生メカニズム、薬の薬理作用や病原微生物による生体反応を理解することによって、体の変調や病気の成り立ち、回復過程を科学的に捉え、これらから得た知識が看護実習や将来の看護実践に結びつけられるように看護の基盤教育を行っている。また、大学院の教育についても病理学、薬理学に関する内容の教育を担当している。生体反応学研究室の研究活動に関しては外部の競争的研究費を獲得し、積極的に英語の研究論文を海外の学術雑誌に発信して行くことを目標にしている。

2 教育活動の現状と課題

講義に関しては本年度入学生より新カリキュラムが施行されたことから科目名に一部変更はあったが、教授内容に変更は無かった。本研究室が主担とである科目としては、学部1年次生を対象に病理学総論、病理学各論、微生物免疫論を、学部2年次生を対象に生体薬物反応論Ⅰ、学部3年次生を対象に生体薬物反応論Ⅱ、また、学部2年次生を対象とした健康科学実験（血液検査・ラットの解剖・基礎微生物学実験）を行ったが、一部COVID-19の感染予防対策のためZoom配信で行ったものもあった。大学院1年次生を対象に、実践薬理学特論、病理学特論、老年臨床薬理学特論を行った。学部試験終了後の成績不良者の対応としては解答状況や解答用紙および質問コメントに対する回答することで改善点を示すほか、面接等を行うと共に、一般の学生にも試験問題（正解付）や解答用紙を返却する等の対応を取った科目もある。解剖学や生理学と共にこれらの病理学、薬理学、微生物学が看護実践を行ううえで十分に理解しておくことの重要性を認識させ、講義を進めることが重要であると考え。前述の対応を行ってはいるが、基礎科目の解剖、生理、病理、薬理、微生物学の成績は看護の科目の成績に比べると悪く、科目によっては単位修得率が低い状況であった。一方、大学院の科目においては単位取得に至らなかった学生はおらず、比較的良好的な学修習得状況であった。来年度の学部教育において、試験に通るための暗記や国家試験に類する多肢択一問題対策を行うような学修ではなく、より内容理解につながるような授業内容の復習を十分行えるような課題提示を行うなどの対策を考える必要がある。

3 研究活動の現状と課題

外部の競争的研究費として、日本学術振興会の科学研究費補助金を教員2名とも獲得している。研究代表者として、基盤研究(B)「加熱式たばこによる雄性生殖系への影響および寄与因子の探索と影響の低減を目指して」、基盤研究(C)「ユズ果皮飲料中のフラボノイドが抗アレルギー作用を発揮する条件の探索」、挑戦的研究(萌芽)「胎児期加熱式たばこ曝露が胎児に与える影響と出生後に生じる影響の推定」を、研究分担者として、基盤研究(A)「東アジアを越境するバイオエアロゾル：日本本土への拡散・沈着とその生体影響の評価」を獲得している。卒論生に対しては外部研究費に関連するテーマで研究を進めることができた。次年度も継続する研究課題であるため、今後の課題としては、研究成果を積極的に英語論文として発表し、科学研究費補助金以外の競争的研究費も獲

得して行くことを目指す。

5-3 健康運動学研究室

1 活動方針

当研究室の教育目標は以下の6つである：①科学的なものの見方や考え方などを学ぶ。②実際に運動を通して体を動かすことの楽しさを体感する、③個人、社会、人類にとって運動が重要であることを理解する。④健康・体力を維持・増進するための運動量、運動強度を確保する。⑤自分に合った運動を見つけ、運動習慣を身につける。⑥ボランティアを通して様々なことに気づき、考え、今後の人生に活かす。研究に関しては、地域及び社会に貢献できる研究、あるいは研究活動自体が社会貢献につながるような研究を目指している。

2 教育活動の現状と課題

1年次の大学ナビ講座では、「大学の授業と試験の受け方」をZoomで実施した。1年次の健康運動ボランティア演習はコロナ禍のためイベントの開催が自粛され、昨年は参加できるボランティアがなかったが、今年度は、①富士見が丘夏祭り、②富士見が丘団地わかば会サロン、③大分市野津原地区ななせの里まつり、④総合型地域スポーツクラブ交流会、⑤別府大分毎日マラソン、⑥富士見が丘団地森林探検ウォーキングの6つのイベントに参加し、県民の健康・体力チェック等を実施した。参加できなかった数名の学生は、参加した学生の感想を読み、ボランティアの意義を考えた。1年次の健康スポーツは体育館で実施したが、待ち時間に学生同士の会話が多いためマスクを装着して実施したが、開講が10月以降であったため、運動をするのに支障はなく、また熱中症の心配はなかった。2年次生の健康運動学はZoomを利用し、動画等も配信しながら対面の講義と同様に行うことができた。2年次生の健康運動学演習では、80名以上が同時に運動するため、自宅での運動実施を可として、運動の目標を立てて各自が運動に取り組み、ベースライン測定と結果判定測定で運動の効果を自己評価してレポートにまとめた。卒業研究では、2名の学生がそれぞれ「温泉入浴の自律神経バランスへの効果」、「筋硬度からみた温泉入浴の肩凝り緩和効果」という研究テーマで取り組んだ。当初、温泉の肌への健康効果をテーマにする予定であったが、レンタルを予定していた機器のレンタル事業がコロナ禍のため中止となってしまったため、急遽、研究テーマを途中で変更したため、倫理審査の受審が遅れてしまい、実験・執筆スケジュールがタイトになってしまった。特に、コロナ禍であるため、今年はそのような事柄も想定して余裕のあるスケジュールを組む必要がある。

大学院に関しては、助産学コース2年次生を2名と1年次生を1名、広域看護学コース1年次生の課題研究の指導教員を務めたが、広域看護学コース1年次生は進路を変更したため、退学した。助産学コース2年次生を2名はそれぞれ「妊孕性に関する知識の定着度と月経の管理及び婦人科疾患の受診行動との関連」、「看護学生の月経前症候群とレジリエンスの関連」という研究テーマで課題研究に主体的かつ自律的に取り組み、研究成果報告会での発表態度も立派であった。助産学コース

1 年次生は文献研究で読んだ論文の貴重なデータを再解析する予定であったが、データ利用の許可が得られなかったため、自分で調査を行ってデータを収集するように変更し、倫理審査を受審してパスした。次年度は早めにデータ収集することが課題である。

3 研究活動の現状と課題

昨年、日田の下駄メーカーの依頼で収集した一本歯下駄を履いて歩行した時の腰部の3次元加速度データの波形を検討した。このデータは世界初のデータであり、波形自体の解釈も定かではないため、まずは靴を履いた歩行の波形と比較し、波形成分の意味を検討した。次年度の目標は、一本歯下駄を履いた3次元加速度データを明確に解釈することである。

4 その他

- ① 富士見が丘夏祭り（イベント補助） 7/23
- ② 富士見が丘団地わかば会サロン（健康・体力チェック） 9/24
- ③ 大分市野津原地区ななせの里まつり（健康・体力チェック） 11/6
- ④ 総合型地域スポーツクラブ交流会（健康・体力チェック） 11/23
- ⑤ 別府大分毎日マラソン（救護班） 2/5
- ⑥ 富士見が丘団地森林探検ウォーキング（血圧測定、ウォーキング） 3/25

5-4 人間関係学研究室

1 活動方針

周りの人と喜びや苦しみを分かち合うとともに、自他の独自性及び個別性を尊重することのできる豊かな人間性を養うため、心理学の知見をベースとした、人間関係に関わる基本的な知識やスキル、人間の行動や発達についての理解・洞察を深めるために必要な知識、精神看護学の基礎となる知識の習得を目的としたカリキュラムを編成し、教育活動を展開している。本学における教職課程（養護教諭一種免許状）の運営を担当している。大学院教育においては、院生自身が、課題の設定から、研究方法を確定、調査（実験）の実施、資料解析、論文の作成を、主体的に行うことができるよう、個別にゼミを開催し、指導を行っている。

2 教育活動の現状と課題

前期はオンライン、後期は対面を中心に教育活動を展開した。オンライン授業では、Zoom の機能を援用し、学習者に参加、発言の機会を提供した。また、授業時間外の課題に関しても、オンライン

のアプリケーションを利用して、課題の提示、提出、フィードバックを円滑に実施することができた。遠隔講義の環境下においても、学生が受け身にならず、放置されることもなく、教員のマネジメントの下に主体的に授業に参加する機会を保障することができた。

実習校、教育委員会、文部省との折衝を含め、養護教諭養成課程の運営を担当している。非常勤講師との事務連絡、養護実習 I、II、教職実践演習の運営、教員採用試験への対応、進路ガイダンスの実施、県内実習体制の環境整備、文部科学省提出文書の作成などにより、相応の負担が発生している。

3 研究活動の現状と課題

研究活動に関しては、大学院修士課程における課題研究や修士論文の指導、博士課程の学生の指導がメインになっている。博士課程の学生1名が学位を取得した。また博士課程の学生2名の投稿論文がそれぞれ受理された。大学院生の指導と養護教諭養成課程の運営の両立が課題になる。

5-5 環境保健学研究室

1 活動方針

環境保健学研究室は、WHO が定義する「Environmental Health」に沿って「環境」を、物理的要因、化学的要因、生物的要因、および行動に影響を与えるすべての関連要因と健康との関係を科学的に理解するための基礎的事項とその予防対策の考え方についての教育を学部の環境保健学概論（1年次）、環境保健学詳論（2年次）および環境疫学・生物学演習（3年次）で行っている。また、現代医療に必要不可欠な放射線教育も、開学以来、全国の看護系大学の先頭に立って実施してきた。看護コアカリキュラムの教育項目に明記されたことで、本学の放射線教育モデルが他の看護系大学の参考になることが期待されている。その関係で看護教育者を対象にしたトレーナーズトレーニングを文科省事業として平成30年まで実施してきた。その後は、看護職者を対象にした放射線教育を他大学と連携して進めている。大学院教育では、研究者コースを対象として「放射線健康科学特論」、「放射線リスク学特論」、「放射線保健学特論」、「放射線健康科学特別演習」を教授している。NP コースの放射線や画像診断教育にも貢献している。健康科学専攻では、主に診療放射線技師の社会人の放射線の教育研究を実施している。

2 教育活動の現状と課題

放射線を含む環境保健の教育は、多分野な内容を含むために、学部1、2年生の段階では教育が難しい点がある。そのため、身近な社会問題（原子力災害、新型コロナウイルス・インフルエンザ感染症の危機管理など）を取り上げることで関心を持たせ、その理解には物理や生物、病理生理、免疫、生物統計といった関連科目の基礎的な知識が重要であることを認識させるようにしている。さらに、

2年次の環境保健学詳論、3年次の演習「環境疫学・生物学演習」ではアクティブに関わる授業を実施し、主体的に理解を深めることを狙っている。プレゼン資料の作成、質問応答、課題レポート作成などを通して、できる限りすべての学生に対して個別に指導することでより効果の高い講義・演習にしていくことを目指している。学生による授業アンケートから講義・演習の目的はおおよそ達成できたと考える。次年度は現状を維持するとともに、最新の環境問題も取りあげていきたいと考えている。また、環境問題に対してお互いの考え方を共有し合うことができるような工夫（グループディスカッションなど）を取り入れていきたい。

3 研究活動の現状と課題

医療・環境放射線をテーマに研究を続けている。医療被ばくによる健康リスクを生物学的に明らかにすることを目的とした研究では、マウスに γ 線照射し、時系列を追って遺伝子欠失変異した造血幹細胞の蓄積の程度を評価し、より詳細な発がんモデルの構築を検討している。

新しいがん放射線療法の一つであるマイクロビーム放射線療法（MRT）の抗がん効果の生物学的根拠を明らかにするための研究では、数 μ 幅に絞ったX線（X線マイクロビーム）をすだれ状にがん細胞集団および正常細胞集団に照射すると、がん細胞集団にのみ致命的な影響が生じることが分かった。これは、がん細胞と正常細胞では放射線に対する細胞間の相互作用が異なっていることを示しており、新たな放射線生物のテーマとして開拓している。大学院生の指導では、マンモグラフィを対象にした臨床研究、放射線皮膚炎に関する動物実験研究、CT画像診断に関する研究を進めてきた。令和5年度も、X線照射装置を用いた動物レベルの研究、マイクロビームを利用した細胞レベルの研究、医療被ばくの防護に関する研究、CT画像診断に関する研究を引き続けて進め、放射線の健康リスクに関する研究にさらに貢献していく。

5-6 健康情報科学研究室

1 活動方針

科学的根拠に基づいた看護実践の基盤となる、情報収集と分析および発信のための知識と技術の修得をめざして教育を行っている。また、学習と業務における情報処理の能力を早期に高めることができるよう配慮し、実践的な教育内容を展開している。

特に、単なるデータの取り扱い技術や数的処理の知識として学ぶのではなく、看護職として、また一人の社会人として適切に判断・行動ができる能力を養うため、具体的な事例において自ら考えて学習することを推進している。

また、教育及び研究のみならず、本学のICT環境の管理と運用を通じて大学全体のパフォーマンスを日常的に支援することを実践している。

2 教育活動の現状と課題

今年度は学部新カリキュラムの開始年度で、本研究室の担当科目は大きな変更はなかったものの健康情報処理演習がⅠ、Ⅱの2科目に分割され、生物統計学と健康情報学の開講順が入れ替わった。講義科目と演習の対応に一部ずれがあったものの、教育成果については、授業アンケート等からもほぼ例年通りの成果だと評価する。しかし、生物統計学及び健康情報学については、今後も継続して受講者の興味関心を高め、理解を深めるための改善を検討したい。特に、本年度からすべての担当科目で Google Classroom を利用し、一定の効果があつたと評価する。今後、受講者への連絡、資料の公開、課題の提出などの点からさらに活用して、教育効果を高めたい。

大学院における教育については、広域コースの担当科目については例年通りの成果だと評価する。保健情報学特論については、生物統計学パートは昨年度と同じテキストで実施した。新任の岡田助手とともに振り返りを行った結果、来年度はテキストを指定せず、参考図書を複数指定して受講者側からの積極的な自己学習を推進する形式に変更することを決定した。また、本年度は博士後期課程の保健情報科学特論で4名の履修があつたため、2名の教員と4名の履修者による輪講形式で実施したところ、活発なディスカッションも行え、充実した時間となった。

3 研究活動の現状と課題

佐伯、品川の2名は科研費による研究を継続している。新任の岡田助手は学内研究費を獲得すると共に、自身の博士論文の最終段階に入っている。

コロナ禍のため、教育現場を対象とした研究など、一部研究課題について遅延が続いており、この状況下での円滑な研究遂行について解決を要する課題は認めるが、それぞれ研究テーマのいったんの完了に向けて活動している。また、岡田助手を含んだ新しいメンバー構成で、研究室としての研究活動および研究支援体制を再構築していきたい。

5-7 言語学研究室

1 活動方針

言語活動の四技能である **Speaking, Listening, Reading, Writing** をバランスよく伸ばすことを念頭に、将来の専門分野で役に立つ英語が身に付くよう、実用的で易しい英語コミュニケーション (**Speaking, Listening**) に取り組ませている。また、人間としての感性を養うという観点を含め、英語処理能力を高めるために、易しい英語で書かれた様々な分野、ジャンルの英語読本を積極的かつ多量に読ませる「多読」を導入、実施している。更に、教室内での活動を課外でも維持継続できるよう、CALL (**Computer Assisted Language Learning**: コンピューターを用いたウェブ学習システム) による TOEIC 対策英語学習プログラムを実施している。

2 教育活動の現状と課題

ネイティブ・スピーカー教員の授業では、自作の教材を毎回配布し、学生はパートナー同士、または、小さなグループで英語コミュニケーション (Speaking, Listening) を練習した。1年次生の講義内容は、一般的な日常生活の話題 (Food, Shopping, Home, その他)、2年次生の講義内容は、看護英語であった。各話題について3~4週間かけてじっくり練習を行い、同じ学生が毎回同じグループに含まれないように配慮することで、新鮮な気持ちで楽しく学習できるよう工夫した。応用可能な文法・語法の講義をもとにして、学生同士で授業ごとの討論課題について英語で意見交換などの言語活動を行った。また、1年次生前期の授業では、CALL学習を必修授業として取り入れている。授業を二部構成とし、上記の自作教材の英語コミュニケーションの練習と、CALL学習を行った。発音の向上を図ることを念頭に、教員の発音を確認、反復させ、学生間で反復練習させる時間を以前よりも長く確保した。結果として発音を意識した英語での発話の機会が増え、発音の技術が改善したと考えられる。今後は語彙習得が未熟な学生を念頭に、生活において頻出する語彙を習得させる効果的な方法を検討していきたい。

日本人教員の授業では授業を二部構成とし、前半では英文テキストの日本語訳を最初に配布し読ませることでテキストの内容を理解、把握させ、それをもとに課題となるテキスト部分についての語彙、文法、発音についての講義を行った。また、ネイティブ・スピーカーの発話を音声CDで確認し、実際に発声の反復練習を行った。講義で取り扱った課題テキスト部分は次週までに暗唱できるようにしてやることを課題とし、次週には実際に暗唱(含む筆記)できるかの確認を行った。後半では、易しい英語で書かれた書物を辞書なしで読み、総読書語数増進を目指す多読を実施した。学生自らが読む本を自由に選択することで学習動機の維持を図った。学生の学習に対する自主性を刺激するため、1年次1学期講義で扱った範囲から暗唱する英文を学生自身に抽出させる試みを行った。語のつづりや符号に対する意識が高まった様である。今後は抽出させる範囲や分量を増やしてその効果をみる予定である。2年次生前期の多読では、語数の少ない図書が人気であった。次年度はそれより語数の多い図書を学生が選択するよう促す意味で図書の配置を変更し、読書量の変化に注目していく。

言語能力の向上には継続学習が不可欠である。しかし時間的な制約もあり、教室内での活動は限定的にならざるを得ない。そこで、年間を通し、全ての学生(1~4年次生、大学院生)が自ら自由に英語学習に取り組めるよう授業外での多読教材の貸し出しや、CALLシステムを実施している。受講した学生は、真剣に取り組み、結果として学習効果の向上がみられた。

学生の英語学習に対する意欲の維持、継続を図るべく、日々学習環境の整備を模索し、より魅力的な教室内活動の実現と自主的な学習の促進をはかりたい。

3 研究活動の現状と課題

世界的な新自由主義の台頭や急速な電子ネットワークシステムの普及、浸透、さらにCOVID-19の世界的流行とロシア・ウクライナ戦争の影響により、学びの傾向が大きく変化しつつある。そうした中であって、学びの本質はいかなるものかという視点から、人文学の果たす役割を再確認し、文体論と19世紀英文学に着目して研究を進めた。成果として、Jane Austenの文体に着目した著書

の書評を発表した。また、看護・ケアの視点を再確認し、スピード重視に大きく傾いた世界の趨勢に警鐘を鳴らす著書の翻訳も出版した。人類の学びの在り方とその本質を念頭に、今後は言語音声と発話のうち「音読」に着目し、近代以降の教育的意義の変遷と文体における表現の分析、解釈に取り組む予定である。人工知能に代替されえない人間の学びの再確認を通して、言語学習の果たす意義と役割について考察していく。

5-8 基礎看護学研究室

1 活動方針

今年度より新カリキュラムとなり、科目数も増えたため、授業方法を工夫し、その効果を確認しながら、最適な教育の提供を目指す。さらに研究室の円滑な運営を行うことで、大学運営に貢献することを目的とした。

4年間での基礎看護学教育の土台となる基礎看護学についての教育目標及び内容の共通理解を深め、適切な教育内容の教授を目標とした。

研究室内の良好なチームワークを形成し、教授活動に最大の効果を期待して活動した。

2 教育活動の現状と課題

今年度は新カリキュラムに変更する授業もあるため、研究室内で授業方法等の検討を繰り返し行い、学生に効果的な授業を行うことが出来た。

新カリキュラムへの変更に伴い、演習については、教師が講義を録画したものを、事前に視聴を促したうえで、演習に臨むという形式をとり、授業時間をすべて演習に費やせるように工夫したことで、学生の技術習得が向上した。技術試験の初回合格率が1.2年生とも前年の60%前後から80%近くに向上していた。昨年の評価から、技術チェック前には、必ず、教師の指導を複数回受けることをアナウンスしていたため、体調不良等を除いてほぼ全員の事前指導ができたことも合格率向上に寄与していたと考える。

COVID-19の影響で一部の授業の時期を変更することになったが、技術習得に関する影響はなかった。しかし、教育の一貫性を考慮すると、一連の授業計画の途中で長く間隔が伸びることでモチベーションに影響し、知識の積み上げが困難になるため、不測の事態による授業の変更を視野に入れた計画が必要である。

講義主体の授業については、オンラインで計画通りに実施できた。Webによる学生の反応も特に問題はなく、理解についても変化はなかったと考える。

次年度は、シミュレーション教育をさらに取り入れ、学生の判断力や実践能力の向上をめざして教育方法をさらに工夫していく予定である。

3 研究活動の現状と課題

研究成果の発表および外部の研究費獲得を目指して、研究室全員がそれぞれの研究課題に向かって各自努力を続けてきた。研究成果発表については、2名が学術誌へ投稿予定であり、1名が科研費の獲得が出来た。また研究室全体で、雑誌への投稿も出来た。次年度も常に論文投稿や新たな研究課題の探求に努力しながら、継続している研究の成果を上げていく必要がある。

5-9 看護アセスメント学研究室

1 活動方針

看護アセスメント学は、基礎看護科学講座に位置づけられ、人の健康問題を根拠に基づきアセスメントできる能力を養うことを目的とし教育を実施している。看護の基盤となる人間科学講座で教授された内容との融合を図りつつ、身体的、心理的、社会的側面から看護学の視点で根拠に基づくアセスメントができることがねらいである。看護アセスメント学研究室の担当科目は、1年次及び2年次の履修科目が多く、基礎的な理論や科学的な見方、クリティカルシンキングなど、エビデンスを迫る姿勢とともに、看護への関心、喜びなど感性を高め、専門領域に繋げるといった教育的役割がある。現在教授している具体的な科目は、「看護疾病病態論 I」「看護疾病病態論 II」「ヘルスアセスメント」「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」「看護アセスメント学実習」である。「看護疾病病態論 I」「看護疾病病態論 II」では、主要な疾病の理解や病態の理解、さらに「ヘルスアセスメント」においては、看護師の五感を活用し頭部からつま先まで身体の観察ができる能力を身につけ、身体的なアセスメントができる基礎的能力を身につける。「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」は、看護過程の展開の基礎的能力が身につくことを目的とし、講義および演習を組み合わせ、知識の習得を段階的に行っていく。「看護アセスメント学実習」では、受け持ち患者と関わり、初めて実際の患者に対して看護過程の展開を行うことを通し、自己の課題を明確にし、専門看護学領域の基盤とする。

大学院教育においては、「フィジカルアセスメント学特論」「看護アセスメント学特論」「基盤看護学演習」など、根拠に基づくアセスメント、臨床推論能力を高めることを方針とする。大学院教育の NP は、3P (Physical Assessment, Pharmacology, Pathophysiology) の能力の強化は必須である。そのことから本研究室が NP 教育に関わり、フィジカルアセスメントや臨床推論能力をさらに高めていくことを目指し、次年度開設される NP 研究室と連携して NP 教育を実践していく。

2 教育活動の現状と課題

毎年、学生の学びの達成度を評価しつつ、授業の目標、授業構成、授業方法などの見直し改善を行っている。「看護疾病病態論」や「ヘルスアセスメント」などフィジカルに関する科目はメカニズムの学修ができるよう工夫している。学修評価の試験では、筆記試験は過去問による断片的で暗記の

知識にならないよう、理解に重点をおくための試験問題を毎回新たに作成した。さらに「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」など、人間の見方を身体以外の心理、社会面まで統合して人を包括的に捉えることの重要性を教授している。また「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」「看護アセスメント学実習」では、看護過程の理論を活用し、患者を理解し、よりよい看護実践ができることを目標としているが、看護過程の展開自体が主眼とならないよう指導が必要な場面もあるが、患者の状況や症状がイメージできるよう DVD の視聴をした看護過程の展開の工夫や、教員 4 名で個別に看護過程の基本的考え方や記録方法を丁寧に指導した。

看護学実習は 3 つの全ての実習施設が予定通り 2 週間の実習を受け入れ、臨地でしか学べない経験ができ、学生も充実した実習であったとの感想が多く達成感もあった。

課題は、症状から病態を探求していく力、観察をポイントの修得、臨床推論能力を育成などさらに強化していきたい。また人間科学講座の教員とも連携をとりながら、重要な知識やメカニズムの理解の積み上げや統合ができるような授業の工夫が必要と考える。

3 研究活動の現状と課題

それぞれの教員が、自分の専門的研究領域で研究を推進している。4名全員が科学研究費を採択し、自己の研究テーマで取り組んでいる。また、石田准教授が責任者となり、研究室全員でデジタル聴診器を用いた遠隔授業の有用性に関する研究に取り組んでいる。また、卒業研究や課題研究の指導により、各分野の研究の幅を広げている。論文の公表も一部進めているが、さらに積極的に推進することが必要である。

5-10 成人・老年看護学研究室

1 活動方針

成人・老年看護学は、成人期と老年期の対象への看護実践に必要な専門知識・判断能力・援助技術を習得することを目標とし、成人看護学概論、老年看護学概論、成人看護援助論・老年看護援助論、成人・老年看護学演習、成人看護学実習Ⅰ、Ⅱ、老年看護学実習の科目を運営している。成人期と老年期の連続性を学ぶことが研究室の特徴であり、人間のライフサイクルに生じる健康障害の経過をとらえた学習活動を展開している。科目内容として、概論は 2 年次前半に開講し、成人期と老年期の発達段階の特徴や保健、理論について学ぶ。さらに成人看護援助論では、急性期、回復期、慢性期、終末期の疾患や傷害をもつ人への看護を実践する力を養い、老年看護援助論では老年期の加齢変化に伴う生活援助、疾病予防について学ぶ。専門的知識の教授とグループワークによるディスカッション等を設け、学生が考える力を養う学習方法を展開している。さらに 3 年次前期には、成人・老年看護学演習において、模擬事例への看護について考え学び看護過程展開を行う。さらに 3 年次前期・後期には実習科目をおき、成人看護学、老年看護学の学習成果を実践に反映できるように展開している。

2 教育活動の現状と課題

成人・老年看護学は、学生が主体的に学習できるように、ナーシングスキルやメディアイなどのオンライン教材を活用し、何度でも繰り返し、自分のペースで学べるように各授業に継続導入している。学生からの課題提出物や質問への応答もクラスルーム等の Web を活用し実施してきた。COVID-19 の影響でオンライン授業 3 年目でもあり、教材の工夫を重ねてきたこと、学生自身もオンラインに慣れてきたこともあり、学習目標への到達度から効果が得られていると評価できる。対面授業が再開された場合、オンラインの方が、効果があると考えられる内容については、今後も継続していく。また、次年度から研究室体制が変更されるため、成人看護学、老年看護学と 2 研究室の教育活動となる。一部連動しながらの教育活動となるが、2 研究室体制では、各研究室員が減少する体制となるため授業方法に工夫が必要である。これまで効果のある教育活動について継続する一方で、新たな方法を導入して評価をする必要がある。

3 研究活動の現状と課題

成人・老年看護学では、各教員が主要とするテーマを中心に認知症高齢者、糖尿病患者などの慢性疾患看護、急性期の看護、高齢者の生活に着目した研究を行い、科研費を獲得しつつ活動をしている。昨年度と同様に COVID-19 の影響で研究活動がすすみにくい領域もあり、引き続き、研究再開と国内外での研究成果の公表の機会をつくることである。また、研究室が成人看護学と老年看護学の新体制となることから、各研究室教員の科研費の獲得や、研究室でとりくむ共同研究の促進が課題である。

5-11 小児看護学研究室

1 活動方針

学部における専門看護学小児看護学の教育活動は、主に学部 2 年次から 3 年次にかけて行われる。1 年次に行われた基礎科目の知識をもとにして、小児の成長・発達過程の特徴を理解できるようにする。小児看護学概論・小児看護援助論・小児看護学演習・小児看護学実習へと段階的に小児看護の役割を理解していく。代表的な理論を学び、小児の発達段階、看護・保育について学ぶ。最終的に小児看護学実習にて、学んだことを生かしながら小児の看護過程を展開できるようになること、子どもへの倫理的態度やこども観を養うことが目標である。

小児 NP コースでは、2 年間で必要な科目を履修し知識や能力の向上を目指し、NP としての知識や態度を身に付けていく。そして、段階的に行われる試験をクリアすることが目標である。

教員は各自の研究室内での役割を行う。研究課題に取り組み、学会や研修会に参加しながら自己研鑽し研究活動を行う。また、関連する社会貢献活動を行っていく。

2 教育活動の現状と課題

学部教育での講義は計画通り実施できた。しかし、コロナ禍であったため臨地実習が不可能であった期間があり、学内実習を行った。学内実習では臨地実習をイメージできるようにDVDや事例を用いた。学生の理解を確認するために、一方的な講義だけではなく理解を確認する発言を促すことが必要であった。

大学院小児NPコースでは、学生は必要な科目を履修し、段階的に行われる試験に合格した。1年次生は進級試験に合格し、2年次生は修了試験に合格しNP資格認定試験を受験することができた。

学生の性質により学びの差があったため、それぞれの長所を生かしながら知識や技術を身に付けていくことが必要であった。

3 研究活動の現状と課題

各教員の専門性を生かしながら、それぞれの研究テーマを探求した。学会発表や論文投稿にも取り組んだ。教員のテーマを卒論指導に生かすことができ、4年次生とともに取り組んだ。テーマは小児がんに関すること、I型糖尿病に関すること、医療的ケア児に関すること、プリパレーションに関することであった。

NPコースでは課題研究に取り組んだ。それぞれのこれまでの臨床経験から、医療的ケア児の在宅移行に関すること、小児がんに関すること、訪問看護に関することをテーマとして行った。

NPコースの学生は実習の時期は課題研究についての時間がとりにくく、計画的に進めることが課題である。

4 その他

令和4年度大分県教育委員会主催大分県医療的ケア研修会（教員）第2回7月27日・第3回7月28日、（看護師）第2回8月3日を小児看護学研究室が協力し、小児・NP実習室で行った。

5-12 精神看護学研究室

1 活動方針

学部教育の基本目標は従来通り、1)精神科領域以外の様々な場でも展開できる精神看護、2)対象者の社会参加・自己実現や生きにくさに焦点を当てた看護、3)看護者自身の特徴や“治療的人間関係”に留意した看護、及び4)医療と保健・福祉サービスとの連携を意識した看護の修得と設定した。そのために講義～演習～実習が継ぎ目なく一つの流れとして接続するよう、担当教員が連携を図った。卒業研究はコロナ禍の中にあって文献研究を中心にせざるを得なかったが、できるだけ各学生の関

心に沿ったテーマで進められるよう配慮し、今年度は5名の学生を担当した。

大学院では担当授業の他に、教員が指導する学生たちによるゼミを月1回程度開催し、原著講読や研究発表予行を行った。学生が自主的に運営と進行を担い、互いに刺激し合って教育的効果を発揮している。

教員の研究活動は、それぞれの専門性を活かしつつ、必要に応じて協働作業を企画している。

2 教育活動の現状と課題

学部教育の講義では、新カリキュラムへの移行を計算に入れて講義内容を精選し、セルフケアに着目したアセスメントや、リカバリに焦点を当てた支援を重視する授業にした。新型コロナウイルス感染症拡大により臨地実習ができない可能性が当初から予想されたので、演習の段階から仮想事例を用いたアセスメントと計画立案をさせ。同時に実習施設やNPOのスタッフによる活動紹介を聴講させ臨地実習できなかった場合でもなるべく現場を想像できるように配慮した。結果的に精神科病棟では実習ができず学内演習に振り替えたが、障害福祉サービス事業所では臨地実習ができたので、不十分ながらも精神障害がある当事者に触れたり精神保健サービスの現場を実感したりさせることができた。卒業研究では、学生の関心・能力と計画の実現性をすり合わせ、卒論完成後も国試に至るまで支援を続けた。

3 研究活動の現状と課題

引き続き大学院生や学外の病院・企業・自治体と協働して、自殺予防、交替勤務と睡眠、精神障がい者のリハビリテーション等の領域で研究を展開するとともに、これらに関連した科研費を獲得した。特に今年度は、県の要請により大分県地域連携プラットフォーム推進事業費補助金を得て、新型コロナウイルス感染症患者の後遺症に関する調査を行った。これらの成果は順次、学会発表や論文投稿として形になっており、順調に進行している。

5-13 母性看護学研究室

1 活動方針

母性看護学では、学部教育において、女性のライフサイクルおよびマタニティサイクルにある妊娠・分娩・産褥・新生児の生理・病態と母子およびその家族への援助の理論と方法について学ぶことを目的としている。科目は母性看護学概論、母性看護援助論Ⅰ、母性看護援助論Ⅱ、母性看護学演習、母性看護学実習で構成している。母性看護学では、学内で学んだ理論と技術を実習で実践し、理論と実践を結びつけることを目標としている。特に母性看護学実習は周産期に重点をおいて実習を展開している。

2 教育活動の現状と課題

母性看護学の講義、演習、実習は、コロナ禍の影響を受けて、オンラインと対面講義で実施した。オンライン講義は3年目となるが、事前に学生に資料配布を実施した。学生の講義における反応は、講義終了後グーグルフォームにて、講義における学びや感想、質問を提出してもらい確認した。後期の母性看護援助論Ⅰから、コロナ禍の状況は改善し、講義室で講義を実施した。

母性看護学技術演習は3日間で学生の人数を減らして演習室で実施した。母性看護過程の演習は対面によるグループ学習にて実施した。発表会は講堂で実施したが、学生から積極的な意見交換が見られた。対面による演習指導は、学生の取り組み状況が伺えて、学生と直接討議することができた。

母性看護学実習の前半の4週間は、コロナ感染症の増加と醫院の分娩件数の影響を受けて、9月は実習施設や日程を変更した。最終的に、大分県立病院（16名）、堀永産婦人科（35名）、いしい産婦人科醫院（19名）、学内実習（5名）であった。臨地実習時間が3.5日～5.5日と短期間であったが、学生が実際に現場を見学して体験して学ぶことの大切さを実感した。昨年の母性看護学実習の課題は、臨地実習期間が短くなり経験値が減ったことであった。今年は学生の実習日数を確保するように努力はしたが、9月はコロナ禍の影響で実習日数が減じられ、臨地に行けても経験値は少なくなっている。

3 研究活動の現状と課題

母性看護学研究室は、女性の健康に関する研究、性教育・受胎調節・家族計画に関する研究、乳房ケアや産後ケアに関する研究、父親の育児参加に関する研究に取り組んでいる。今年度は大学院生の「未就学児を育てる女性看護職の就業継続促進要因の検討」と「西日本地域におけるアドバンス助産師更新の現状と課題」の研究課題が、母性衛生2022年7月号に掲載された。今年度も大学院生の研究課題「妊婦における産後ケア事業の認知度および利用への意識」と「保育所に入所する子どもをもつ母親の卒乳・断乳時期の支援の実態とニーズ」について、修了後に論文を母性衛生に投稿した。今後も母性看護学研究室での研究成果を論文投稿していきたい。

4 その他

日本助産師会と大分県助産師会が主催する、2023年9月開催の九州・沖縄地区研修会の運営に母性看護学研究室が協力している。また、2023年11月に開催される大分県母性衛生学会の学術集会を母性看護学研究室が担当する。

5-14 助産学研究室

1 活動方針

本研究室は、大学院助産学コースの教育を主に担っている。大学院助産学コースでは、高度な判断力と実践力をもつ自律した助産師を育てることをめざしている。助産師が専門職として社会に対し

て果たすべき役割について理解し、高度な周産期母子医療に対応するためにハイリスク妊産褥婦を含めた助産診断能力及び助産技術、またリプロダクティブ・ヘルスを推進するために他職種との連携・協働、社会資源の活用能力を身につけるための教育を展開している。特に、模擬事例を用いたシミュレーション演習、段階的 OSCE を用いた技術試験などの教授方法を教員で検討を重ね、COVID-19 感染症対策実施のうえで行っている。さらに、大学院修了の専門職業人として旺盛な探究心や豊かな人間性を身につけることを目指し、オンラインを活用した発表や対面による交流の機会を設けディスカッションの場としている。研究活動は、各教員のテーマを深め研究力を高めること及び卒業研究、課題研究の指導をとおして、学会発表や論文投稿を行い、助産学領域全般の研鑽を積んでいる。また、オンライン研修や学会等に積極的に参加し自己研鑽を積み重ねている。

2 教育活動の現状と課題

助産学コース学生は、夜間に共通科目を履修し、1年次の前期は昼夜にわたって講義・演習があるため、課題の重複や体力・健康面の支援も行っている。今年度の授業は、大学の方針に沿って新型コロナウイルス感染対策を実施し、ほぼ対面授業を行った。夜間の共通科目は、Zoom によるオンライン授業が多いことから、時間割の都合で助産学コースの授業も一部を Zoom で実施した。大分市内の小中学校での「いのちの教育」は、学内で再々のリハーサルを実施し、3年ぶりに現地で経験できた。1、2年次生が重複し密になる時間を避けるように実習室の使用日時の調整をし、感染対策を行い短時間で効率よく練習する方法をとった。1年次生の段階的 OSCE は、看護技術の手順を意識しがちであるため、その技術の目的や事例に応じた方法を思考するグループディスカッションを行うワークショップ形式を取り入れた。発表後のデブリーフィングの時間を活用し各自が自身の考えを述べる機会にもなった。1年次後期の NICU 課題探究実習は、臨地 2日と学内での実習を行った。専任教員が、実習前に学内でグループディスカッションするなど学びが深まるようにした。妊娠期課題探究実習は、感染対策を実施し、ほぼ計画通りの日数を実施した。受診妊婦数の減少や施設の感染対策方針等から超音波診断装置を用いた妊婦健康診査の件数は施設による差がみられた。2月後半から予定通り継続事例を受持ち実習した。

2年次生の4月の分娩介助演習は、研究室作成の動画を活用し各自で事前学習を行い、3グループに分かれて練習するなど感染対策を行い OSCE も予定通り実施した。

分娩介助を伴う助産学統合実習は、施設との打ち合わせを入念に行い、防護物品などの感染対策を実施しながら5月から8月にかけて約4か月間の実習を行い、実習目標はほぼ達成できた。実習開始前から心身に不調のあった学生1名が、実習開始後2週目から欠席し家族と受診後に休学した。発熱・咽頭痛（PCR 検査を実施）、過換気症状のあった学生が数日欠席したが、他の学生は大きく体調を崩すことなく実習した。教員は、学生個々の問題解決能力や対人対応能力に応じた指導を展開した。助産師国家試験受験に必須の分娩介助経験であるため、実習施設の協力を得て可能な限り経験できるように待機等を実施し、学生は直接分娩介助を平均 9.8 例（9～10 例）実施した。次年度も全教員で学生の体調管理に留意しながら支援する。

2年次後期の助産所助産師の自律した助産ケアの実際は新型コロナウイルス感染防止対策で中止した。学会のオンライン講義の視聴や母体搬送シミュレーションを演習し、助産師としてのアイデン

ティティの基礎を形成した。課題研究は指導教員の指導を受け、全員提出し成果を報告した。令和4年度修了生5名は県内外の病産院に就職し、県内就職者は2名であった。

令和4年度から新カリキュラムがスタートした。段階的OSCEのさらなる修正を行い、大学院生としての思考力、自己学習力を養い人間関係スキルを向上させる方法を研究室教員でディスカッションし改善を図る。

3 研究活動の現状と課題

学内外の研究費を獲得し、さらに他機関の支援を受け、各自の課題を探究し続けており、感染対策を図りつつ調査を進めている。卒業研究は、教員の研究テーマの一部や教員のテーマとは直接関係しないものの助産学の発展の基礎となる研究を指導した。大学院生の特別研究・課題研究は、主または副指導教員として指導に携わり、共同研究者として関連学会誌に複数掲載されるなど成果を残している。過年度修了生の論文を投稿するべく継続して支援していくことは継続課題である。

5-15 保健管理学研究室

1 活動方針

学部教育については、看護管理学や在宅看護論に関する授業を通して、学生がマネジメントやリーダーシップ、在宅看護に関する能力を育成することを方針とする。大学院教育では、看護管理・リカレントコースをはじめとした実践者を対象に、看護管理学に関する教育を行い、実践に役立つ授業を行うことを方針とする。さらに、看護管理学や在宅看護学に関する研究を行い、研究の新たな知見を学部と大学院教育に役立て、教育と研究を通して地域社会に貢献することを方針とする。

2 教育活動の現状と課題

学部教育では、学部2年次生を対象に看護管理学の基礎となる授業を行い、4年次生に対しては実習経験等の事例を通して看護管理学の基礎を学ぶ教育を行った。また、2年次生の家族看護論、3年次生の在宅看護論では、学生が療養者とその家族に看護を提供できるよう、理論および法令制度を含めた教育を行った。令和5年度は、2年生の看護管理学概論Ⅰと家族看護学が新カリキュラムとなる。また、3年次生と4年次生は新カリキュラムへの移行を視野に準備を進める。各科目の教育を充実させると共に留年生など、単位未取得者に対して、履修がスムーズに行えるように対応を行う。

大学院は、修士課程および博士後期課程の学生を対象に看護管理学特論、修士課程の学生を対象に看護管理学演習を行った。修士課程看護管理・リカレントコースの課題研究および博士課程後期看護学専攻コースの研究についても研究室の教員が、主担当、副担当として個別指導やグループによるゼミ形式の指導を行った。令和5年度は、修士課程看護管理・リカレントコース3名、博士課程後期看護学専攻コース1名の計4名を新たな大学院生として受け入れる。講義や演習、研究を通してよ

り良い教育を提供する。

3 研究活動の現状と課題

看護管理学や在宅看護学に関する研究として、令和4年度は大分県中小規模病院等看護管理者支援研修に加えて、西部地域と宇佐中津地域で支援を行った。令和5年度は、科研費と併せて西部地域と由布地域の支援を行う。令和4年度に採択された科研費の研究課題「中山間地域の訪問看護ステーションにおける課題と安定・持続化に向けたモデルの検討」「中小規模病院の看護師がやりがいを獲得するプロセスの解明と支援指針の開発」「中小規模病院の看護管理者の管理行動が看護の質と定着に及ぼす効果予測モデルの開発」は、文献レビューやデータ収集、研究成果に関する学会発表を行った。令和5年度は、研究成果の学会発表に加え、論文の作成や投稿を行いながら、各研究計画に沿って次の段階に進む。

5-16 地域看護学研究室

1 活動方針

学部教育では、看護の対象を個人から集団、地域へと視野を広げ、生活の場での看護や生活に目を向けた看護職育成への社会的要請を反映し、すべての看護職者の基礎的知識として「地域看護」の思考を持った看護師の育成を目指す。

大学院教育では、少子高齢社会における生涯を通じた健康づくりの支援や、産業・学校を含む地域全体を対象として活動できる保健師の育成を目指している。今年度より新カリキュラムとなり、科目数が増えたため、授業方法を工夫し、その効果を確認しながら、最適な教育の提供を行う。

2 教育活動の現状と課題

学部教育では、2年次後期に地域看護学概論、3年次後期に健康支援論演習及び地域生活支援論の講義を対面で行った。講義では、毎回ミニレポートを課すことで、知識の定着と思考の広がりを促すことができ、次年度も継続していく予定である。演習では、グループワークを取り入れ、グループダイナミクスを活かした活動を期待したが、グループによっては活かすことができず、教員が適時、介入する必要があった。地域生活支援論では、コミュニティ・アセスメントの考え方を活用し、4年次で実施する実習地のデータを用いた演習を取り入れ、実習と連動した学習を強化した。4年次の実習では、COVID-19により臨地実習に行かれない学生もいたが、大学院生のTAの活用で臨地実習の経験値の差を少なくすることができた。次年度も実習では可能な限りTAを活用していきたい。

大学院教育では、1年次は、日中はコースの講義・演習・実習、夜間に共通科目の履修があり、過密なスケジュールとなる。また、実習では、長期間の実習を一人で行うため精神的ストレスが多い。そのため、教員が随時、課題や精神面の支援を行っており、次年度も学生の心身両面についての支援

を実施してく。講義では、大学院生としての主体性と論理的な思考力を向上させるために、発表、ディスカッションを多く取り入れた。次年度も継続していく。令和4年度修了生4名は県内の保健所と市町村保健センターに就職した。

3 研究活動の現状と課題

学部の卒業研究では、4名の学生に各教員が研究指導を行い、論文としてまとめた。大学院教育では、教員の指導のもと課題研究として4名が論文をまとめるとともに、その成果を2名の学生が「大分県公衆衛生学会」で発表した。また、「日本公衆衛生看護学会」で全国の大学院修士課程保健師養成の学生との交流会を持つなど、活発に研究活動を実施した。

教員は、研究成果の発表および外部の研究費獲得を目指して、研究室全員がそれぞれの研究課題に向かって各自努力を続けてきた。それぞれの研究成果は国際学会および国内学会で発表、論文として投稿した。今後も、研究の継続と課題研究や実習の成果を学会発表や雑誌投稿できるよう教育をおこなっていく。

5-17 国際看護学研究室

1 活動方針

学部教育では、国際看護学概論（2年次）、国際看護比較論・国際看護学演習（3年次）、大学院では、国際看護学特論、広域看護学演習、その他講義で国際看護に関連する内容を担当し、世界の健康課題やその背景を理解するため、歴史や風土、経済的側面など、複眼的な視点を持ってもらえるよう留意している。今年度は大学院科目国際看護学特論の履修者はいなかった。講義・演習では、日本国内のみならず世界の人々を看護の対象と捉え、1) 地球規模の保健医療に関する課題について理解し、その直接的・間接的要因や、課題に対する地域／グローバルな規模での対策について学ぶこと、2) 在留外国人や訪日外国人の増加等により急速に多様化する対象者の文化・社会的背景に着目し、文化に配慮したケア（Transcultural nursing）について学ぶことを目的としている。次年度から、国際看護学演習を選択科目とし、言語学研究室と共に運営する。文化・社会・言語背景が多様な人々を対象とした看護実践に活かせるより実践的な演習構築をめざす。

2 教育活動の現状と課題

当研究室では、グローバルヘルスに関する基本的な知識を獲得すること、また、講義や演習を通して多様な価値観に触れ、文化社会的背景が人々の健康に及ぼす影響について理解することをめざしている。しかし、今年度も昨年に続き COVID-19 感染拡大予防のため、オンライン講義も多く、グループワークもオンラインが多くなったため、ディスカッションを通して考察を深める機会が少なかった。学生は講義・演習の目標を概ね達成できたと考えるが、オンラインでの講義・演習をより効

果的にするための工夫が必要である。また、復習は小テストや科目試験の準備として定着してきたが、予習は不足していた。予習・講義／演習・復習を効果的につなげ、相乗効果が得られるよう教授内容や方法を工夫していく必要がある。

3 研究活動の現状と課題

教員は各々のテーマ「在日ムスリム女性の感染症に対する認識・態度・講堂と文化社会的要因—結核に着目して」、「看護系単科大学における学生の異文化感受性を高める国際看護学教育プログラムの検討」で科研費を獲得し継続的に研究に取り組んでいる。前者のテーマについては、その一部を卒論生と共に取り組み、MOU締結校の研究者とも協力し質問紙調査を進めた。

卒業研究として、上記1名の他に、2名の学生が性や性教育に対する多様な価値観について研究し、フィンランドの包括的性教育に関する文献調査、および、性的マイノリティに対する看護師の意識・態度・看護実践に関する文献調査に取り組んだ。また、助産学コース、NPコース、研究者コース博士後期課程の担当／副担当として、指導にあっている。

今後は、タイムマネジメントに努めて研究に取り組む時間を確保し、各々の研究を推し進めること、結果を遅滞なく論文としてまとめ発表していくことが課題である。

4 その他

大分県国際交流プラザ、JICAデスク大分、大分市国際課から国際交流に関するイベントをご紹介いただき、学生・教職員に発信している。また、大分市国際課が開催した「おおいた国際協力啓発月間」において、研究室活動のパネル展示を行った。

5-18 社会看護学教室

1 活動方針

看護の機能がより良い形で発揮され、社会で有効に機能していくためには、社会の仕組みを理解し、システム化、変革していく方法論を活用できるよう社会環境（保健医療福祉行政）の重要性やその見方を学ぶ。今年度、広域看護学講座に本研究室が設立された。

2 教育活動の現状と課題

学部では、健康支援概論、保健ボランティアを担当した。また、大学院では健康社会科学特論、広域看護学コースやNPコースの講義を一部担当した。次年度は、今年度担当した科目に加えて学部では社会保障システム論、大学院では看護政策論、保健福祉行政論を担当する。社会の仕組みや保健医療福祉行政の制度の基礎的理解に加え、各科目において現行の仕組みを変革できるよう演習も取

り入れたい。

3 研究活動の現状と課題

学部での看護政策教育プログラムの作成や新型コロナウイルス感染症の保健所と市町村との連携の在り方に関して研究を実施した。来年度も継続する予定である。結果については論文にしていくが、現在の社会や制度のなかでの必要性や重要性について考察していきたい。

6 研究助成・事業助成等

6-1 研究助成

6-1-1 日本科学振興会科学研究費助成事業（科研費）

荒木章裕

中山間地域の訪問看護ステーションにおける課題と安定・持続化に向けたモデルの検討. 若手研究.
(代表)

石田佳代子

災害時における「黒エリア」での対応に向けた実践モデル的教材の開発. 基盤研究(C). (代表)

岩崎香子、安部眞佐子

CKD 誘発オステオサルコペニア発症を防止する食事性タンパク質摂取のあり方. 基盤研究(C). (代表, 分担)

岩崎香子

身体不活動が腎疾患に糖尿病を誘発する機序の歩行制限モデルラットにおける解析. 基盤研究(C).
(分担)

内倉佑介

看護師による単純 X 線画像読影のための教育プログラムの開発. 基盤研究(C). (代表)

梅野貴恵

離乳後女性のエクオール産生能と骨代謝プロフィール回復状態の推移との関連. 基盤研究(C). (代表)

恵谷玲央

放射線発がんの新たなリスクモデルを細胞間コミュニケーションの視点から考える. 若手研究.
(代表)

小嶋光明

マイクロビーム放射線療法の抗がん効果の仕組みを細胞間コミュニケーションから紐解く. 基盤研究(C). (代表)

小野治子

生活習慣病の服薬者の医療費削減に向けた保健指導の構築. 基盤研究(C). (代表)

小野美喜

看護師の裁量範囲の拡大により生じる倫理的問題と倫理教育のあり方に関する研究. 基盤研究(C).
(代表)

影山隆之

病院看護師における夜勤時の眠気と先行睡眠・勤務時間・身体活動との関連. 基盤研究(C). (代表)
森林環境下でのリモートワークが労働者のメンタルヘルスと労働効率に及ぼす影響. 基盤研究(C).
(分担)
医療的ケアが昼夜必要な在宅療養児の生活に即した地域包括支援システムの構築. 基盤研究(C).
(分担)

加藤典子

看護基礎教育課程における政策教育プログラム導入ガイドの開発. 基盤研究(C). (分担)

草野淳子

医療的ケア児を支える訪問看護師と専門支援相談員をつなぐ連携教育プログラムの開発. 基盤研究(C). (代表)

桑野紀子

在日ムスリム女性の感染症に対する認識・態度・行動と文化社会的要因—結核に着目して. 基盤研究(C). (代表)

後藤成人

ランダム化比較試験による自殺対策ゲートキーパー養成プログラムの効果と持続性の評価. 基盤研究(C). (代表)

佐伯圭一郎

看護学生のシビリティー (civility) を育むアクションリサーチ. 基盤研究(C). (分担)
看護系大学における臨床実習前の共用試験の検討. 基盤研究(B). (分担)

定金香里

ユズ果皮飲料中のフラボノイドが抗アレルギー作用を発揮する条件の探索. 基盤研究(C). (代表)
東アジアを越境するバイオエアロゾル: 日本本土への拡散・沈着とその生体影響の評価. 基盤研究(A). (分担)

佐藤愛

地域在住高齢者のオーラルフレイルの実態調査と口腔・嚥下・咳嗽機能向上の試み. 若手研究. (代表)

佐藤栄治

自発的掛け声と立ち上がり時の体幹前傾動作が体幹及び下肢筋活動に及ぼす影響. 基盤研究(C).
(代表)

品川佳満

看護学生の情報倫理統合力の修得を目的とした学習支援ポータルサイトと演習教材の開発. 基盤研究(C). (代表)
ICT を活用した医療職との連携による新しい保育者実習プログラムの開発と評価. 基盤研究(C).
(分担)

篠原彩、桑野紀子

女性外国人技能実習生のリプロダクティブヘルスニーズに対する支援の構築. 基盤研究(C). (代表,
分担)

秦さと子

嚥下機能評価のための血中および唾液中サブスタンス P 濃度の基準値の検討. 基盤研究(C). (代表)

杉本圭以子

精神科デイケアにおけるリカバリー支援心理教育プログラムの標準的実施の可能性. 若手研究.
(代表)

田中佳子

シャント血流音から狭窄を評価する機器の開発に関する基礎的研究. 基盤研究(C). (代表)

藤内美保

看護基礎教育における臨床推論の看護の思考形成を導く教育プログラムの開発. 基盤研究(C). (代
表)

濱中良志

骨粗鬆症に対する新しい発症機序の解明と新規薬物開発. 基盤研究(C). (代表)

樋口幸

予防的スキンケアのための画像解析による新生児の皮膚評価ツールの開発. 基盤研究(C). (代表)
スキنبロットティング法を用いた新生児の皮膚トラブル発症のメカニズム解明. 基盤研究(B). (分
担)

姫野雄太

中小規模病院の看護師がやりがいを獲得するプロセスの解明と支援指針の開発. 若手研究. (代表)

福田広美、村嶋幸代

看護師長による看護師の継続意思につながる基本的心理欲求支援プログラムの開発. 基盤研究(C). (分担)

藤本優子

乳幼児を持つ親への祖父母の育児サポートは、祖父母の世代性と健康の向上に関連するか. 研究活動スタート支援. (代表)

乳児期の子どもを持つ母親の特性および育児レジリエンスの特徴と促進要因に関する研究. 基盤研究(C). (分担)

丸山加菜、桑野紀子

看護系単科大学における学生の異文化感受性を高める国際看護学教育プログラムの検討. 基盤研究(C). (代表, 分担)

森加苗愛

糖尿病をもつ成人期男性のセクシュアリティの看護ケアの質評価基準の検証. 若手研究. (代表)

矢野亜紀子、福田広美、荒木章裕、村嶋幸代、姫野雄太

中小規模病院の看護管理者の管理行動が看護の質と定着に及ぼす効果予測モデルの開発. 基盤研究(C). (代表, 分担)

山田貴子

熟練訪問看護師の臨床判断モデルの開発—新卒訪問看護師教育の開発に向けて—. 若手研究. (代表)

吉田成一

加熱式たばこによる雄性生殖系への影響および寄与因子の探索と影響の低減を目指して. 基盤研究(B). (代表)

胎児期加熱式たばこ曝露が胎児に与える影響と出生後に生じる影響の推定. 挑戦的研究(萌芽). (代表)

6-1-2 その他の研究助成

小嶋光明

細胞間コミュニケーションからマイクロビーム放射線療法の抗がん効果の仕組みを考える. 高エネルギー加速器実験機構共同利用実験. (代表)

放射線照射したマウスの骨髄・脾臓内造血幹細胞の細胞動態の解析～放射線誘発マウス急性骨髄性白血病のメカニズムを考える～. 2022年度放射線災害・医科学研究拠点共同研究. (代表)

加藤典子、村嶋幸代

新型コロナウイルス感染症の更なる波に向けた保健所の体制整備の充実に関する調査. 公益社団法人日本看護協会 感染拡大に備える看護提供体制の確保に関する調査研究助成. (代表, 分担)

樋口幸

胎脂の脂質組成分析に関するプロトコールの開発. サラヤ株式会社共同研究費. (代表)

樋口幸、吉田成一

微酸性電解水を用いたディスプレイの開発. 鳥繁産業株式会社 受託研究費. (代表, 分担)

村嶋幸代

ICT活用による保健師活動評価手法の開発及びPDCAサイクル推進に資する研究. 令和4年度厚生労働科学研究費補助金 健康安全・危機管理対策総合研究事業. (分担)

6-1-3 学内の競争的研究資金

岩崎香子

慢性腎臓病に伴う血管石灰化の発生と骨代謝異常の進展に対する食事性フラボノイド摂取の効果.
先端研究

石田佳代子、藤内美保、山田貴子、内倉祐介

デジタル聴診器を使用したフィジカルアセスメントにおける教育効果の検討. 先端研究

恵谷玲央

機械学習を適用した胸部診断画像の経時的解析による異常画像の早期検出法の検討. 奨励研究

岡田悠希

単調欠測データの基づく判別関数に対する冗長性検定. 奨励研究

小嶋光明

がん・正常共存細胞集団をもちいた放射線適応応答による抗がん効果の検討. 先端研究

甲斐優子、小野治子、加藤典子、藤本優子、佐藤愛、村嶋幸代

修士課程保健師教育の臨地実習受け入れにより実習指導者にもたらされる変化に関する研究. プロジェクト研究

影山隆之、福田広美、荒木章裕、堀裕子、永松いずみ、木嶋彩乃、篠原彩

予防的家庭訪問実習における世代間交流が高齢者に及ぼす効果に関する研究. プロジェクト研究

佐藤愛

反射性咳嗽力の加齢性変化と関連要因の検討ー咳衝動と血中サブスタンス P 濃度に着目してー.
先端研究

杉本圭以子、梅野貴恵

更年期女性の更年期症状とヨガ実施経験およびマインドフルネス傾向との関連. 先端研究

藤内美保、甲斐博美、石田佳代子

大学院 NP 教育カリキュラムの評価と再構築に関する研究. 先端研究

橋本志乃、藤内美保

終末期にある思春期がん患者への予後告知に関わる看護師の役割の検討. 奨励研究

藤本優子

地方都市における親の育児をサポートする祖父母の「世代性の特徴と関連要因の検討」奨励研究
(科研費採択により辞退)

渡邊一代、小野治子

妊娠可能な時期の女性の健康および妊孕力に関する自己認識の調査、奨励研究

6-2 事業助成

影山隆之、篠原彩

新型コロナウイルス感染症患者の後遺症研究、大分県地域連携プラットフォーム事業費補助金、
(分担)

姫野雄太

令和4年度医工連携医療関連機器等事業化補助事業、

福田広美

令和4年度大分県地域医療介護総合確保基金大分県中小規模病院等看護管理者支援事業、

6-3 外部研究者受入れ

本年度実績なし

7 研究業績

7-1 著書

編集 勝又浜子, 加藤典子, 清水嘉代子, 田母神裕美: 看護法令要覧 令和 5 年版, 日本看護協会出版会, 東京, 2023.3.

アン・ギャラガー著, 宮内信治・小西恵美子訳: スローエシックスと看護のアート ケアする倫理の物語. 南江堂, 東京, 2022.6.

村嶋幸代: I:基礎編 第 5 章 保健師と研究 1 実践に不可欠な「研究力」, 新版 保健師業務要覧 第 4 版 2023 年版, 248-254, 日本看護協会出版会, 東京, 2023.2.

鈴木由美, 村嶋幸代: II:実践編—地域診断に基づく展開事例— 精神疾患患者への育児支援, 新版 保健師業務要覧 第 4 版 2023 年版, 374-387, 日本看護協会出版会, 東京, 2023.2.

7-2 原著論文・査読付総説

Iwashita K, Etani R, Kai M, Ojima M: (2023). Effect of standard skin care treatments on skin barrier function in X-irradiated hairless mice. Asia-Pacific Journal of Oncology Nursing, 10(1), 100149, 2023.

小林敏生, 田淵啓二, 乗越健輔, 安東由佳子, 影山隆之, 古屋敷明美: 自然豊かな地方への滞在型転地勤務がもたらすメンタルヘルスおよび QOL への影響—IT 企業社員を対象とした検討. 日本ヒューマンヘルスケア学会誌 7(2): 39-49, 2022.

Magawa S, Yanase S, Miyazaki T, Igura K, Maki S, Nii S, Nii M, Tanaka H, Kondo E, Ikeda T, Kageyama T: Relationship between Edinburg Postnatal Depression Scale (EPDS) scores in the early postpartum period and related stress coping characteristics. Healthcare 10, 1350, 2022. DOI: 10.3390/healthcare10071350

田中生弥子, 影山隆之: 中学生のための SOS の出し方に関する教育の効果—自殺予防教育プログラムの一環として. 学校メンタルヘルス 25, 40-51, 2022.

草野淳子, 高野政子: 重症心身障害児(者)施設・病院における特定行為を必要とする入所者の状況と看護管理者の意識. 小児保健研究 81(1), 68-76, 2022.

草野淳子, 神野桃子, 高野政子: 訪問看護師が行う医療的ケア児への看護の実践に関する文献検討. 日本小児看護学会誌 31, 87-93, 2022.

吉村幸永, 草野淳子, 高野政子: 大分県内の小・中・高等学校におけるがん教育の実施準備状況と養護教諭の取り組みに関する実態調査. 小児保健研究 81(2), 155-160, 2022.

仲野水稀, 桑野紀子, 梅野貴恵: 日本の助産学生が感じる外国人妊産婦をケアする際の文化的障壁とその影響要因. 母性衛生 63(1), 267-274, 2022.

後藤成人, 宮本翔平: アルコール関連問題に関する精神科看護師の考え方と対応内容の現状. 日本精神科看護学術集会誌 65(1), 256-257, 2022.

Sadakane K, Ichinose T, Maki T, Nishikawa M: Co-exposure of peptidoglycan and heat-inactivated Asian sand dust exacerbates ovalbumin-induced allergic airway inflammation in mice. *Inhalation Toxicology*, 34(9-10), 231-243, 2022. <https://doi.org/10.1080/08958378.2022.2086650>.

Akaji S, Sagawa T, Honda A, Miyasaka N, Sadakane K, Ichinose T, Takano H: Post-staining Raman analysis of histological sections following decolorization. *Analyst*, 147(20), 4473-4479, 2022. <https://doi.org/10.1039/D2AN01138G>.

佐藤栄治: 自発的かけ声「どっこいしょ」と立ち上がり動作の体幹前傾動作が体幹および下肢筋活動に及ぼす影響. 看護理工学会誌 10, 100-110, 2023. https://doi.org/10.24462/jnse.10.0_100

篠原彩, 影山隆之, 荒木章裕, 福田広美, 品川佳満, 堀裕子, 永松いずみ, 佐藤愛, 木嶋彩乃, 村嶋幸代: 地域在住高齢者と看護学生による世代間オンライン交流会の試み. 老年社会科学 44(4), 359-368, 2023.

Kudoh R, Komiya K, Shinohara A, Kageyama T, Hiramatsu K, Kadota J: Marital status and post-COVID-19 conditions, *Respiratory Investigation*, 2023. <https://doi.org/10.1016/j.resinv.2023.01.001>.

杉本圭以子: 精神科デイケアにおける IMR の参加者同士の関係と参加者に対する実施者の関わりーリカバリー促進に有効な関係とはー. 精神障害とリハビリテーション 26(1), 65-72, 2022.

竹山ゆみ子, 永松有紀, 藤内美保: 施設入所高齢者の自立度別栄養状態の実態と舌圧・身体計測値の栄養評価指標としての活用可能性. 看護理工学会誌 9巻, 143-152, 2022.

藤澤彩花, 林猪都子, 徳丸由布子: 未就学児を育てる女性看護職の就業継続要因の検討. 母性衛生 63 (2) , 539-546, 2022.

松永知亜紀, 林猪都子, 永松いずみ: 西日本地域におけるアドバンス助産師更新の現状と課題. 母性衛生 63(2), 597-604, 2022.

樋口幸, 巻野雄介, 田中佳子, 大貝和裕. 微酸性電解水の 1 週間反復噴霧がヒト皮膚に与える影響－二重盲検プラセボ対照並行群間比較試験－. 看護理工学会誌, 9, 72-80, 2022.

Shimizu S, Yonezawa K, Haruna M, Tahara-Sasagawa E, Usui Y, Minematsu T, Higuchi S : Relationship between facial skin problems with a focus on inflammatory cytokines and the presence of Malassezia in 1-month-old infants. Scientific Reports 13, 1-11, 2023.

矢野博之, 矢野真美, 樋口幸, 濱中良志: 微酸性電解水の線維芽細胞に対する細胞障害性の評価. 看護理工学会誌 9, 170-177, 2022.

姫野雄太: 新型コロナウイルス感染症流行下にがん手術を受ける患者の術前の体験 - 消化器がん患者を対象とした分析 -. 日本手術看護学会誌, 17(2), 186-191, 2022.

藤本優子, 山下正, 都筑千景: 委託型地域包括支援センターが立案する事業目標の根拠となるデータとその具体的提示方法. 日本公衆衛生看護学会誌, 11(2), 126-133, 2022

藤本優子, 小西かおる: 乳幼児を養育する母親が祖母から受ける育児サポートの種類と関連要因 . 日本世代間交流学会誌, 12(2), 33-42, 2023.

宮内信治: 音調に見える Emma の自己欺瞞. 日本言語音声学会論文集 第 3 号, 21-34, 2022.

宮内信治: 引用符付き自由間接話法の朗読表現 : Jane Austen's *Emma*, Vol. 1. 英語教育音声学 第 2 巻, 185-190, 2023.

7-3 その他の論文等

岩崎香子：教育講演 1 腎臓が障害されると骨はどうなるのか？—老化モデルとしての尿毒症骨—実験動物の骨から考えた腎不全骨と加齢骨の共通点と相違点. 第 42 回日本骨形態計測学会特集号 日本骨形態計測学会雑誌 第 32 巻 2 号 p28-29

梅野貴恵：大分県立看護科学大学大学院看護学研究科博士課程（前期）看護学専攻実践者養成助産学コース. 助産師 76(1), 32-33, 2022.

影山隆之：労働，メンタルヘルス，自殺予防. 自殺予防と危機介入 42(2), 14-19, 2022.

影山隆之：「新型コロナウイルス問題」と向き合うメンタルヘルス活動：これからの自殺対策のために. 日本社会精神医学会雑誌 31, 259-263, 2022.

影山隆之：自殺予防と向き合う～身近な課題として看護師にできること. 看護のチカラ 578, 22-28, 2022.

後藤成人，影山隆之：自殺対策ゲートキーパー（GK）という用語を知る一般住民、および GK 養成研修の受講経験者・受講希望者の特徴 - 今後の研修計画の一助として -. 自殺予防と危機介入. 43(1), 54-60, 2023.

杉本圭以子：メンタルヘルス支援のための看護師によるアセスメント. こころの健康 37(2), 7-10, 2022.

渡辺莉緒，杉本圭以子，梅野貴恵：産科外来助産師の産後うつを予測する視点と他職種との情報共有の実践. 助産師 77(1), 33-37, 2023.

廣田真里，秦さと子，石丸智子，田中佳子：新カリキュラム思考から 1 年が経過して得た手ごたえ. 看護展望 48(4), 32-36, 2023.

宮内信治：自由間接話法における Wh-疑問文の音調. 英語教育音声学 創刊号, 147-151, 2022.

Chris Gastmans 著，八尋道子，宮内信治，小西恵美子訳：Dignity-enhancing nursing care: A care ethics approach. 「尊厳を高める看護ケア：ケアの倫理のアプローチ」. 日本看護倫理学会誌 14 (1), 59-70, 2022.

鎌田久美子，村嶋幸代，木嶋彩乃. 保健医療福祉連携システムの構築方法の解明と連携モデルの提案. 保健師ジャーナル 78(3), 228-231, 2022.

本田あゆみ, 村嶋幸代. 保健医療福祉連携システムの構築における県庁の役割 県庁と全保健所が協働して退院調整ルールを策定し、全医療圏で運用している福島県の取り組みから. 保健師ジャーナル 78(4), 318-323, 2022.

7-4 プロシーディングス

菅谷愛美, 後藤愛, 小泉恵子, 松本佳代, 島田珠美, 黒木雪絵, 草野淳子. 第 8 回日本 NP 学会学術集会シンポジウム「小児診療看護師(NP)の活動と未来～在宅・施設・病院の活動から役割について考える～」

7-5 報告書

Ojima M, Ito A, Usami N, Ohara M, Suzuki K, Kai M. The Cellular Response of DNA Damage in X-irradiated Cancer Cell Population-Verification of Radiation-Induced Field Size Effect in Cancer Cell-. Photon Factory Activity Report 2021, #39, 2022.

飯本武志, 古渡意彦, 山口一郎, 五十嵐悠, 榎本敦, 小嶋光明, 小田啓二, 川島恒憲, 中村美和, 浜田信行, 福土政広, 笠井篤, 辻本忠, 橋本周, 高橋賢臣, 秋吉優史, 阪間稔: エックス線被ばく事故検討WG 経過報告書, 日本保健物理学会, 2022.7.

7-6 学術講演

岩崎香子：教育講演 1 腎臓が障害されると骨はどうなるのか？－老化モデルとしての尿毒症骨－実験動物の骨から考えた腎不全骨と加齢骨の共通点と相違点..第 42 回日本骨形態計測学会，米子市，2022.7

小嶋光明：モデル授業-放射線の健康影響-. 日本放射線看護学会第 11 回学術集会，東京，2022.9.

影山隆之：交替制勤務に従事する工場労働者への睡眠衛生教育. シンポジウム 1 産業保健領域における睡眠問題を考える～職種・対象者別のアプローチ. 日本睡眠学会第 47 回定期学術集会，京都，2022.6.

桑野紀子、土谷ちひろ、マルティネス真喜子、松永早苗：研究委員会企画 日本国際看護学会員が創る国際看護. 日本国際看護学会第 6 回学術集会、オンライン、2022.9.18

Kuwano N: Overview of nursing issues in the aging society of Japan.” Hebei Medical University International Nursing Academic Forum on “Integration, Innovation, and Development. Zhongshan Campus, Hebei Medical University. Invited lecture, Online, 2022 June 12.

桑野紀子：シンポジウム 新型コロナウイルス感染症パンデミックを通して見えた課題、今後求められる看護のコンピテンシー、教育現場の視点から. 第 63 回日本熱帯医学会大会、第 26 回日本渡航医学会学術集会. 別府ビーコンプラザ（ハイブリッド開催），2022.10.8（招待）

宮内信治：スローエシックス. 静岡県立大学看護学研究科・看護学部特別講義，オンライン，2022.12.

吉田成一：大気汚染と雄性生殖機能：過去から現在. 第 63 回大気環境学会年会，堺市，2022. 9.

吉田成一：研究紹介：生体への影響. 第 3 回加熱式たばこ研究討論会，新宿区，2023. 3.

吉田成一：加熱式たばこの曝露による雄性マウス生殖系への影響. 第 49 回日本毒性学会学術年会，札幌市，2022. 6.

7-7 学会発表等

足立綾, 高野政子, 草野淳子: 重症心身障害児の摂食嚥下機能のアセスメントの実態. 日本小児看護学会第 32 回学術集会, 福岡, 2022.7.

石田佳代子: DVD 教材「看護師を対象とした災害時における黒エリアでの対応シミュレーション」の製作とその有用性. 第 28 回日本災害医学会総会・学術集会, 岩手県, 2023.3. (口演発表)

岩崎香子, 堀怜南, 柴田めぐみ, 鈴木恵子, 長岡正博, 大和英之, 風間順一郎. [4- (メチルチオ) フェニルチオ]メタンビスホスホネート投与は腎障害初期の骨脆弱性形成を緩和する. 第 42 回日本骨形態計測学会, 米子市, 2022.7

Uchikura Y, Tonai M, Etani R : Use of the image of Chest X-ray for nursing assessment; Cross-sectional study of clinical nurses featuring respiratory and circulatory management , 26th East Asian Forum of Nursing Scholars, Tokyo, 2023.3.

江藤美咲, 梅野貴恵. 出生前診断検討段階から出生前までの夫婦の心理的特徴と医療職としての支援に関する文献的研究. 第 63 回日本母性衛生学会学術集会, 神戸, 2022.9.

Etani R, Ojima M. Effect of repeated low-dose X-irradiation on mouse head to Sfp11 gene of hematopoietic stem cells in non-irradiated femur. 第 65 回日本放射線影響学会, 大阪, 2022.9.

恵谷玲央: 機械学習を用いた肺炎画像診断支援の構築に向けた基礎研究. 第 59 回放射線影響懇話会, 福岡, 2022.10.

岡田悠希, 首藤信通 : 2-step 単調欠測データに基づく判別分析の変数選択に関する仮説検定. 日本計量統計学会第 36 回大会, 愛媛, 2022.5.

Ojima M, Ito A, Usami N, Ohara M, Suzuki K, Kai M. Considering the anticancer effect of microbeam radiotherapy from the viewpoint of cell-to-cell communication-Comparison of the survival rates between normal and cancer cells after non-uniform X-irradiation-. 第 65 回日本放射線影響学会, 大阪, 2022.9.

Ojima M, Iwata M. Future prospects for new radiotherapy -Current status and Challenges of FLASH radiotherapy and microbeam radiotherapy-. 第 65 回日本放射線影響学会, 大阪, 2022.9.

堀田昇吾, 加藤知子, 太田勝正, 野戸結花, 赤羽恵一, 小嶋光明, 佐藤潤, 吉田浩二, 明石眞言, 草間朋子. 住民支援のための看護職で構成する「原子力災害保健支援チーム (NuHAT : Nuclear disaster Health Assistance Team)」に関する検討. 日本放射線看護学会第 11 回学術集会, 東京, 2022.9.

Ojima M, Ito A, Usami N, Ohara M, Suzuki K, Kai M. The response of DNA damage in normal human cell populations locally irradiated with X-ray microbeams. 第 59 回放射線影響懇話会, 福岡, 2022.10.

小嶋光明, 伊藤敦, 鈴木啓司, 宇佐美德子, 大原麻希, 甲斐倫明. X 線マイクロビームを用いた放射線に対するヒト正常・がん細胞集団の応答～マイクロビーム放射線療法の抗がん効果を考えるための基礎研究～. 第 4 回日本放射線安全管理学会・日本保健物理学会合同大会, 福岡, 2022.12.

安藤亜実, 小野治子: 働く女性の月経随伴症状および対処行動の実態, 第 11 回日本公衆衛生看護学会学術集会, 仙台, 2022, 12.

山口花菜, 小野治子, 杉本圭以子: 精神保健福祉対応における市町村保健師と警察の連携の実態. 第 68 回大分県公衆衛生学会, 大分, 2023.3.

影山隆之, 篠原彩, 小宮幸作, 平松和史: 大分県における COVID-19 患者の後遺症に関する調査: 日常生活の回復度およびトラウマ的症状の観点から. 第 68 回大分県公衆衛生学会, 大分, 2023.3.

本田佐和子, 影山隆之, 後藤成人: 大分県内の健康経営認定事業所における睡眠衛生教育、適正飲酒教育、ストレスチェックの実施状況と業種、従業員数、職場文化との関連. 第 68 回大分県公衆衛生学会, 大分, 2023.3.

黒岩千翔, 影山隆之: 病棟で 3 交替勤務に従事する看護職者の勤務中の眠気と身体活動量の関連: 勤務時間帯毎の比較. 日本睡眠学会第 47 回定期学術集会, 京都, 2022.6.

齊藤友子, 影山隆之: コロナ禍における保育者の職業性ストレスと精神健康・離職意向の背景要因の検討. 日本精神衛生学会第 38 回大会, 神戸, 2022.10.

福島哲也, 佐藤愛香, 佐藤みゆき, 小野允久, 後藤かおる, 梅木達也, 原美和, 衛藤龍, 影山隆之: 精神科新人看護師の精神看護実践力を高める為の学習活動. 第 67 回九州精神医療学会, 別府, 2022.11.

芦刈信哉, 佐藤理恵, 永田由美, 児玉美由紀, 小田幹代, 河向勝貴, 衛藤龍, 影山隆之: 機能別看護から受け持ち制看護へ～より充実した業務遂行を目指して. 第 67 回九州精神医療学会, 別府, 2022.11.

加藤則子, 田口美穂子, 麻生保子, 加藤典子, 澤田いずみ, 蓋若琰, 塩田昇, 梶原由紀子, 江上千代美: 女性保護者の地域とつながる力と子育て支援資源 活用に関する検討. 第 81 回日本公衆衛生学会総会, 山梨県, 2022.10.

野村陽子, 石橋みゆき, 小山田恭子, 池田真理, 田中幸子, 西垣昌和, 加藤典子, 岩田直美: 看護基礎教育課程における政策教育プログラム導入ガイドの検討. 第 42 回日本看護科学学会交流集会, 広島県, 2022.12.

草野淳子, 山口礼華, 足立綾: 小児病棟の看護師が白血病患児と家族へ実施している緩和ケアに関する文献検討. 第 69 回日本小児保健協会学術集会, 三重, 2022.6.

草野淳子, 足立綾: 訪問看護師が行う重症児に対するアセスメントの視点を構成する因子の検討. 日本小児看護学会第 32 回学術集会, 福岡, 2022.7.

草野淳子, 足立綾, 橋本志乃: 小児病棟の看護師が白血病患児と家族へ実施している緩和ケアに関する文献検討. 第 28 回大分県小児保健協会学術集会, 大分, 2022.9.

Naka H, Kuwano N: Difficulties Faced by Public Health Nurses in Providing Postpartum Maternal and Child Health Services to Foreign Residents in Japan. 26th East Asian Forum of Nursing Scholars, Tokyo, 2023.3.

金城芳秀, 李廷秀, 西川浩昭, 佐伯圭一郎: 看護学生によるシビリティの例示—教育学習環境におけるアクションリサーチから—. 第 87 回日本健康学会総会, 東京, 2022.11

定金香里, 市瀬孝道: 防かび剤チアベンダゾール経口曝露によるマウスアレルギー性喘息への影響の検討. 第 52 回日本職業・環境アレルギー学会総会・学術大会, 福井, 2022. 6.

定金香里, 市瀬孝道: 輸入果実に使用される防かび剤経口曝露によるマウスアレルギー性気道炎症への影響評価. 第 93 回日本衛生学会学術総会 東京, 2023. 3.

山内珠鈴, 佐藤愛: 老人クラブ参加者におけるオーラルフレイル危険度別の咀嚼力の実態. 第 68 回大分県公衆衛生学会, 大分, 2023.3.

Shinohara A, Kawasaki R, Kuwano N, Ohnishi M: Interview survey of physical and mental changes and coping strategies among 13 Vietnamese female technical interns living in Japan. 26th East Asian Forum of Nursing Scholars, Tokyo, 2023.3.

篠原彩, 影山隆之, 福田広美, 木嶋彩乃, 村嶋幸代: 看護学生による予防的家庭訪問実習 (第8報): コロナ禍での訪問実習と学生の学び. 第81回日本公衆衛生学会総会, 甲府, 2022.10.

篠原彩, 影山隆之, 福田広美, 村嶋幸代: 看護学生による予防的家庭訪問実習 (第9報): 世代間交流が高齢者に及ぼす影響. 第81回日本公衆衛生学会総会, 山梨, 2022.10.

秦さと子, 後藤真優: ショウガ成分含有飴の嚥下反射惹起への影響. 第28回日本摂食嚥下リハビリテーション学会学術大会, 千葉, 2022.9.

杉本圭以子: IMR 実施経験による精神科デイケアスタッフのリカバリーに対する考え方の変化, 日本精神保健看護学会第32回学術集会オンライン大会, 2022.6.

杉本圭以子: 更年期女性の更年期症状とヨガ実施経験およびマインドフルネス傾向との関連, 日本マインドフルネス学会第9回学術集会オンライン大会, 2023.3.

藤丸阿希子, 藤内美保, 山田貴子: 令和4年度指定規則改正に向けた臨床判断能力向上に関する看護系大学の教育計画の実態と課題, 日本看護研究学会第48回学術集会, 松山市, 2022.8.

橋本志乃, 村嶋幸代, 田口敦子, 春山早苗: 保健活動における ICT 活用の先駆的自治体の現状と課題及び成果, 第42回日本看護科学学会学術集会, 広島, 2022.12.

西田欣広, 蓮見令奈, 矢野博之, 牧大介, 濱中良志: β -secretase 欠損マウスにおける成長ホルモン分泌不全が暗期の行動リズムへ与える影響. 第45回日本分子生物学会, 千葉市, 2022.11.

矢野真美, 矢野博之, 濱中良志, 樋田真理子, 松尾哲孝, 吉岡秀克: 放射線による I 型コラーゲン発現調節における長鎖非コード (lncRNA) の機能解析. 第45回日本分子生物学会, 千葉市, 2022.11.

森下麗華, 樋口幸, 他: 新生児期のおむつ皮膚炎の発症に関連する要因の検討 保清・スキンケアと皮膚バリア機能に焦点を当てて. 第63回日本母性衛生学会学術集会, 神戸, 2022.9.

森楓, 樋口幸, 他: 清拭素材が皮膚に及ぼす影響 皮膚バリア機能と表皮に焦点をあてて. 第63回日本母性衛生学会学術集会, 神戸, 2022.9.

辻憂華, 樋口幸: 微酸性電解水と一般消毒薬の皮膚影響に関する比較-1 か月間の反復塗布の影響-. 第10回看護理工学会学術集会, 東京, 2022.10.

姫野雄太：看護師のやりがいに関する研究の動向。第48回日本看護研究学会学術集会, Web, 2022.8.

姫野雄太, 福田広美, 藤内美保：中規模病院の療養病棟に勤務する看護師のやりがいの構造解明への試み－SCATを用いた1事例分析－。第42回日本看護科学学会学術集会, 広島, 2022.12.

Himeno Y, Fukuda H, Tonai M：Attempt to Elucidate the Structure of challenging of Nurses Working in a Medium-Sized Hospital: An Analysis of Two Case Studies. 26th East Asian Forum of Nursing Scholars, Tokyo, 2023.3.

Fujimoto Y, Sakagami Y, Tsuzuki C, Konishi K：Conceptual Structure of Mothers' Needs for Grandmothers' Childcare Support and Development of Measurement Tools in Japan. The 7th ICCHNR conference Online , 21-22 June 2022

Sakagami Y, Fujimoto Y, Konishi K：Home-visit nursing “outcomes” evaluated by both home-visit nursing agencies and families of children with medical complexity in Japan. The 7th ICCHNR conference Online , 21-22 June 2022

都筑千景, 藤本優子, 藪本初音：地域・職域連携推進に向けた効果的な協議会のあり方について考える～職域の健康づくりを地域の健康づくりへ～, 第11回日本公衆衛生看護学会 仙台 17-18 December 2022

Fujimoto Y, Sakagami Y, Konishi K：Patterns and characteristics of childcare support of mothers by grandmothers living in urban areas in Japan. The 26th EAFONS Online, 10-11 March 2023

Sakagami Y, Fujimoto Y, Konishi K：Development of the Home-visit Nursing Quality Indicators for Children with medical complexity – Adding ‘Outcome’ items as evaluated by families – , The 26th EAFONS Online, 10-11 March 2023

吉田浩二, 堀裕子他：編集委員会企画：優秀論文賞受賞口演「がん放射線療法看護認定看護師の在籍する医療機関における放射線皮膚炎の発生およびケアに関する実態調査」～会員の投稿を促すために～.日本放射線看護学会第11回学術集会, Web 開催, 2022.9.18.

御手洗歩, 中村志津子, 堀裕子他：コロナ禍におけるエンゼルケアに対しての患者家族の思い. 大分県病院学会, 別府, 2022.11.

丸山加菜, 桑野紀子, 小野七菜恵, 野村弥生：オンラインによる異文化交流が看護学生に及ぼす影響. 第6回日本国際看護学会学術集会, オンライン, 2022.9

宮内信治: 引用符付き自由間接話法の朗読表現 : Jane Austen's *Emma*, Vol. 1 受容理論から朗読音調を考える. 日本英語教育音声学会第2回大会, 北九州市, 2022. 5.

宮内信治: 翻訳作品に見るスローエニックスの6つの要素. 日本看護倫理学会第15回年次大会, 沼津市, 2022. 5.

田口敦子, 村嶋幸代, 春山早苗, 杉山大典, 水流聡子, 赤塚永貴, オーガナイズドセッション「保健師活動の質評価とDX」. 第7回日本臨床知識学会学術集会, 東京都, 2023.2.

Murashima S, Taguchi A, Haruyama S, Hashimoto S : Survey of the use of ICT in local government maternal and child health services in Japan. 26th East Asian Forum of Nursing Scholars, Tokyo, 2023.3.

森加苗愛, 岡佳子, 岩橋淑恵: 糖尿病をもつ成人期男性のセクシュアリティの看護ケアの質評価基準の評価 ～糖尿病教室における看護ケアの取り組みから～. 第27回日本糖尿病教育・看護学会学術集会, 大阪, 2022.9.

餘目千史, 佐藤栄子, 村角直子, 岡佳子, 清水安子, 住吉和子, 高橋慧, 東めぐみ, 藤原優子, 山崎優介, 山本裕子, 森加苗愛: COVID-19感染拡大による糖尿病患者への教育・看護に関する実態調査—外来における教育・看護に焦点を当てて—. 第27回日本糖尿病教育・看護学会学術集会, 大阪, 2022.9.

山本裕子, 高橋慧, 住吉和子, 餘目千史, 岡佳子, 佐藤栄子, 清水安子, 東めぐみ, 藤原優子, 村角直子, 山崎優介, 森加苗愛: COVID-19感染拡大による糖尿病患者への教育・看護に関する実態調査—病棟における教育・看護に焦点を当てて—. 第27回日本糖尿病教育・看護学会学術集会, 大阪, 2022.9.

山崎優介, 東めぐみ, 清水安子, 餘目千史, 岡佳子, 佐藤栄子, 住吉和子, 高橋慧, 藤原優子, 村角直子, 森加苗愛, 山本裕子: COVID-19感染拡大による糖尿病患者への教育・看護に関する実態調査～看護師が捉えた地域連携への影響～. 第27回日本糖尿病教育・看護学会学術集会, 大阪, 2022.9.

岡佳子, 森加苗愛, 藤原優子, 餘目千史, 佐藤栄子, 清水安子, 住吉和子, 高橋慧, 東めぐみ, 村角直子, 山崎優介, 山本裕子: COVID-19感染拡大による糖尿病患者への教育・看護に関する実態調査～看護師が捉えた療養生活の困難さと心理的苦痛～. 第27回日本糖尿病教育・看護学会学術集会, 大阪, 2022.9.

矢野亜紀子, 福田広美, 荒木章裕, 姫野雄太, 村嶋幸代: 中小規模病院におけるトップマネージャー

の地域における学びと看護管理行動および人材育成の関連. 第 42 回日本看護科学学会学術集会, 広島県, 2022.12.

渡部 望雄磨, 山田 貴子, 藤内 美保: 救急看護師の臨床判断能力の向上に影響を与えた経験 –インタビュー調査より–. 第 48 回日本看護研究学会学術集会, 2022.8.

Takako Y, Mako Y, Miho T: Visiting nurses care to support the continuation of care for a husband oh a terminal cancer patient.ursing. 26th East Asian Forum of Nursing Scholars, Tokyo, 2023.3.

吉田成一, 市瀬孝道: 加熱式たばこ気化蒸気の吸入曝露がマウス雄性生殖系に与える影響. 日本アンドロロジー学会 第 41 回学術大会, いわき市, 2022. 6.

吉田成一: 加熱式たばこの曝露による雄性マウス生殖系への影響. 令和 3 年度助成研究発表会, 新宿区, 2022. 7.

吉田成一, 市瀬孝道: 加熱式たばこの使用による免疫かく乱作用と雄性生殖系への影響. 日本薬学会 第 143 年会, 札幌市, 2023. 3.

7-8 開発・特許等

石田佳代子: DVD「看護師を対象とした災害時における黒エリアでの対応シミュレーション」製作, 日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(C) 課題番号 19K10778 災害時における「黒エリア」での対応に向けた実践モデル的教材の開発」より, 2022.6.

7-9 受賞

齊籐友子, 影山隆之: 日本精神衛生学会第 38 回大会・大会賞, コロナ禍における保育者の職業性ストレスと精神健康・離職意向の背景要因の検討, 2022.10.

森加苗愛: 第 27 回日本糖尿病教育・看護学会学術集会賞 (JADEN27 AWARD), 糖尿病をもつ成人期男性のセクシュアリティの看護ケアの質評価基準の評価 ～糖尿病教室における看護ケアの取り組みから～, 大阪, 2022.9.

8 社会貢献

8-1 講演等

足立綾

大分県教育委員会 令和4年度第2,3回医療的ケア研修. 大分市, 2022.7.

大分県看護協会 保健師助産師看護師実習指導者講習会 指導案作成演習. 大分市, 2022.11.

日本小児看護学会 令和4年度若手教員研修. オンライン, 2023.3.

荒木章裕

大分県看護協会令和4年度認定看護管理者教育課程ファーストレベル, ヘルスケアシステム論Ⅰ
(ヘルスケアサービスにおける看護の役割). 大分市, 2022.8.

石田佳代子

確実に身につくフィジカルアセスメント. 令和4年度大分県看護協会研修会, 大分市, 2022.7.

看護過程. 令和4年度保健師・助産師・看護師実習指導者講習会. 大分市, 2022.10.

フィジカルアセスメント (心音・呼吸音・全身皮膚). 令和4年度看護力再開発講習会. 大分市,
2022.11.

岩崎香子

第42回日本骨形態計測学会 ハンズオンセミナー. 2022.6.

梅野貴恵

「助産師教育課程, 母性看護学」. 令和4年度保健師助産師看護師実習指導者講習会. 大分県看護協会. 大分市, 2022.8.

おおいた合同FDプログラム新任教員研修「授業デザインの基礎」. 令和4年度おおいた地域連携プラットフォームFD・SDワーキング. 大分市, 2022.12.

小野治子

上乘せ教育課程における健康危機管理に関する教育の実際. 全国保健師教育機関協議会夏季研修,
オンライン, 2022.8.

小野美喜

認定看護管理者教育課程ファーストレベル研修 看護専門職論. 看護実践における倫理, 大分
市, 2022.7.

大分県看護協会実習指導者講習会. 実習指導計画・指導案作成の実際, 大分市, 2022.9.

甲斐優子

職場の健康管理の進め方～管理者の役割～ 大分県信用組合幹部研修会 大分市 2022.6.
いい仕事をしよう！ 大分県看護協会 2022 保健師ミーティング 大分市 2022.10.
保健師教育課程 大分県保健師助産師看護師実習指導者講習会 大分市 2022.8.

影山隆之

メンタルヘルス. 大分県自治人材育成センター新任課長級研修, 大分市, 2022.4.
メンタルヘルス. 大分県自治人材育成センターマネジメント研修, 大分市, 2022.5.
精神科看護の基礎. 日精看大分県支部研修会(初任者研修), 大分市, 2022.5.
睡眠と健康. 大分産業保健総合支援センター衛生管理者研修, 大分市, 2022.7.
睡眠と健康管理. 大分産業保健総合支援センター産業医研修, 大分市, 2022.7.
大学メンタルヘルスはパンデミックを超えられるか?—COVID-19 で浮き彫りになった課題. 令和 4 年度群馬県内大学等メンタルヘルス研究会, 前橋. 2022.9.
自殺対策ゲートキーパー研修のつくりかた. 日本精神衛生学会第 38 回大会, 神戸市, 2022.10.
惨事ストレス対策. 警察庁九州管区ストレス研修, 福岡市, 2022.10.
平時のストレスマネジメント対策と惨事ストレス対策. 大分県消防職員幹部教育中級幹部科研修, 由布市, 2022.11.
平時のストレスマネジメント対策と惨事ストレス対策. 大分県消防団上級幹部科研修, 由布市, 2022.11.
よい眠りがよい人生をつくる: 快適睡眠のコツ. 令和 4 年度 2 学期けんしん大学講座, 大分市, 2023.1.
加齢と生きる希望. 令和 4 年度大分市民のこころといのちを守る自殺対策講演会, 大分市, 2021.1.
平時のストレスマネジメント対策と惨事ストレス対策. 九州管区警察局大分県情報通信部研修, 2023.2.

加藤典子

国レベルの公衆衛生看護活動. 東北大学大学院医学系研究科. 2022.6.
新型コロナウイルス感染症禍の保健師活動に期待すること. 大分県市町村保健活動研究協議会前期研修会. 2022.7.
看護政策論. 聖隷クリストファー大学. 2022.7.
地域看護と地域包括ケア. 帝京大学大学院公衆衛生学研究科. 2022.8.

草野淳子

大分県教育委員会主催令和 4 年度第 2 回(教員対象) 医療的ケア研修会. 2022.7.
大分県教育委員会主催令和 4 年度第 3 回(教員対象) 医療的ケア研修会. 2022.7.
大分県教育委員会主催令和 4 年度第 1 回(看護師対象) 医療的ケア研修会. 2022.4.
大分県教育委員会主催令和 4 年度第 2 回(看護師対象) 医療的ケア研修会. 2022.8.
大分県医療的ケア児等支援者養成研修会講師. 2022.11.

定金香里

初年次地域キャリアデザインワークショップ. おおいた地域連携プラットフォーム. 大分市, 2022.6.

品川佳満

やってみよう看護研究2 量的研究と分析. 大分県看護協会教育研修, 大分市, 2022.7.

秦さと子

基礎看護学における実習指導. 2022年度保健師助産師看護師実習指導者講習会. 大分市, 2022.9.
指導案作成演習の支援. 2022年度保健師助産師看護師実習指導者講習会. 大分市, 2022.9-10.

杉本圭以子

やってみよう看護研究1 テーマの絞り方から研究開始まで, 大分県看護協会教育研修, 大分市, 2022.5.

やってみよう看護研究4 看護研究のまとめ方とプレゼンテーション, 大分県看護協会教育研修, 大分市, 2022.8.

精神看護学における実習指導 保健師助産師看護師実習指導者講習会, 大分県看護協会教育研修, 大分市, 2022.8.

佐伯市食育ワークショップ「こころとからだ元気になる食事作り」 佐伯市ブランド推進課, 2022.12

関根剛

リーダーシップ;看護チームのマネジメント. 大分県看護協会看護管理者教育課程ファーストレベル, 大分市, 2022.5.

対話の基本・カウンセリングの基礎知識.大分県警察学校警察安全相談実務専科教養, 大分市, 2022.5.

面接技術. 訪問看護eラーニングを活用した訪問看護師養成講習会, 大分県看護協会, 大分市, 2022.7.

チーム力を向上させるコミュニケーション. 大分県教育センター フォローアップ研修「人間関係構築力向上」, 大分市, 2022.6

犯罪被害者支援と人権. 宮崎県人権同和対策課 人権担当者養成講座, 宮崎県, 2022.7

青年期のメンタルヘルスとコミュニケーション.大分工業高等専門学校特別講演, 大分市, 2022.7.

カウンセリングスキルの基礎・支援者の倫理.山口被害者支援センター犯罪被害者支援員養成講座, 山口県, 2022.7.

カスタマーハラスメントへの対応. 津久見病院研修会, 津久見市, 2022.7.

メンタルヘルス. 大分県自治人材育成センター係長級研修, 大分市, 2022.7

自殺を防ぐゲートキーパーとは. 大分市社会福祉協議会福祉ボランティアリーダー研修会, 大分市, 2022.8.

犯罪被害者との関わり方. 大分県弁護士会犯罪被害者研修会, 大分市, 2022.8
ワークショップ;あなたの市町村の犯罪被害者をどう支援するか. 和歌山県犯罪被害者等支援担当職員研修会, 和歌山県, 2022.9
支援員のストレスとサポート. 被害者サポートセンターおかやま被害者支援養成講座・支援員継続研修会, 岡山県, 2022.9.
性犯罪被害者の心理と支援. 大分県警察学校性犯罪捜査専科, 大分市, 2022.9.
市町村における犯罪被害者等支援. 宮崎県市町村主管課長会議, 宮崎県, 2022.9.
自殺のサインとその対応. 臼杵市ゲートキーパー研修会, 臼杵市, 2022.9.
ロールプレイ・聴くということ. チャイルドライン受け手養成講座, 大分市, 2022.10.
外国人被害者への支援における現状と課題. 全国被害者支援ネットワーク秋期全国研修会, 東京都, 2022.10.
信頼関係を築くコミュニケーション. 大分県教育庁体育保健課新規採用栄養教諭研修, 大分市, 2022.10.
地域の住民だからこそできる自殺予防. 大分市保健所ゲートキーパー研修会, 大分市, 2022.11.
「支援センターにおけるコーディネーターの役割と業務」「研修の企画」. 全国被害者支援ネットワーク春期全国研修会, 東京都, 2023.1.
人材育成(1) 助言・指導のあり方. 全国被害者支援ネットワーク九州・沖縄地区研修会, 佐賀県, 2023.2.
人材育成(2) 育成される側から育成する側へ. 全国被害者支援ネットワーク中国四国地区研修会, 山口県, 2023.2.
惨事ストレス対策.大分県消防学校専科教育救急科, 由布市, 2023.3.
人材育成(1) 助言・指導のあり方. 全国被害者支援ネットワーク近畿地区研修会, 京都府, 2023.3.
こころのSOSに気づいて、つながる、支えるいのち—自殺予防のために地域だからできること—.
宇佐市, 2023.3.

藤内美保

日常生活に必要なフィジカルアセスメントを確認しよう.大分赤十字病院公開看護師研修会, 大分市, 2022.8.
確実に身に付くフィジカルアセスメント.大分県看護協会教育研修, 2022.7.
大学教育課程.大分県看護協会実習指導者講習会, 大分市, 2022.7.
実習指導案・指導計画.大分県看護協会実習指導者講習会, 大分市, 2022.11.
看護研究, 竹田・豊後大野地区合同看護研究学会, 豊後大野市, 2022.9.

廣田真里

看護サービス質管理 認定看護管理者教育課程ファーストレベル 大分県看護協会, 大分市, 2022.7.
組織管理論Ⅱ 組織分析 認定看護管理者教育課程セカンドレベル 大分県看護協会, 大分市, 2022.8.

人材管理Ⅱ（人事・労務管理） 認定看護管理者教育課程セカンドレベル 福岡県看護協会，福岡市，2022.9.

福田広美

大分県看護協会令和4年度認定看護管理者教育課程ファーストレベル，組織論，大分市，2022.8.

大分県看護協会令和4年度認定看護管理者教育課程ファーストレベル，統合演習，大分市，2022.9.

藤本優子

南あわじ市元気活躍推進事業 開会記念講演，2022.5.

南あわじ市生涯現役カレッジ研修会①，2022.8.

南あわじ市生涯現役カレッジ研修会②，2022.8.

村嶋幸代

ポストコロナの保健活動を見据えてー県庁と保健所の活動を重点にー，東京大学地域看護学教室6月研究会，オンライン，2022.6.

DX 社会における健康な地域づくりを担う保健師への期待，令和4年度保健師中央会議，厚生労働省健康局健康課保健指導室，東京都，2022.8.

地域の未来をけん引する公立大学の取組みと課題，令和4年度第1回公立大学学長会議，一般社団法人公立大学協会，京都府（ハイフレックス方式），2022.10.

DX 社会における健康な地域づくりを担う保健師への期待，令和4年度市町村保健活動研究協議会・在宅保健師等「虹の会」合同研修会および市町村における統括的な役割を担う保健師会議，大分県国民健康保険団体連合会，大分市，2022.10.

DX時代の保健師活動～ポストコロナで行政保健師が求められること～，令和4年度統括保健師等連絡会議，京都府健康福祉部，京都府，2022.10.

看護基礎教育の現状と課題～看護職が政治力を持つことの意味と重要性～，2022年度九州ブロック看護管理者等政策セミナー，大分県看護連盟，大分市，2022.11.

DX社会における管理期保健師への期待～ポストコロナで行政保健師が求められること～，令和4年度徳島県管理期保健師研修会，徳島県，オンライン，2022.12.

住み慣れた地域で元気に暮らし続けるための看護の取り組み，第12回杵築市地域医療フォーラム，杵築市立山香病院，杵築市，2023.3.

森加苗愛

看護研究を始めよう，大分赤十字病院キャリア開発ラダーレベルⅡ研修会．大分県，2022.3.

新人看護職員研修2 看護記録の基礎，大分県看護協会研修．大分県，2022.4.

看護研究とは，九州糖尿病看護認定看護師会研修．福岡県（オンライン研修），2022.8.

やってみよう看護研究3 質的研究と分析，大分県看護協会研修．大分県，2022.8.

教育セミナー JADEN 研究推進委員会・編集委員会企画，糖尿病看護実践の評価を量的研究でどう示すか？ ～臨床家の疑問に光を灯す LIVE レクチャー．大阪（ハイブリッド），2022.9.

日本糖尿病教育・看護学会 研究推進委員会企画，事例研究入門セミナー 看護を語り合いエッセンスを見つけましょう！《Web 研修》. オンライン研修，2022.12.

吉田成一

腸内細菌って大切!? 大分県立看護科学大学公開講座，大分市，2022. 9.

吉村匠平

構成的エンカウンターグループを用いたコミュニケーション演習（1）大分医師会立アルメイダ病院新入職員研修，大分市，2022.6.

勇気づけのコミュニケーション 大分医師会立アルメイダ病院プリセプター研修，大分市，2022.7.

大分県教員育成ガイダンス 大分県立大分豊府高校、大分舞鶴高校、大分雄城台高校、大分西高校、大分鶴崎高校，2022.10

構成的エンカウンターグループを用いたコミュニケーション演習（2）大分医師会立アルメイダ病院新入職員研修，大分市，2022.11.

思春期講演会 大分市立佐賀関中学校，大分市，2022.12.

8-2 非常勤講師

石田佳代子

中津ファビオラ看護学校 基礎看護技術 I

稲垣敦

大分医学技術専門学校 運動学

岩崎香子

大分大学福祉健康科学部理学療法コース 生化学

梅野貴恵

藤華医療技術専門学校助産学科 助産学研究

恵谷玲央

久留米大学認定看護教育課程がん放射線療法看護分野 放射線療法における放射線の安全な取り扱い

小嶋光明

久留米大学認定看護教育課程がん放射線療法看護分野 放射線療法における放射線の安全な取り扱い

影山隆之

別府大学人間学部 精神保健の課題と支援

別府市医師会看護専門学校 精神看護学概論, 精神看護の方法

愛知県立大学看護学部 公衆衛生学

加藤典子

東北大学医学部保健学科 保健医療福祉制度

自治医科大学大学院看護学研究科 看護管理・政策論

桑野紀子

藤華医療技術専門学校 看護の統合と実践Ⅱ (国際社会と看護)

宮崎県立看護大学 国際看護論

後藤成人

中津ファビオラ看護学校 看護研究

定金香里

大分リハビリテーション専門学校 生理学Ⅰ、生理学Ⅱ

佐伯圭一郎

神戸薬科大学 医療統計学Ⅰ

別府医師会立別府青山看護学校 情報科学、情報科学演習

品川佳満

別府医療センター附属大分中央看護学校 情報科学、情報基礎演習、ICT活用演習

別府市医師会立別府青山看護学校 情報科学

関根剛

大分大学医学部医学科 導入Ⅱ（自己理解のための心理臨床学入門）

大分大学医学部看護学科 臨床心理学

大分医学技術専門学校 心理学

大分臨床工学技士専門学校 コミュニケーション学

藤内美保

広島大学 5技法を用いたヘルスアセスメント（全身フィジカルアセスメントの実際）

名桜大学大学院 包括的健康アセスメント

森ノ宮医療大学大学院 診療看護師総論

中津医師会中津ファビオラ看護学校 基礎看護技術 ヘルスアセスメント（1年生）、ヘルスアセスメントの実際（3年生）

濱中良志

大分大学 国際健康コンシェルジェ養成講座

平松学園臨床検査技師学校 生化学

後藤学園社会福祉士・精神福祉士 医学一般

樋口幸

藤華医療技術専門学校助産学科 助産学研究

丸山加菜

藤華医療技術専門学校 看護の統合と実践Ⅱ（国際社会と看護）

宮崎大学医学部看護学科 統合看護論Ⅱ（国際社会と看護）

宮崎県立看護大学看護学部 国際看護論

宮内信治

大分県立芸術文化短期大学 英語 I

村嶋幸代

聖隷クリストファー大学大学院博士前期課程 看護政策論

8-3 研究指導

大分県立病院

佐伯圭一郎

荒木章裕

大分赤十字病院

森加苗愛

石田佳代子

岩崎香子

大分医師会立アルメイダ病院

恵谷玲央

杉本圭以子

衛藤病院

影山隆之

堀裕子

別府医療センター

樋口幸

吉田成一

大分医療センター

品川佳満

小野治子

8-4 学会役員等

荒木章裕

日本高齢者ケアリング学研究会 理事
看護科学研究 査読委員
大分県看護研究学会 委員

石丸智子

日本救急看護学会雑誌 専任査読委員

稲垣敦

日本体育測定評価学会 顧問
日本スポーツ救護看護学会 顧問
日本体育・スポーツ・健康学会 評議員
九州体育・スポーツ学会第 72 回大会 実行委員

岩崎香子

日本骨粗鬆症学会 評議員
日本 CKD-MBD 学会 評議員
ROD21 研究会 幹事
第 24 回日本骨粗鬆症学会学術集会 プログラム委員

梅野貴恵

日本助産診断実践学会 理事・編集委員
大分県母性衛生学会 理事・副会長
第 17 回大分県母性衛生学会学術集会 実行委員

恵谷玲央

日本保健物理学会 コミュニケーション委員会 委員
日本保健物理学会 医療被ばく国民線量評価委員会 委員
日本放射線影響学会 キャリアパス・男女共同参画委員会 委員
日本放射線影響学会 放射線リスク・防護検討委員会 委員
日本放射線影響学会 論文紹介企画小委員会 委員
日本アイソトープ協会 第 32 期放射線安全取扱部会広報専門委員会 委員

小嶋光明

日本放射線影響学会 理事
日本放射線影響学会 放射線リスク・防護検討委員会委員長

日本保健物理学会 倫理委員会委員
日本保健物理学会 エックス線事故検討WGメンバー
放射線生物研究 編集委員会委員

小野美喜

日本看護倫理学会 理事
日本 NP 教育大学院協議会 理事

甲斐博美

日本 NP 学会理事

甲斐優子

第 12 回日本公衆衛生看護学会 企画委員

影山隆之

日本精神衛生学会 理事長
日本精神衛生学会編集委員
日本自殺予防学会 常務理事
日本自殺予防学会 編集委員長
日本学校メンタルヘルス学会 評議員
日本学校メンタルヘルス学会員 編集委員
日本産業ストレス学会 評議員
日本社会精神医学会 評議員
日本看護科学学会和文誌査読専門委員

草野淳子

一般社団法人日本小児看護学会 評議員
一般社団法人日本小児看護学会 災害対策委員
一般社団法人日本 NP 教育大学院協議会 委員

桑野紀子

大分県看護協会 実習指導者講習会運営委員会 副委員長 (6 月迄)
日本国際看護学会 理事会研究委員会 評議員

後藤成人

一般社団法人日本精神科看護協会大分県支部 教育委員長

佐伯圭一郎

日本テスト学会 編集委員

定金香里

日本生理学会 評議員

大気環境学会健康影響分科会 幹事

藤内美保

日本 NP 教育大学院協議会 監事

日本 NP 教育大学院協議会 教育課程審査委員

公益社団法人日本看護科学学会 社員

日本看護研究学会九州・沖縄地方会 役員

特定行為研修指定研修連絡会 理事

特定行為研修制度の普及促進に関する委員会 委員

大分県立看護科学大学特定行為管理委員会 責任者

大分県立病院特定行為管理委員会 委員

永松いずみ

日本看護学会 学術集会抄録選考委員

大分県母性衛生学会 幹事

濱中良志

癌・炎症・抗酸化研究会 評議員

林猪都子

大分県母性衛生学会 理事

大分県母性衛生学会 学術集会実行委員

大分県助産師会 副会長

日本助産師会 九州・沖縄地区研修会 実行委員長

樋口幸

看護理工学会 評議員

看護理工学会 将来構想委員会委員

日本助産学会学会誌 専任査読委員

姫野綾

大分県助産師会 教育委員

姫野雄太

日本看護管理学会誌 査読者

千葉看護学会誌 査読委員

廣田真里

大分県看護協会 理事

藤本優子

在宅ケア学会 実行委員

地域看護学会 国際交流推進委員

堀裕子

一般社団法人日本放射線看護学会 編集委員

宮内信治

日本言語音声学会 常任理事

日本英語教育音声学会 常任理事

村嶋幸代

日本 NP 教育大学院協議会 副会長

全国保健師教育機関協議会 理事・教育評価準備委員会委員長

日本看護系大学協議会 監事・APN グランドデザイン委員会委員

日本看護系学会協議会 監事

日本看護科学学会 監事・代議員

日本 NP 学会 監事

日本地域看護学会 監事・代議員

日本在宅ケア学会 監事・代議員

日本公衆衛生学会 代議員

日本公衆衛生協会 評議員

森加苗愛

日本糖尿病教育・看護学会 理事

日本糖尿病教育・看護学会 評議員

日本慢性看護学会 評議員

日本糖尿病教育・看護学会 研究推進委員会委員長

日本糖尿病教育・看護学会 編集委員会委員委員

吉田成一

日本アンドロロジー学会 理事

精子形成・精巣毒性研究会 評議員

日本薬学会 代議員

8-5 その他委員等

石田佳代子

大分県看護協会 実習指導者講習会運営委員会委員
大分県リハビリテーション協議会 委員

石丸智子

大分市救急業務検討委員会委員

梅野貴恵

おおいた地域連携プラットフォーム教育プログラム開発部会 FD・SD 事業ワーキンググループメンバー
日出町子ども子育て会議 委員・会長

小嶋光明

放射線影響懇話会 世話人
大分大学医学部付属病院 臨床研究審査委員会委員

小野治子

大分市鶴崎駅周辺整備基本構想策定委員会委員
大分市建築審査会委員委員
大分市風俗関連営業建築物審査会委員委員
大分市開発審査会委員
大分県国民健康保険団体連合会 情報公開および個人情報保護審査会委員
大分県国民健康保険団体連合会 介護サービス苦情処理委員会委員
大分県保健師連絡会 委員

小野美喜

日本看護倫理学会 課題検討委員長
日本看護倫理学会 査読委員
日本 NP 教育大学院協議会 資格更新委員会委員長
日本 NP 教育大学院協議会 制度検討委員会委員長
大分県立病院 地域医療支援病院運営委員会委員長
社会医療法人啓和会 大分岡病院特定行為研修管理委員

甲斐優子

大分県介護保険審査会 委員
大分市社会福祉審議会 委員
大分市高齢者福祉計画及び第 8 期介護保険事業計画策定委員会 委員

大分市地域福祉計画策定委員会 委員
社会福祉法人大分市社会福協議会地域福祉活動計画策定委員会 委員
大分市生き生きプラザ潮騒等指定予定者選考委員会 委員
大分県ナースセンター運営委員会 委員

影山隆之

大分県自殺対策連絡協議会副会長
大分県精神疾患医療連携協議会委員
大分県アルコール健康障がい対策推進協議会委員
大分県ギャンブル等依存症対策推進協議会委員
大分県公害審査会調停委員会委員
大分市民のこころといのちを守る自殺対策行動計画策定推進検討委員会会長
別府市自殺対策計画策定推進委員会委員長
日出町自殺対策連絡協議会委員
豊後大野市自殺対策連絡協議会助言者
警察庁惨事ストレスケアアドバイザー
労働者健康福祉機構大分産業保健総合支援センター専門相談員
大分県社会福祉協議会日常生活自立支援事業契約締結審査会審査委員

加藤典子

大分県後期高齢者医療審査会委員
大分県国保連合会保健事業支援・評価委員会委員

草野淳子

大分県立看護科学大学特定行為研修管理委員会委員
大分県障害児適正就学指導委員会委員
おおいた医療的ケア児等支援関連施設連絡会
大分県小児保健協会役員
第8回日本NP学会学術集会運営委員(小児 Chapter)
九州沖縄小児看護教育研究会幹事
医療的ケア児(者)の会「ここから」サポーター

桑野紀子

第63回日本熱帯医学会大会・第26回日本渡航医学会学術集会合同大会 看護部会運営委員

佐伯圭一郎

ホルトホール大分選定委員

定金香里

大分県理科化学教育懇談会 幹事
大分県環境影響評価技術審査会 委員
大分県リサイクル認定製品審査会 委員

佐藤愛

大分県公衆衛生協会 評議員

品川佳満

大分県情報公開・個人情報保護審査会 委員

杉本圭以子

日本精神障害者リハビリテーション学会第 29 回群馬大会 抄録査読委員

関根剛

総務省消防庁緊急時メンタルサポートチームメンバー
大分県こころの緊急支援チーム 運営委員・メンバー
大分県 DPAT メンバー
(公社) 全国被害者支援ネットワーク理事 (九州・沖縄ブロック担当)
(公社) 大分被害者支援センター 副理事長

藤内美保

大分県医療費適正化推進協議会委員
大分県国民健康保険運営協議会委員

林猪都子

大分県地域保健協議会 母子保健小委員会委員
大分県准看護師試験委員
大分市おおいた都心まちづくり会議委員

樋口幸

大分市産業活性化プラザ産学官連携推進事業検討委員会 委員
おおいた地域連携プラットフォーム地域交流・課題検討部会 産学官成果共有 WG

福田広美

大分県医療計画策定協議会委員
大分県在宅医療連携協議会委員
大分県社会福祉審議会委員

大分地方労働審議会委員
大分県公立学校教員育成協議会委員
大分県中小規模病院等看護管理者支援協議会委員
大分県看護協会認定看護管理者教育運営委員会委員
大分県看護協会アドバイザー派遣事業推進会議委員
大分県看護協会訪問看護総合支援センター試行事業委員
大分県看護協会訪問看護ステーション機能強化推進事業委員

藤本優子

全国保健師教育機関協議会研修委員

宮内信治

大分市立横瀬小学校 学校評議員
大分県高等学校教育研究会英語部会 顧問

村嶋幸代

国立保健医療科学院 評価委員会 委員
宮崎県地方独立行政法人評価委員会 評価委員
ヘルシー・ソサエティ賞 審査委員
社会福祉法人 三井記念病院 評議員
令和4年度大学における医療人養成の在り方に関する調査研究選定委員会 委員
大分県都市計画審議会 委員
大分県医療審議会 委員
健康寿命日本一おおいた創造会議 委員
生涯健康県おおいた 21 推進協議会 委員
野津原地域まちづくりビジョンフォローアップ会議 委員
大分県国民保護協議会 委員
大分県公私立学校教育協議会 委員
大分県石油コンビナート等防災本部員 委員
大学コンソーシアムおおいた 理事
おおいた地域連携プラットフォーム 監事

森加苗愛

大分県看護協会教育委員

吉田成一

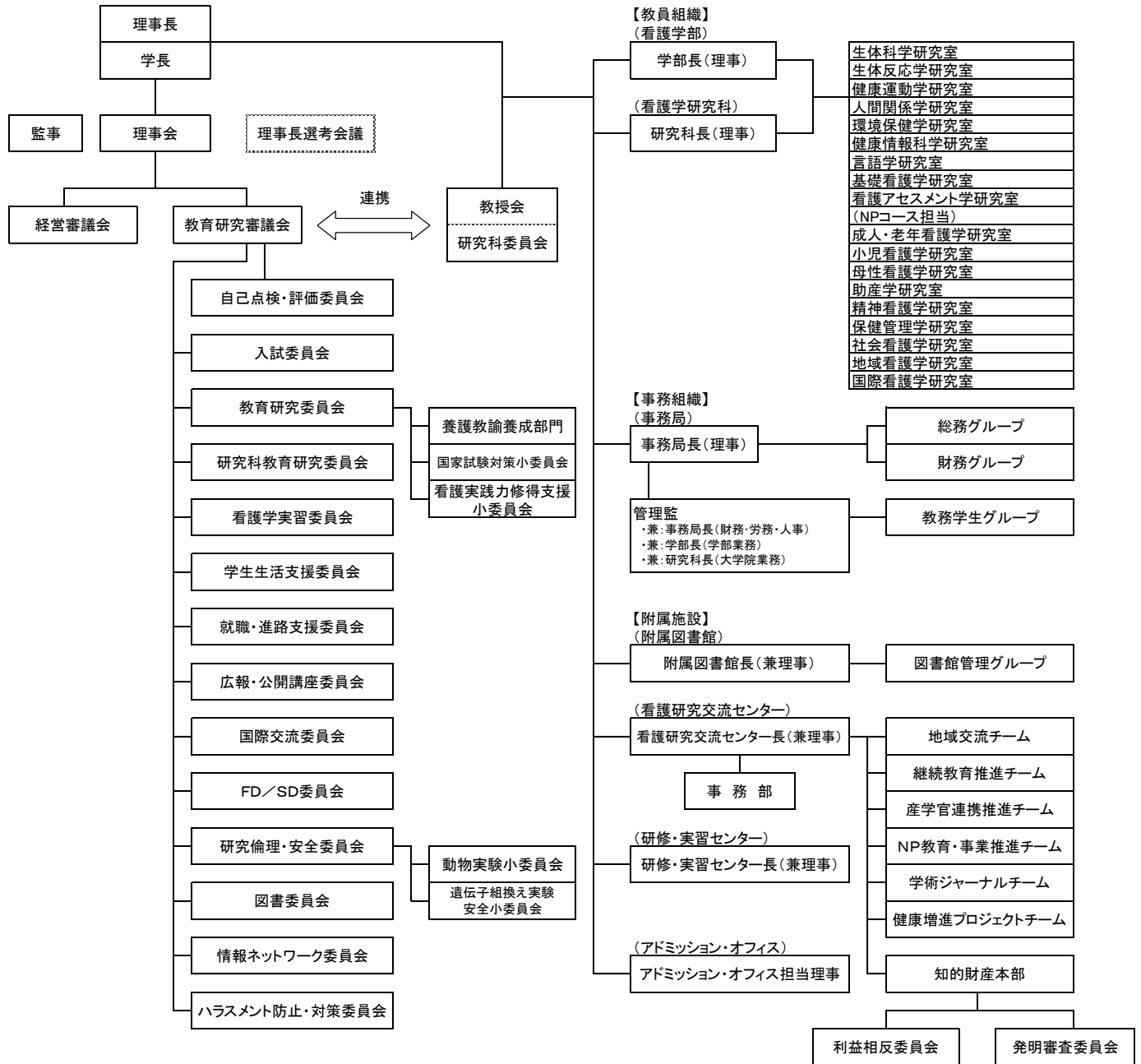
大分県 第二次生涯健康県おおいた 21 喫煙対策部会 委員

9 学務

9-1 組織図

法人組織図

大分県立看護科学大学



9-2 危機管理対策本部

本部長 理事長 村嶋幸代

副本部長 学部長 福田広美、研究科長 稲垣敦、事務局長 岡田浩明

本部員 小野美喜、吉田成一、廣田真里、佐伯圭一郎、小嶋光明、
釘宮由美子、尾割勇作、伊東美穂、菊池誉志

COVID-19（新型コロナウイルス感染症）への対応については、「感染防止に努め、学生・教職員から感染者を出さない」、「細心の注意を払って授業を継続し、学生の学ぶ権利を保障する。」、「大変革期にあたり、学生・教職員自身が情報を得て自立的に行動すると共に、COVID-19 と共存する世界を見据えて必要な準備をする。」という3つの方針を掲げ、県と連携しながら、各委員会や事務局から学生や教職員に対して体調管理の徹底等の注意喚起などを行ってきた。

令和4年度は、新型コロナウイルス感染症への状況に応じた各種対策を行うため、4月、9月、12月と随時、大分県立看護科学大学新型コロナウイルス感染症対策マニュアルを改正した。

このマニュアルに基づき、大分県から発表されるレベルの段階に応じて、対策を取りながらもサークル活動の再開や図書館等の施設の利用制限の解除を行ってきた。授業についても状況に応じてオンラインを積極的に活用しながら、対面授業を再開した。

また、学生及び教職員が感染した場合や濃厚接触者となった場合は、定められたメールに連絡することを徹底し、状況を速やかに把握したことで、学校内での集団感染は発生しなかった。

新型コロナウイルス感染症対策の国及び県の関係情報を教職員全員で情報共有し、感染状況に応じた対策を調整するため、現況や本学における新型コロナウイルス感染症対策の取組等について、毎週1回サマリーレポートを作成した。

9-3 委員会等活動

9-3-1 理事会

理事長 村嶋幸代

学内理事 福田広美、稲垣敦、岡田浩明

学外理事 三股浩光、佐藤昌司、渡邊規生

監事 福田安孝、中野洋子

理事会の役割は、法人の運営に関する重要事項を審議することである。本年度は 5 回の理事会を開催し、教育研究審議会報告の後、年度計画に関する事項、地方独立行政法人により知事の許可または承認を受けなければならない事項、重要な規程の制定または改正、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価などについて審議した。

特記すべき報告および審議事項として、第 1 回は、職員給与規程、役員報酬規程、期限付雇用職員就業規則、看護研究交流センター規程の一部変更について審議を行った。また、令和 4 年度在学生の状況、令和 3 年度卒業生・修了生の進路状況の報告を行った。第 2 回は、大分県立看護科学大学大学院学則の一部改正として NP コースカリキュラムの改定、令和 3 事業年度業務実績報告書及び令和 3 年度決算について審議を行った。その他、大分県立看護科学大学名誉教授の授与、大学機関別認証評価点検評価ポートフォリオについて報告が行われた。第 3 回は、大学院学則の一部改正として科目の変更、育児休業等に関する規程及び関連する規則等の一部改正、教学 IR システムマネジメント規程について審議を行った。また、令和 4 年度大分県地方独立行政法人評価委員会評価結果、大学院入学者選抜試験の結果と二次募集の状況が報告された。第 4 回は、「成人看護学研究室」「老年看護学研究室」及び「NP 研究室（仮称）」の設置、教員の採用、学則の一部改正として科目の変更について審議を行った。また、職員給与規程、役員報酬規程、期限付雇用職員就業規則の一部変更について審議を行った。その他、令和 4 年度中間決算、令和 5 年度予算編成方針についても審議が行われた。併せて、学部及び大学院二次募集の入学者選抜試験実施について報告が行われた。第 5 回は、大分県立看護科学大学人事基本計画、教員の採用と昇任、第 3 期中期計画に係る令和 5 年度計画（案）、令和 5 年度予算（案）について審議が行われた。その他、令和 4 年度卒業、修了生の状況や入学者選抜試験の状況について報告が行われた。

大学の円滑な運営のために活発な意見をいただいております、今後も引き続き、外部理事の方々の意見をいただき議論をして決定するよう進める。

9-3-2 経営審議会

理事長 村嶋幸代

学内理事 福田広美、稲垣敦、岡田浩明

学外理事 三股浩光、佐藤昌司、渡邊規生

経営審議会委員 千野博之、吉村充功、佐藤政昭、大戸朋子

本審議会の役割は、法人の経営に関する重要事項を審議することである。法人の経営状況について報告し、審議した。

本年度は5回の経営審議会を開催し、年度計画に関する事項のうち、法人の経営に関するもの、地方独立行政法人により知事の許可または承認を受けなければならない事項のうち法人の経営に関するもの、重要な規程の制定または改正に関する事項のうち法人の経営に関するもの、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価に関する事項のうち法人の経営に関するもの、組織及び運営の状況について自ら行う点検および評価などについて審議した。

なお、理事会構成員は、経営審議会の委員も兼ねており、審議内容も関係することから経営審議会と同時に開催し、特記すべき報告及び審議事項は、理事会と同様の内容である。

運営費交付金が年々減額されていく状況のなかで、外部資金の獲得をさらに推進すること、大学の魅力を発信し優秀な学生の継続的な確保の戦略が必要であり、効果的・効率的な経営に関して継続的に審議する。

9-3-3 教育研究審議会

学長 村嶋幸代

学部長 福田広美

研究科長 稲垣敦

事務局長 岡田浩明

委員 犀川哲典（学外委員）、梅野貴恵、小嶋光明、小野美喜、甲斐優子、加藤典子、影山隆之、草野淳子、桑野紀子、佐伯圭一郎、Gerald T. Shirley、藤内美保、濱中良志、林猪都子、廣田真里、吉田成一、吉村匠平

本教育研究審議会の役割は、大学の教育研究に関する重要事項の審議を行うことである。本年度は11回の教育研究審議会を開催し、各種委員会報告を行うとともに中期目標・中期計画に関する事項、規程等の改正、学生の就業、進級判定、休学、復学、退学、学位の授与に関する事項、教員の人事及び評価に関する事項、教員の自己点検・自己評価に関する事項、各種諸規程等について審議・承認した。各回の教育研究審議会の議事内容は理事会で報告された。

特記すべき審議事項等として、第1回は、職員給与規程、役員報酬規程、期限付雇用職員就業規則について、期末手当の引下げ等、一部規定の改正が承認された。併せて、看護研究交流センター規程

についても業務の見直し及びチーム名称変更のため一部改正が承認された。第 2 回は、令和 3 年度に退職した教授 3 名について名誉教授を授与することが承認された。また、日本学生支援機構による新型コロナウイルス感染症対策助成金（食に関する支援）に申請を行うことが承認された。第 3 回は、大分県立看護科学大学大学院学則の一部改正として、NP コースの令和 5 年度カリキュラム、修了要件、アドミッション、カリキュラム、ディプロマ・ポリシーの改正が承認された。また、教学 IR システムマネジメント規程等が提案され検討していくことが承認された。第 4 回は、文部科学省の令和 5 年度大学入学者選抜実施要項により、新型コロナウイルス感染症対策に伴う試験実施上の配慮を行うこととなり、本学の令和 5 年度学部入学者選抜追試験として面接と入試、共通テストの結果を活用することを決定した。また、令和 4 年度の高校新課程導入に伴い、本学の一般選抜（前期・後期日程）における令和 7 年度以降の共通テストの指定科目を決め直すこととした。第 5 回は、令和 4 年度大分県地方独立行政法人評価委員会評価の結果、教育の質向上と業務運営改善に S 評価を受けたことが報告された。審議事項は、育児休業法の改正に伴い、育児休業等に関する規程及び関連する規則等の一部改正について、育児休業の取得回数制限が緩和された。また、教学 IR システムマネジメント規程が承認された。その他、特定行為研修管理委員会設置要綱及び特定行為研修修了認定要領について、保健師助産師看護師法第 37 条の 2 に規定する特定行為研修に関する省令に基づき一部改正を行った。第 6 回は、令和 5 年度から「成人看護学研究室」「老年看護学研究室」及び「NP 研究室（仮称）」の設置が承認された。これに伴い、成人看護学の教授として令和 5 年 4 月 1 日から古賀雄二氏の採用が承認された。第 7 回は、令和 5 年度から成人看護学研究室 4 名と老年看護学研究室 3 名とすることが承認された。学部の令和 4 年度新カリキュラムの科目「成人老年看護学演習」の変更案が出された。令和 6 年度以降の第 4 期中期目標・中期計画作成スケジュールについて令和 4 年 11 月から令和 5 年度にかけて準備を行うこととなった。研究室体制等の変更によりマルチルームの活用方法について検討を行った。第 8 回は、外部認証評価の現地調査に関する報告が行われ、予防的家庭訪問実習の高評価及び内部質保証等に関する課題を共有した。審議事項は、職員給与規程、役員報酬規程、期限付雇用職員就業規則、職員の通勤手当の支給に関する細則について所要の改定を行うことが承認された。また、学部の令和 4 年度新カリキュラムの科目「成人老年看護学演習」の変更案が承認された。第 9 回は、国際看護学及び基礎看護学研究室の教員を選考することとなった。令和 5 年度大学入学共通テスト追試験のスケジュールについて確認を行った。第 10 回は、国際看護学研究室及び成人看護学研究室の教員選考について審議が行われた。その他、一般財団法人大学教育質保証・評価センターの大学機関別認証評価報告書（案）について検討を行った。第 11 回は、人事基本計画の一部改正、内部質保証推進会議設置要綱案、法改正に伴う個人情報の保護に関する規程の変更、事務職員の定年等に関する規程等の一部改正等、地方独立行政法人評価に係る令和 5 年度計画（案）、令和 5 年度予算（案）、防災・業務継続計画（BCP）の一部改正、学位論文審査における学外審査委員に関する申し合わせ（案）、令和 4 年度学部進級判定について審議が行われた。

以上、令和 4 年度は新型コロナウイルスの感染拡大防止に努めながら本審議会の運営を行った。令和 5 年度も引き続き、感染防止対策を行い、大学の教育研究に関する重要事項の審議を行う。令和 5 年度は学部と大学院において、2 年目に入る新カリキュラムの移行をスムーズに行う。また、令和 4 年度に行われた外部認証評価の結果を踏まえて、本審議会としても大学の教育研究の改善に向けた活動を進める。

9-3-4 教授会

学長 村嶋幸代

学部長 福田広美

事務局長 岡田浩明

委員 安部眞佐子、足立綾、荒木章裕、石田佳代子、石丸智子、稲垣敦、岩崎香子、梅野貴恵、恵谷玲央、小嶋光明、小野治子、小野美喜、影山隆之、甲斐優子、加藤典子、草野淳子、桑野紀子、佐伯圭一郎、定金香里、品川佳満、秦さと子、Gerald T. Shirley、杉本圭以子、関根剛、藤内美保、濱中良志、林猪都子、廣田真里、樋口幸、堀裕子、宮内信治、森加苗愛、吉田成一、吉村匠平

本教授会の役割は、大学の教育課程の編成に関する事項、学生の入学、卒業、その他の在籍に関する事項、学生の表彰及び懲戒に関する事項の審議を行うことである。

本年度は 4 回の教授会を開催し、学部入試の可否判定、卒業判定、および学生の表彰に関する事項について審議・承認した。看護師国家試験は合格率 97%であった。4 年次の学生表彰は、学長賞 1 名、優秀賞 2 名、卒業研究発表優秀賞 6 名、学生賞 1 名の計 10 名、在學生は、新 2 年次生の表彰は 2 名、新 3 年生の表彰は 2 名が承認された。

令和 5 年度入學生は 82 名、卒業生は 75 名を予定している。今後も入学、卒業に関して量的、質的な観点から審議し、今後も優秀な学生の輩出に向けて努力する。

9-3-5 研究科委員会

学長 村嶋幸代

研究科長 稲垣敦

事務局長 岡田浩明

委員 足立綾、安部眞佐子、荒木章裕、石田佳代子、石丸智子、岩崎香子、梅野貴恵、恵谷玲央、小嶋光明、小野治子、小野美喜、甲斐優子、影山隆之、草野淳子、桑野紀子、佐伯圭一郎、定金香里、品川佳満、秦さと子、Gerald T. Shirley、杉本圭以子、関根剛、藤内美保、濱中良志、林猪都子、樋口幸、廣田真里、福田広美、堀裕子、宮内信治、森加苗愛、吉田成一、吉村匠平

本委員会は、大学院の教育課程の編成、学生の入学、修了等の在籍に関する事項、学生の表彰及び懲戒に関する事項の審議を行う。本年度も特別選抜と 2 回の入学試験の可否判定、進学・修了判定等について審議した。但し、今年度は、2021 年 12 月に提出されて審査が長引いた博士論文が 1 件と 2022 年 12 月に提出されて審査が長引いた博士論文が 2 件あったため、委員会を例年よりも 2 回多い 6 回開催した。この結果、今年度は博士学位を 6 件授与した。また、今年度も COVID-19 のため全て Zoom での開催となったが、研究室から Zoom で出席することとし、画像で研究室からの

出席を確認した。また、委員全員が集まる機会が限られているため、委員会時に大学院運営全般に関して意見を求めた結果、学長より博士学位論文の体裁について問題提起があり、学生表彰とともに、まずは研究科教育研究委員会で検討することとなった。

9-3-6 自己点検・評価委員会

委員長 佐伯圭一郎

副委員長 宮内信治

委員 小嶋光明、樋口幸、小野治子、尾割勇作、松尾美沙、安部翼

自己点検・評価委員会は、本学の教育研究水準の向上を図り、かつ本学の目的及び社会的使命を達成するため、大学の自己点検・自己評価に関する事、内部質保証に関する事、年報の編集・発行に関する事、本学の中期目標・中期計画に関する事、認証評価その他の第三者評価に関する事を分掌している。

1) 大学機関別認証評価：一般財団法人大学教育質保証・評価センターによる大学機関別認証評価を受審した。5月に点検評価ポートフォリオを提出、その後の書面評価、実地調査、関係者からの意見聴取を経て、2023年3月に「大学評価基準を満たしている」という評価を受けた。また、評価結果と点検評価ポートフォリオを大学ウェブに公開した。2) 大学の中期目標・中期計画：年度当初に令和3年度実績報告を取りまとめた。年度末には令和4年度計画に基づく実績報告について各種委員会等からの資料収集を開始した。令和5年度計画について、各種委員会等の計画を取りまとめた。3) 年報の編集・発行：2021年度年報を編集し公開した。例年より早めのスケジュールで編集作業を進め、7月に学外ウェブに掲載した。4) 議事録の学内への公開状況及び記載等を随時チェックして、整備を推進した。

来年度は自己点検・評価活動を継続的に進めることはもちろん、外部認証評価の評価結果を受けた具体的な改善策の策定や更なる活動の進展について、関係部署と共に検討を進めることが課題である。

9-3-7 入試委員会

構成員 構成員は非公開としている。

入試委員会は、学部の入学者選抜を分掌し、令和5年度入学者選抜の全体及び大学入学共通テストの実施を統括するとともに、入学者選抜の方法及び入試広報について検討した。新型コロナウイルス感染症の状況に応じた運営方法を検討・実施し、また今年度からウェブ出願システムの運用を開始した。

令和 4 年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会（オンライン開催）に 3 名が参加し、国の方針、令和 7 年度からの大学入学共通テストの科目変更、及び感染拡大下における各大学の対応等について情報を収集した。高校の学習指導要領改定に伴う令和 7 年度以降の大学入学共通テスト実施科目変更に合わせて、令和 7 年度一般選抜（前期日程・後期日程）における共通テストの本学指定科目と配点を検討し、公表した。

入試に関する広報活動を、広報・公開講座委員会と協力して行った。延べ 24 会場で業者主催進学説明会に参加し、高校生・保護者等延べ 520 名の相談を受けた。県内高校の進路指導担当者等を対象としたオンライン進学説明会を 6 月 3 日に開催し、25 校 28 名の教諭が参加した。新型コロナウイルス感染症防止のため今年度もオープンキャンパスがオンライン開催となり、その中で進学説明会と進学相談会を開催した。相談会の質問者が少なかったのは、前年度の質問事項をふまえて説明を尽くした結果と思われる。

コロナ禍の下では、大学入学共通テストの追試験が各都道府県で実施されることとなったので、大分県内で会場を提供する大学等との協議の結果、今後も追試験が各都道府県で実施される場合は、本学は追試験にのみ会場を提供することとなった。今年度は 1 月 28、29 日に追試験を実施し、大きなトラブルなく終了した。

本学の令和 5 年度入学者選抜は、別項（2. 入学試験等 2.1 学部入試）に整理したとおり実施した。志願者数は、学校推薦型選抜では前年度より 3 名の減少、一般選抜前期日程では前年度より 17 名の減少、一般選抜後期日程では前年度より 118 名の減少で、総計では昨年比 158 名減少であった。志願者数が減少傾向にあることから、入試広報対策が必要と考えられた。大学の外部認証評価においても受験者向けの大学ホームページ情報がわかりにくいとの指摘を受けたので、必要な情報を一括して見やすくまとめる作業に着手した。入学者選抜の実施にあたっては、感染症対策（試験会場環境・人員配置・受験生への対応等）に努め、感染等により受験できなかった受験生のために試験区分毎の追試験の方法を定め、また国のガイドラインに沿って、新型コロナウイルス感染症のため共通テストを受けられなかった受験生の追試験等についても検討した。

ウェブを活用した出願システム及び主体的活動に関する得点評価システムを導入するため、業者を選定して作業を進め、今年度の学校推薦型選抜からトラブルなく導入することができた。これにより事務作業が大いに省力化でき、主体的活動の採点もスムーズに行うことができるようになった。

前々年度から面接試験を得点化したことから、今年度も入試監督者説明会と合わせ面接担当者説明会を開催し、評価と記録方法の統一を図った。総合問題（筆記試験）に出題ミスを起こさないよう、前年度策定した作問手順書に沿って作業を進めた。

今後も入試の広報と運営方法の両面について改善のための検討を重ねながら、年度計画に沿って活動していく予定である。

9-3-8 教育研究委員会

委員長 福田広美

副委員長 杉本圭以子

委員 石田佳代子、岡田浩明、定金香里、品川佳満、秦さと子、濱中良志、原田千夏、吉村匠平

本委員会は学部学生の教育と教員の研究を効果的かつ円滑に行うために教育・研究関連の活動と教育・研究予算の策定を行っている。本年度も例年通り、毎月（8月除く）定例の委員会として11回の会議を開催した。

1. 2022年度改定カリキュラム移行（福田）

令和4年度新カリキュラムが1年次生から開始となった。2年次以上は平成27年度カリキュラムを実施し、新旧カリキュラムにおいてディプロマ・ポリシーの達成に向けた教育を行った。また、カリキュラムの移行に際し、新カリキュラムと旧カリキュラムの科目に関する一覧表を作成し、単位未修得者を含めた対応を行った。

2. 教学マネジメント・IR 関連（杉本委員・石田委員・福田）

1) アセスメントチェックリスト・チェックデータ（杉本委員）

教学マネジメント・IRにおけるアセスメントポリシーの運用に向けて、アセスメントチェックリストを作成してデータを収集し2021年度アセスメントチェックデータとして整理した。今後経年的にデータを収集し、DPに沿った教育課程による成果を可視化することをめざす。さらに学生自身が主体的に自分の成長を確認することができるよう、教務システムの機能強化を検討した。その他、教学マネジメント・IRの促進に向けて学内のIR規程も作成した。

2) 旧カリキュラム DP 評価（杉本委員・石田委員）

旧カリキュラムで学修する4年次生と2年次生に対して学修到達状況を問うアンケートを実施した。4年次生は前年度と比較し「保健医療福祉における看護活動と看護ケアの質を改善する能力」「地域ケアの構築と看護機能の充実を図る能力」が身についたと答える学生が増加した。2年次生から本学の教育について「根拠に基づいた看護を考えるうえでとても役立っている」「周りの環境やシステムについて学ぶ機会がたくさんあり理解が深まった」など肯定的な意見が多く寄せられた。

3) 新カリキュラム DP 評価（杉本委員・福田）

新カリキュラムで学修する1年次生に対して学修到達状況を問うアンケートを実施した。DP1「心豊かな人間性・倫理観」の達成度が高かった。アンケート実施にあたりDP、カリキュラムツリー、カリキュラムマップ、シラバスについて説明し、到達目標とカリキュラム構成を意識して学修に取り組むよう促した。さらに今年度の振り返りと来年度の目標を記載する時間を設け1年間の学修を振り返る機会とした。

4) 外部認証評価（福田）

令和4年度機関別外部認証評価を受審し、法的な側面から学部教育に関する評価を受けた。その結果、カリキュラム・ポリシーを中心に改善点が明らかになり、カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーの関連や成績評価について学生に分かりやすく示すよう変更することとなった。その

他、シラバスについても課題に対する改善を行った。

3. シラバス関連（品川委員、定金委員）

令和 5 年度の学部シラバス作成に関する業務（マニュアル整備、システム設定、記載チェック等）を行った。これまで評価方法や評価割合に関する記載についてアナウンスや内容確認が不十分な部分があったため、マニュアルを見直し教員に周知を行った。今後は作成だけにとどまらず、シラバスの意義や活用について教員や学生に伝えていくことが必要である。

4. 入学前教育（定金委員）

1 年次生を対象にアンケート調査を行った。生物関連科目に対する強い苦手意識を持っていたことから、入学前の学習に関して、生物のコンテンツを充実させるため、紙媒体から Web に変更した。名称を「わかば通信」とし、各入試種別に内容を変え、学習すべき内容の他、モチベーションを上げる工夫として、合格者の声を掲載した。アンケートの結果から、入学前の学習は、生物関連科目の理解に役立つという評価が得られた。

5. 総合人間学（杉本委員・福田）

獣医師、起業看護師、気象予報士、LGBT 支援者、舞台俳優など様々な分野で活躍している講師による講義と看護国際フォーラムの参加により構成し、様々なものの見方・考え方を学ぶことのできる科目として運営した。全 10 回をオンラインによる講義で実施した。

6. 卒業研究（福田）

令和 4 年度の卒業研究は、文献研究や二次データを活用した研究、調査研究や実験研究等が行われた。卒業研究はルーブリックを用いた評価を学生と教員が実施し、教員評価をもとに単位認定を行った。卒業研究発表優秀賞は、教員評価の平均点が高い学生を対象に、発表の 3 分科会からそれぞれ上位 2 名を優秀賞とし、計 6 名が受賞した。

7. 感染対策・教育環境について（福田・原田委員）

令和 4 年度も学時歴を変更せず予定通り授業を実施した。授業方法は、県内の感染ステージに合わせて、オンラインと対面によるハイブリッド、または、全面的なオンライン授業を行った。試験については、全面的なオンライン授業期間であっても実施し、教室を分けて密を避ける等、感染対策に留意して実施し、クラスター等の発生もなく授業を予定通り実施できた。

8. 卒業研究発表会運営（濱中委員、吉村委員、品川委員、定金委員）

卒業研究会発表会に関する運営（プログラム・要旨集作成、各種提出物管理、リハーサル・発表会進行等）を行った。昨年度に行った卒論実施方式のアンケート結果を受け、発表会は、Zoom によるオンラインおよび分科会方式で実施した。大きなトラブルはなく 1 日間で全 74 演題の発表が終了した。

9. 学生表彰（福田・原田委員）

令和4年度の4年次生の学生表彰は、学長賞1名、優秀賞2名、卒業研究優秀賞6名、学生賞1名の計10名を表彰した。2年次生と3年次生の学生表彰は、成績や進級試験において優秀な成果を収めた2年次生3名、3年次生2名を表彰した。

10. 国家試験対策小委員会（石田委員）、看護実践力修得支援小委員会（秦委員）、進級試験WG（濱中委員）、養護教諭養成部門（吉村委員）の活動は、別途項目により記載しているため、ここでは省略する。

今年度の課題と次年度の取り組み

令和4年度から新カリキュラムが2年目に入る。新カリキュラムと平成27年度カリキュラムが、同時に問題なく進められるよう、移行期の対応を引き続き実施、評価する。また、令和4年度までに作成した、アセスメントチェックリスト・チェックデータを活用し、教学マネジメント・IRをさらに進められるよう新システムの導入を含めた検討を行う。さらに、令和4年度の外部認証評価で課題となったカリキュラム・ポリシー等の改善に取り組むと同時に、入学前教育やシラバスについても引き続き力を入れる。令和5年度は新型コロナウイルスの感染症分類が5類へ変更となるが、感染拡大防止に努めながら授業を行う。

9-3-8 1) 養護教諭養成部門

部門長 吉村匠平

部門員 秋本慶子、小野治子、菊池誉志、草野淳子、佐伯圭一郎、関根剛、中釜英里佳

養護教諭養成課程を運営した。主な業務は、履修生に対する履修カルテ面談、1年生希望者を対象としたガイダンス、非常勤講師の時間割（教科書）調整及び遠隔講義の実施対応、実習校選定業務（大分市教育委員会と連携）、実習校の巡回指導（養護実習Ⅰ、Ⅱ）、養護実習Ⅰ履修者選考（令和4年度は15名中10名に履修許可）、大分県内者（大分市の学生を除く）対象の母校実習（豊後高田市2校、杵築市1校、宇佐市1校、臼杵市1校、竹田市1校、中津市1校、日田市2校、別府市2校、佐伯市2校で実施）に関する調整業務、教員採用試験一次対策の遠隔配信での実施、教員採用試験二次対策講座（実技、場面指導）、採用試験終了後の就職活動の支援、教員免許の一括申請、新カリキュラムの施行に伴う教職課程変更届の文部科学省への提出である。今年度は、一次試験対策がオンデマンドで実施できるよう環境を整備した。今年度より、大分県教育委員会がスタートさせた大分県内の高等学校を対象とした教職ガイダンスに参加した。令和4年度は大分市内の公立高校5校で開催された。

令和4年度卒業生（養教課程第4期生、過年度生1名）は、17名が養護教諭一種の免許状を取得した。教員採用試験の受験者は6名、1次試験合格者は4名、最終合格者は1名（大分県）だった。免許取得者の進路は、大分県養護教諭1名（正規）、佐賀県非常勤講師1名、和歌山県非常勤講師1

名、大学院等進学 2 名、医療機関就職者 10 名、一般企業就職 2 名。教員就職率は、20.0%、教員として勤務する卒業生の大分県内就職率は 33.3%だった。

今年度の課題は、養護実習 I を近隣校での学校ボランティアの形で実施するための事前調査、関係機関との連携であったが、感染症拡大のため、実習機会の調整、確保に迫られたこと、学校が学外のボランティアを受ける入れるという状況になかったことから、実質的な進展はなかった。継続して検討課題とする。

9-3-8 2) 看護実践力修得支援小委員会

委員長 秦さと子

委員 足立綾、荒木章裕、後藤成人、佐藤栄治、永松いずみ、丸山加菜、山田貴子、矢野杏子、渡邊一代

看護実践力修得支援小委員会の主な活動目的と役割は、①1 年次から 4 年次までを通じ、学生が段階的に看護実践力を修得できるように、看護技術修得プログラム（統合科目）および看護スキルアップ演習を企画・運営・評価すること、②学生が効果的に看護実践に関する学習ができるように、研究室領域間で情報交換し、臨地および学内における実習に関する環境整備を行うこと、③臨地実習に関する指導指針、ガイドブック等の作成・見直しである。7 月を除く月 1 回の定例会議および臨時会議 1 回を開催し、前述に基づき主に以下の活動を行った。

1. 看護技術修得プログラムの企画・運営・評価

第 1～3 段階看護技術演習（ファーストステップ：2 年次後期、セカンドステップ：3 年次前期、サードステップ：4 年次前期）を実施した。第 1・2 段階看護技術演習では、課題事例に対して適切な技術適用を評価する内容である。そのため学生に、評価日に照準を合わせて、グループワークと実技練習を計画的に取り組みさせた。今年度は、グループワークはオンラインを主に活用し、技術練習と評価のための技術チェックは、感染対策を行いながら学内で実施した。学生の取り組みの状況は良く、概ね目標に到達できたと評価した。また、学生のグループワーク等での取り組み状況が適正に評価に反映されるように、学生による自他評価方法を取り入れ実施した。これにより、グループワークに対する学生の不満はほとんどなかった。新カリキュラムへ移行するため、第 1 段階は今年度が最後の実施となった。第 3 段階看護技術演習（4 年次前期）では、学生が主体的・計画的に学習する環境の提供として e ラーニングを行い、知識の習得やレポートを通して看護技術の習得を目指すことができていた。今後も学生の取り組み状況を適正に評価する方法について検討していく。

2. スキルアップ演習の企画・運営・評価

本演習は 4 年次生を対象に看護基礎教育の総仕上げとして、人間科学講座の専門基礎科目と看護の専門科目で学んだ知識・理論を統合し、アセスメント能力および看護技術実践能力を養うことをねらいとしている。今年度もオンラインで実施した。昨年度同様に、オンラインでの演習方法につい

て、感染予防に配慮し事前に動画または写真、パワーポイント資料等でコンテンツを作成し、事例に対して適切かつ安全安楽な看護技術をどのように提供しようと考えたかが伝わる発表にするよう指示した。その結果、実施後の学生からのアンケートではディスカッションの充実等の意見があり、教員からも見せ方の工夫により学生の学びがわかりやすかったなど好評であった。次年度も同様の方法での開催を継続する。次年度は、事例内容や課題の見直しの必要性を検討する予定である。

3. 新カリ看護技術演習検討

2022 年度改正のカリキュラムで本委員会が担当する 2 年次後期『基礎看護 援助技術演習（選択科目）』、3 年次前期『臨床看護援助技術演習（必須科目）』、4 年次前半『応用看護援助技術演習（選択科目）』に関する授業内容、および具体的な運用システムの検討を実施した。概ね授業構成は完成し、現在は 2023 年度開講に向けて具体的な運用システム等について計画的に取り組んでいる。

4. 実習環境の整備

1) 南大分キャンパス

今年度は、特に、臨地実習中に利用する実習関連物品の整備と利用簿等の修正を行い、スムーズな運用につなげた。また、ネット環境整備の要望に対して、モバイル Wi-Fi を 6 台、月割でレンタルし対応した。感染予防対策で CO₂ モニターを設置し、感染対策に活用した。

2) その他実習施設環境整備

各実習終了後に担当研究室のメンバーから実習時の環境状況について報告してもらい、必要な環境整備を行った。今後も各研究室間で情報共有しながら必要な環境整備を行っていく。

3) 学内実習環境の整備

導入 2 年目の教育用電子カルテ (Medi-EYE) について、運用、導入への意見収集、トラブル対応、継続活用意向調査、教材検討などを行った。コロナ禍により臨地実習が学内実習に変更された場合や学内演習で活用されていた。また、看護技術修得支援のため e-learning 教材 (ナーシングスキル) においては、年度初めに新入学生及び教員の登録、変更および年度末削除を行い、相談窓口を担い、年度内トラブル 8 件に対応した。また、活用状況の評価を行い、本教材は広く活用されていることが確認された。今後は、安定した運営環境の保持と適切な学習事例や技術種目の検討が必要である。その他、学内実習等で必要な消耗品、備品等の購入により演習環境の調整を行った。

5. 実習関連マニュアルの内容検討および整備

1) 看護技術習得確認シート

4 年間で計画的に技術修得が図れるように、1 年次生に看護技術修得確認シートの説明と配布を行った。また、4 年次生に対し卒業時看護技術確認アンケートを実施した(2022 年 12 月実施、回収人数 52 名/74 名中 回収率 70.3%)。卒業時まで全員が単独で実施できることが望ましい技術項目：22 項目のうち、8 割以上の学生が「単独で実施できる」と自己評価した項目数は 4 項目で、昨年度より減少した。その要因としては、コロナの影響が大きいことが考えられた。各臨地実習での基礎看護技術の実施状況を把握しながら、経験できる機会を増やすような支援を検討する必要がある。

2) 実習ガイドブック・実習指導指針の見直しと作成

実習ガイドブックの一部見直しを行った。2022年度からの新カリキュラムが現行のカリキュラムと並行して運用されるため、どちらのカリキュラムにも対応できるように掲載の工夫を行った。実習ガイドブックは500部作成し、348部を学生および実習施設への配布を行った。今後も活用による評価と社会の変化に応じた内容の見直しが必要である。

9-3-8 3) 国家試験対策小委員会

委員長 石田佳代子

委員 定金香里、佐藤愛、宿利優子、原田千夏、姫野綾

本委員会では、看護師の国家試験合格率100%を目指し、学生が主体的に学べる教育環境を整備する役割を担っている。具体的には、年間模試計画の早期立案、実施、結果分析を行い、個別・少人数指導体制の整備、国試ガイダンスの充実、学習環境の工夫などにより、学習への動機づけを高めることである。

2023年2月に実施された第112回看護師国家試験の合格率は、全国の90.8%に対し、本学は97.3%であった。

本委員会が取り組んだ主な国試対策としては、4月にそのスタートとなる「国試ガイダンス」を学生委員とともに行った。7月には「国試対策スタートアップチャレンジ」を実施した。スタートアップチャレンジでは、国試に向けての学習開始のきっかけづくりや学習習慣の継続を支援するために、外部講師による新出題基準対策講座（オンライン）の聴講、本学の国試結果および模試結果から得られた傾向などの説明、過去に実施した模試の解き直しと必修模試、以上に加えて、卒業生の体験談を聞く機会を新たに設けた。12月には必修問題と状況設定問題対策として「国試対策レベルアップチャレンジ」を実施した。業者模試は7回実施した。模試の結果は自己採点し、自分の力を把握するとともに必ずやり直しをすることを指導した。成績低迷者に対しては個別対応を適宜行った。また、1・2月には国試に向けて健康管理や感染対策等の説明を行い、試験直前期にもガイダンスを充実させた。

学習環境の工夫として、新型コロナウイルス感染対策で学生が登校できない時期などには、模試を各自の自宅で受験できるように学生委員が研究室ごとに配布するなどして対応した。また、自己学習場所の確保については、徹底した感染対策の下で利用できる場所を確保するなどして対応し、大学全体で支援できるように配慮した。学内の雰囲気づくりとして、9月より毎月1回、国試の過去問題をGoogleフォームで全学生に配信し、他学年に対しても国試対策に対する意識が高まるように取り組んだ。なお、業者が提供する教員向けセミナー等に参加して、国試問題の傾向などについて情報を収集し対策に活かした。

次年度以降の国試対策に役立てるために、2月の国試終了後に4年次生にアンケートを実施した。また、模試の結果分析を行い、全国正答率に比べ本学正答率が下回っている問題の一覧表を作成し、本学が苦手な部分を把握して、学内の教員間で共有できるように周知した。その共有事項の活用の現状を把握し、今後の活動の参考とするために、年度末に教員に「模試結果の活用に関するアンケート

ト」を実施した。

次年度の課題は、学生の国試対策へのより主体的な学習を支援するために、適時に情報を提供し学習環境を整えることと、国試対策の開始が特に遅い学生に対して早期の開始を促す有効な対策を検討し実施することである。112 回国試の本学学生の傾向の分析結果や模試結果の活用に関するアンケート結果などを参考にしながら、合格率 100%を目指して取り組む。

9-3-8 4) 進級試験ワーキンググループ

リーダー 濱中良志

メンバー 佐伯圭一郎、山田貴子、宿利優子、田中佳子

2月22日(水) 本試験実施

2年次生 86名受験(1名欠席)、64名合格、22名不合格

平均 65.9点、標準偏差 10.0点、最高点 86点、最低点 42点

再試験・追試験は3月1日(水)実施

再試験 22名受験, 21名合格、1名不合格

追試験 1名受験、1名合格

9-3-9 研究科教育研究委員会

委員長 稲垣敦

副委員長 梅野貴恵

委員 甲斐優子、影山隆之、藤内美保、福田広美、神崎正太

オブザーバー 村嶋幸代

本委員会の任務は、大学院研究科の運営に関する事項について審議することである。本年度は審査の遅れた修士論文があったため、委員会を13回開催した。入試の結果は、第2章に記載した。

今年度は、本学が大学教育質保証・評価センターの認証評価を受審したため、関連する部分のポートフォリオの執筆や事前 Web アンケートの準備を行った。ポートフォリオでは、【基準1】法令適合性の部分及び【基準3】特色ある教育研究の進展における<取り組み3>大学院における高度実践者教育を担当した。評価の結果は合格(大学院の基準を満たしている)であったが、以下の改善点を指摘された。【改善を要する点】としては、①博士課程後期における収容定員の超過、②「学習成果を評価する方法に関する方針」を明示すること、③「入学者選抜の基本方針」を明示することの3点が指摘された。また、【今後の進展が望まれる点】としては、①博士課程前期における収容定員の未充足、②シラバスの組織的な点検・確認の体制の整備、③学習到達目標の達成度をどのような観点から評価するのが学生に明確に伝わるような成績評価基準、④DPとCPの関係を明確化し、学生に明

示すること、⑤教育情報の公表についての組織的な検討・運用を行う体制の整備及びわかりやすい情報公表、⑥法人組織と大学組織の関係、学内組織間関係の整理などにより、内部質保証を担う組織体制の明確化、の6点の指摘があった(3/15)。これらの点は次年度の委員会で検討し、内部質保証推進会議で改善案の承認を得て、次年度中に改善を完了する予定である。

その他、以下の事案について検討し、運用開始した：(1)英語論文作成概論の担当教員を native speaker に変更、(2)大学院での基礎英語教育(Intensive English Study)の中止、(3)NP コースの3ポリシー、カリキュラム、入試(地域枠)の変更、(4)受験者が COVID-19 で受験できない時の追試験の実施、(5)認証評価のポートフォリオの作成や事前 Web アンケートの準備、(6)博士論文の副論文として Scopus に登録されているジャーナルを許可、(7)科目名の変更、(8)特定行為研修管理委員会設置要綱及び特定行為研修修了認定要領の改正、(9)KPI の検討、(10)NP コース関連の予算の受け入れ、(13)学位論文審査における学外審査委員に関する申し合わせの作成。

また、次のようなルーティンな業務を行った：(1)入学式の準備・運営、(2)休学、復学、長期履修、退学の確認、(3)指導教員の変更、(4)大学院生の困りごとの相談、(5)退学希望者と面談、(6)大学院生の TA 雇用の承認、(7)大学院研究費及び大学院研究室の消耗品購入の検収、(8)NP コースの進級判定、(9)在学生の履修状況の確認、(10)特待生授業料免除について、(11)大学院生オリエンテーション、(12)日本学術振興会の優勝賞について、(13)特別選抜の募集要項の作成・配付・事前相談・問題作成・準備・設営・試験監督・採点・集計・合否判定案作成、(14) NP コースの基礎学力試験の結果の確認、(15)新入生の既習得単位の確認、(16)長期履修申請の確認、(17)学部生のキャリアガイダンスにおける大学院進学について説明、(18)指導教員の確認と未決定の学生との面談・調整、(19)日本学生支援機構大学院奨学金推薦について、(20)大学院説明会の企画・準備・運営、(21)博士課程後期への進学審査の募集要項の作成・配付・事前相談・問題作成・準備・設営・試験監督・採点・集計・合否判定案作成、(22)入学試験の募集要項の作成・郵送・事前相談・問題作成・準備・設営・試験監督・採点・集計・合否判定案作成、(23)研究中間報告会・研究計画報告会・論文レビュー報告会・研究成果報告会の企画・運営、(24)年間スケジュールの検討、(25)大学院特待生入学料免除について、(26)大学院入試の過去問題と解答例の配付、(27)学生便覧とシラバスの編集、(28)二次募集の募集要項の作成・配付(今年は受験者希望者なしのため実施せず)、(29)日本学生支援機構大学院第一種奨学金返還免除について、(30)学生と語る会(助産学コース)・院生と語る会(広域看護学コース)の企画・運営、(31)修士論文と博士論文の審査員の推薦、(32)大学院研究生の募集要項の作成・配布、(33)年度目標の実施状況の確認・次年度の目標と予算案の作成、(34)修了要件の確認と修了判定案の作成、(35)修了式・学位授与式の準備と運営、(36)研究費の繰越の審議、(37)日本学生支援機構奨学金予約採用について、(38)特定行為研修管理委員会について、(39)新入生の既習得単位認定認定、(40)非常勤講師のチェックと承認、変更の許可、(41)大学女性協会奨学金推薦者の推薦、(42)中期目標・中期計画の原案作成、(43)年度目標・年度計画の原案作成、(44)大学パンフレット原稿の執筆、(45)新型コロナウイルス感染症対策マニュアルの改正。

9-3-10 看護学実習委員会

委員長 廣田真里

委員 林猪都子、梅野貴恵、小野美喜、甲斐優子、影山隆之、加藤典子、草野淳子、桑野紀子、
藤内美保、福田広美、村嶋幸代、佐藤英

令和 4 年度の年度計画は「各段階の実習についてどういう病院で実習させると良いか、また、実習病院に求める看護の機能などを整理する等、実践能力向上のための実習施設との連携と指導体制の見直し強化をおこなう」であった。

令和 4 年度も実習の半分近くが学内となり、実習施設に求めるものは「実習の受け入れ」であった。そのため、看護の機能などを整理するには至らなかった。教員は、臨地と学内との 2 手に分かれ、それぞれに指導を行ったが、その過程において、日々臨地の状況に変化がある中で、平常時よりも密に情報交換ができたこともあった。

「新型コロナウイルス感染症に係る看護学実習の大学の方針と注意事項」について、夏以降若干の感染者数の下降に伴い、内容と実態の乖離があったため、実態に合わせて変更した。学生及び患者の安全の担保をしながら、学生が少しでも臨地に行けるように実態に合わせた変更となった。

各段階の実習を通して、学生の成長につながる実習指導の継続指導、情報共有、引継ぎ等について検討した。これについては、すぐに効果的な方法が見つかるわけではないため、引き続き検討の必要性があることを確認した。

予防的家庭訪問実習については、次年度より、グループでの振り返りの時間を授業時間に計画することが承認された。

実習に伴い、PCR 検査等の費用が昨年度を大きく上回っていることから、PCR 検査等の必要性について意見交換した。原則、「PCR 検査等を実習受け入れの要件としない」ことを実習施設に理解してもらおうこと、一方、母性・助産実習や小児実習、予防的家庭訪問実習等においては、PCR 等が必須であることを確認した。

基礎・成老実習室の近代化改修に伴い、実習室の効果的な活用方法および将来の改修等について検討の必要性があることを確認した。

次期中期計画においては、「学生の自律性、主体性を引き出す効果的な実習指導」「学内及び臨地実習の充実、演習から実習への効果的な継続指導」「インシデント事例活用システムの構築」の 3 点について意見を提出し、今後の課題を確認した。

新型コロナウイルス感染症に振り回されて 3 年が経過した。実習や演習、対面授業にも多大な影響が及んでいる。令和 5 年度は「With コロナ」を念頭に置いた実習方法、実習指導方法及び、ICT を活用した教育方法等について検討する必要がある。

9-3-11 学生生活支援委員会

委員長 小野美喜

委員 内倉佑介、菊池誉志、後藤成人、釘宮由美子、関根剛、篠原彩、永松いずみ、丸山加菜

COVID-19 感染拡大による学生の自粛生活が 3 年目となり、COVID-19 感染予防を強化するとともに、不安を抱える学生を支援すること、教員・学生間の交流の機会をつくること、自治会活動などの学生行事が継続できるよう支援を強化することを重点課題にあげ、学生支援を行った。具体的な活動は以下である。

1) COVID-19 感染予防対策：感染状況をみながら学生に注意喚起し学内の環境整備を行った。4 月には「新型コロナウイルス感染対策と学生生活」令和 4 年度版を学生ポータルサイトに公開し、食堂の巡回を実施した。しかし全国的な感染拡大によって学生自身の感染や同居家族の感染が増え、学内での連携体制のもと保健室が中心となって感染者の把握と管理を行った。

2) 学年担任によるサポートと保健室を中心とした健康支援：随時、各学年の担任が、学生の生活習慣や健康に関する相談に応じた。留年学生や休学を検討している学生・保護者との面談を行い、今後進路に関する相談と助言をし、学習支援を行った。今年度の面談件数はのべ 39 件であり、例年同様に低学年の相談件数が多かった。メンタル面でのサポートが必要な学生は保健室が窓口となり、必要なケースは専門家につなげた。カウンセリング件数はのべ 44 件と昨年度より増加し、カウンセリング相談員を 2 名に増員して対応した。

3) 経済的支援：教務学生グループより情報発信される奨学金や授業料減免制度を共有し、必要時学生に情報提供した。また食生活に関する支援として 11 月にフードドライブ開催し希望学生に余剰食品を提供した。

4) 新入生・全学オリエンテーション：全学オリエンテーションには感染予防のため 1 年生のみが来場し、他学年はオンラインによる参加で開催した。全学および 1 年生の親睦オリエンテーションでは、学生間の距離を縮める工夫をし、学生交流につとめた。

5) コンタクトグループによる交流促進：4 月 20 日、27 日にコンタクトグループによる交流会を開催し 29 グループ 140 名が参加した。4 年次生がリーダーシップをとりリモートによる開催ではあったが、学年を超える交流と情報交換が実施できた。

6) 自治会活動、サークル活動など学生関連イベント支援：若葉祭やキャンパスクリーンデイの行事は感染拡大を考慮して中止した。しかし令和 5 年度には 3 年ぶりとなる若葉祭開催を目指しており、学生に助言を行いながら準備を支援している。サークル活動再開にあたり、感染対策を講じた活動計画の提出をもとめ、活動を支援することで徐々にサークル活動を再開することができた。3 年間のコロナ禍で休止していたサークルの廃止や新規サークルの立ち上げなど変化があった。入学以来サークル活動をしていない学生が大半であり、今後の活動に向けた支援が課題である。また、自治会活動の会計や事業計画の支援、助言を行い、コロナ禍で活動できていなかった学生自治の継続活動を支援した。

7) 1 年生を対象としたデート DV 等の研修：1 年次生を対象にデート DV に関する講習会を 7 月に開催した。今年度は講師を招聘し対面による研修開催とした。

8) 学生の交通安全の推進：交通安全指導講習会は、感染対策のため対面講習会を中止した。今年度より自動車通学許可の確認については面接を廃止し、書面実施に変更したが、トラブルは生じなかった。学生からの交通事故報告を受け、適宜全学への注意喚起を行った。

9) 九州地区学生指導研究集会、九州地区公立部長会議の参加 昨年度に引き続き文書開催となり、文書での意見交換を実施した。

10) 学生生活実態調査：昨年同様に 12 月に Google フォームを用いた実態調査を実施した。回答率は 38.3%と昨年より低下したが、コロナ禍での学生の生活実態の掌握ができた。結果はキャンパススクエアの掲示板で公開し、学生からの要望は各関係部署に伝え回答を得た。

次年度の課題は、さらに学生交流を活発にすることである。ポストコロナの学生生活を整えるため、若葉祭やサークル活動の開催支援を強化する。またメンタル面での支援や学習支援が必要な学生が増加していることから、担任や保健室と連携をとったサポートをさらに実施していく。

9-3-12 就職・進路支援委員会

委員長 甲斐優子

副委員長 廣田真里

委員 佐藤愛、中釜恵里佳、姫野綾、岡田浩明、神崎正太、竹中愛子（10 月から藤川桂子）

就職を希望する学生は就職率 100%、県内就職率 50%以上を目指して取り組みを行った。

就職・進路相談として 4 年次生には、就職や進学などの進路状況に合わせて希望者全員への模擬面談の計画的実施、履歴書や小論文作成への随時指導等を実施した。また、各研究室内の随時相談においても、県内施設の情報提供なども行った。その結果、看護師への就職、保健師、助産師への進学希望者の 5 割弱が 8 月までに、約 8.5 割が 10 月までに進路先が内定した。養護教諭を希望する者は、希望する県に内定し、進学を希望する者は、本学又は地元県での進学ができた。最終的には、県内就職率は 60.0%となり、数値目標は概ね達成した。

就職・進路支援のためのキャリアガイダンスとしては、年間 3 回を計画した。3 年次生には、2022 年 7 月 19 日と 2023 年 2 月 15 日に、学生からの希望が強い卒業生の体験報告や施設の看護職の講義を取り入れた。また、ジョブカードを用いた自己理解や県の看護政策の動向の講義を行い、就職活動が具体化できるように工夫した。2 年次生には、2023 年 2 月 22 日に、インターンシップ等への参加や 9 月からの専門領域実習の重要性を伝え、就職活動がタイムリーに始められるように説明した。受講後のアンケートからは、内容を理解している反応が多かった。

また、今年度から 1 年次生の大学ナビ講座で、看護のキャリア形成の重要性や県内施設の看護部長から看護活動の実際について講義をしていただき、看護学実習や就職活動に向けた心構えなど、県内への就職活動の準備となる機会を新たに増やすことができた。

このように、学生が希望する進路に向かって活動ができるように、1 年次生から 4 年次生までの体系的な就職進路支援活動となってきた。今後は、その取り組み内容の充実を図るとともに、日常的に

上位学年と進路相談ができるような交流の場の創出や、卒業後のUターン支援の充実等継続的なキャリア支援を検討する必要がある。また、県内就職率についても成果が継続するよう取り組む必要がある。

9-3-13 FD/SD 委員会

委員長 梅野貴恵

副委員長 吉田成一

委員 安部眞佐子、杉本圭以子、長瀬英子、姫野雄太、藤本優子、宮内信治

FD/SD 委員会は、教職員の能力開発、教育/研究内容及び教育方法の改善、組織間の連携を推進することを目的とした委員会である。主とする分掌は、①FD/SD の研修、②教員の授業評価の実施及び授業内容・方法の改善及び向上、③教員の教育、研究等に関する資質向上、①～③の企画及び推進に関することである。令和4年度の本委員会の活動内容は、以下の1)～9)である。

1) FD/SD 研修：9-4 FD・SD 活動参照

今年度は新任教職員研修を感染対策の上、新任教員7名、新任職員1名を対象に対面で実施した。科学研究費説明会・研修会は、例年FD/SD委員会が実施していたが、今年度は本学の経営環境を全教職員が知り、本学の収入増と節約を図り安定的運営に貢献する趣旨で、科研費を含む厚労省など外部資金獲得への周知を含め「外部研究費獲得研修」として大学と本委員会が協力して実施した。SD研修会(①「タイムマネジメント」篠原丈司氏)はハイブリッド(対面とZoom)で実施し、教育に関する研修会は(「授業デザインの基礎」鈴木雄清氏)と人権に関する研修会(「性的少数者の人権」江藤裕子氏)、SD研修会(②「DV防止啓発研修」吉本寛子氏)は、Zoomで実施した。今年度は、COVID-19感染拡大防止の為、ほぼZoomを用いたオンライン研修を実施した。

職位・経験別の研修は自己の課題や関心が異なるため、自主的な活動にしている。学内サーバーchihiro上にFSDS研修管理データベースを作成し、参加状況を確認できるようにしたが利用率は高くないようであった。研究・教育・大学運営に関わるような研修への参加を促進する目的で参加費の自己負担を軽減するため研修費用を補助することとし、2名が参加し研修報告書の提出があった。

今年度は、大分県自治人材育成センター県職員研修の募集案内はおこなったが、派遣希望はなかった。

2)学内競争的研究費の活用促進として、今年度から科研費の採択期日が2月末となったことを受け、前年度の3月7日にメールにて学内競争的研究費の募集を行った。4月1日締切までに奨励研究3件、先端研究4件の新規応募があった。4月6日にFD/SD委員会主催の審査会(審査員7名:FD/SD委員会から4名、教育研究審議会メンバーから2名、担当理事1名)で審査し、審査結果により助成額を決定した。さらに、4月着任の新任者にむけて4月1日に募集案内を行い、5月6日締め切りまでに奨励研究2件、プロジェクト研究1件の新規応募があった。5月11日にFD/SD委員会主催の審査会(同メンバー7名)で審査し、審査結果により助成額を決定した。

令和3年度採択分の2年目課題のうち、先端研究1件は、前年の研究計画書の変更願が出され研

究責任者の変更と令和5年度までの継続課題とすることが認められた。科研費スタート支援に新規採択されたこと等から辞退の届出があり、令和3年度に採択された2年目の研究課題と合わせて、令和4年度は、計13件への助成を行った。休職者を除く16題の研究成果（進捗状況）は、3月6日のアニュアルミーティングで報告された。

令和5年度の学内競争的研究費の募集は2月9日に行った（締切3月31日）。

3)科学研究費助成金申請の促進を行うために、全教職員対象に上記1)のとおり研修会を実施した。令和4年度の新規採択課題は8件で、レビューを受けたのは5件であった。4月1日新任教員に、スタート支援の応募期日と本委員会が申請にあたっての支援を行うことをアナウンスした。4月7日に担当者から公募アナウンスを行い本委員会がレビュー支援を実施し、3名が申請し1名が新規採択された。令和5年度科研費申請書のピアレビューは、新規申請29件のうち16件であった。2月28日に採択結果が一部公表され、新規採択課題は8件で、そのうちレビューありは3件であった。

4)国内/海外派遣研修の応募申請者はなかった。

5)授業評価アンケートは、Google フォームを使用した方法に変更した。1年次生36科目、2年次生31科目、3年次生25科目、4年次生12科目の全104科目（のべ113回）であった。担当教員は、Google Drive 上で結果を閲覧できるため、学生の自由記載への回答をキャンパススクエアの掲示板「授業アンケートの広場」に掲載するか、メールでの返答を促した。全体の科目ごとの回答数と平均値一覧は、FD・SD 委員会事務担当者が集計し学期毎にキャンパススクエアの掲示板にアップした。1年次生の回答率は、1学期は7割を超えていたが、2,3学期には2割を下回るものもあった。2~4年次生の回答率は、ばらつきはあるものの4割以下であった。また、全く無回答の科目もあった。学生には、今年度より授業時間の最後5分程度をアンケートの回答時間に確保し、メールでURLを送付し、学生担当者から督促メールを送付しているが、回収率の増加にはつながらなかった。次年度は、学年の初め、長期休暇明けなどにアンケート担当委員が趣旨の説明等を実施することとした。大学院科目の授業評価は、Google フォームを用いたwebアンケート又は、担当教員自作のアンケート実施を単位認定者に依頼した。授業アンケートの実施は10科目（全121科目中）であった。

6)教員相互の授業参観を促進するために、Google フォームによるアンケートを12月1日~16日に全教員を対象に実施し39名からの回答を得た。4月~11月の授業参観の実績は、所属研究室内の授業参観がのべ20人、所属研究室外の授業参観が、のべ10人であった。

7)アニュアルミーティングは、令和5年3月6日に開催した。新型コロナウイルス感染拡大対策として、3日前にカレッジホールに発表用のポスターを掲示し、参加者は事前にポスターを閲覧、当日は質疑を行う方式とした。当日は、Zoom を用いて発表者による簡単な説明と質疑応答（1人8分）を実施し、教職員54名が参加した。学内競争的研究費の応募者による発表12題、一般演題10題が、ポスターやパワーポイント資料を用いて発表された。

8) おおいた地域連携プラットフォーム教育プログラム開発部会 FD・SD 事業ワーキンググループが主催した「2022年度大分合同 FD・SD プログラム新任教員研修」が12月17、18日にオンデマンドと対面（会場：大分県立芸術文化短期大学）で実施された。本学から3名が参加した。委員長がファシリテーターの1人として参加した。

9) おおいた地域連携プラットフォーム教育プログラム開発部会 FD・SD 事業ワーキンググループには委員長がオンライン会議（メール稟議含む）に5回参加した。第5回大分合同 FD・SD フォーラ

ム (Zoom) は、「これからの高等教育に求められる学習環境デザイン (東京大学大学院教授 山内祐平氏)」のテーマで、3月9日に大分県立芸術文化短期大学本学が担当し開催された。本委員会メンバーや教員13人が参加した。

10)学内全教職員へ他機関からのFD・SDに関する情報提供を44回行った。

今後の課題

今年度の学部の授業評価アンケートは、Google フォームで実施した。後期 (2~3 学期) に回答率低下があるため委員会内で検討した結果、入学時、各学期初めにアンケート担当委員が趣旨の説明等を繰り返し実施すること、科目担当教員に Google Drive の見方と学生への返答の促進を行うことにした。次年度の web アンケートの回答率をあげる工夫を実践し状況を確認し、令和6年度からの方針を検討することとした。教員の教育力を高める方法の一環として、DX を活用した授業の参観を計画して学内教員に周知する必要がある。また、教育・研究・大学運営のための研修参加や国内・海外派遣研修費の利用者が少ないため、周知して研修参加を促進することとする。

9-3-14 研究倫理・安全委員会

委員長 草野淳子

副委員長 濱中良志

委員 荒木章裕、小嶋光明、加藤典子、森加苗愛

外部委員 二宮孝富、西英久

事務局 松尾美沙

研究倫理・安全委員会を令和4年度は11回開催した。1月が休会であった。各月ごとに教員や大学院生等から申請された研究計画書の審査を行った。今年度の申請件数は93件で、そのうち88件が承認された。A判定7件、B判定81件、C判定2件、取り下げ3件であった。採択率の向上を目指すために、大学院生や教員からの記載要領の相談を受け入れた。大学院生の研究計画の記載内容が充実するように今後も申請時には「研究計画の申請の手引き」を熟読し、担当教員の指導を十分に受けることをアナウンスしたい。

研究倫理教育に関しては、公正研究推進協会のeラーニングAPRINを導入して、教員全員が受講するように年度計画を立てた。3月末日までに受講対象である教職員・大学院生が全員受講するようアナウンスした。令和4年度の修了者は教員53人、事務5人、大学院生41人であった。研究計画の提出時には、研究責任者・共同研究者のAPRINの修了書の提出を義務づけている。受講対象である教職員と大学院生全員の受講が課題である。

令和4年度は、動物実験小委員会と協議し「X線を用いた動物等の実験に関する要領」の変更を検討した。そのほか、学外研究責任者の研究計画の審査及び倫理教育の取り扱い、研究計画の審査手順について検討した。令和5年度より外部委員が委員会に参加して、研究計画を審査し判定結果を合議することになった。Web会議となるため、初年度は課題を検討することが必要である。

9-3-14 1) 動物実験小委員会

委員長 小嶋光明

委員 吉田成一、恵谷玲央、定金香里、松尾美沙

令和 4 年度の動物小委員会は臨時開催も含めて 6 回開催した。動物実験研究計画書 11 件の審査（新規審査件数 9 件;変更・追加件数 2 件）を行い、11 件が学長によって承認された。令和 4 年度では計画に沿った動物実験が 11 件実施され(うち 2 件は健康科学実験)、使用動物匹数はマウスが 280 匹、ラットが 69 匹で、総使用匹数は 349 匹であった。前年度の総使用匹数 868 匹に比べて今年度は 60%減少した。令和 4 年度に使用された動物実験おける「自己点検・自己評価」を実施すると共に、動物実験実施報告書を作成し学長に報告する。使用動物の慰霊祭は新型コロナ感染症拡大によって中止された。動物実験教育訓練に関しては令和 4 年 4 月 14 日(17 名)に動物実験講習会(小嶋・恵谷)を実施した。また、令和 4 年 12 月 16 日(75 名)に研究の倫理と安全の中で動物を対象とした実験(小嶋)について学部 3 年生を対象に実施した。人獣共通感染症の教育訓練は令和 4 年 6 月 9 日(12 名)に実施した。

かねてより飼育施設の温度・湿度の環境記録装置（データロガー）が劣化していたが、今年度は飼育室 2 の温湿度データロガーが故障したため新設した。残りの飼育室のデータロガーにも経年劣化している可能性があるため今後更新を検討する。

来年度も実験計画書の審査に加えて、実験実施中の状況や動物の健康状態について定期的に監視を行い、必要に応じて修正を加えることで、動物の福祉を考えた実験が行われるよう継続的な取り組みを行っていく。

9-3-14 2) 遺伝子組換え実験安全小委員会

委員長 吉田成一

委員 小嶋光明、岩崎香子

今年度は遺伝子改変動物等を使用する教員がいなかった。

9-3-15 広報・公開講座委員会

委員長 小嶋光明

委員 安部翼、石丸智子、大島操、岡田浩明、岡田悠希、甲斐博美、久保紘子、吉田成一、
矢野亜紀子、渡邊一代

1) 若葉祭教員企画

今年度は COVID-19 感染拡大状況を考慮し、中止となった。

2) オープンキャンパス

新型コロナウイルス感染拡大予防のため、7月16日(土)にオンラインで開催(LIVE配信)した。学長挨拶、大学紹介、入試概要説明、授業料・奨学金等の説明、在校生による合格体験談・メッセージ、模擬授業を配信した。また、模擬授業以外は8月から10月まで大学ホームページ上で後日配信した。オンライン開催に先立ち、事前に朝日新聞と読売新聞に広告を掲載し、広報活動を行った。オープンキャンパスのLIVE配信には197名の参加があった。後日配信については再生総数(配信期間:2022年8月9日~10月31日)が764回のだった。参加者からは「合格体験談」や「在校生メッセージ」が進路を選ぶ際の参考になったという意見が多かった。しかし、「キャンパスの様子を見たい」、「学内の設備等を見せてほしい」という声もあった。令和5年度は新型コロナウイルス感染拡大予防に配慮しながら、対面での開催を計画している。実際の学内の様子を見てもらえるようにしたいと考えている。

3) 出前講義

高校からの依頼により、大学進学を希望する高校生を対象とした出前講義に講師を派遣した。看護系の教授3名、准教授2名を派遣した。県立臼杵高校(6月15日)、熊本県立東陵高校(9月21日オンライン)、県立別府青翔高校1年生(9月22日)、県立別府青翔高校2年生(9月29日)、県立安心院高校(10月14日)の5件であった。

4) キャンパスツアー(大学見学)

新型コロナウイルス感染拡大予防のため、中止となった。次年度は再開する計画をしている。

5) 大学HP、SNSおよびマスメディアによる広報

大学のイベント案内を掲載(Webオープンキャンパス、オンライン講義、看護国際フォーラム、ホームカミングデイなど)し、それらの実施報告として大学アルバム42件を掲載した。本学公式Facebookを利用して大学のイベントの告知や活動・取り組みを卒業生、在校生、受験生、一般の方々などに発信した。今年度は、73件を掲載した。また、2月からは公式Instagramも開設し、8件を掲載した。また、各研究室・委員会の活動、受賞やメディア掲載等の情報を効率的に収集するため広報情報投稿フォームを作成し、定期的に教職員へ情報提供の協力依頼を行うなど学内からの情報収集強化を図った。教員の研究紹介は、全教員の協力のもと毎月更新し11件を掲載した。大学HPに掲載している大学Q&Aは、年2回(4月、11月)更新した。

6) 大学案内パンフレットの作成と活用

委員会委員5名が大学案内パンフレットWGに参加し運営した。業者選考では委員全員が参加し、2024年度版が次年度4月中に納品されるようにWGの支援を行った。2023年度版の大学案内パン

フレット約 3,000 部は、出前授業、進学相談時に本学に関心をもつ学生や保護者、高等学校に配布し、本学の認知度の向上や大学生生活の具体的な説明などに活用した。

7) 公開講座

新型コロナウイルス感染拡大予防のため、9月10日(土)にオンライン開催した。今年度のテーマは「腸活!腸から元気になろうー免疫力をアップする心と体のつくりかたー」と題して、順天堂大学医学部病院管理学研究室教授の小林弘幸氏と本学生体反応学研究室准教授の吉田成一氏がそれぞれの専門的視点から「腸活」について講演した。告知のチラシは県下の病院や各種施設等や、6月の大分県看護協会総会などで早期に配布した。また、朝日新聞と読売新聞の2社に広告を掲載した他、大分県信用組合の県下38支店のデジタルサイネージにも告知を掲出し、広報した。参加者の年代は10代から60代以上と幅広かった。また、職業も医療従事者のみならず、看護系教員、会社員、高校生と様々で、総勢107名の参加があった。終了後のアンケートでは、「大変良かった」「良かった」が99%と高い評価が得られた。参加しようと思った理由は「テーマに興味があったから」が最も多く92%であり、情報源は「チラシ」「本学のHP」の二つで約7割を占めた。今後の開催方法としては、オンラインでの開催希望が90%と多かった。次年度も幅広い年齢層から関心の高いテーマで開催できるよう企画する。また、オンラインと対面のハイブリットでの開催を計画する。

8) 大学オリジナルグッズの作成

本学の広報活動推進を目的に、教職員に対し活用促進の取り組みを行ったが、COVID-19感染拡大のため対面のイベントが中止となり、活用機会は少なかった。年度末には各グッズの残数を確認し、500部のクリアファイルを作成した。

9) 広報誌「風のひろば」

広報誌「風のひろば」は後援会と共同で年2回(7月 Vol.20、12月 Vol.21)作成した。県内高校、学部生の保護者、同窓生、県内の実習関連病院などに各号1,900部を配布した。掲載内容は、卒業生インタビュー、教員の研究紹介等であった。次年度も年2回のペースで作成し、本学の学部生や卒業生、教員の活動等について紹介していく。

10) 活動の課題

令和5年度の継続課題は、以下の通りである。

- (1) 大学の教育研究活動の状況やその活動の成果に関する情報等を随時ホームページで広報する。
- (2) イベントの開催情報や学生の諸活動等を、メディア(テレビ、新聞)、ホームページ、SNS、広報誌等で発信する。
- (3) 一般県民(高校生含)、医療職者のニーズを満たすテーマの公開講座を開催する。
- (4) 新型コロナウイルス感染防止対策を講じながら対面方式で7月にオープンキャンパスを開催する。
- (5) 県内の高校へ教員を派遣する出前講義で看護学の魅力を伝え、本学への進学希望につなげる。
- (6) 大学院の広報の充実を図る。

9-3-15 1) 大学案内パンフレットワーキンググループ

リーダー 吉田成一

メンバー 内倉佑介、岡田悠希、橋本志乃、矢野亜紀子、矢野杏子、長瀬英子、久保紘子

2024 大学案内パンフレットを製作した。過年度より継続しているコンセプト「未来創造」は本年度のパンフレットでも継続することとした。パンフレットの内容として、次の事項を反映させることを念頭に作成することとした。1. 新型コロナウイルス感染症が流行している「今」の状況をパンフレットに反映させる。2. パンフレット全体の統一感を持たせる。3. コンセプト「未来創造」に基づいた卒業生・修了生・教職員の声をメッセージとして盛り込む。4. 特集ページを設定し、特集ページ以外のページは毎年大きな変更とせず、特集ページでその年のパンフレットについて特徴を出す。5. パンフレットには情報量を大きくせず、大学ホームページに QR コード等でリンクを設け、ホームページ上で詳細な内容が確認出来るようにする。

パンフレット制作に関わる業者は小野高速印刷株式会社が選定され、制作過程では、WG と複数回合同会議を行い内容について検討した。パンフレット内容を調整するにあたり、時間が要したため、原稿作成依頼、写真撮影が例年と比較すると遅い時期になったことは今後の課題である。写真撮影について本年度は感染対策を講じつつ、卒業生、修了生の所属勤務機関等で実施できた。

2024 大学案内パンフレットは 2023 年 3 月末に完成するため、次年度 WG では完成した 2024 大学案内パンフレットについて、改善点、評価できる点などの議論を一定期間かけて行った上で 2025 大学案内パンフレットを作成することがより魅力的なパンフレットを作成する上で重要と考える。

9-3-16 国際交流委員会

委員長 Gerald T. Shirley

副委員長 桑野紀子

委員 伊東美穂、岩崎香子、恵谷玲央、橋本志乃、姫野雄太、丸山加菜

1) 韓国の蔚山大学校医科大学看護課程交流派遣学生受け入れと交流

蔚山大学から学部交流派遣として学部生 8 名を同行教員 2 名と共に 8 月 2 日から 8 月 6 日までの 5 日間受入れ、本学に滞在する予定であったが、日韓の新型コロナウイルス感染症の流行状況について情報共有しながら実施の可否を両校で協議し、今年度は中止とした。

2) 韓国の仁荷大学校医科大学看護学部のオンライン交流会

感染拡大下でも実施可能な国際交流としてオンライン交流会を企画し、MOU 締結校である韓国仁荷大学の看護学生 28 名と本学学生 28 名が参加、8 月 9 日に実施した。両校参加学生の満足度は高く、今後につながる企画となった。

3) インドネシア ムハマディア大学のオンライン講義

MOU 締結校であるインドネシア ムハマディア大学から依頼を受け、精神看護学研究室の影山教授が6月14日にオンラインで“Issues and Trends in Mental Health” 「メンタルヘルスの課題と傾向」のテーマで講義を行った。

4) 本学学生の派遣

本学から学部交流派遣として学部生8名を同行教員2名と共に8月15日から8月19日までの5日間、韓国の蔚山大学校医科大学看護課程に派遣する予定であったが、日韓の新型コロナウイルス感染症の流行状況について情報共有しながら実施の可否を両校で協議し、今年度の派遣事業は中止とした。

5) 第24回看護国際フォーラムの開催

新型コロナウイルス感染症の流行状況を鑑み、大分県看護協会と共催で第24回看護国際フォーラムを令和4年10月29日に、Zoom ウェビナーで開催した。テーマを「With コロナの経験から得た知見—未来志向で考えるシームレスな新人教育の在り方」とし、米国から1名の講師が録画講演、国内から1名の講師がライブ講演した。質疑コーナーでは、米国・国内講師がライブ参加した。参加者は226名と盛況であり、約14%は県外からの参加者であった。参加者の職業は「看護師」が約4割を占め、臨床現場からの関心も高いテーマであることが伺えた。参加者アンケートの結果では講演内容について97%、質疑応答について94%が「とても満足」「ほぼ満足」と回答しており、高い満足度を示していた。

6) 英文 Web・パンフレット

令和4年度に英語パンフレットを全面改定し、刊行した。

令和5年度は、令和4年度の計画を踏襲し、韓国の蔚山大学校との学生交流プログラムでは対面交流を行う予定である。基本的には、学生および教員の国際的視野の育成のために、国際交流の機会を設け、各交流の目的に沿った実施内容を検討する。看護国際フォーラムでは開催後に参加者アンケートを実施し、看護職のニーズに沿ったテーマを選定し、地域貢献にもつなげる。

9-3-16 1) 英文 Web・パンフレットワーキンググループ

リーダー Gerald T. Shirley

メンバー 伊東美穂、岩崎香子、桑野紀子、丸山加菜

実施状況：

令和4年度に英語パンフレットを全面改定し、刊行した。

今後の課題：

海外の方に対して本学の魅力や情報を発信しPRを行うため、また、本学の学生や教職員が海外へ留学・進学する際などにも活用するために令和5年度に本学の情報を英語版学外Webで発信する。

9-3-17 図書委員会

委員長 林猪都子

委員 安部眞佐子、伊東美穂、白川裕子、堀裕子、吉村幸永

委員会選定及び学生リクエストによって新たに1,498冊（注：年度末最終冊数を記載予定）の蔵書を整備した。また、「図書館だより」（発行回数2回 <Vol.17(2022年7月)、Vol.18(2023年1月)>）の発行、図書企画展示（企画展示6回、ミニ展示1回）の実施、教職員の推薦図書を毎月紹介する「教職員おすすめの一冊」を継続し、教職員・学生の図書館利用拡大を図った。書庫狭隘化対策としては、今年度は研究室より移管された図書134冊の除籍を行った。また、研究・教育がより効果的に行えるよう、文献デリバリーサービス「Reprints Desk」、医学映像情報センターの映像配信サービス「ビジュランクラウド」を継続している。データベース医中誌Web版に関しては「フリーアクセスプラン」へ契約を変更したことで、実習先や自宅学習での利用が可能となり利用者の利便性が向上した。

学修支援としては、授業科目ごとに担当教員に参考図書の推薦を依頼し、「講義の理解を助ける図書・視聴覚資料」として案内を行い、リストを図書館HP上で公開している。また、購読雑誌見直しのため、教員・学生にアンケートを実施し、その結果を元に和雑誌・洋雑誌併せて15タイトルの購読を中止することで予算の削減を図った。後期に入り、新型コロナウイルスの感染者数が減少してきたことから、2022年11月より学外者の図書館利用を再開し、学内者に向けても休日開館を行っている。卒業生・修了生の入館状況を次年度以降も継続的に調査集計し、利用拡大のための方策を検討していくこととした。

9-3-18 情報ネットワーク委員会

委員長 佐伯圭一郎

副委員長 品川佳満

委員 恵谷玲央、岡田悠希、佐藤英治、長瀬英子、原田千夏

本学のネットワーク運用支援、新入生オリエンテーションでの情報関連ガイダンスや教職員へサポートなどのユーザー支援、メール管理、サイボウズなどによる手続き支援などの定常的に行う業務を各委員がWGごとに担当して行なった。

定常的な業務の他、本年度の活動としては、ファイアウォールの更新、財務システムのデータセン

ター利用への検証作業、来年度更新の教職員用 PC の仕様検討を行った。セキュリティ対策関連では、情報セキュリティ対策基準・情報セキュリティガイドライン原案の理事会への提出、サーバ chihiro のランサムウェア対策、パスワード漏洩検知サービスの試用、学生を対象とした情報セキュリティ講習会の開催を行った。学生を対象とした情報セキュリティ講習会は 7～8 月にオンデマンド配信で実施し、対象とした 2～4 年次生の 84%から受講済みの報告が得られた。

今後も定常的業務をつつがなく担当していくが、課題としては、世界的半導体不足による PC 類をはじめとする情報機器の価格高騰や保守費用の増加による経費の増加、納期の不安定さの影響による更新計画への影響などの問題がある。全学的な経費削減という状況において、費用の上昇を抑えつつ、業務効率やセキュリティの向上などを配慮して、活動を進めていく必要がある。

9-3-19 ハラスメント防止・対策委員会

委員長 岡田浩明

委員 稲垣敦、小野治子、小野美喜、田中保之（外部委員、弁護士）、長瀬英子、吉村匠平
関根剛（オブザーバー）、尾割勇作（事務局）

令和 4 年度のハラスメント防止・対策委員会として 1)～2)の活動を行った。

1) 委員会の開催

6 月 30 日（online）、2 月 22 日（online）に委員会を開催した。

2) 教職員向けハラスメント研修会の開催

10 月 24 日に対面及び online で、大分県人権問題講師の西田数子氏を講師として、「あなたから変わってみませんか 教育現場におけるハラスメント」の演題で、ハラスメント研修会を開催し、49 名の参加があった。

ハラスメント相談員が委員会に相談内容を統一的な項目により報告できるよう、ハラスメント相談報告書を作成した。また、次年度も委員の知識を深めるため、第 1 回委員会で弁護士の田中委員より、最新の裁判例の紹介を行う。

9-3-20 衛生委員会

1号委員 岡田浩明
2号委員 角匡幸（産業医）
3号委員 小野治子
4号委員 佐伯圭一郎、尾割勇作
オブザーバー 釘宮由美子
事務局 松尾美沙

衛生委員会は、職場の労働災害及び健康障害を防止し、職員の安全及び健康の保持増進を図るために活動を行っている。本年度は、計9回の委員会を開催し、健康診断結果の把握や職場巡視等を行った。

1 職員の健康管理

- (1) 定期健康診断を4月13日に実施した。健康診断結果を確認し、精密検査の必要がある職員に当該精密検査受診を勧奨した。
- (2) 労働安全衛生法に基づくストレスチェックを5月19日から6月1日に実施し、集団分析結果から健康リスクの確認を行った（64名受検、受検率87.6%、前年度比1.7%増）。
- (3) インフルエンザ予防対策として、予防接種希望者を募り、11月11日に学内接種を行った（希望者24名）。
- (4) 有機溶剤を使用する実験室の作業環境測定を5月10日と11月1日に実施し、その評価の報告を行った。
- (5) 夏季休暇、年次有給休暇の積極的な取得を教職員へ呼びかけ、取得状況を教育研究審議会等に報告した。

2 健康増進活動支援事業

- (1) 教職員の健康管理への意識向上を図るため、職場ウォーキングラリーを開催し、教職員45名が参加した。
- (2) 昨年度に引き続き、「各種スポーツイベントへの参加支援」としての参加負担金助成は新型コロナウイルス感染症の感染状況を鑑み、実施しなかった。

3 職場巡視

12月5日と1月16日に建物内を巡視した。その結果、キャビネットが固定されていない、キャビネット上に落下しやすい物が置かれている、階段の一部で床シートが剥がれている箇所等を確認した。キャビネットの固定、階段の床シートの補修については、大学事務局に依頼し補修等を行った。その他、照度、温度、CO₂（二酸化炭素）濃度について適正であることを確認した。CO₂（二酸化炭素）濃度について、人の多い部屋は高めの数値となったため、換気に注意することが必要である。職場巡視の結果は、教育研究審議会にて報告した。来年度も巡視を行い、必要な箇所の整備を行う。

9-3-21 評価委員会

委員長 稲垣敦

委員 岡田浩明、甲斐優子、福田広美

当委員会は、「公立大学法人大分県立看護科学大学教員評価の実施に関する基本的な方針」に従って、理事長及び理事以外の常勤教員の年間活動に関する評価を行い、理事長・学長に報告する。また、評価方法の改善や昇任人事の準備も当委員会の分掌事項である。今年度は、学長の指名により地域看護学教授の甲斐優子氏を委員に迎えた。本年度は昨年度の評価方法を踏襲し、学生による授業アンケートの結果を自己評価書に記載し、次年度の目標を記載する欄を継続したが、評価点には加えなかった。一方、記入方法に誤解が生じないように、説明をわかりやすくした。今年度は教員の負担を考慮し、例年（昨年：12月21日）よりも早く、12月15日に自己評価書等の資料の提出（〆切：1月16日）をメールで教員に依頼したところ、2月6日に48名全員から提出された。その後、所定の方式で評価を行い、その結果が適切であることを合議で確認し、学長に評価結果を報告した後、学長より差し戻しがあったため再検討し、修正後、3月3日に学長名で教員に個人評価票を返却した。その後、今年度着任した教員とC判定の教員については学長秘書が日程調整を行い、学長が個人面談を行った。なお、今年度は教員からの問い合わせや疑義はなかった。この教員評価結果を受けて、人事基本計画及び昇任基準に基づいて昇任の可能性を検討し、准教授1名、講師1名、助教2名の昇任案を理事長に提案した。この結果、全員の昇任について学長の承認が得られたため、推薦書や業績目録等の必要書類を準備して、3月8日の教育研究審議会で学長が昇任案を諮り、候補者全員の昇任案が承認された。その後、3月15日の理事会及び経営審議会で理事長が昇任案を諮り、最終的に候補者の昇任が確定した。次年度は、研究室メンバーによる研究室主任の評価、授業アンケート結果の評価点への反映、評価結果の公開等を検討する予定であるが、評価委員会では自己評価書を作成する教員の負担が極めて大きいことから、個人の年度目標に対する到達度によって評価する等の抜本的な改革が必要ではないかという案が出たため、これに関しては継続審議となった。

9-4 FD・SD 活動

1. FD・SD 研修

1) 新任教職員研修：4月2日 14:00～17:10、4月4日 9:00～12:10（対面）。対象者8名に大学組織概要、カリキュラム概要など、9領域に関する学内研修を実施した。

2) 外部研究費獲得研修会：7月6日 16:15～17:30（Zoom）。参加者は教職員63名。学長の挨拶のあと本学の経営状況についての説明を岡田事務局長、①科研費申請の説明を申請事務担当者（伊東美穂リーダー）、今年度科研費採択者1名（姫野雄太助教）の講義、②厚生労働省関係の研究費・事業費について1名（加藤典子教授）、その他 e-grant の紹介（稲垣敦研究科長）を実施した。また、先立って4月に新採用教員の科研費スタート支援の申請を希望した3名に申請書類の記載ポイント等についてメールで支援した。令和5年度科研費申請にむけたピアレビューは16件行われた。

3) 教育に関する研修：12月26日 13:30～15:30（Zoom）。参加者は教員48名。テーマは「授業デザインの基礎－学生の学びを促進する授業」で、ARCS や MUSIC の動機付けモデルを聴講し、ブレイクアウトルームを用いたグループディスカッションを行い、動機づけ経験の振り返りから理論による分類、授業改善アイデアの検討を行うワークショップ形式であった。講師は、大分大学 IR センター 准教授の鈴木雄清氏。

4) 人権に関する研修：12月26日 10:00～11:00（Zoom）。参加者は教職員67名。テーマは、「性的少数者の人権」で、性的少数者を取り巻く環境、SOGI ハラ、共生社会づくりのために私たちができること等の内容であった。講師は、大分県生活環境部人権尊重・部落差別解消推進課啓発班副主幹の江藤裕子氏。

5) DV 防止啓発研修：3月6日 10:00～11:30（Zoom）。参加者は教職員70名。テーマは、「DVの基礎知識、当事者の支援と回復に必要なこと」で、DV防止に関する法整備、加害者と被害者の特徴、DV被害当事者の対応、DV被害者支援の柱等についての内容であった。講師は、NPO えばの会 吉本寛子氏。

2. 学内競争的研究費

3月7日（4月1日）に募集を行い、奨励研究5件、先端研究4件、プロジェクト研究1件の新規応募があった。4月6日（5月12日）に審査会が開催され、10件すべての採択およびそれぞれの助成額が決定された。その結果、令和3年度採択分（2年目課題）とあわせ、奨励研究5件（1件科研費採択のため辞退）、先端研究6件、プロジェクト研究2件への研究助成が行われた。なお、それぞれの成果および進捗状況については、3月6日のアニュアルミーティングにおいて報告された。令和5年度の研究費募集を2月9日から開始した。

3. 国内／海外派遣研修

本年度は、国内／海外派遣ともに応募はなかった。

4. 授業評価アンケート

学部の授業評価アンケートは、1年次36科目、2年31科目、3年25科目、4年12科目、合計

104 科目について実施した。結果は担当教員 Google Drive 上で確認し自身の教授活動に活用した。各学期（前後期）に、科目ごとの平均値一覧結果は Campus Square に掲載され学生に周知した。

5. アニュアルミーティング

3月6日に研究費取得演題 12 題（13 題のうち 1 題は辞退）、一般演題 10 題が Zoom による発表形式（ポスターは発表 3 日前よりカレッジホールに掲示）で実施された。

10 附属組織

10-1 図書館

・2022 年度利用者数

図書館入館者数（延べ人数）	16,358 人
学外からの利用者数（実人数）	80 人

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため学内者のみの利用としていたが
2022 年 11 月 1 日より通常どおり学外者も利用可能とした。

・2022 年度受入図書冊数	1,731 冊
うち購入数	1,676 冊

・2022 年度受入雑誌タイトル数	182 点
うち購入数	141 点

・図書等資料蔵書数（2023 年 3 月 31 日現在）

蔵書冊数	85,359 冊
所蔵雑誌タイトル数	646 点
電子ジャーナル購読タイトル数	597 点
電子ブック購読タイトル数	15 点
視聴覚資料	2,284 点

10-2 看護研究交流センター

センター長 稲垣敦

副センター長 影山隆之

メンバー 加藤典子、定金香里、藤内美保、林猪都子、篠原彩、神崎純子

随時、センター規程や分掌事項を見直した。昨年度、本センターに知的財産本部を位置付けたため、産学官連携推進チームが中心となり、知的財産アドバイザーを設置し、知的財産の管理、普及・啓発、権利化、保護・活用等を推進した。また、学術ジャーナルチームは、インターネットジャーナルについて国内の看護系学術雑誌でははじめてとなるプレプリントサーバー／プレプリントリポジトリ（Jxiv）やデータ公開（J-STAGE Data）の導入の検討を開始した。継続教育推進チームは、若葉祭とホームカミングデイの同時開催を決定した。NP 教育・事業推進チームは、NP 研究室の新設を実現し、特定行為研修を 17 区分 31 行為に絞り、修了生のフォローアップ会議を開催した。次年度は、特に、大学全体に関わる利益相反に関する届出等について検討する。

10-2-1 地域交流チーム

リーダー 影山隆之

メンバー 荒木章裕、甲斐優子、神矢恵美、神崎純子、篠原彩、永松いずみ、福田広美

本チームは予防的家庭訪問実習を運営するとともに、おおいた地域連携プラットフォームに対する窓口となり、チーム会議を年 11 回開催した。

予防的家庭訪問実習に関しては、実習協力者への依頼、実習要項の作成と学生・教員へのオリエンテーション、本実習における感染対策の実施、進行状況の管理（学生・協力者・担当教員の調整）等を行った。新型コロナウイルス感染症の流行により 4～6 月は学生訪問を中止した。予定通り訪問できなかった学生の補習として、学生による電話問安、訪問地域に関する外部講師講話、オンラインでの学生グループワーク等を計画・実施した。年度末に協力者訪問を行った。

本実習のために、地域ステークホルダーとの運営会議を 2 回開催して、本実習の報告、コロナ禍における地域の状況についての情報共有、新規協力者開拓のための方法に関する協議等を行った。実習に長年ご協力いただいた方々が年度末に多数辞退され、新規協力者を募っても人数が満たされないことから、今後の運営について協議した結果、次年度から下横瀬地区でも協力者を募る方針で合意した。様々な変更を余儀なくされたものの、実習全体としてはスムーズに進行した。担当教員の役割など、実習運営の細部について改善を検討し、次年度の実習要項を取りまとめた。

おおいた地域連携プラットフォームでは主として地域交流・課題検討部会と教育プログラム開発部会に参加し、県内の高等教育機関・地方自治体・産業界団体との交流・協議を行った。県が県内大学等との連携を希望する地域課題解決事業の一つとして「新型コロナウイルス感染症患者の後遺症研究」に応募し、感染症対策課および大分大学と協働で調査研究を行った成果を、同事業報告会等で発表した。その他、必要な情報を学内で共有し、産学官連携推進チーム・FD/SD 委員会等と連携して学外との協働作業を推進した。

次年度は、感染症の状況をモニターしつつ、予防的家庭訪問実習の活動地域を下横瀬地区にまで拡大して実習を運営することと、前年度末に検討した実習運営方法の改善について確実に実施してゆくことが、当面の課題である。

10-2-2 継続教育推進チーム

リーダー 林猪都子

メンバー 足立綾、神崎純子、佐藤愛、篠原彩、姫野雄太

1. 地域貢献としての看護研究支援

5 施設（大分県立病院、大分赤十字病院、大分医師会立アルメイダ病院、衛藤病院、別府医療センター）から研究支援の依頼があり、各施設に講師を 2～3 人派遣し、看護研究支援を実施した。また、新規に国立病院機構大分医療センターから依頼があり 11 月から研究支援を開始した。今回は継続教

育推進チーム担当者と施設が研究支援について事前調整をしたことで、派遣講師がスムーズに研究支援を進めることができた。各施設の研究支援は2月までに終了し、3月末までに研究成果発表会が実施され、支援者による講評が行われた。2022年度の支援については、COVID-19の影響により、Zoomやメール等での支援が多く行われ、施設によっては、派遣講師による看護研究に関する講義を実施した。研究支援に関して、全施設から大変満足の回答があり、次年度以降も全施設から継続希望があった。各施設による研究支援内容に差が見られるので、次年度は派遣講師の入れ替わりに伴って、必要時、継続教育推進チーム担当者と施設管理者が話し合いの機会を持ち、事前調整を行う。

2. 看護研究交流会の開催

2022年7月7日に看護研究交流会をオンラインにて実施した。研究支援を受けている看護管理者、学長、看護研究交流センター長、派遣講師、継続教育推進チームが参加して、受けている支援や研究成果、看護研究支援体制について意見交換をした。今回の座談会形式での企画は初めてであったが、他施設の研究状況を知る良い機会となった。そこで、施設で研究に取り組むことができる支援体制の整備・構築についての情報交換が必要と考えたので、次年度は看護管理者と施設における研究支援体制の構築の現状について、意見交換を行う。

3. ホームカミングデイの実施

6月18日にホームカミングデイをオンラインにて実施した。参加者は卒業生と修了生9名、教職員18名であった。ホームカミングデイは卒業生の現況について聞きながら、なごやかに進められた。今年度はCOVID-19の影響を受けてオンライン開催とした。次年度の開催に向けて10月に2017年～2021年の5年間の卒業生・修了生にホームカミングデイに対するニーズ調査を実施した。その結果、65.1%の学生が対面開催、36.8%の学生が複数年度の卒業生・修了生参加による開催を希望していた。よって、2023年度は若葉祭の初日（5月20日）に対面で複数学年の卒業生・修了生参加で企画する。

10-2-3 産学官連携推進チーム

リーダー 加藤典子

メンバー 尾割勇作、神崎純子、佐藤栄治、篠原彩、田中佳子、樋口幸

産学官連携推進チームでは産学官連携による開発研究、地域連携及びベンチャー精神に富んだ人材育成などを推進する目的で平成27年度から発足・活動を行っている。本チームは、県内企業等との共同及び受託研究を促進し、地域企業の活性化を図ることを使命としている。産学官連携推進チームではこれ迄に県内外の企業や病院からの研究依頼・技術相談の窓口となり、教員（研究者）への紹介を行った（本年度は2件）。

本年度も人材育成の一環として、教員等に他大学の知的財産セミナーの紹介や学長やチームメンバーが東九州メディカルバレー構想推進大会に参加した。県内企業のニーズと大学教員のシーズのマッチングを図るための取組として、令和5年度に県内企業への周知を図るため、令和3年度に作成した大学教員のシーズ集の更新を開始した。さらに、教員の知的財産権に関する仕組みについての

理解を深めることを目的に外部講師を依頼し、講演を開催するとともに、令和5年度から知的財産アドバイザーを新規に配置するための体制整備を行った。

今後の課題としては、シーズ集を基に県内企業との共同研究の推進を図るとともに、研究成果物や特許等の知的財産の仕組みについて引き続き教員や大学院生に理解を深めるためのセミナー等を行うことや、規程集等の見直しを行う必要がある。

10-2-4 NP 教育・事業推進チーム

リーダー 藤内美保

メンバー 足立綾、石田佳代子、大島操、甲斐博美、草野淳子、宿利優子、橋本志乃、濱中良志、堀裕子、宮内信治、森加苗愛、吉田成一、吉村幸永、神崎純子（事務局）、岡田浩明（事務局長）、村嶋幸代（学長）

・令和5年度 NP 研究室立ち上げ

NP 教育のさらなる充実を図ることを目的に NP 研究室の立ち上げを提案し合意された。2名の常勤教員（准教授）と1名の非常勤助手の3名体制となる。診療看護師（NP）が准教授として配置されるように今後活動する。

・NP 教育の近未来像 TG の活動

本学 NP コースの使命として、プライマリケア領域に求められている NP の近未来像を検討した。その対策は大分県内で活動する NP の数を増やすことであり、プライマリ領域の NP が活躍できる病院や施設を抽出し、県内の日田、国東、中津、佐伯、豊肥、中部地区のほぼ全域の12施設を訪問し受験生のリクルート活動を行った。事前に職場で勤務する看護師が進学できる方法を検討し、リクルート用パンフレット・チラシを作成し、活動に使用した。

・NP コース教育課程 新カリキュラムと特定行為区分の変更

NP コースのカリキュラム改正を行った。方針はプライマリ領域の強化と効果的・効率的な教育運営である。そのため、老年と小児別々の科目を大幅に見直し、老年小児共通の科目を増やした。また特定行為実習を正規科目として入れた。総単位数は55単位を維持した。プライマリを強化するカリキュラム改正に伴い特定行為区分も17区分31特定行為に絞った。

・質担保の教育について（実習前試験、進級試験、口頭試問、修了試験など）

大学院カリキュラムの展開と質担保のための段階的な試験を次のように実施した。1年次生は12月13日に口頭試問、2月22日に進級試験を実施し、10名が進級となった。2年次生は6月15日に実習前試験、OSCE、1月28日に修了試験を行い7名全員が修了した。この7名は日本 NP 教育大学院協議会の NP 資格認定試験を受験し全員合格した。

・地域枠確保の推進（リクルート・募集要項改訂など）

2023年度入学生から履修カリキュラムが改正されるため、改正カリキュラムに則った大学院学生募集要綱の改正案を作成し、研究科教育研究委員会に提案した。また、「プライマリケア NP 活用のお勧め」というパンフレットを作製して、県内の地域中核病院をリクルート訪問した。結果、今年度

の地域枠の学生 5 名を確保することができた。

- ・ NP 広報活動について（ホームページ、チラシ、SNS など）

NP コースに関するパンフレットを作成し、学生募集等に活用した。

大学公式 Facebook や Instagram を活用し、NP コースに関連するニュースやイベント、学習風景等の情報発信を行った。

- ・ NP 実習室整備

臨床推論とフィジカルアセスメントや特定行為のスキル修得・向上の目的で、学生が自主的にいつでも活用できるよう NP 実習室の拡充を計画し実施した。主な改善点としては、地域看護学実習室の階段イスを撤去しスペースの確保をした。またさまざまな物品を一面の棚に格納できるようにしたり、講義やディスカッションができるよう移動机、スクリーンやプロジェクターなどの学習環境を整えた。

- ・ 実習施設合同会議

第 1 回は 7 月 2 日（土）に開催した。今年度の実習計画案、特定行為補講実習の進捗状況、厚労省の特定行為関連の手続きの強化に向けての体制整備などについて報告した。また働き方改革により次回より平日開催とすることとした。2 回目は 2 月 7 日（火）に開催し、NP 実習の報告、次年度の計画、特定行為補講実習により学生全員が 21 区分全てで 5 症例の経験ができる見込みであることが報告された。

- ・ 実習施設の新規開拓

次年度からの実習施設として 6 つの実習施設を開拓した。病院 2 施設、クリニック 3 施設、老健 1 施設である。実習施設の意見として学生人数を減らしてほしいという希望があったためである。診療看護師が活動している施設を中心に開拓した。実習協力施設を増やすことは NP の理解や推進につながると考える。

- ・ NP 修了生生活動推進施設交流会開催

初めての試みとして、現在 NP 修了生の 1 年目が所属する施設と在学生の所属する施設管理者（病院長、看護部長、病院事務長他）を対象に、様々な分野で活動する NP3 名の講演と情報交換を実施した。学生や管理者から NP をどのように活動させればよいのか悩んでいるという意見があった。在学生を支援する管理者から修了後の活動イメージがつき支援体制を整えたいとのフィードバックがあった。

- ・ 修了生のフォローアップ会議

テーマは、「NP の実践と介護・診療報酬 ～この実践、診療報酬に繋がりますか？～」で、2 月 10 日に開催した。参加人数は、修了生 16 名、大学院生(M1)12 名、大学教員 9 名、計 37 名だった。診療報酬につながる実践についての意見交換や情報共有等の交流ができた。

- ・ 入学前オリエンテーション

入学後の履修に伴う勤務調整や学習効果の促進を目的にオリエンテーションを今年度初めて実施し、入学予定者 9 名全員が参加した。仕事との両立や遠方からの通学に関しての質問に対応した。

- ・ NP 先端研究

テーマは、「プライマリ NP の実践知から得たコンピテンシーの探究 -大学院修了後の経験年数別の分析-」である。対象者全てのインタビューは完了し、現在分析中である。アニュアルミーティ

ングで報告した。

- ・令和4年度地域医療介護総合確保基金（医療分）申請

NP教育に必要な学習教材として、NPシナリオシミュレーション教育システム、デブリーフィング・データ管理システム一式、超音波学習ユニットを使用し、多様で幅広い事例に対する臨床推論、臨床判断能力を強化し高度なNP教育を行うための申請を行った。

- ・特定行為研修関連

① 特定行為補講実習について

特定行為補講実習を開始し5症例以上の実症例の経験ができるようにした。5月～8月まで大分大学医学部附属病院、大東よつば病院、豊後大野市民病院、別府医療センターで実施した。またNP実習修了後も5症例満たしていない項目は、大分岡病院、厚生連鶴見病院、豊後大野市民病院 別府発達医療センターで、主に2月を中心に補講実習を実施した。以上より学生全員が21区分38特定行為の全てで5症例以上の経験数を確保できた。

② 特定行為管理委員会における認定方法の改定

認定方法を改定する必要があったため、特定行為研修管理委員会設置要綱および特定行為研修修了認定要領を改定した。また特定行為管理委員会で評価するための評価基準の策定を行い、特定行為の認定は、学生の申請に基づき、学生個々に認定することを明文化した。これにより入学前に既に特定行為研修を認定されている行為は、5症例経験やOSCE等では扱わないこととした。

③ 特定行為筆記試験・OSCE

特定行為筆記試験と厚生労働省が定める特定行為6項目のOSCEを12月20～22日に実施した。到達目標は知識、技術及び態度や実践能力を身につけることである。筆記試験は21区分38行為について行った。OSCEの6項目については独自に作成した事例を用い、厚生労働省の手順書をもとにして学生はアセスメントした。教員は観察評価表と到達目標評価表を用いて評価を行い、最終確認は第3者評価者に依頼した。

④ 特定行為eラーニング

特定行為に対応したeラーニングシステムを今年度本格導入した。学生全員が自己学習に活用している。

⑤ 厚労省関連（事務局との連携、報告書、施設等登録、変更手続き等）

特定行為研修実習協力施設を12施設削除し、4施設を追加し、実習協力施設18施設に整理し、登録した。それに伴い、全実習協力施設に指導者登録されている医師等の異動（転勤や退職など）を確認し、指導者変更の登録手続きを行った。省令改正に伴う特定行為研修計画書を作成し、登録した。また、厚生局手続きの強化を図るために、事務局と教員が連携・協力ができる体制づくりとして、役割フローシートを作成した。令和5年度から特定行為研修の事務的な手続きの強化のため、事務担当職員を看護研究交流センターに1名配置することになった。

次年度は、新カリキュラムの円滑な運営、NP学生の自主的なNP実習室の活用推進のための学習環境整備、就職後の研修体制の検討、地域枠の継続的な学生確保など取り組むべき課題にむけて継続的に努力していきたい。

10-2-6 学術ジャーナルチーム

リーダー 定金香里

メンバー 秋本慶子、恵谷玲央、神崎純子、Gerald T. Shirley、白川裕子、徳丸由布子、中釜英里佳、山田貴子

本チームは、インターネットジャーナル「看護科学研究」の編集事務局の業務を担っている。それぞれの担当メンバーが、投稿論文の受付、確認作業、編集担当委員の選定、委員・査読者・著者間の連絡作業、英文校正、編集作業、Web ページの作成、J-STAGE への登録といった実務を行った。本年度は、20 巻 1 号（2022 年 4 月）、同 2 号（2022 年 12 月）を発刊した。また 2023 年からは随時掲載に発行形態を変更し、採択された論文から順次、J-STAGE 上に掲載することにした。これに伴い号番号の付与を廃止した。3 月 29 日現在、2 本の論文を 21 巻として発刊しており、昨年度掲げた年間 3 号の発刊を実質達成した。「看護科学研究」編集委員会および学術ジャーナルチームにメンバー交代があったが、作業・業務の引き継ぎは円滑に行われた。新たにドメイン、jnhhs.com を取得し、魅力ある HP 作りを行った。また論文の掲載を J-STAGE に集約し、利用者の利便性を図った。HP 上から投稿するフォームも上手く活用し、受付作業の利便性が向上した。編集事務局の役割分担も明確化が進められている。昨年度の課題であった査読期間の短縮も個人努力ではあるが図ることができた。

次年度は、より一層、投稿の利便性の向上を図るため、投稿者がプレプリントサーバーや J-STAGE Data を利用できるよう投稿規定を改定し、作業経路も変更する。一方、本年度は投稿数がこれまでよりも多かった。本誌が魅力あるジャーナルと捉えられてきている証左であるかもしれないが、受付業務がオーバフローした。従って、担当者の増員と作業内容の簡便化が喫緊の課題である。投稿規程等の改変によって膨れ上がる一方であった事務局業務の見直しを、学術ジャーナルチームのみならず、編集委員会も含めて組織的に行う。システムの面でも査読期間が短縮できないか検討する。これに関し、査読システムを現在のダブルブラインドからシングルブラインドに変更することも検討する。

10-2-7 健康増進プロジェクトチーム

リーダー 稲垣敦

メンバー 濱中良志、小野治子、佐藤愛、秦さと子、石丸智子、田中佳子、森加苗愛、掘裕子、甲斐博美、樋口幸、桑野典子、丸山加菜、篠原彩、荒木章裕、姫野雄太、矢野亜紀子

研究に関しては、温泉入浴による筋緊張、ストレス、や自律神経活動への影響について、転地効果を考慮して評価した。社会貢献活動としては、①富士見が丘夏祭り（7/23）、②富士見が丘団地わかば老人クラブ「わかば会サロン」（9/24）、③七瀬の里まつり（11/6）、④総合型地域スポーツクラブ交流会（11/23）、⑤別府大分毎日マラソン（2/5）、⑥森林探検ウォーキング（3/25）の 6 つのイベント

トで学生と共に健康・体力チェック等の活動を行った。これらの活動は、本学の学外 HP、Facebook、Instagram に掲載した。今年度は、大分県の自治体の政策立案支援（シンクタンク）事業、宇宙旅行看護師（フライトナース？）の研究・養成事業（JAXA）等を含めて検討を開始した。

次年度は、大分県の自治体の政策立案支援（シンクタンク）事業の実現に向けて具体化してゆく。

11 名簿

11-1 役員

理事長（学長）		村嶋幸代
理事	学部長	福田広美
理事	研究科長	稲垣敦
理事	事務局長	岡田浩明（～R5.3.30）
理事（非常勤）	大分大学医学部附属病院長	三股浩光
理事（非常勤）	大分県立病院長	佐藤昌司
理事（非常勤）	富士甚醬油(株)代表取締役社長	渡邊規生
監事（非常勤）	公益社団法人認知症の人と家族の会 大分県支部 代表	中野洋子
監事（非常勤）	公認会計士	福田安孝

11-2 審議会委員

経営審議会

学内委員	理事長	村嶋幸代
学内委員	理事	福田広美
学内委員	理事	稲垣敦
学内委員	理事	岡田浩明（～R5.3.30）
学外委員	理事（非常勤）	三股浩光
学外委員	理事（非常勤）	佐藤昌司
学外委員	理事（非常勤）	渡邊規生
学外委員	弁護士	千野博之
学外委員	日本文理大学学長室長	吉村充功
学外委員	大分合同新聞社特別顧問	佐藤政昭
学外委員	大分県看護協会長	大戸朋子

教育研究審議会

学内委員	学長	村嶋幸代
学内委員	学部長	福田広美
学内委員	研究科長	稲垣敦
学内委員	事務局長	岡田浩明（～R5.3.30）
学内委員	生体科学教授	濱中良志
学内委員	生体反応学准教授	吉田成一
学内委員	人間関係学准教授	吉村匠平
学内委員	環境保健学准教授	小嶋光明

学内委員	健康情報科学教授	佐伯圭一郎
学内委員	言語学教授	Gerald T. Shirley
学内委員	基礎看護学教授	廣田真里
学内委員	看護アセスメント学教授	藤内美保
学内委員	成人・老年看護学教授	小野美喜
学内委員	小児看護学教授	草野淳子
学内委員	母性看護学教授	林猪都子
学内委員	助産学教授	梅野貴恵
学内委員	精神看護学教授	影山隆之
学内委員	社会看護学教授	加藤典子
学内委員	地域看護学教授	甲斐優子
学内委員	国際看護学准教授	桑野紀子
学外委員	大分大学名誉教授	犀川哲典

11-3 教職員

11-3-1 専任教員

生体科学	教授	濱中良志		
	准教授	安部眞佐子		
	学内講師	岩崎香子	R5.3.31	退職
生体反応学	准教授	吉田成一		
	准教授	定金香里		
健康運動学	教授	稲垣敦		
人間関係学	准教授	吉村匠平		
	准教授	関根剛		
環境保健学	非常勤助手	秋本慶子		
	准教授	小嶋光明		
	学内講師	恵谷玲央		
健康情報科学	教授	佐伯圭一郎		
	准教授	品川佳満		
言語学	助手	岡田悠希	R4.4.1	採用
	教授	Gerald T. Shirley	R5.3.31	退職
	准教授	宮内信治		
基礎看護学	教授	廣田真里	R5.3.31	退職
	准教授	秦さと子		
看護アセスメント学	学内講師	石丸智子		
	助教	田中佳子		
	臨時助手	神矢恵美		
	教授	藤内美保		
	准教授	石田佳代子		
	助教	山田貴子		
	助教	内倉佑介		
	(NP コース担当) 助教	甲斐博美		
成人・老年看護学	臨時助手	吉村幸永	R4.4.1	採用
	非常勤助手	大島操	R4.4.1	採用
	教授	小野美喜		
	准教授	森加苗愛		
	講師	堀裕子		
	助教	中釜英里佳		
	助教	宿利優子	R5.3.31	退職
	助教	佐藤栄治		

小児看護学	教授	草野淳子		
	講師	足立綾		
	助手	橋本志乃	R4.4.1	採用
母性看護学	教授	林猪都子		
	助教	永松いずみ		
	助教	徳丸由布子		
	臨時助手	今村知子		
助産学	教授	梅野貴恵		
	准教授	樋口幸		
	助教	姫野綾		
	助教	矢野杏子	R5.3.31	退職
精神看護学	教授	影山隆之		
	准教授	杉本圭以子		
	助教	後藤成人		
保健管理学	教授	福田広美		
	講師	荒木章裕		
	助教	姫野雄太		
	助手	矢野亜紀子		
社会看護学	教授	加藤典子	R4.4.1	採用
地域看護学	教授	甲斐優子	R4.4.1	採用
	講師	小野治子		
	助教	藤本優子	R4.4.1	採用
	助教	佐藤愛		
	臨時助手	渡邊一代		
国際看護学	准教授	桑野紀子		
	助教	丸山加菜		
看護研究交流センター	助教	篠原彩		

11-3-2 就職相談員

就職相談員	竹中愛子	R4.9.30	退職
就職相談員	藤川佳子	R4.10.1	採用

11-3-3 非常勤講師（学部）

小川伊作	音楽とこころ
澤田佳孝	美術とこころ
松田美香	言語表現法
黄炳峻	韓国語
西英久	哲学入門
大杉至	社会学入門
二宮孝富	法学入門（日本国憲法）
平野互	医療福祉と人権、社会保障システム論、 看護の倫理、哲学入門
松本昂	微生物免疫論
首藤佐織	大学ナビ講座
増田勝美	大学ナビ講座
松久美	災害看護論
麻生良太	教職概論、教育方法論
堀本フカエ	教職概論
横山秀樹	教職概論
鈴木篤	教育学概論、 道徳、総合的な学習及び特別活動
赤星琴美	養護概論Ⅰ、養護概論Ⅱ
飯田法子	教育相談
藤村晃成	生徒指導
河野伸子	教育相談
中島暢美	教育相談
藤田文	学校教育心理学
今井航	教育課程論、教育制度論
大渡文子	学校保健学
霜山朋子	学校保健学
手嶋康深	学校保健学
吉田知佐子	学校保健学
古賀精治	特別支援教育論
藤野陽生	特別支援教育論

11-3-4 非常勤講師（大学院）

甲斐仁美	看護管理学特論
伊東朋子	基盤看護学演習
川崎涼子	広域看護学概論
藤内修二	広域看護学概論、健康危機管理論、 疾病予防学特論
藤野里紗	広域看護アセスメント学演習
高波利恵	産業保健特論
吉田愛	産業保健特論
池邊淑子	疾病予防学特論
三浦源太	疾病予防学特論
井上真	薬剤マネジメント特論
玉井文洋	健康危機管理論
本山秀樹	健康危機管理論
井上貴史	リプロダクティブ・ヘルスト論
竹内正久	リプロダクティブ・ヘルスト論
島本久美	リプロダクティブ・ヘルスト論
宇津宮隆史	リプロダクティブ・ヘルスト論
花田克浩	リプロダクティブ・ヘルスト論
實崎美奈	ウイメンズヘルスト論
佐藤昌司	周産期特論、周産期診断技術演習
飯田浩一	周産期特論
豊福一輝	周産期特論
後藤清美	周産期特論
小山尚子	周産期特論
井上祥明	母子成育支援特論
上野桂子	母子成育支援特論
佐藤敬子	母子成育支援特論
平野互	母子成育特論、保健医療福祉行政論、 看護倫理学特論
安部真紀	周産期診断技術演習、 助産マネジメント論、 助産マネジメント演習
戸高佐枝子	助産マネジメント論
生野末子	助産マネジメント論、 助産マネジメント演習
	分娩期診断技術特論
市原恭子	地域母子保健学特論、地域保健特論

佐藤由美子	地域母子保健学特論、広域看護展開特論
安東優	老年診察・診断学特論
加隈哲也	老年診察・診断学特論
佐分利能生	老年診察・診断学特論
永瀬公明	老年診察・診断学特論
中村朋子	老年診察・診断学特論
藤谷直明	老年診察・診断学特論
溝口博本	老年診察・診断学特論
宮崎美樹	老年診察・診断学特論
西水翔子	老年診察・診断学特論
庄山由美	老年 NP 特論
立川洋一	老年アセスメント学演習
宮川ミカ	老年アセスメント学演習
迫秀則	老年実践演習
佐藤博	老年実践演習
竹内山水	老年実践演習
藤谷悦子	老年実践演習
古川雅英	老年実践演習
山本真	老年実践演習
平井健一	老年実践演習、老年診察・診断学特論
中村雄介	老年実践演習、老年診察・診断学特論
一万田正彦	老年疾病特論
糸永一朗	老年疾病特論
小坂聡太郎	老年疾病特論
木村成志	老年疾病特論
財前博文	老年疾病特論
大仲將美	老年薬理学演習
塩月成則	老年薬理学演習
伊東弘樹	老年臨床薬理学特論
龍田涼佑	老年臨床薬理学特論
光根美保	NP 論、老年 NP 特論、老年探究セミナー
田村委子	NP 論、老年実践演習
後藤愛	小児看護学特論、小児 NP 特論
佐々木真理子	小児看護学特論、小児 NP 特論
黒木雪絵	小児看護学特論、小児 NP 特論、 小児アセスメント演習
菅谷愛美	小児看護学特論、小児 NP 特論、 小児アセスメント演習

池内真代	小児疾病特論
糸永知代	小児疾病特論
井上真紀	小児疾病特論
大川優子	小児疾病特論
小栗沙織	小児疾病特論
末延聡一	小児疾病特論
福永拙	小児疾病特論
井原健二	小児診察・診断学特論
江口春彦	小児診察・診断学特論
清田晃生	小児診察・診断学特論
小林修	小児診察・診断学特論
関口和人	小児診察・診断学特論
長濱明日香	小児診察・診断学特論
別府幹庸	小児診察・診断学特論
前田知己	小児診察・診断学特論
木村裕香	小児診察・診断学特論
久我修二	小児診察・診断学特論、小児疾病特論
保科隆之	小児診察・診断学特論、小児疾病特論
原卓也	小児診察・診断学特論、小児疾病特論、 小児アセスメント演習
松本康弘	小児薬理学特論、小児薬理学演習
大末美代子	小児 NP 特論
大津佐知江	小児 NP 特論
菅原真由美	小児 NP 特論
松本佳代	小児 NP 特論
松久美	小児老年実践演習
山崎清男	看護教育学特論
大田えりか	看護科学研究、健康科学研究特論
竹村陽子	看護コンサルテーション論
小池智子	看護政策論
立森久照	看護政策論
中西三春	看護政策論
小山秀夫	看護政策論
黒川竜紀	病態生理学特論
甲斐倫明	放射線健康科学、特別演習

11-3-5 事務職員

	局長	岡田浩明	R5.3.30	退職
総務グループ				
	副主幹	尾割勇作		
	主査	松尾美沙		
	主任	安部翼		
	事務員	木下明美		
	事務員	花木真弓		
財務グループ				
	主幹	伊東美穂		
	主幹	長瀬英子	R4.4.1	転入
	主任	久保紘子		
	事務員	宮川眞美	R5.3.31	退職
教務学生グループ				
	主幹	菊池誉志		
	副主幹	原田千夏		
	主査	佐藤英		
	主査	神崎正太		
	事務員	内倉沙希	R5.2.28	退職
	保健室職員	釘宮由美子		
図書館管理グループ				
	サブリーダー	白川裕子		
	非常勤司書	川上裕	R4.4.27	退職
	非常勤司書	中野智子		
	事務員	岸田美由紀		
看護研究交流センター				
	事務員	神崎純子		